

詩人の出 発

1,500円 (千 共)

既刊全集未収録・初期末発表作品集

東京都世田谷区代田一五九三
振替東京四二六六一一

麦 書 房

一七日も終り、蓋の部屋を片づけをりし
人々、物類の隅より小管を見出でぬ。兄
らその蓋を開けば、様々の札束と紙きれ
あり。五年來貰ひためし心付けと、その
日付、額、施主を記す。常に与へられし
外は求めず、好物の菓子、魚、煙草すら
殆ど自らあがなひしことをしらす。皆今
日の日を思ひてなり。可哀さうにと一言
もらせば、並み見る人々面を蔽ふ。

小管にはちぢがころねいちらしみ手にとり
もちて見るもみななみだ

思はずも小管みいでしをどろきはほとけの国
をのぞきみしごとし

室津、漁業資料講習会

家々ならびともしびうつる眼のまへにぼつか
りとくろきは明神の鼻

入江ふかくうちよする波のちからよわり舟は
たゆする音はよもすがら

秋ふかく岬の村にきてとまるあひしらぬ人ら
と友のごとくに

「善導和尚」の校正。何度か焼捨てんとし、
夜ふかく校正刷みるころなき桐の広葉にお
ちくる月か
曇りながらうすあかりある夜のふかさこそも
すしろし波のおともなし
県庁にて

重油購買券は苦心してつひに受けられず役人
の顔をまともに見入る
わが無理は百も千もする小漁夫の七八人が生
かされぬものか

魚をとれば魚がへると云ふ内の海八十島かけ
に魚はをらぬかも
大海に魚族の絶えむ日はあらめや土に草木の
枯れはつべしや

打瀬網二舟つみかさね焼いたらばむなこそひ
かけむわれも漁夫らも

十月末約束により子供らと一夜泊りの
旅に出づ。身につかぬ俗務に身心疲れ
はてたれど、旅ならば或は安まらんか
とも思ふ。

をとめらは若草山の枯芝にころぶしあそぶ家
さかりくれば
柿くへば首ふり寄りくさを鹿の黒眼にうつる
わが顔の痩せ
枯芝にくするごとくくひざまつき今日一日は
子らにあたへき
薬師寺の塔さへ訪はず年ひさし曇りのしたに
まさめにも見ゆ

果樹園

第83号

詩人、その生涯と運命 小高根 二郎
植 物 浅 野 晃
ヘリック詩抄 森 亮
忙 日 吉本青司

圃 上 福地邦樹
貸 室 萩原葉子
不 易 美堂正義
雨 の お と 堀口 太平
妊婦を歌つて下さいますな 森 鮎子
冬彦のことば 大西 昇
喪 失 堀之内
生 老 病 死 青木敬磨

詩人、その生涯と運命

書簡と作品から見た伊東静雄(七十一)

小高根 二郎

二月初旬、伊東は次の書簡を桜岡孝治氏に
送つてゐる。桜岡氏から、大倉産業であつた
か。会社の囑託となつてシンガポールにゆ
くことが伝へられ、これはその返事である。

「昭南においてなのですか。今文学者は東
京で動いて貰はねばならぬと思ひますが。

あなたとしては、また仕方ないことでもあ
りませう。仲間分れしてゐても、林君もさ
びしがりませう、私もさびしい。

私はどこにゐても板につかぬ性格ですか
らあなたが、南方であまりうまくゆくのは

にくいやうな気がします。こちらに來られ
たら是非寄つて下さい、たのしみです。私
の弟も活動写真とりにラングーンに出かけ
ました。さつき、やつとどいたといふ知
らせが、来たところです。」

(昭和一八年二月二日、堺市北三国ヶ丘町より)
東京市西品川桜岡孝治宛はがき

文学者は今東京で動くべきだ……という伊
東の意見が見えてゐて面白い。一億一心とい
つた掛声に動いてゐた時勢であつたので、文
学者も東京に結果して一心になつて文学すべ
きだといふ論理になつたのかもしれないが、
昨秋栗山理一氏も東上し、大阪に残つてゐる
友といへば中島栄次郎・富士正晴両氏ぐらゐ
となつた寂しさも、伊東にさう思はせてであ
らう。

編輯後記

十月六日、島尾敏雄氏より作品集第四巻をいただいた。
本誌に掲載した広告どほりまことに塊気せまる運作である。
この作者の救ひのない境涯は、日常生活のどこにもあつ
てゐる深淵の所在を説き合へると共に、読者をして作者
の境涯でなくて助かつた……と感しさせる不思議な作品で
ある。いふところの単なる私小説の類ではない。
十月十八日、岡山に旅をした。例の大学工学部の訪問が主
目的である。餘暇があつて後樂園を見たあと城址に歌碑を
探した。吾妹子先生こと平賀元義の碑である。しかし鳥城
には風流な碑はなく、むくつけき明治の創業者の碑とほけ
たやうな異相事閣下の銅像があつた。図書館のぞくと古
老があるたので元義の碑の所在を訪ねると、西大寺にゆく途
中の大多羅に歌碑がなんかしらんかあつたと教へてくれた。
後樂園には鶴を寄附してくれた羽津若氏の詩碑が六高出
身のゆゑにあつた。この妙な因縁になにか私は抵抗を感じ
た。倒錯した現代日本の見本をここに見る思ひが抗から
だ。翌十九日、広島に立ち寄つた。かつて昭和二十一年復
員の出次ブラット・ホームに下り立つて死の広がりや絶望
の思ひで睡したことを思ひ出した。それにしても見事な
復興をしたものである。平和記念館に一番をよめる有実
米の惨事を決して無駄にしてゐないことを物語つてゐた。
さう後日感じたのは、或ひは久々にお会いして敬談をしえ
た広島大学の清水文雄博士の研究室の明るさのせりだつた
かもしれない。(〇)

果樹園 第八十二号 (毎月一回一日発行)

昭和三十七年十二月一日発行

池田市野町一六八
編輯者 小高根 二郎
発行者 池田市東吉区桑津町五の八
印刷所 元市印刷株式会社
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円 送料 十円

又、文中若い友達間の感情疎隔に対しても
配意してゐる点が見えて面白い。伊東が若い
友を遇することが篤かつたことは、死後彼を
追慕する者が多いことをもつても知られる。

その若い友達が互ひに親和できるかどうかの
危惧からであらう、伊東は進んでは紹介の労
をとることが少かつたことも有名である。近
附く運命のものは、放つておいても自然に近
附き、いつのまにか親和するからである。そ
れにしても林氏と桜岡氏との仲違ひには心を
勞してゐるやうに見ゆける。「天性」の仲間
同志としての義理からではなく、兩人の才能
を惜んだからであらう。それにしても「天性
」を始めた頃から伊東の若い友に対する処遇
というか態度が變つてきてゐるやうに感じら
れる。それは「天性」の同人達が伊東に対し
て明らかに師の礼をとつてゐるからか、それ
とも伊東に領導者としての意識がでてきてゐ
るからである。積極的に交渉を斡旋し親和の
労をとる傾向が、今後の書簡に看取されるで
あらう。

しかし同じ若い友であるべき者であつても
異質の人に対しては、全く態度を異にしてゐ
るのである。伊東も同人である「四季」に拠
る詩人の杉山平一氏に送つた次の書簡に、そ
の微妙な変化を看取できるであらう。

「御詩集ありがたうございました。日ごろからお作まるとして拝見したいと存じをりましたので、うれしくございました。

お会いする機会もなく過ぎてをります。御自愛祈ります。他日の拝眉を期してをります。お礼のみ。 伸々

十三日の松竹座の朗読会にはいらつしやいませんか、私は出てみようかと考へてみます。」

(二月一日、堺市北三国ヶ丘町より芦屋市打
出荒地六、杉山平一宛はがき)

杉山氏が伊東に贈った詩集は処女詩集「夜学生」(昭和十八年一月)である。同集は最後の文芸汎論詩集を受賞した。同賞を伊東の処女詩集「わがひとに与ふる哀歌」も受けてゐた事実は、まだ読者の記憶の片隅に残つてゐるかもしれない。同じ賞を受賞した詩集であるが全くの異質の抒情である。従つて同じ「四季」に属してゐながら、杉山氏から伊東を訪ねることもなく、伊東から杉山氏に近附くこともなかつた。「他日の拝眉を期す」といひ、松竹座での朗読会に誘つてゐるやうであるが、「私は出てみようかと考へてみます」という言葉には、杉山氏の行動に無関与な他人行儀が感じられる。伊東にとつて杉山氏の異質さというか異風さは、単に詩に於けるそれ

りをさしてゐるのではなく、昨年の十二月二十三日に創立された大日本言論報国会に關聯してではないかと想像される。その会の一翼である「日本文学報国会」に蓮田は若い国文学者として重きをなしたはずであるから、その会での活躍をさしてゐるのであらう。蓮田はその会で丹羽文雄氏等?の情痴小説家を指弾した当時としてはフェイマスの、現在としてはノトリアスな事件がある。おそらくその事件での活躍をさしてゐると思量される。この書簡の用件は、伊東が担任する病弱な津田少年を、蓮田氏の成城学園の中学部に収容してもらへまいかという依頼である。津田家は桑原武夫氏の親戚で南大阪で材木商を営んでゐる豊裕な商家である。「津田家は大へん大へん私とは親しい間柄」と伊東は言つてゐるが、事実、伊東日記の諸所に彼の往來が見える。伊東は病弱な少年の一身上の相談に応じるとともに、その少年の母である「年上の夫人とよもやま話をするのを好んだやうである。」(新潮文庫、伊東静雄詩集)。「言はゞ伊東にとつて津田家はサロンだつた。同じやうな意味で伊東の親しい家に白築家があつた。日記を見ると伊東は時に両家を相繼いで訪れてゐる。明らかに、家庭に恵まれなかつた伊東は、このサロンで気分を転換をはかつたもの

にとどまらず、家業である鉄工所であるか機械製作所であるかを企業するキャピタリストの一員であるという風聞が、不条理に彼を遠い存在に感させたのだらう。たしかに伊東にはそんな氣質があつたのである。

杉山氏宛書簡の五日後、伊東は次の書簡を蓮田善明氏に送つてゐる。

「十三日久しぶりで栗山さんに会ひました入学試験場(天王寺中学)で、おひるの休みに、中食しながら。そして、皆さんのお噂きいてなつかしかつたです。殊に蓮田さんの御奮闘愉快でした。栗山さんは、この春の休に上林温泉に行かうと誘つてくれました。私も喜んで行きたいと思ひます。

さて、いつか成城高等入学のことでお願ひしました津田といふ家の又も一人の子供で、去年一年生の時うけもち、二学期の末からまる一年間病氣のため休学してゐる生徒があるのです。いつか申したやうに、桑原武夫氏の親類です。それが、成城の中学部には入りたい熱望にて、親が数日中に上京し、色々御校の事情ききたいらしいのです。実は私にも一緒に上京して、蓮田さんにお会いしてみてくれとたのむのですが、津田家は大へん大へん私とは親しい間柄なので、こんなことまでたのむのですが、

のやうである。

私は桑原武夫氏に直接に確かめたところであるが、津田少年の成城への転校は伊東の努力にか、はらず成功しなかつたとのことである。少年は後年慶応に行つた。公私を分つると蓮田善明氏ほど厳格な人物はないからである。彼は大歌人の憶良さへ私情の歌人として擯斥した。公の場で歌ふべからざる私情の歌を歌つたからだといふ。憶良の「宴を罷る歌」という題の歌に「憶良らは今は罷らむ子哭くらむ其の彼の母も吾を待つらむぞ」といふ私情の歌一篇があるという理由からである。それほど公私の別に厳しい蓮田氏である。伊東静雄の詩情には心酔したにかかはらず、桜岡氏の詩集出版の世話とか、津田少年の転校依頼といふ私情には同情しなかつたと思つてよいかと思ふ。愚痴無智の詩人として私情を守ること厳格であつた伊東。国学者として公情に殉ずること厳格であつた蓮田。この見えざる性格的な相違を、今後の伊東・蓮田の交渉の底に考へていただきたいと思ふ。

この書簡中に、伊東は栗山理一氏に春休に上林温泉に行くことを誘はれ、その旅行に同意してゐた。が、伊東は上林温泉には行かず若い友等とにぎやかに南紀の旅へ行くことになるのである。この旅の提唱者であつた林富

私は校務と、身体の工合で行けません。もし、近日中にお宅に参上しましたら甚だ御迷惑ですが、よく話してやつて下さいませんでせうか。どうぞおねがひいたします。信用していい家であると私は信じてをるのであります。そして子供自身も中位の成績の子であります。

けふは歯がいたくて、どうも文章うまくかけません。よろしく御判読下さい。要用のみです。

十六日 伊東静雄
蓮田様

(二月六日、堺市北三国ヶ丘町より東京市
宇奈根、蓮田善明宛封書)

大阪府立天王寺中学で行はれた試験とは、興亜工業大学のそれで、昨年十月赴任したばかりの栗山理一氏が試験官として来阪したわけだらう。伊東はなつかしさにたへず辨当持参で会ひにいつたのである。先の桜岡氏宛書簡に「今文学者は東京で動いて貰はねばならぬ」という言葉があつたが、係果が多くて上京しえない伊東は、せめて友から聞く文壇情報に、はやる心を慰めたのであらう。

「蓮田さんの御奮闘云々」とあるのは、単なる「文芸文化」の編輯だとか旺盛な執筆ぶ

士馬氏の次の文章に詳しい。

「あれは昭和十八年のことだつたと思う。春休みを利用して、私達——貴志武彦と春日豊と斉藤達雄と私とは、貴志の故郷である紀州に遊びに行こうということになつた。私達は医科の学生であつた。もう戦争ははじまつていた。貴志の故郷は紀州の古座であつた。その途次、私達は伊東静雄氏をお訪ねした。伊東静雄の名前が、そんなに世の中に知られてゐたわけではなかつたが、既に、昭和十年上梓の詩集「わがひとに与ふる哀歌」と、昭和十五年出版の「夏花」といふ、この二冊の詩集の著者を、私達はドイツ語の教科書で接する外国の第一流の詩人達とおなじように畏敬してゐたのである。殊に私は医科の学生というより、文学少年だつたので、独逸ロマン派の作品を割と沢山読んでいて、殊にヘルデルリンとかリルケとかと並べて、彼らに匹敵する詩人だといふことを、信じて疑わなかつた。仲間と云つても、貴志武彦を除いては、春日も斉藤も、特別に、文学好きな医科の学生というのではなかつたが、貴志と私とは、前にも伊東静雄氏におめにかかつていたし、その旅の途次、伊東さんにおめにかゝることも、その時の旅の

娘しみのひとつでもあつた。そして、私はその私の仲間を紹介した。

そのとき、伊東さんは、九州大学の文科の学生で、文学志望の庄野潤三君を紹介して下すつた。私達はやがて皆、それぞれ競争に行くことを考えなければならなかつたし、そういうこともあつて、すぐに若人らしく、仲良くなつた。のみならず、その庄野君も仲間に加わつて、伊東静雄さんもおさそいして、みんなで貴志の故郷に旅行することになつたのである。(昭和三年四月七日、日本医事新報)

林富士馬
一かの旅

この林氏の文章を、桜岡孝治氏の愚生宛書簡(昭和三〇年)で追補をすれば、伊東の家で林・貴志・庄野氏等がにぎにぎしく集つてゐるところに、さらに桜岡氏が偶然顔を出すことになるのである。二月二日の桜岡氏宛伊東書簡に「仲間分れしてゐても、林君もさびしがりませう、私もさびしい」とあり、「こちらに来られたら是非寄つて下さい」とあつた。伊東は金盆をとりだすとそれに酒をつぎ、林氏と桜岡氏に仲直りのかためをさせ、一緒に南紀の旅にいでたつたのである。

この心豊かな旅で得た詩が第三詩集「春のいそぎ」巻頭を飾る「かの旅」(「コギト」六月号発表)

である。

かの旅

古塵の人貴志武彦に

杉原や檜ばらがくれに
桃さくらはや匂ひでし
そを眺めつつ
ゆたかなる旅なりしかな
熊野路を南へゆきて
わが見たる君がふるさと

形見にぞ拾ひもてきし
玉石はみれども飽かず
あさもよし紀の海が
荒海にかくもみがきて
みつぬるむ春の渚に
おきたりし古塵の玉石

第三詩集「春のいそぎ」

ちなみに、この詩を医学生身分で伊東から捧げられた光栄な貴志武彦氏は、医業と文学で海外雄飛を夢みてパラグワイにあつたが一昨昭和三十六年十二月十六日自動車事故によつて不慮の死をとげた。

この三月頃、富士正晴氏の斡旋で、彼がも

と勤めてゐた弘文堂で第三詩集を出す話が進められた。

「この土曜午後四時半ごろ桑原さん宅にて弘文堂の人と会ひます。これもあなたのお智恵かと思ひ有難いです。ところが八東氏が病氣とかにて原野君来るさうで、一寸閉口しさうです。でもまあ仕方ありますまい。弘文堂の人に会つたら、その上報告と、御相談を兼ねて、お会ひしたいです。表題はまだきめてません。「春朝秋夕」、「春朝集」、「春のいそぎ」等。装幀工二夫願ふことたのしみです。病人皆殆んど快癒、もうひまです。」

(三月、堺市北三国ヶ丘町より大阪市北田辺、富士正晴宛はがき)

伊東は桑原武夫氏宅で弘文堂の原野栄二氏と話し合ふことになつたのである。伊東が「一寸閉口しさうです」と言ふのは昔の「巴」時代の仲間と交渉しなければならぬからである。伊東は東淀川の原野氏宅の二階で、近く結婚する青木敬應氏のために性教育が目的の猥談をやつて、あんまり夜中まで騒いだため原野氏が階下の母親から注意され、おふくろ昂奮しよつたな……と伊東が秀逸な放言をしたことは既述した。そんな間柄の昔馴染みともつともらしく出版に関して、細微にわたつ

た交渉をしなくてはならぬのだから、さすがの伊東も照れたわけである。

四月初旬、伊東はさらに次の書簡を富士氏に送つてゐる。

「『詩論』ありがたうございました。先夜林君同道にて参上(同君紀州旅行の帰途来阪したのです)しましたが留守にてまご

植物

浅野 晃

わたくしが禾本科の植物であつたとき
曠野の土にしっかりと根を張り
水分や養分を吸ひ
太陽の光をあびて生きた

わたくしは自分の場所に根をおろし
しだいに背丈を大きくした
空の色・雲の色 風の色 落日の色に染まり
何も思はず生きた

夜は月の下で眠つた
うなされることなどなく
露の玉をいっばい身につけ

朝の日に目ざめた

わたくしの葉の何と青かつたことだらう
こがね虫がやつて来て
這ひ上つた
海からの風に吹かれながら

わたくしはいつも歌つてゐた
無言の歌をうたつてゐた
自在にからだをゆりながら
仲間もいつしよに歌つてゐた

わたくしは自分を捧げ立つてゐた
小さな旗でもあるかのやうに
しるしでも 証しでもあるかのやうに
けれど何ひとつ知ることなく。

富士正晴氏から伊東に送られた詩論は「林富士馬論」である。この詩論は伊東の斡旋で「四季」に送られたが採用されず、さらに改筆の上「文芸文化」に送られたのだらう。「文芸文化」八月号所載の「林富士馬の詩」がその一部であると思像される。同論は冒頭「林富士馬と三島由紀夫とについては云つて見たくてたまらぬものがある」といひ、三島氏の作品は一冊にまとまつてからものを言ひたく、もし誰も一冊にしようとしないうら、自分が骨を折つてもいいと言つてゐる。やがてこの富士氏の言葉が現実となるが、伊東と三島氏との今後の関係の上からも、この事実を記憶に留めておいていただきたい。

話は先に戻るが、紀州から帰つてきた伊東は富士氏の「林富士馬の詩」を発見し、当の林氏に敬意を表さすために同道したのであらう。留守とあつて宿に戻つて持参のウイスキーを二人で呑んで別れてゐるが、やがて富士氏と林氏の交渉も繁くなるのである。富士氏が京都の七丈書房の他に東京の石書房にも勤めを兼ね、上京の折には林氏の家に泊る機会ができるからである。

四月中旬伊東は次の書簡を蓮田氏に送つてゐる。

* 序の校正本屋に送つておきました。

よみかへしてはづかしくなりましたが仕方ありません。

*「本居宣長」昨日いただき、早速拝見し始めました。あなたの古事記の講義きいたいと常々思つてゐましたので、ずるぶるうれしくありました。「勇進」といふ言葉このごろもつとも肝銘したものでございませう。日本の詩歌のもつとも大切な、発想の唯一の地盤がそこにあること、十年の詩作の後やつとわかつて来たのであります。私は段々立派になれさうに考へてゐます。少くとも後退する気つかひはない自信を得ました。それが、「勇進」といふお言葉を書いたのと、全く時を同じうしてゐたことをうれしく、有難く考へてをります。

今度の拙詩集は、そこまではいつてゐませんが、そこに到つた前日の記念にはなりさうであります。感謝。

一つわかればすつかりわかる大和心のはれやかさも教へていただいたやうに感ぜられるのであります。このごろ熊野旅行の詩つづけて三、四書いてゐます。近年めづらしいことでもあります。

十七日

伊東静雄

蓮田善明様

(四月十七日、堺市北三国ヶ丘町より東京市宇奈根、蓮田善明宛封書)

ての「勇進」というほどの意味に解釈していいであらう。つまり、弘文堂で上梓計画が進んでゐる、あまりに古典的な「春のいそぎ」期の詩境からの脱皮——勇進の心機を擲ん

へリック詩抄 (三十四)

森 亮

われ富めり

夜のしざりゆくを告げる柱時計はなくても、わが家の雄鶏は朝が近づけばときをつくる。婢女のブルーデンスは幸ひよくできたをんなで、

わたしの持つともなく持つてゐる僅かな財物をつましく使ふ。

日毎に白い面長な卵を生むめん鶏はくっくつと鳴いておのれの手柄を知らせる。油断なく聞き耳を立てる鶯鳥は

なにか身に危険が迫れば舌を振り立てて訴へる。

食事のたべかすで飼ひ馴らした小羊はこの仔一匹を残して母親に死なれた哀れなやつ。

縦横にわが家を走り廻る猫は

伊東は正月休みに執筆した蓮田氏の評論集「神韻の文学」の序を校正し、発行所である一条書房に送り返した由しるしてゐる。又、日本思想家選集の一冊として近刊された蓮田氏の「本居宣長」(昭和十八年四月)を恵送してもらつた札を述べてゐる。蓮田氏の古事記の講義を常日頃伊東が聞きたいと思つてゐたというわけは、もともと蓮田氏が国学への発足をしたのは古事記研究からであり、「真福寺本古事記書写の研究」や「古事記の文学史的考察序説」の論文があることを知つてゐたからである。彼の成熟した古事記観を「本居宣長」中の「古ことの伝へ」章で読みうる喜びを伝へてゐるのである。

又、伊東は蓮田氏が使ふ「勇進」という言葉に「日本の詩歌の……発想の唯一の地盤」と讀へるほど異常に感銘してゐる。この「勇進」という言葉は、伊東が序を書いた「神韻の文学」中の「古今の保守」に出てくるのである。その文中に引用されてゐる東郷平八郎大将の日本海々戦の戦闘詳報に出てくるのである。「天佑と神助により我が聯合艦隊は敵の第二第三聯合艦隊と日本海に戦ひて遂に殆ど之を撃滅することを得たり……中略……此の対戦に於ける敵の兵力我と大差あるにあらず、敵の将卒も亦其の祖国の為に極力奮闘したる

だ……と言つたほどの心境であらう。

書簡の末尾で、熊野旅行の詩の連作をしてゐる由みえてゐるが、それは次の作品なのである。

鼠のこそ泥どもを平らげつつぶくぶく太る。

この他にまだトレーシーがある。田園に隠れたわたしの日常を

いやが上にも楽しめるのがこの毛むくぢゃらの可愛い犬だ。

これら教へ上げたものは皆わたしの心をなごませる玩具と言へよう。

といふのも心労のない所では一寸した物事で結構楽しいのだから。

デフオンシャヤで暮らしたへリックの生活を歌つた

作品の中から一篇を選んでゆかりの地に詩碑が建てられんとすれば、「われ富めり」(七二五)が採用されらうことには疑はない。そこでこの独身の中年男は慣み深い女中のブルーデンス(略称ブルウ)に家事一切をまかせてのんびり暮らし、教師といふ役柄から時に近隣の上司階級の家に招かれては華やかでウイットに富んだ話上手で喜ばれた。

を認む。しかも我が聯合艦隊が、よく勝を制して前記の如き奇蹟を収め得たるものは、一に、天皇陛下御稜威の致す所にして固より人の能くすべきにあらず。特に我が軍の損失死傷の僅少なりしは歴史神靈の加護に由るものと信仰するの外なく、曩に敵に對し勇進敢戦したる麾下将卒も皆此の成果を見るに及んで唯感激の極言を所を知らざるもの如し」中の、傍点をほどこした所に出てくるのである。

蓮田氏はこの「勇進」を起用して評文中に慣用してゐた。伊東がその「勇進」に感銘したのは、東郷大将の用語としてではなく、蓮田氏の起用と慣用とに對してであつたらうが二月中旬の栗山理一氏宛書簡に見えた、日本文学報国会でかの蓮田氏の活躍に喝采を送つてゐた事実と照合して、いささか蓮田熱に浮かされすぎてゐるやうな傾向がうかがへる。さう言へば、昭和十五年十月五日附大山定一氏宛書簡では「果斷」といふ言葉に伊東は妙なほど昂奮してゐた。好戦的とか時局向き御用作品がどうしても書けなかつた伊東の万感は、こんな言葉に詰屈し凝固したのかも知れない。

伊東が「勇進」といふ言葉に託してゐる真心機は、詩境の「後退」に對する対照とし

那智

いにしへの代々にたふとき御幸のそのあとどころ

をがまむと来ればゆゆしも天地もどろと響き

神ながらましましにけり

雄叫びの那智の御瀧は

いまの世の熊野びとらが勇しき軍立すと
おほ前のしづきにぬれて
玉の緒の命もひかり
をがみてぞゆきにたりけむ
なつかしや那智の御瀧は

第三詩集「春のいそぎ」

熊野旅行に取材したこの連作を作つてゐる由を知つた蓮田氏は、伊東に寄稿を求めたのであらう。「那智」は「文芸文化」七月号に発表された。

五月中旬になると敗戦の徴候は南の海だけでなく北洋にも現れた。十二日には米一ヶ師団は濃霧を衝いてアツツ島に上陸を開始したからである。霧がなよりの煙幕だと安

心してゐた日本守備隊は、電波探知機による適確な敵艦砲の援護射撃で大損害をかうむつた。二十九日の夜半、守備隊山崎保代大佐は残存兵力をひきいて敵陣に斬りこんで玉碎した。

この悲痛な出来事もしらず、同日に伊東は次のやうなはなやかな書簡を女流詩人田中光子さんに送つてゐる。

「拝啓

御詩集「高原」まことに、有難うございました。

味もそつけもなき貧寒な近來の詩風の中にあつて、御詩の、屈折多くしかも優艶濃密な風韻を有難きものに存しました。どうぞ御自らこの境をおいたはりあるやう祈り上げます。わが国振りの保持は、女性に待つこと大なりといふのは、小生日頃の考へでございます。

一言お礼のみです。

二十九日

伊東静雄

田中光子様

(五月二十九日推定―堺市北三国ヶ丘町より東
京市京橋区明石町三四、田中光子宛封書)

私は田中さんの「高原」を知らないのなんとも言へないが、「屈折多くしかも優艶濃密な風韻」と闊秀に対する最上級の讃辞をさ

伊東は「四季」六月号に田中さんが「落」を寄稿してゐるのを発見して、自愛自重するやう、積極的に注意をしてゐるのである。

伊東は「四季」同人ではあつたが言はば外様であつた。同じく外様同人ではあつたが、「コギト」の場合は譜代の取扱ひをうけた。

「文芸文化」は全く同人ではなく、単なる招かれた寄稿家にすぎなかつたが、譜代同人な

忙日

吉本青司

仕事に疲れたとき
傷心の兆したとき

本屋へ行く

ほんやりと本の表題を眺めたり

ページをめくつたり

インクの匂いをかいだり

それだけで、こころの沈みがなおるのだ

本が無かつたら

世界はさびしいだろう

△脱獄をいたむ詩のために

つづされた同人雑誌

書架も空っぽだったそのころの本屋▽

仕事に疲れたとき

傷心の兆したとき

本屋へ行く

世界の騒音にくらべて

そこには争いがなく

林のような空間がある

仕事に疲れたとき

傷心の兆したとき

本屋へ行く

そして、想うのだ

△革命というものが

もし、こんなだったら……▽

おいたはりあることを切に願つてゐたもの一人であります。

大へん差出がましい申しやうながら、云はずにをれぬ気持にて筆とりました。「高原」はもつと孤独で誇高いものであつたと存じます。」

(六月十日前―推定―堺市北三国ヶ丘町より東
京市京橋区明石町、田中光子宛はがき)

のそれに異質でありすぎるところから、この忠告となつたと思ふ。

この忠告は初心の田中さんには判らなかつたやうである。彼女の質問に対して、伊東は折返し次の返事を出してゐる。

「文意つつきぬ葉書差上げ失礼しました。

あんな方法で無雑作に、ご自分の作をひと

の選に委ねられることを、私は残念に存じ

たのであります。その程度に、私は「高原

」の作者に敬重の心持を抱いてゐたのであ

ります。「自己をうつす鏡」をそんなに安

直に外部に求めることは自分の詩をいたは

るよい方法ではないと存じます。詩壇など

ということしばらくお考になる必要はない

のではありませんか。又現在の日本には詩

壇と称し得るものが果してあるかどうか疑

はしいのであります。知己といふものはか

くれて案外多いのではありますまいか。」

(六月十日、堺市北三国ヶ丘町より東京市明石
町、田中光子宛はがき)

自分こそかくれもない知己だということを
声明したやうな伊東の書簡である。どこか
招きの心意が動いてゐる。伊東と田中さん
の師弟としての交渉は翌昭和十九年の春か
ら具体的になるが、最近彼女が発表した小
説「鯉ノ肌」(昭和三十七年)を讀むと、優艶

廁上

福地邦樹

恥ずかしながら

僕の兄貴は便所で本を讀むのが趣味だ

徳川家康のように痔ではないが

アンモニアで頭が冴えて

短時間で非常に能率があがるという

化学系の会社の技術課長で

帰りがおそいものだから

夜更けて本を讀むのを奥さんがとめるの

だ。

この新手には奥さんも根負けし
しかし、あまり長いときは

中でおぼれてないかと

心配してノックするそうだ

三上といい 馬上 枕上 廁上^{しじょう}

文章を案するに最適な場所をいう

兄貴もついに読書の極意に達したかと

いまだ枕上の僕はいたく感服している

会社でアンモニアを扱う場所は

どんな工具でもいやがるそうだが

兄貴だけは、近來きたえたその鼻で

課長みずから、悪臭の中に

一時間ぐらい立ちはだかつて指図をし

この臭いをかぐと

心平静になり、あまつさえ

勇氣漲々わきあがると豪語してゐるそうだ

濃密に加へるに妖気を内蔵した女性であることが判る。

貸室 XVII

その2 萩原葉子

間もなく、赤い顔の四角な体格の一見、肉体労働者風の年輩の男を案内して来た。後ろに娘らしい少女もいた。

若い会社員を希望した筈だったのに、話が違ふと私は幹旋所の男を困った顔で見ていると「嫌だったら断つてもらつても差しつかえありませんよ」と目配せをしている。さっきの電話の様子がおかしかった意味が、やっと分つたのである。

気にいらぬからといって顔だけ見て断つてしまふこともできず、ともかく部屋に案内した。

私が使つていた部屋だけに特別愛着があつて、見ず知らずの人達に、ずかずかと入られるのが嫌な思ひだつた。机や本棚もまだ置いてあり、私生活まで覗かれたような不快さだつた。

生活にもっとゆとりがありさえすれば、こんなことにならないのに……と私はくやしかつた。

だと思つた。私に否応を言わせないものがある。

お酒を飲んでゐるための赤い顔だということとは、紛れもなく分つて来たが、素朴という印象もなくはないし、早く決めてしまいたかつた私は「おねがいします」と答えたのだ。

不易

美堂正義

イランやイラク地方の廢墟を發掘すると部落が幾層にも重なつていて時代を隔てながら

粉挽所の上に粉挽所があり道路の上に道路が違はない構造で在り理由はわからないが生活様式の変革も文化の進歩もなくほぼ同一の形式の部落が形成されてゐる

人が住まなくなつて土砂が覆ひ

いつかその上に新しい部落が造られ

また砂に埋もれることが

幾世紀の間数回も繰り返されてゐる

何故住まなくなつたか

赤ら顔の四角な男は、戸棚の具合や方角を調べる

「良い部屋ですなあ。陽当りも良いし銭湯も近くにあるし、こりや良い」と上機嫌である。

「この辺りは一等地ですよ。ガスも水道もあるし静かで交通は便利ですし……」と幹旋所の男は商売のうまさを披露しはじめた。いつもそうだが悪い所は言わず、良い所ばかり言うので気が気でなかつた。近くに学校が三つもあつてうるさいことや、近所が近い上にトランペット、ピアノ、ヴィオリン等の素人音楽で悩まされることや、夏は断水することを知っているのに「水は豊富で……」と言つてゐる。

「良い所ですなあ、わしの名は鬼林達平と言います。勿論前科なんか、ありませんよ。××会社のトラックの運転手をやつてゐる人間です」

私はトラックと聞いて、新聞などによく出ている事故のことや、映画「ヘッド・ライト」で見たジャン・ギャパンの紛するトラック運転手の生活を思い出してゐた。

「わしは係累はなく、妻もなく一人暮らしですよ。この娘が時々掃除洗濯に来てくれるだけです。仕事は一日置きに帰つて来て休んで

た。

引越して来た翌朝、鬼林は手拭を持って挨拶に来た。

引越しの挨拶など初めてだった私は、鬼林の帰るまでに唯うろろしているだけで、とうとう一言も言えなかつた。

住めなくなつたかかは

歴史の厚い壁に隔てられて知る由もなく紙にも記されないのでも現在も覗ひ知ることができない

白日の下に晒された姿を見ないが青い空と輝く太陽の

砂漠とステップ地帯に残された人間の営みの遺跡を地上に露はしすく風化されたのもあらうそれらを研究したところでも

類似の部落の生成までも解明することは困難である

隔絶された辺境の世界に時代を通じて繰り返へされた

生活様式の成立の相似が

私の心を不思議と静ませるものがある

又出勤という仕組で……昼夜勤務なんですなあ

「はあ」私は中ば上の空で答えていた。他人の生活の様子など聞いても訳が分らなかつたし、すぐ忘れてしまふ。それよりこの鬼林という人間は確かなんだろうか、と心配だつた。

幹旋所の男は「どうです？この男に決めては？という目で私を見ている。

鬼林はもう入るつもりになつて、ここにテレビ、あそこにラジオと家具の位置を娘と相談している。娘は十四五才位だったが、きちんとしているし、鬼林も良い父親に見え、次第に私は安心してゐた。

だが赤い顔は肌の色なのか、アルコールのためなのか気がなつてゐた。私は思ひきつて言つた。

「お酒などを飲んで近所迷惑になるようなことがある方は……」

鬼林は赤い顔を四角に張つて

「大丈夫ですとも。この年になつていい氣になつてうかれ出すなんてはからしくて出来やしませんや」

「いかがです？」幹旋所の男は今度は声に出して言つた。「この辺で決めて下さいよ」という含みを持たせてゐるところは、さすが

F子のように無視されるのも腹立たしい思いに駆られるが、昔風のしきたりに出られるのも尚困る。

鬼林はまたやつて来た。今度は一升瓶を持って来て「お歳暮の一つ」と言つた。やはり顔は赤いが酔つてゐる風もなく長い挨拶をして

生きるといふことはこんなにも哀しいものか人間の行為の変らないのは

人間といふものの本質の永久不易を示すのか

人間から隔絶された世界忘れられた不毛の土地に

営まれたさ、やかな生活が

何故私にこんなにも興味があるのだらうか自然に耐えて生ねばならなかつたからかまた産まれた土地を捨て切れぬ人情にか関係のない私だが埋没された人間の姿が

一層人間臭く迫つてくる

帰った。鬼林の疲れた癖のある顔には、何かの不満がつまってるような、重苦しさもあった。

お歳暮もやはり初めてで何と言って受け取って良いか、分らなかつた私は鬼林に礼の言いやうがなく唯「御丁寧にすみません」と繰り返していった。お正月には来客でお酒も役に立つと思っても、うまく言葉が出なかつた。

鬼林が帰った後、落ち着いて見ると一升瓶は醤油だったことに気付いて、自分乍らおかしくなつた。お歳暮と貼った紙の下には、醤油の名が大きく銘記されているのに、よほど鬼林の来訪に緊張していたらしい。

正月になって門松が取れる頃、鬼林の部屋からもすごい大声でラジオが流れて来た。あまり聞いたこともない流行歌である。

「タクワンポリポリ、お茶漬けサラサラ」
「タクワンポリポリ、お茶漬けサラサラ」

「ラジオの音は小さく」と契約の時に言った筈だった。急いで出て見ると窓から蒲団や手拭が一杯に干してあり、それに合わせるように大きなラジオが鳴っている。

鬼林の部屋は表通りなので、窓はまる見えだった。私が使っていた時は外から見ても美しいよ

雨のおと

堀口 太平

呉城鎮の峠で、きたみちには花だった胡桃が、うれてくされていた。

あれから二十年。

小雨がふつてきた。

ちかくで屋根をはがしていた。
築山のしら梅の木に、埃がときどきまいかか

ご開扉をうけて、このまえば涙をながしたのに、今日はどうしたことだ。

草もちをくつた。

かわいた軒下の土に雨だれがおちていた。

ひよっとしたら、これが永遠だ。

うすぐらい土間に、つめたい春のにおいがした。

城内のから井戸になげこまれた死体のにぶい

おと。

ひやくていせん
百底村の農夫がくれた藁の火の古いろ。

すぎたのは時間だけだ。

失せたものは何もない。

短歌がいくつかできた。

キャベツの苗をさした山の畑や、

地ぶりになって、やみそうにもなくなったと

いったことや、

雨のあぜみちに枯れた芒の歌など。

(三七、一一、八)

うにカーテンにも気を配って、物音一つしないうようにしていたのにこれでは、あまりひどい。

お正月早々でもあるし体裁も悪くてならぬい。それに近所から苦情が出ることは、間違

私はもう注意を言いにゆく勇気が無かつたあの赤い顔で、怒鳴られそうな予感が出て、怖くてならなかつたのだ。そうかといつて早く止めてもらわなくては近所で苦情に来るだらう。

思い余って私はまた紙片に書くことにした顔も見なくて済むので、書くのが一番気やす

を歌って下さいますな。

老人とストッキング

やせた肩拾いの老人が

破れたストッキングの片方が落ちて

のを見つけた。

大切そうに拾い上げて、

透明に近い網の目を数えでもするように

目に近付けて値をみしてみる。

ストッキングは

繊細な神経をいらいらさせて

恥づかしさを風にゆられゆられ……。

下を向いて歩いて来た白い犬が

ふいと 頭をあげて、

夕焼の赤の中に消え去った。

妊婦を歌って 下さいますな

森 鮎 子

妊婦を歌って下さいますな、

何万年、何千万年も遠い昔の

いのちの 悲しみと 希望を 湛えてい

るのです。

彼女はこの時、あらゆる生きものと、こ

の世の創造主とさえ

親しくなるのです。

湖のように あらゆるものを受け入れ、

それらを湛えることしか知らぬ、

無抵抗な妊婦を歌って下さいますな。

彼女の目が爬虫類の目に似てくる哀れさ

娘に思い切って注意すると、暫くはラジオも聞こえなくなつて、表通りの方の窓も閉め切つてあるのでほっとしていると、またラジオが鳴り出した。

今度は前よりもっとひどくて、耳も破れそうである。困つたことだった。この間注意し

ラジオはすぐ消え、私はほっとして机に向い急ぎの原稿を書きはじめていると、玄関のブザーが破れるほどに鳴つた。

ブザーの音は嫌なもので、犬がそのたびに吠え出し思わず緊張で身がまえ、ドキドキする。

怖る怖る開けて見ると、鬼林が立っていた真赤な緊張した顔をこわばらせ、唯ごとではない心配である。

怒つて来たことは明らかだった。

「一言苦情を言わせてもらいに来ましたノ

わしがラジオを聞いちや悪いといふのかね?

「鬼林は言いながら、タタキに一步入つて来

た。

私はもうぶるぶるしていた。

「なぜわしのことはかり文句をつける気な

のかノわしのどが大やの気に入らねえのか

聞かせてもらいましようやノ」

言葉使いの荒っぽさと大声にまごつき、お

ろおろとうろたえて、言葉もない。

「大やさんにはつきりしてもらいましよう

なぜ、ラジオを聞いちや悪いのかちうことを

ノえ?!

やっぱり朝から飲んでいるのだ。熟柿の臭いがしている。心配したように酒癖の悪い男だったのかと思うと、とんでもない人に借し

てしまったと後悔した。

「音をもっと小さくして頂かないと、困るのです……」やっとそれだけ言う

「だからなぜ困るかちゆうことを言ってもらいましょうや！」

まるで与太者の脅迫に逢ったような思いだった。不意打ちのため手の尽しようがない。なぜ困るか言えと言っても、そんなことは分り切ったことではないか。

「近所が近いのでお互いに気をつけないと迷惑になるので……」と、終らないうちに

「迷惑だって？それならわしが言いたかったことなんだ。Kさんのヴァオリンの音は一体何故大やば、ゆるしておくのだ？」

「……でもKさんのは仕事でし……それにはたまでです……」

「不公平ちうもんだなノ今だって隣りでギロコ・ギロコやっとうるさくてたまらないからラジオかけていたんだノ片方がよくて片方を注意するような大やばは大体不公平だよノ」「ええ……でも近所にうるさい家もあるしお宅の部屋は、表通りに一番よく響きますので、すみませんけど」

私は唯平あやまりにあやまればかりいた話の通じないひとほど怖いことはない。こんな恐ろしい人は初めてである。大休声が大きく

冬彦のことば

大西昇

冬彦が 妻と 話をしてゐた
おとうさまが るてくれると
いいね

とき とき
なにか いつて くれるから
やつぱり

生きてゐて よかったね
冬彦

さざんくわ

あした 入院するよと いったとき
昌彦は したをむいて
エビオスの茶色いびんのレットルを
ちひさな つめで むしりながら
かなしみを こらえてゐた
そして わづかに いいよと いった
十ねんまえ
さざんくわのさいてゐる あかるい日だ
つたな

生老病死 (七)

青木敬磨

十一月一日、漸く共同販売事業を開始。
五年米粉料の魚市場は昨日限り閉鎖した
いくばくの忙しさをなりし今日でできる共同販売
所のはなしに聞き入る
疲れしるく、終に目まひして休る。

大き疲れ一ときにくる心ゆるみ畳のうへに身
は動かざり

激しい吐瀉。その度に心臓は微塵に
くだけ去る如し。

海山の眠りほうけてゐるときにわが心臓はこはれむとすか
わねのうちに心臓はこの位置にあれど手にし
ふれねばつかむすべもなし
しづかなれば脈搏ほそり結滞ありころはす
みて冷えゆく手脚

組合より看護婦をよび、大阪から岡
本君を頼みなどしたりと聞く。診断
はレンキンコウソク症。

心臓に水おかしめもつかもたぬかみころの
ままと云ひし友はも
われを見つむる看護婦の眼のしろきことなど
おもひをり結滞はつつく

喪失

堀之内 歴

私に故郷は もう無くなっていった
わが影が地上から消え失せている如く
あそこには既に見覚えのないものが
忽然と陥没したもののあとに坐っていて
わが網膜の一点に遠いそれらが写るのだ
今しも貧困符 色あせたわが背を丸め
やんわりと街の毛細管 横丁つたいに

あかときと夜烏なきぬめざめゐる雑木林の黄
葉をおもふ

ふたこゑはなきてつづかず夜ふかくむじなの
叫びききしあとのしじま

いぬむかといくたび思へどごかざる夜半の
電灯のあやしき光り

まなこあきてそのままに居りあさまだき障子
のうへにうつるうす月

たしかなる心がまへとおもひつつ苦しきすぎ
てむせびなくわれは

されぎれの記憶をつづりあるひはくずしかの
幾日の秩序いまはなし

林檎の汁も収まらぬこと数日、不思議
に生きつきて、十二日目には薄き重湯
の通れば、

きまつたところを歩む 安穩の薄明時刻

もし今あの遙かな山峽を訪なうとなら
それが最も呪われた旅になるだろうか
都市のここ谷間で 生あくびもれるとき
へお前らに 故郷なんか要るもんか

いつも行き逢う年寄のバタ屋が路上で
不安に開けつ放しの瞳孔を此方へ向け
瞳いっばいに 私を迎えているが あ、
故郷のさざ波よ 寂しらの老いの眼よ

一九六二、十一、二八

ある日のくれ水よりうすきひとさちの重湯が
とほり声あげしこと

其後は日々々に食慾あり、心きも従つ
てしづまりゆく

眼にとめてゆく塵もなし白菊の香によみがへ
るわが命かも

わがやまひゆるむ朝けに老い母が手に植ゑま
しし菊の鉢これは

病室にはりつめし空気がすでになし人のうごけ
ばにはふ菊の香

餅をやり干しはぜのだしにころろかせそれを
しほりて我にたびたまへ

戸口まで見舞ひにきたる人のこゑに会ひたけ
れど会はずいましばらくを

看護婦のちひさき過失をとがめざりまなこつ
ぶりてほかの事をおもふ

月の末端には床の上に起直るほどにもな
り、看護婦をも版らしめて、

今日のおさのもらひざかなは誰がころろ膳に
むかひて瘦せし手をあはす

年老いてかたくなころろつものならむめの前
にある人を見つむる

口に云はず云はぬが花とつがやけばあいつが
悪いと歯ざしり顔

まだ書物よむ力なし、多くは頼しき
人々の雑話を楽しみ、時に写真帖な
ど取出して

大黄河のはのの明けに東むき銃さしあげて万
歳する写真
このなかに我も交るとうれしそくに飯還兵は
画報をあけて見せにくる
日滿華三国の使者調印す石積むごとき大工事
それは
三つ四つの子どもわれらの歳とならば安けか
らんと云ひしは誰か

丸山薫著

詩集 連れ去られた海

¥ 370

★河口★帆船の子★自在なランブ
★連れ去られた海

東京都千代田区神田錦町三十一三
振替東京 九一三七五

潮流社

組合の人々木南舎の青年ら、わが病中
につくしうれし話の歌々聞きゆく程に
ともすれば辭任の決意もゆるむ。

病室のめぐりに敷きし蓆のあと心づかひを聞き
をれば泣かゆ

ほしいものは問はれて西瓜と云ひし西瓜な
ど云ふことを何かおもひし

雁がねはあたまのうへをちかちかと羽音のこ
しなき過ぎにけむ

ほしき書物つきからつきへあらはれきて生計
のことをわすれぬるもよし

まなこつぶり光琳画集など買はむ日をあすの
病床のわがたのしみはとりよせし古本目録に
しるしつけること

まよなかにしみじみとふる雨なれば山のもみ
ちばちらまく惜しも

遠くより見舞ひたまひし人々へお礼のことば
口に云ひしのみ

峯のうへに風おさまらず夜ふかくリルケをよ
むと病床に坐す

さきりの枝にのこる枯葉のかたみにふれかそけ
きものか深夜の詩集

風おちて雨戸ゆずぶるものなしリルケは大
きひとみをもてり

正月の劇のけいこの青年らかへりしあとはた
だしづかなる

ぬばたまの夜深き庭をあるくもの木の葉にも
あらむとおもひて聞きをり

入宮の青年のことばかしこければわれは病床
に端坐してさく

秋のうちに羽がはりせしにはとりは綿雪のご
とあたたく見ゆ

学生は冷視されますと訴へくるいちらしき手
紙横田嬢の

わが手により珪子はあよむたどたどしく飛石
のうへをえらぶこの誇り

ひなたにて大地のうへにあほぶしつむづかる
こらはひとりあるきをねがふ

にはとりひよごさやるわが手をまね珪子
もやるとこしかがめをり

わがやまひはやも癒えむとわが子らと手をひ
きあるく朝庭のうへへ

小春日和あすもかくあねなわが子らとわれと
してするあよみの稽古

小包は善導和尚十二月一日のあさの郵便につ
きぬ

善導和尚わがかきつづりしものゆえにこの小
冊を父のまへに供ふ

編輯後記

十一月六日。信州への旅の途次、はからずも豊橋駅のプ
ラットフォームで、誰かを見送りにこられた丸山薫氏にお
目にかかった。上掲広告の氏の詩集を出版した潮流社々長
・八木憲爾氏を見送つて出られたのだつた。一別来、三十
三年たつてゐるが、意外に氏がお変わりになつてゐるのに私
は驚ろき、意外に老けてゐる私に氏は驚ろかれた様子であつ
た。

旅から歸つてみると、思ひがけず久松潜一先生より鞭達
のお葉書をいただいた。過般近くの阪大文学部で開か
れた国文学学会に先生はおいでになり、そのついでに池田
の逸翁美術館をごらんになつて、同じ池田在の拙社を思ひ
出していただけたことであつた。

これと同じ光榮は、かつて野間光辰教授からもいただいた
。忝いことである。十一月二十八日。北陸旅行の歸り上京し所用あつて荏荏
に棟方志功画伯をお訪ねした。その日の朝長岡で見た東朝
「新入国記」欄で、画伯の左眼は失明し右眼もまた危い由
出てゐたのですくなからず心配してゐたが、案に相違して
画伯は明るかつた。肉眼言ひとならば心眼開く、不退転の
精神力によるのであらう。初めて画伯にお目にかつた昭和
四年の夏の思ひ出のために、八合浦浜松原添えの砂丘に
ふるさとのなハマナスの花のお歌入りの板面を賜つた
が、あの日鉄骨研究の兄太郎は大阪高等学校、愚生は弘前
高等学校の一生徒だつた。

この日拙論にゆかりある川田順・河上敏太郎・三好達治
氏はそつて芸術院会員になられた由新聞は報じてゐた。
(O)

果樹園 第八十三号 (毎月一回一日発行)

昭和三十八年一月一日発行

池田市野町一六八

編輯者 小高根二郎

印刷所 元市印刷株式会社

発行所 果樹園社

池田市野町一六八

定価 三十円 送料 十円

果樹園

第84号

詩人、その生涯と運命 小高根二郎
ヘリック詩抄 森 亮
学 吉本青司

貸 室 萩原葉子
花とりんご 浅野 晃
正月 馬 鹿 堀之内 歴
中国の茶 福地邦樹
生老病死 青木敬麿
編輯後記

詩人、その生涯と運命

書簡と作品から見た伊東静雄 (七十二)

小高根二郎

昭和十八年の八月中旬伊東は次の書簡を中
島栄次郎氏に送つてゐる。

「お元気ですか、永らくお会いしません。

今日杉浦正一郎君から来信、久振に上阪す

るゆゑ、二十二日(日)午前十一時アペノ

橋大鉄前のモカかユーゴー書店で、あなた

と私に会つてみたいとのことでありませぬ。

お気向きましたらお出で下さいませんか。

一筆御案内のみ
十七日

(昭和一八年八月一七日、堺市北三国ヶ丘町より大
阪市住吉区平野西之町二二、中島栄次郎宛はがき)

佐賀高等学校教授をしてゐる芭蕉研究の杉
浦正一郎氏が来阪するので、会はうという案

内状である。杉浦氏と中島氏は大阪高等学校

での同期生である。本来ならば杉浦氏から中

島氏に上阪の予定を連絡し、中島氏から伊東

へ会同の案内が出さるべきである。ところが

中島氏には哲学者らしい隠遁性があつたので

伊東へ連絡する方が気安かつたからかもしれ

ない。昭和十八年の伊東日記を見ると、当時

伊東に母校の佐賀高校から口がか、りかけて

ゐた事実が判る。九月二十七日のところに、

「田舎へゆきたい。広い庭のある田舎の家で

住みたい。そして仕事に専念したい。佐賀の

口の成就することを祈る。」とある。或ひは

そこらの消息を杉浦氏が伊東にもたらしたも
のであるかもしれない。

八月下旬伊東は次の書簡を富士正晴氏に送
つてゐる。

「赤ん坊の生れるの待つて、この休中は家

にばかり居ました。お掃除や洗濯の手伝し

て。本も何もよまず。詩も作らず。しかし

中中生れない。

二十一日から学校、結婚なされたのです

か、お家はどのへんでせうな。氣むいたら

遊びに来て下さい。私は新しいお家ゆゑ、

いろいろ気がひけます。いつか佐賀の杉浦

正一郎君があなたの住所きいてきました。

詩集は九月上旬の予定。」

(八月下旬、堺市北三国ヶ丘町より大阪市阿
倍野区昭和町中三ノ五、富士正晴宛はがき)

伊東は花子夫人のお産を待つてゐる。伊東
日記二十七日の項に長男夏樹君誕生の様子が
見えてゐる。

「二十七日 暑し。学校ひるまで。放課時

分、富士、貴志両君来校。富士君は貴志君

の家に二、三泊して、昨日帰阪せしとのこ

と。カマボコ、アジの乾物土産に貰ふ。富

士君の家にゆき中食に与る。四時すぎまで

談話。帰宅すれば、おばあさん来てゐた。

夕食後花子高田さんと共に銭湯にゆく、か

へれば八時。風呂の中で二度ほど、花子、胸いたみしといふ。段々に陣痛来。手廻の品持ち、常持病院に花子を伴ふ。みちみちでさしこみ来る。道がくらしいうへに路傍に防空壕はつてあるので、手をひいてやる。十時。看護婦さん達もお産よと大きい声で呼合つて、門をあけ、電燈つけていろめくたのもしい。案外早く分娩するらしい、と医者は云ふ。こちらは夜明けの五、六時頃かと来る時は思つてゐたが、生れたのは、十二時二十五分。二階で雑誌よみながら待つてゐた。時々産室を伺ひみる。うぶ声してはしり下り室をうかがへば赤ん坊しはらくしてからねてゐるのが見える。鼻の穴がこちらから見える位置で、思はず大きな鼻と思つた。中々つれて来てくれない。しかしひとりで、ニコニコして、微笑がとまらない。星室。産室から持つてこられた赤ん坊をひとりであづかると、どうにも出来ぬ困惑した気持。あわてて蚊帳を何度も吊りそこなふ。六百八十匁、何だか元氣な、ととのつた、しつかりした顔してゐる。手をうごかし、あくびをする。えなを二重に首にまきつけてたといふ。時々花子見に産室にゆく、わりに元氣。花子も二時頃二階に担ぎ上げられる。うごかすのは、「いい

のかなあ」と不安であつた。共に寝て、蚊を追ふ。花子も元氣。赤ん坊に何か水分やうかといふと、医者は必要なしといふ。赤ん坊はおぎあおぎあとするつこいふくみ声で泣くものと思つてゐたら、なんだかおこつたやうな、氣に入らんといふやうなつよい声でなくのおどろいた。二、三日後つきそひ婦にきいたら、このころは皆さうですと云ふ。なぜだらう。世相が母親の神経をするどくしてゐるせいかなと思ふ。「伊東は久々にして得たこの長男の名を夏之助とすべきか夏樹とすべきか二日間熟考し、三日目に夏樹の方に決定し入籍してゐる。」これは数日前物故した藤村の春樹といふのがいくらか頭にあつたのと、夏之介では趣味がいくらかいきにすぎ、本人がそれをわかるまで困ることあるやもしれずと思つたからである。」と日記に説明してゐる。島崎夏樹、芥川夏之介、伊東は二文家の姓に当てはめ、さらに伊東姓に換置してみて、いろいろ勘考したのであらう。藤村はこの二十二日零時十五分に逝去してゐた。長男誕生の六日前であるかつて青春の日……伊東は安代・百合子さんを相手に盛んに藤村論をやつたことがあつた又、処女詩集「わがひとに与ふる哀歌」を、出すに及んで一本を藤村にも贈呈し、簡単な

葉書の札状がきたことを望外の喜びとした。つまり藤村は私淑した師祖であつた。昨年五月に逝去した朔太郎は師匠だつたのだ。伊東は精神の奥所でこの師祖の像につねに敬重の灯を捧げて怠ることがなかつた。その師祖の本名の春樹の春に次いで、夏の夏樹と命名したについては、さらに敬重の灯を息子が継承することを願つたのかも知れない。この名を熟考してゐた二十九日には大東亜文学者大会が東京で開かれてゐた。伊東は日記に「夏の蒼鬱たる樹蔭、人をして息ほしむべし。わが国の文運もまた夏樹のごときかならん」と書いてゐることは、伊東のその禱り心を物語つてゐる。夏樹君が生れたのを契機にして、伊東は日記を例になく几帳面につけだしてゐる。数日つけ忘れたりしてゐるが、どこかにメモはとつてゐたらしく、替つた月日の個所に附記されてゐる。この丹念さも、夏樹君が成長してものを考へるやうになつた日、自分の生れた頃の日々は、このやうに厳しかつたといふ事實を、父の日記によつて知らしめようがためである。九月に人つて伊東の身近も世界の情勢と共に騒然としてゐたことが、次の日記によつて知られる。

「一日 夏樹生れてから暑い日のみ、病室は風あれども暑し。熱のあつた日は、風が吹いても、マッチをすつても、階下で物音がしても夏樹泣きじやくつた。すぐに死ぬこと考へて困つた。赤ちやんが大へんだといふと、まき子泣く。すぐ助からぬ氣がするのだ。花子の熱は高い時七度八分。医者も乳もみ産褥熱ではないといつた。しかし、おり物割に多いので氣になつた。乳による発熱らしかつた。氣がいらいらしてお目出度いより、心配であつた。新聞や雑誌に「死」のこと書いてあるといやな氣がした。……中略……」

「一日 夏樹生れてから暑い日のみ、病室は風あれども暑し。熱のあつた日は、風が吹いても、マッチをすつても、階下で物音がしても夏樹泣きじやくつた。すぐに死ぬこと考へて困つた。赤ちやんが大へんだといふと、まき子泣く。すぐ助からぬ氣がするのだ。花子の熱は高い時七度八分。医者も乳もみ産褥熱ではないといつた。しかし、おり物割に多いので氣になつた。乳による発熱らしかつた。氣がいらいらしてお目出度いより、心配であつた。新聞や雑誌に「死」のこと書いてあるといやな氣がした。……中略……」

その翌日(たぶん十二日)夜、ねてゐる時こつて、仰むけにひつくりかへりその拍子に、うしろにねかした夏樹の頭をひどく打つ。水で冷やす。この日大毎にわが「読書随想」出る。その翌日(たぶん十二日)夜、ねてゐる便所に立つた拍子に、右手でひどく夏樹の胸をおしつけて、夏樹泣く、仰天する。十三日、朝医者来て、何ともないと云つた由、安心。七百六十匁(生れた時六百八十匁、それから一週間位で六百匁にへつてゐたのである)。十四日、学校帰りに津田氏にお礼にゆき桑原氏が、東北帝大転任を知る。滋養糖、ビール貰つてかへる。十五日、桑原氏を訪問挨拶する。荷造りの最中。帰りに中助の「蜜蜂」買つてよむ。「みつこし」に仕方なく旧稿「淀の河辺」を送る。心にそまぬ。「蜜蜂」は自分の近來の心持に云ふに云はれぬ静・沈静の氣分を与へてくれる。感謝する。一字一字指で押へてよみたい心持也。ずつと残暑つづき暑い。先日からムッソリニー(中伊の山頂のホテル)救出の新聞記事つづく。十二日、アブルツィのアー

ニン山脈中海抜二千九百米のグラン・サツ
ソ、九名の部下をひきゐた親衛隊大尉、
落下傘部隊、飛行機で脱出、英米へ身柄引
渡し予定前一日のことなりしといふ。」

夏禰君の健康状態の不安定。南島島への敵
機敵艦の襲来と三日間にわたり出つ放しの警
戒警報。家族の退院。地震。長友桑原武夫氏
の転任。パドリオ政権による伊太利の降伏：
…この騒然たる雰囲気の中で、伊東にと
つて文学は一種の鎮静剤の役目を果してゐる
やうである。十二日の大毎に執筆した読書随
想「読み方」には、「一字一字を指して押へて
丁度、著者が書いてゆくのと同じぐらゐるの速
度で読みたい」と、乱説ではなく味読の心得
を書いてゐた。十五日の伊東日記には、中助
助氏の「蜜蜂」を「一字一字指して押へて」読
み初めてゐる由と、この作品が伊東の近頃の
心境に、一種言うに言はれぬ静粛・沈静の気
分を与へてくれたと感謝してゐる。一字一字
を指して押へて読み進む読書法は、鎮静を自己
に強ひる一種の自己催眠法だとみることで
きよう。

伊東が異常なほど感銘してゐる中氏の「蜜
蜂」は、昭和十七年の中氏の日記をそのまゝ、
作品にしたもので、兄嫁に寄せる追慕と追悼
が主体となつてゐる。中氏が「銀の匙」を執

筆以後、医者である兄との不和で家を出た頃
から、その間にあつてなにかと面倒をみてく
れた兄嫁に寄せる謝情と慕情が、年甲斐もな
いと思はれるほどの少年的清純で異常に光
つた作品である。「三十三年姉は病兄の世話
をするかたはら家大事と身をこつぱいにして
蜜蜂のやうに働いてくれた。そのうへに理不
尽に降りかかる敵意と虐待と病苦。四十年の
寂寥、四十年の艱難。この人のために泣くな
らば涙を雨とそそいでも足りない」。昔は医
者であり、今は精神異常で釣マニアにすぎな
い老残の兄……。その兄をあしらひかねてゐ
る中氏の衷情に、伊東は自が苦衷を顧みて同
情してゐるわけである。伊東は「蜜蜂」に続
いて「銀の匙」を再読してゐる事実が日記で
判明するが、中氏の「蜜蜂」に於ける苦澁を
その淵源に、さぐらうとしてゐるのだらう。

伊東はこの日記の二日後、次のやうな書簡
を富士氏に送つてゐる。
「御結婚を祝します、と申してもいい頃ぢ
やないかと思ひます。先日平岡公威君から
あなたのお骨折よろこんだ葉書来ました。
わたしのところにも二十八日（お宅に行
つたその晩十二時）にうまいこと男子出生
、まあまあ二人とも無事、詩集は二十日す
ぎの予定。」

「昭和十八年の夏に、富士正晴氏とも御近
づきになつた。現にこの書物のことにつ
いては富士氏に種々な御迷惑をおかけし、交
遊半ばにして応徴、さらに応召されたのち
も、恰かも故郷にのこしてきた愛し児のや

うにこの書の成行を案じて来られた。」
又、この「跋に代へて」中に、三島氏は伊
東に関して次のやうに触れてゐるので、読者
の参考に供する。

「わが師川路柳虹先生からも御噂をうかゝ
つてゐたわがひとに与ふる哀歌の伊東静雄
氏は私が少年時代から、稀有のロマンティ
ストとして懐しみやまつてきた詩人であ
つた。古き世の陵に程近い堺の御宅で、氏
が萩原朔太郎氏を語り、国学における考証
の用を語り、詩人の本質的な教養について
語られる時、氏の眼差が涼しくもえさかる
さまは美しかつた。暗い齏道を厭まで送つ
て下さりながら、「僕はちよつといぢけた
のが好きですね、物を言つてフツと人の顔
をみるやうな。」と云はれたのがふしぎに
ありありと思ひ起される。その後で伊東氏
は、上官の部屋へ食事を捧げて「はいりま
す！」と云つて入つてゆく兵卒のよさを云
はれた。」

三島氏は徴兵検査で帰郷した際に伊東を訪
問したのである。伊東は、親友清水文雄氏の
教へ子であり、心友蓮田善明氏が天稟を認め
て発表舞台を「文芸文化」に与へてゐるこの
若い貴公子を喜んで迎へたやうである。その
証拠によくしやべつてゐる。詩祖としての朔

（九月十七日、堺市北三国ヶ丘町より大阪府昭
和町、富士正晴宛はがき）

富士氏は妹女子さんの生野高女での同級生
——元上方落語の師匠をしてゐた人の娘さん
と結婚したのである。仲人は京大で美学を講
じてゐた上野照夫氏だつた。

富士氏は先月の「文芸文化」で林富士馬氏
の詩を論じてゐたが、その際、同誌の寄稿家
である学習院高等科生徒であつた三島由紀夫
氏にも触れ、「三島由紀夫については今の作
品が纏つて一冊の書物となつてから云ひたい
一冊の書物に、ひとがしないのなら、わたし
が骨折つてもしたい」と言つてゐた。その
言葉どほり、富士氏は自分が勤めてゐた七丈
書院に、三島氏の処女小説集「花ざかりの森
」の出版方を斡旋したのである。三島氏が富
士氏の骨折りを喜んでゐる由、伊東書簡に見
えてゐるのは、そのことをさすのである。事
実、翌十九年十月に陽の目を見た同著の「跋
に代へて」の後記に、三島氏は次のやうに感
謝の言葉を述べてゐる。

「昭和十八年の夏に、富士正晴氏とも御近
づきになつた。現にこの書物のことにつ
いては富士氏に種々な御迷惑をおかけし、交
遊半ばにして応徴、さらに応召されたのち
も、恰かも故郷にのこしてきた愛し児のや

（九月下旬、推定、堺市北三国ヶ丘町より、大
阪府昭和町、富士正晴宛はがき）

招待とは富士氏の結婚披露宴のそれである
Bとはビールのこと。例の、桑原武夫氏の親
戚の津田家にも無心にゆくつもりだつたの
であらう。林富士馬氏も東京からはるばると
走せ参じる模様である。富士氏は彼の詩の最
良の知己だつたから祝意を表すためだつたら
う。末尾に伊東が散文に意欲を燃やしてゐる
事実が書かれてゐる。

月が改まつた十月、その中旬に心友蓮田善
明氏に再度の召集令状がくだつた。第一次応
召から帰還したのは昭和十五年十二月二十五
日だつたから僅か二年十ヶ月の内地滞留が許
されたばかりであつた。その間「文芸文化」
の編輯に、「文学」「現代」「文芸世紀」等
の雑誌への寄稿に、目覚ましいばかりの活躍
をした。今年になつてからも、四月に「本居
宣長」（新潮）、九月に代表作「鴨長明」（雲
林書）を出版し、伊東の序を冠した「神酒の文
学」（書房）もまさに出版されんとする晩で
あつた。

明日熊本に向け東京を発つという二十五日
の夜、をりから降りしきる雨を衝いて清水文
雄・栗山理一・池田勉氏等「文芸文化」の同

人を中心にして数人の友が集つて壮行会が開かれた。栗山氏の語るところによると、「蓮田は軒昂と郷党神風連の歌を高吟し、はては醜夷を憤つて熱涙を流してゐた。私は長い交友の間に、はじめて蓮田が男泣きに泣くのを見た」(昭和十八年「文芸文化」)

「(昭和十八年「文芸文化」)と、言つてゐる。清水氏の記憶によると「アメリカの奴めらが……アメリカの奴めらが……」と繰返し言つて泣いたという。九月にはすでに南島島まで襲撃されてゐた。無念やるかたのない憤激の思ひと共に、このたびは全く生還を期しえない悲痛な予感と覚悟とが、この男泣きになつたのであらう。これが死地にいで征くもの偽らざる万感である。蓮田氏が高吟した神風連の歌とは、盟主太田黒伴雄の「天照す神をいはひて現身の世の長人と吾れは成りなむ」でなかつたらうかと推察する。現身でインモータルたんとする願ひ、萬歳を祈る願ひは、まさしく死を意味する。さういへば、昨年四月蓮田と伊東の間に、「神のみ前にのみ語らむ」という心懷の照応があつた。一脈……太田黒伴雄の「現身の世の長人」にならうという覚悟に、通じるものがあるのを感じられる。

翌朝、蓮田は東京駅で乗車するに先立ち二重橋から皇居を拝んでゐる。立会した栗山氏はその模様を次のやうに報じてゐる。「夜米

止を命ずる場面が書いてある。兵は清冽な流水に咽喉をうるほし、或ひは汗の手拭を洗ひ

の雨に洗はれた大前はひとしほ浄らかで、水をふくんでかざらふ玉砂利はまるで海底を歩むやうに碧く煙つて見えた。陸軍中尉の武装に身を固めた蓮田は見送りの幼い子供たちを傍に並べて、二重橋はるかに恭しく伏し拝んでゐたが、いつまでも面を上げようとはしなかつた。その面影が今もまぎれと浮んでならぬ。」(二流の誓願)

蓮田はこの長い「うつしみかみ」への祈りの後で「水をふくんでかざらふ玉砂利」を拾つてゐる。

皇居を拝してかへるさ
蓮田善明

妻よ この大前に歌かれたる
さゞれ石のうるはしからずや
汝が手ににぎり
拾ひて
われと汝と分たん
汝が手なるは稚子らにも分てよ
さゞれ石
あ、大前のさゞれ石
円らかに 静かに
ありがたきかな
わがいたゞきもつて

行く 三粒四粒

昭和十八年「文芸文化」二月号

この詩によれば蓮田氏は先づ敏子夫人に玉砂利を拾はせたのである。おもうに完全軍装で真白い手袋をしてゐる蓮田氏は、雨水で手袋が濡れることを避けたのだらう。夫人が掌に拾ひあげ、清められた玉砂利を、蓮田氏は三粒四粒わけもらひ、なほ夫人の掌に残つたぶんから、晶一・太二・新夫の三子息に分けさせようといふのである。遠征する蓮田氏が玉砂利を奉戴してゆく気持はわかる。それは蓮田氏が歌つたやうに国の礎をやがて成すさゞれ石であらうなら……。或ひは再び踏むことができるかどうか期しがたい国土の一部でもあらうから……。しかし日本に残る夫人や子達にも分ち持たさうとする蓮田氏の心意は、あきらかに形見分けである。国の礎に成り果てようと覚悟する彼の魂、彼の骨の一部に相当する形見であると解釈される。

ここで読者に蓮田氏が第一次応召のときに執筆した随想「小石」(昭和十四年「文芸文化」八月号)を思ひ出していただかねばならない。洞庭湖畔と想像される蜘蛛手をなして流れる川辺の戦場で軽機・重機・大隊砲が入り交つて鳴る、一線に兵を投入する直前に、蓮田氏は小隊に小休

へリック詩抄 (二十五)

森 亮

信心深かった父の亡き霊に

三十有五年の長いとつき、まだわたくしはあなたのこの正式のお墓に参りに来たことがなく、死者を弔ふわざにと、或は髪の一房を切り、或は心をこめた涙をあなたの上にそそぐこともなかつた。父よ、このなほざりを赦され度い。あなたの骨が

この地で最後の憩ひについてゐるのが分るなかつたのです。しかし御覧ください、それを確かめ得た今、あなたの亡き霊に溢れるばかりの捧げ物を持つて私は来ました。野芹、犬はほづき、いとすぎ、いちぬなど、嘗ても今も

水筒を満たし、又は、顔を洗ふなどする。蓮田氏は重い腰を川原の草に下して躍るやうに

墓前に手向け、墓所を飾るにふさはしいこれらの草木を
此処にもたらし、更に勝る宝さへ持ち込みました。

それは誕生の負ひ目を返さうとする私です。あなたは私に命をくだすつた——いつかは死ぬる命とは言へ。その有り難い恩徳に充分に報いる覚悟を私は改めてもつ。あなたの不慮の死の足許から生まれたやうな私のはかない命も

私の書く詩歌によって限りない命に変わらないでもありません。

へリックの生まれた翌年、父のニコラスは自宅の窓から街に落ちて死んだ。それには自殺と疑はれる節もあつた。変死の翌日聖ポール寺院の近くの某寺院の墓所に葬られたが、死因にまつはるトラブルから納骨の場所がその後変更されたものであらうか。「信心深かった父の亡き霊に」(八二)の詩はさういふ疑問を記させる。この詩に二度も「聖なる」(標題の「信心深い」、本文の「聖なる」)但し「正式の」と意識したといふ形容詞を使つてゐるのも父の死がキリスト教徒にはあるまじき自殺でなかつたことを辯護する気持からであらう。

走り去る流水に見入る。この時水底の小石が妖しく彼を魅了するのである。「その浅い水底から私の網膜を眩はすやうに急に迫り上つて来るものを感じた。それは水底に色とりどりの指程の小石が、水中の花のやうに散乱してゐるのであつて、その天然のモザイクの、水を透して見る冴えた美しさ、正に清麗極りない造化の見事さ、ふと私はこちらから我とその水底のさゞれ石に物言はうと屈んだ自分の突拍子もない行動におどろき、改めて再び小石の美しさに感動をくりかへした。私はその僅か瞬時の深い感動から、直ぐ、烈しく山峽にこだまして鳴りつづけてゐる銃砲声に促されて起ち上つて整列を命じたが、突嗟に私は水底から一握りの小石を握みとり、ぬれたま、ポケットに藏めてゐた。」

この中国の川底のさゞれ石と日本は二重橋前広場のさゞれ石、しかも共に濡れたそれに魅了される、蓮田氏の性癖といふか好みも考へてみねばなるまい。それは性癖とか好みというより、むしろ運命に近いせつばつまつた何かかもしれない。「ふと私はこちらから我とその水底のさゞれ石に物言はうと屈んだ自分の突拍子もない行動におどろき、改めて再び小石の美しさに感動をくりかへした」とあつた。忘我というより衝動性をもつた美への

感動である。美への行動であつた。いや、美の奪取だつた。二重橋前広場でも八妻よこの大前に敷かれたる さゞれ石のうろはしからずやVという美の感動が先行してゐる。次に美の奪取に移行するわけだが、「うつしみかみ」の御前という遠慮からか、八女が手に一にぎり 拾ひてわれと汝と分たんVと、敏子夫人に奪取の役割を担任させ、彼は受領という受け身の行動に転位してゐる。しかし命令者である彼の主体的な奪取本能に基いてのことである。

かく、私が蓮田氏の「さゞれ石」に寄せる妄執にかゝらずにはつてゐるわけは、この濡れた艶々とした円らで静かな球体は、突如として彼に投擲行為を誘ふからである。その行為は大坂駅頭に見送りにてた伊東との出会の直後に発作のやうに起るが、駅頭での出会の模様を、伊東・蓮田はおの次のやうに伝へてゐるが、その対照が面白い。

伊東の十月二十六日の日記に次のやうな記述がある。

「九時四十分の汽車で蓮田善明君大阪通過（昨日電報で通知のあつたもの。応召）。黄菊一枝と、本わたす。身体どうですといふと、神経痛があるのです、といふ。前に職場の経験ある上に、学徒出陣で自分は前

行で伊東から朗吟で聞いた「水中花」の詩句

遂ひ逢はざりし人の面影

一茎の葵の花の前に立て。
堪へがたければわれ空に投げうつ水中花
に対応する歌と想はれるからである。この伊東の絶唱は、あの日以来実に六年蓮田氏の耳底にあつたに相違ない。それは魔笛のごとく折にふれふと鳴りだすのである。この伊東の華麗極まりない投擲は、最近の「久住の歌」

見学

吉本青司

傍聴席に坐ると、守衛が
オーバーをとってほしいと言ふ
何に敬礼するのだろうかV
議場の正面には
星座みたいな壁時計が掛っている
△あすこに何かがあるのかなV
その下の大きな椅子に
議長が威厳をつくっている
議会は
スポーツ競技と違ふようだ

より一層軍隊生活に期待と楽しみがあるといふ。自分「この前の帰還からたいが活躍しましたね」。蓮田「大へんなことです。私はこのごろ断つてゐました。大へんなことでした」。「さうでしたらう。私もさう思つてゐました。丁度いい時でしたね。」さつき京都駅で、臼井からうけ取つたといふ「神韻の文学」といふのに「門出に海上日出 大海原 豊栄のほる朝日影 天足らしたり 国足らしたり」とかいてくれる自分も又、詩集に「再びみ召に応じて征途に上らんとて先づ家郷に急ぐなるわが友蓮田善明君を昭和十八年十月二十六日夜車窓に求めて呈す 伊東静雄」と書いて渡す蒼い顔と、例の微笑。万歳を二唱し、深く敬礼して別れる。

この模様を蓮田氏は次のやうな詞書と短歌にしてゐる。（昭和九年「文芸文化」終刊号）

「大阪駅頭夜十時に近く、下り立つ我に伊東君を迎へ寄り、君が新著「春のいそぎ」出来ぬとてたまひ、また秋のいろふけまされる黄菊一輪、白き紙につつめるをそへてわたさる。われは出だすも恥しけれど、たまたま君が序文をこひ得たるをのみほこりとせし一冊の此も今しがた京都駅にて書肆主の特に二部のみ急ぎ本作せしとてあた

あしびきの阿蘇を消しつ
雪しきる久住の山

面影のこそぞの道とり
はせ下る妹が村指し
息つくと立ちて休らふ
しばしばへ心をどりの
力こめ石を投げれば

で再現されてゐた。しかも、蓮田氏の故郷の山——阿蘇の峯続き、耳馴染みな久住山に於ける投擲である。伊東との関連に於て、蓮田

少数の意見はむきになり

多数の意見は退屈している
やがて 訴訟事件が議題にのぼる
最高裁判所へ上訴することは

とり止めるとか止めるなどか
調子いい演説をぶつ議員もいて
新劇の舞台より面白い
△ところで 裁判所には

ここにないものが在るのだろうかV
議場は一転して
数の権威が登場し
変な幕切れになる
塩の袋をもらうのは傍聴者だ

らしきを渡されたるが一をさしだし、語らふことも多くは暇さへなくて再び車に乗り立てば君は声高く、万歳を二かへり唱へたまひ、我は君がたびし花をうちふりつと相別れぬ。汽車やがて駅をはなれて闇に出づるや不図思ひいでし君にたてまつらむとてポケットに秘めありし、こは冬のさかりにはいまだ早き青き香柑の、せんすべも今はなければその二つの実をとりいでて深き夜の闇に投げ、きみゆかりあらばこのことには其をうけ玉へかし。

蜜柑を闇になぐればおとなくしてしづけ
き君がおもかけの立つ

即ち、伊東から蓮田氏にできたの「春のいそぎ」と黄菊を贈り、蓮田氏から伊東にやはりできたの「神韻の文学」と蜜柑を贈つたわけである。但し、蜜柑は手渡すのを忘れポケットの底に残つてゐるのを、その濡れたやうななめらかさと円らで静かな感触とで発車直後に知つた蓮田は、闇の中の伊東の面影に向つて「ゆかりあらばうけ玉へかし」と投擲するのである。

この投擲を発作的に誘つたのは伊東の詩句への模倣——いや、信徒からである。△蜜柑を闇になぐればおとなくしてしづけ君がおもかけの立つVは、かつて昭和十二年の高野夏氏に投擲行為による愛情を示唆、なしい暗示したとしても、別に不思議ではない。

最近蓮田善明の正当な批評を渡辺京二氏が書いてゐるのを発見した。「彼にとつてはある絶対的な精神の極点に収束しようとして緊張する人間の生命の姿のみが真相であり、そのほかの全生活事象はことごとく幻しであつた」（昭和三年「思想の科学」）と……。

このやうな蓮田にとつて、すべすべとした小球体に寄せる性癖としての異常な嗜好……それに伊東から影響された激情の、渡辺氏流に言へば、生命の表現手段としての果敢だが多分にヒステリカルな投擲……、この両因子の不幸なる合致は、終戦に臨んで上条大佐の射殺と蓮田氏自決の一つの誘因になりはしないか？ 伊東と蓮田氏の別離の場面に際して特に、読者の心裡に刻んでおいていただきたいことがらである。

貸室 XVII

萩原葉子

「すみません。でも近所も近いので迷惑になることだけは……」

私はやっと鬼林の言葉の合間に言った。
「近所々々っておおや言うけど、一休近

所と自分とどっちが大事なんだね？」

鬼林のいっその語氣に私は返事につまづいた。それ見ろというように鬼林は続けた。

「大体人間は皆自分のために暮しているもんだらうことを、おおやに言っておくよ。人のために聞きたいラジオも聞かれないなんてこんなばかげた話は、どこにある？ え？」

「そりゃそうですがでも近所にうるさい家もありますし……苦情でも出ると思うんです……」

「苦情だって？どこの家かね？そんなばかばかしいことを言いに来る家は？」

私は鬼林が息をつく間に一生懸命に説明した。隣家の息子がドラムを練習していて、ひどい時は早朝から深夜まで大合奏を始め、病人や子供のいる家では困って署名運動をしてやめてくれるよう、頼んだことがあった。しかしやめるところかそれからは毎に近所にあたり、丁度貸室を建築中の私の家に一番ひどく当たった。大工の音がうるさいとか、カンナ屑が飛んで来て迷惑するとか、仕返しにやって来たのだった。

ラジオの音も今日迄苦情が出ないのが、不思議だったのだ。鬼林は私の話を半分位も聞くと

「冗談じゃない？あの家なら文句をつければかしいことを言いに来る家は？」

の母親にもそのため逃げられたのに違いはないと思つた。

こんなことを度々聞かされたのでは、やりきれない。せつかく私がきれいに入っていた部屋も、酒瓶や何かでひどい乱雑になつていくに違いない……と想像するだけで、不快だつた。

れることあ、これっぽちもあるまい？朝から晩までドンスカ、ドンスカやられておめえ、いいかげん頭にきているところだよ」

おめえとはなんという言葉だろうと、私は腹立たしかつた。

「向うがドンスカ他人の迷惑も考えずにやっているのに、負けていることあないさ。おおやがおとなしいからつけ上つてやって来るんだ。そんなばかな話はあるもんか？」

鬼林の怒りは次第に隣家に向けられていった。

「よし！今度けちつけて来たならわしのところへよこしてください。おおやは女であまいとみてばかにされているんだ。わしがかけ合つてあげる」隣家に向けられて行ったことでようやく機嫌を直した鬼林は、帰る頃には、言葉も静かになつてた。

しかし私は鬼林に部屋を借してしまつたことを、ひどく後悔した。初めの印象が良くなかったのに、急いで決めてしまつたことはやはりうかつだつた。斡旋所の男もが悪いと思つた。

或る夜、裏庭の方かららしい鬼林の大声が聞えているのに、はっとした。

「父ちゃんのすることに、けちつけるのか！」

夕方玄關のベルが鳴つて私はとび上るほど驚ろいた。鬼林が来たのに違いないと思つともう、足がすくんでいる。ベルのけたたましい音は、鬼林の声と結びつけてしまうほど、私は神経過敏になつてた。意を決してドアを開けるとKさんが立っていた。思はずほつとしてKさんの静かな顔を見た。

花とりんご

浅野 晃

山を見ながら山を上る
山も私を見てゐる じつと
山には私がつきり見えてゐるのだ
上りながら花を見た
花も私を見る
どの花も どの花も
形のあるものはみんな生きてゐる
そして見てゐる
見られてゐる
自分の影を追ひながら来た地虫が
山の影に入ると
花も笑つた 私も

私の掌ののつてゐる
つやつやした一個のりんご

かはい地球
むしろ 太陽

太陽よりも巨きな太陽か
それは仏陀の掌であり

想像し得る一切の世界をのせた掌だ
けれど 仏陀よ

私の掌は小さい
私の掌はこのものーりんごを取りおとす

りんごは砕けた
私は自分を咎めた

これは私の罪だか
私はまのあたりあなたを見る

あなたの掌にあるかはいりんごを見る

「父ちゃんは酒ぐらい飲まなきゃ、一体……何の楽しみがあるんだよ！青二才になんか分るか？」

「もう父ちゃんは嫌だよ！」娘の声であるがたん、びしん、と物のふれ合う音や、ぶつかる音が続けて起り

「青二才め！生意気ぬかしやがって！おめえなんか結婚すりや併せになれるんじゃねえか？だがよお、父ちゃんなんか毎日働らいたつて何の楽しみがあると思うんだ？酒ぐらい飲まなきゃ働らく氣にやなるめえ……」次第に泣き声になってゆくのが分る。突然大声を挙げ

「買って来い！買って来ねえか？」

「あたいうも嫌いだよ！父ちゃん嫌いだよ……」

「なにおう？父ちゃんが嫌いだと？」

「酒止めないなら、あたいうも来てやんないよ！帰るよ！」

「行く気か？よし！」

急ぎ足で廊下を駆け歩く音や、物の割れる音がまた激しく続いた。

自分の娘にからんでいる鬼林の醜い赤い顔が、手に取るように想像された。少しも同情する氣にはなれなかつた。あの年で酒ぐせの悪いことは、やはり人間失格なのだろう。娘

「実は近々引越すことになりましたので、一寸知らせに来ました」

古い人だし何となく他の人とは違う親しみをもっていただけに、引越すと言われて私は良い氣はしなかつた。電話も迷惑をしながら取り次いでいるのに、と思つた。

「ほく、今度結婚することになったのですそれで、もっと広い部屋に移りたいのです」

「そうですか。おめでとうございます」

私はぎこちなく言うと、Kは急に耳の辺りを赤らめて恥かしそうに笑つた。

Kのところには一度も女の来た様子はなく真面目な性格だつたことから、結婚はきつと見合だと思つた。

「じゃ日が決り次第また来ます。まだ部屋が見つからないので……」

そういつて帰つてから、Kは半月経つてもそのまま何とも言いに来なかつた。後の人を決める都合もあるし、部屋代や立替えてある光熱費のこともあるのに、私は催促もできず困つてた。電話の取り次ぎは相変らず続きそのたびに留守だつた。

裏庭でがたがた騒々しい音がしているので出て見ると、Kが荷造りをしていて、若い娘が二、三人手伝つていた。Kは私を見つけると、済まないが急に今日引越すことになつた

のどと言った。Kさんの顔は明るかった。

同じ引越しの音でも、入って来る時と出る時ではどうしてこんなに違いがあるのだろうか。いつものことに一抹の心残りのような寂しさがあつた。引越し先は知らないが、今より良い所に行くことはたしかだろう。

そう思うとKの人生が輝やかしいものに見える、自分はなんとという変り映えのしない人生だろうか、残されたものの寂しさまで味うのだった。

小型三輪のエンジンがバタバタと気ぜわしく鳴り、積荷がようやく終りになったらしい気配がした時、Kがあわただしく来た。手には醤油の残り瓶としなびたホウレン草を持っている。

「これ残りものですが使って下さい。いろいろお世話になりました。それから部屋代は日割りにして計算して来ました」と紙を出した。

見ると敷金一ヵ月分から差引いて、余りを私が支払う計算になっている。本当はその逆で私がKから返してもらわなくては、ならないことを忘れていた。今更ながらに「おおよ」としてしか見られていなかった自分が、ばかばかしくなった。

瓶に残った不潔そうな醤油は犬の食事に使

うことにして、ホウレン草は捨てた。好意は分るにしてもとても洗って食べる気がしなかつた。男一人でどんな暮しをしているか想像するだけでもきかない。

翌日の早朝、またベルがけたたましく家中に鳴りわたった。先に起きていた子供がびっくりしてドアを開けるや否や、鬼林の大声がとび込んで来た。

「あのひどい塵はいついどうしてくれる?! わしに始末させるつもりなのかね?」「返事はないのかね? おおやはいないのかね?」

あまりの大声とひどいけんまくに、私はもうがぶるがぶるしていた。ばかばかしい相手と思つてもふるえは止らない。

だが弱みを見せてはいけなないと、私は気持ちを落ち着かせながら出て行った。鬼林はこの前より一層の赤さでひどい様相をしていた。

普段は私にかなり言返しする子供も、あつけに取られてつ立つている。こんな時はまだ少年でも男ということに頼りになるのに、からきしだめだ。

「だいたいこのおおやはあまっちふろさざるよ! あまっちふろさからこういうことになるんだ。え!!」

くやししいと思つても恐さが先に立つて、言

ハイデッカー選集Ⅲ

五二〇円

ヘルダーリンの詩の解明

【訳者】手塚富雄・斎藤信治・土田貞夫
竹内豊治

理想社

われのままになっている。

「たなごが引越す時ぐらいいは、ちゃんと監督しているのがおおやの役目ちうもんだ。Kさんの引越しに第一おおやは、立ち合ったのかよお?」

「……」

「家に引込んでちやあ何をされたって分るめえ? 散らかし放題に散らかして後の者の迷惑も考えずに出て行くのを、監督するのがおおやの任務ちうもんだ!」

私はKの残して行った塵は今日屑屋さんに持って行ってもらうつもりでいたのだ。ポール箱一杯分の紙屑だった。だがひどく怒るところをみると、他にもっと塵の山があるのかも知れないと思つた。借室じゅうが紙屑や塵の山に埋もれているような、不安に怖びえた。出てみないのが悪いと怒っているが、怒られても仕方ないと思つたところが、私にあった鬼林の言うように、引越す時に、部屋の中まで見ないにしても後片付け位は見届けること

正月馬鹿

堀之内 歴

正月だからと言つて

当然のことのように 朝から酒をくらい 昼も晩もくらい 一日テレビの前で子供らと並んで身体じゅう ふやけさせている

さて終夜 へ悪い一日だったVと悔やみ心で

へもう酒は飲むまいぞVと思う 古い習わしだからとすることろをなにか薄汚なく やりきれぬものにおもう

例年 友も来ず 人をも訪わず 旅の金もなく 巷の雑踏は恐らく 正月をこもつてすす我が家の習慣 独酌のわが傍で 育った子供らが 手足投げ出し 気鬱にしている 所詮お正月とは我が家にとつて なんと呪われた日であることか

一九六三・一・一

河村幸一郎君より「旅愁」届く

国とほきチロルの峯にふる星をわれも見たり きうたがひもなく 峯の星にひざまづき祈るをとめごはこと国にあることさへおもはず

山小屋のランプくらけれ今日すぎし水河まなかひにきらめき消えず 眼の下の大いなる谷に木のかげなしまぎれなく耳にとほるチロル唄

【現代短歌叢書】とどく。土田耕平 篇の跋文をみて。その死を初めて知りし。

みづからをくびり死にける歌びとはいかばかりかも哀しみにけむ

いきのをの命かよわく生きつぎつ秋をもまたず逝きし人はも

わが歌をひそかに見せむ人もがも土田耕平は死にいそぎける

折々

ひるまよりもよほせし雨はつひに降り深夜の落葉にせわしき音す

松の葉の白つゆ玉はよべふりし時雨にかあらむ葉末葉末に

ささんかの白花さきていくにちか手をふればきよき露ぞしづける

をとめらがわれに見せむと手折りこし寒椿しろしつめたきほどに

生老病死(一)

青木 敬 磨

冬 承前

木村与吉に

村にゐてたまたまどく郵便を手にするとき のうれしさをおもへ

共同販売所仲買人

さかなうる仲買人の強慾をわれはにくめどみ なよき人のみ

一心にわが説明をききいれる仲買の人らに顔 なじみなし

仲買と云ふ階級がなくなればこの人々は満洲 にゆくか

一日一日わが雑用のふえゆくを哀しみながら 日記かきつける

みむなみの山にもみづる櫨の木はくぬぎにまじりいよいよ紅き山もとの雑木林にこがらし吹き兵らもくふかぬくめしを魚を

たのみおきし陣守の役僧のるす故に始めて杖つき年ら門を出でて
病床にわすれし日とてあらざりき眼のしたにひらくわが海わが山

やみあがりのわれに辛かる坂のみちを杖つきあるく中風患者のごとく心臓はしばしづまりあれなとおもふたひらなる道はわが村になし

たちまちに山こえの雲のひろがりくるはやきをとおもふ坂のうへのみちに海づらをかぶさる雲のおもみさへ身にうけて

かんず病みあがりわれは大海にかけるくろ雲のひとところあまつ日おしはおちてひびかう

今日すこしつかれすぎたるこちなり死産のこともはふりしてかへる石段の隅にかたまるもみち葉をなにかさびしくながめて通る

籠居
岩のうへに歩哨うごかずその手まへ樹水きららかに日にてる写真しみとほる空気の層をかんじをり樹木の写真に歩哨兵の影

一軍が長矩形陣をなし肅々と敵線をつきいる記事に身はふるふ

触るるものは切りにぐるものはかへりみず長矩軍団のあとをしづけさいにしへの諸葛武侯のあとどころ大いなるかなや皇軍の地図は

小春つづき茶の間あかるき窓のそと柿の実赤しはだか木のうれいに時雨すぎてうすら日うつる庭土にこどものかきし人の顔二つ

山の尾をいきづきあへく風音かふかきおくとこのころぐるひか草原のむかふはふかき谷のきりわが友らゆくとに足いでぬ夢

月よみの光のしたに草木みなやすらぎぬむるこの静けさは

阿闍世先生の遺影に
麻ごろも黄架装よちれてひさしかりほほ多みゐます師のおんすがた

わが口に火宅と云ふことおほえしは啓基先生と道ゆきし秋いくとせかすぎさりゆけり冬ふかくこの朝ときし遺影を拜す

義美入宮
つはもの門出のおくりききながらわれは病床におき直りをり

しめやかに雨ふるひとひ風邪にねてわがまへにある仕事のみ多し

茶の花は雨にしほたれ散りむかしほむことをしらぬむくつけき花は

元旦
初霜や山の小径を宮詣で墓詣ですとわれはつま子と

父祖のぬます奥津城は白き石ひとつ水仙の花におちくる初日

見下しゆく峠の下の小村には初日さしよりて人の影もみゆ

組合員一統権原に初詣で
大和こそ大きふるさととりよろふ山のかさなりをこひて来にけり

飲火の松のしげり見ゆ朝霞たなびくなへに鉾杉も見ゆ

をぐらきに坂の上をすぎ大君のみいくさにたつ足音ぞそれあかときの霧に入りゆく人の聲さむさあつきにつつしめと祈る

打瀬祖の紛擾。
いとまあれば騒ぐ人らかわがからだすこしよくなりて休むひまもなし

しらじらと風ふきしきる月の庭にはだかとなりし青桐のかげ庭のうへに流るる月の光あをし冬木のかげのつまびらかなる

黒崎徳善寺報恩講、疲れて泊る。
みちばたの溝のたまりに埃うき冬にいりゆく天雲のうごき

かれがれの水たまりの上に吹きよせられ土埃しろし小葉もましり

塀のうちに紅き実のある冬景色みちひくくして出であふ人なし

ひとしぐれ千両の実のつゆけしや廁につづく橋廊の反り

しみとほる夜寒のころ鉄瓶のたぎちはしろき花よりもほのか

くろぐろと杖曳きあるくおんすがたわが影法師にはほほみあるく

やすらげく眠りしままの爺の顔をふとしもおもふ道ゆきながら

湯崎桃の井。連れの人らも歸りしあと、
冬の夜のくだちにひとり部屋にをり口誦すことき鉄瓶の鳴り

耳のおくどとほくはるけき追憶は父の病室にききし松風

わが病やしなはむころづもりなりひとりしをればこの夜のさむけき

旅の宿に夜ふかくしてさえかへる心をもてり戸の外は雨

中国の茶

福地邦樹

雲南の茶というものを飲ませてもらってびっくりした中国人はいつも

こんなにまずいものを飲んでいのか安物の紅茶とげんのしょうこをまぜたよ

うな味だ色の赤さからみて製法はおそらく紅茶のように醗酵させてあるのだろう

二杯目をすすめられて私はあわてて手をふりながら考えた

なるほど漢詩のあのがさと枯淡とはこのお茶の味に実によく似かよっている

龍神の山はかくりぬ谷を深み夕霧こむる下にかありし

木の国の白良の浜の白砂は足あつつけはその夜にも消ゆ

一月十二日

わだつみに白浪たつとも山ふところ南にむかふ家にゐて見ゆ

山内義雄・矢野峰人編 ★★
岩波 上田敏全訳詩集

岩波書店

がらす戸にあたる日向のうれしさを家の人ら云ふわれに向ひて

相諍ふ小村の日課われはしりぬ諍ひなくなればさびしき人らを

公けのことにわかづらふことなかれと論ず人もあり我もか思ふ

冬野ひくきむかふにひかる海ありて雪雲しだいにひろがりゆくも

雪の野に葦屋根多き村ひとつ製鉄工場のしるえつとの前に

しろじろと低田に立てる驚うこかず雪ふりくればいよいよ白き

水田ひくく白鷺あるくおちつきを見つつわが行く雪ふる道を

三宮黒田巧宅
 かりこものおもひみだれて寝もやらずただにらみみる竹田の軸

あたたかき神経充つる山水にもみづる樹もあり竹田の軸

塀ありて草家のあるじうつつなし秋日にたらし山と樹と水

ぬばたまの夜空をおつる星あれや息はけばわが息がめに見ゆ
 生きの世にいかなるえにしありけるか先だちゆきし人のこほしき
 わが前をうしろをあるく聲音すわがめにみえぬ人の音すも

わがことをいろいろに云ふ人ありと憤るものあらむ歎ぶものあらむ

春

上京 小山細池町下村宅
 塀の内はいまだ芽ぶかぬ木立にてめに見えぬほどにそそぐ雨あり

五条の教会にて始めて細野とよぶ人にあふ。去春富岡の伯母にききしことを再び、

高山の花にもあれな霜しろき歳のはさまに萎ゆることもなく
 むらぎもの心みだれてありといへどわが向ふ道はあめつちに一つ
 生き死にはみころのまま業運のめぐりめぐりをうつつたへに享けむ

わが身にはすることもなし青桐の若葉萌えいづる速さに見入る

編輯後記

十二月二十日の東京新聞「大波小波」欄で拙誌がとりあげられ好意ある言葉をいただいた。吹けば飛ばぬ小説ではあるが、本号で八十四号一つがなく第七巻を完結したことになる。詩誌としては珍らしい息の永さと、同人誌のおきまりである編輯後記に於ける経営難の愚痴がないこと、慰めの言葉をいただいたのだらう。
 さういへば五月十四日の朝日新聞「季節風」欄で拙誌にいたたい有難い言葉も忘れられない。お陰で減る一方であった会員を一つ気に恢復できたし、ハイデッガーの竹内豊治氏その他の貴重な知己を得たのである。ところで三十一日の朝日新聞は「季節風」欄の筆者の目録を解いた。十二名の筆者の中で、文学関係は次の六氏、大岡昇平、佐伯彰一、高橋義孝、武田泰淳、永井龍雄、林房雄の諸氏であった。この中で、こちらの寄贈者であり、特に詩に造詣の深い人が「目」氏であったわけである。意外な方であったのに恐縮し深謝も申し上げる。
 話は変わるが「思想の科学」十二月号の「ナシヨナリズムの転生」特輯は面白かった。特に渡辺京二氏の「蓮田善明試論」は是を是とし非を非とした正論で注目された。
 昭和三十八年々頭……会員の諸氏から年賀を多数いただいた。略儀ですが、ここからお目出度うを申し上げます。特に矢野峰人先生からは、上に掲げた岩波文庫「上田敏全訳詩集」のお年玉をいただいた。感謝申し上げます。(O)

果樹園 第八十四号 (毎月一回一日発行)

昭和三十八年二月一日発行

池田市野町一六八
 編輯 小高根二郎

大坂市東住吉区桑津町五の八
 印刷所 元市印刷株式会社

池田市野町一六八
 発行所 果樹園社
 定価 三十円 送料 十円

果樹園

第85号

詩人、その生涯と運命 小高根二郎
 ボ ス ト 杉山平一
 神 経 吉本青司
 詩 人 福地邦樹

ヘリック詩抄 森亮
 古本屋 堀之内 歴
 貸室 萩原葉子
 先師 浅野晃
 汽車 美堂正義
 噴水 渋谷晴雄
 生老病死 青木敬磨
 編輯後記

詩人、その生涯と運命

書簡と作品から見た伊東静雄 (七十三)

小高根二郎

伊東と別れ、一路……熊本に向け西下する蓮田氏は、錢けの黄菊を水筒にさし、暗い車燈で貫つたばかりの詩集「春のいそぎ」を読んだであらう。蓮田氏の「おらびうた」に次の歌である。

よき人のたびし黄菊を水筒のくちにさし
 つつかざしとぞする

死地にいでたつ者にとつては、唯一の頼りとなるのは内地に留る人の友情である。菊は命ながい花であるが、なほ水筒に生けて、一

刻でも花の命を伸ばさうとする蓮田氏の心ばへには、共に友情の変らざることを祈る思ひも籠められてゐたであらう。蓮田氏が網棚に載せてゐる背囊には、日本文学報国会国文学部会から贈られた「折武運長久」と書かれた日章旗もしまはれてゐた。そこには藤田徳太郎・久松潜一・石川達三・塩田良平・中村武羅夫・暉峻康隆・藤森朋夫・西尾実・舟橋聖一その他の諸家の署名がしるされてをり、その数ある友情も安心立命のよすがであつたに相違ない。

蓮田氏は帰郷すると直ちに西部第十六部隊に入隊、濠北派遣隊第四六師団歩兵第一二三聯隊第三中隊第一小隊長を拝命した。月末門司で上船するに際し軍隊用頼信紙にそ、くさと次の書簡を鉛筆でした、め、祖師ヶ谷なる

敏子夫人に送つてゐる。

「一、スベテ申サヌ故、後ノ事モ、オ前デ分ル程度デ処置セヨ

一、俸給ハ十二月分ヨリソチラヘ行ク、

一、コチラニ、トランクヤ風呂敷包ミヲオク。(城戸さんが、一丁目か、二丁目か……以下不明)

一、本ト夏物シャツ等ノ他、殆ド不要ナノデ、残シテオイタ。

一、送ル原稿ハ、文芸文化同人ニ渡セ

本ニスルニシテモ、三人モ忙シイカラ、僕ノヲ急グ要ハナイ、

○国学と文学(講談社)完成

○歌意抄(放送協会ガ受ケナケレバ白井書房デモヨシ)

○古典文学の榮(仮名、古枝の花第一書房)十分完成シテハ居ナイ

序文ヲ夫々適當ニ書イテ貰ヒナサイ

一、別送ノハガキハ、表裏ヲヨクミテ、書キカケノモノハヤメヨ、

コチラハ
 留守宅 東京都世田谷区宇奈根八二
 四 蓮田善明
 トスル。
 一、学校関係ハ出来ルダケマトメテ直接渡ス

他モ直接渡セルモノハ渡セ

他モ書キカケテキタガ間ニ合ハヌ故
学校ナドデ、父兄ニモソノコトヲ伝
ヘテモラヒナサイ

一、郷里デハ植木、熊本ノ親戚、皆大變

世話ニナツタ

一、植木ニ一度帰ツテ見タカツタガソノ
余裕ナシ

この書簡と共に、蓮田氏が昭和十五年年末
中国戦線から復員直後……戦傷の後遺症を保
養する目的もあつて、阿蘇栃木温泉に敢行し
た逃避行に取材した絶作・小説「有心」も送
られたのであつた。

蓮田氏が輸送船に乗り南下を急いでゐた十
一月上旬、伊東から清水文雄氏に次の書簡を
送つてゐる。

「お手紙ありがたうございました。二十六
日夜大阪駅に蓮田君を一人で送りました。
詩集と黄菊一輪を捧げ、万歳を唱へて別れ
ました。感慨切でありました。

私もおおひしたくございます。お互にこ
の時期をしつかり生きませう。そして互の
この信頼を以て文学をつづけてゆきませう

(昭和八年一月三日、堺市北三国ヶ丘町より伊東)

(京都豊島区目白町学習院官舎、清水文雄宛はがき)
この清水氏宛書簡の三日後、日記によると
桑原武夫・大山定一・富士正晴氏等と「春の

ありました。

二十日

伊東静雄拜

額原先生侍史

(一月二〇日、堺市三国ヶ丘町より京都市大)

將軍、額原退蔵宛封書

これは額原先生から贈呈された随筆集「雀
色時」(昭和八年二月刊)に対する礼状である
同著に「二つの書」と題し、伊東の詩集「夏
花」と保田氏の「戴冠詩人の御一人者」の評
文が収録されてゐる。この「夏花」評は「コ
ギト」昭和十五年七月号に寄稿されたもので
卒業論文審査の日に、初めて伊東を知つた
さきさつから「わがひとに与ふる哀歌」を経て
「夏花」に至る生長の過程を辿つた慈愛に満
ちた評文で、拙論で幾度か引用した代表的な
伊東評である。又、額原先生が保田氏の著に
好意を寄せてゐる代りに、保田氏も近著「芭
蕉」(日本思想家選書)で額原先生に触れてゐる
ことを述べ敬重の意を伊東は表してゐるわけ
である。

十一月下旬の伊東日記には、「春のいそぎ
」が機縁となつたらしく、大毎学芸部次長だ
つた井上靖氏や、河盛好蔵氏の名が見えてゐ
る。

十一月二十六日の項には「井上靖(大毎)

いそぎ」出版記念会を催してゐる。

「六日 約束に従ひ、富士君学校に迎へに
来て、京都にゆく。その車中で大戦果を知
る。〔大本営〕不思議なほどの偉力。感謝、
わが心明るし。

車中から見る淀河原に、すずき美し、草
紅葉、春の花よりうつくしい。六時半北野
社頭で桑原、大山両氏と落合ふ。北野茶寮
で八時半ごろまで。いろいろ記念の文字書
き合ふ。それから四條の何とかいふ待合で
十時半ごろまで。大阪駅につくと十二時、
電車なし、タクシーで富士君の家につく。
タクシー代十円、運転手帰還勇士といふ。
いろいろなこと喋る。いやなこと云ふ。

伊東の出版記念会であると同時に東北帝
国大学に赴任する桑原氏の送別会も兼ねてゐ
たやうである。「いろいろ記念の文字書き合
ふ」とあるが、寄せ書きに伊東は次のやうな
文字をしるしてゐる。

君によりて相会へり

一旧友と遠く行く友

静雄

「君」は富士氏。「旧友」は大山氏。「
遠く行く友」は仙台にゆく桑原氏。又、

兩ありて

よき夜なり

河盛好蔵(出版会)より来信、詩集のこと。

「とあり、井上氏からは大毎に詩を需められ
たのであらう翌二十七日の項に「学校で井上
(大毎)に詩の謝絶、河盛に手紙のお礼書く
。」とある。翌二十八日日曜の大毎新刊紹介
欄には井上氏が書いたと想像される「春のい
そぎ」評が出てゐるので、詩と同時に掲載し
伊東を推挽する芳志があつたのであらう。

「大昭漢発の前二年、後一年の作品二十八
篇、独自の高深なる詩風のうちに聖戦をう
たひ、あるひは妻や子、友への友情をうた
ひ、いづれも抒情詩として現代日本詩の最
高水準を示してゐる。近來多くの詩人の言
葉がいたづらに調子高くて、その反面ます
ます光を失つてゆく中にあつて、著者は美
しい言葉だけが強く天地を貫く詩の掟のき
びしさを作品を通してみごとに示してゐる
読者は日本の美しさがそのまま日本の強さ
であることを感じとらずにはゐられない。

詩を、伊東を、知ること篤い評言である。

十一月下旬、伊東は仙台に赴任した桑原氏
に次の書簡を寄せてゐる。

「仙台はいかがでせう、少しは新しいお住
居におち着かれたところでせうか、奥様お嬢
ちやま方は、新しい土地の風俗をどんなに

しか

静雄

伊東は京都へ行く車中で大本営が久しぶり
に伝へる大戦果に喜んでゐたが、帰りのタク
シーで帰還兵である運転手が語る戦線の真相
? にいやな思ひを味は、されてゐる。
事実、米軍による蛙跳び作戦が開始され
てをり日本軍は幾つかの島から退却を余儀な
くされた。過日再び召集になつた蓮田氏
も、その反撃作戦に起用されたのであつた。
十一月中旬伊東は次の書簡を額原先生に送
つてゐる。

「御手紙と御本まことに有難うございまし
た。殊に「雀色時」には拙著についての御
文章ものつてゐるのを発見し、大へんうれ
しく、又光栄に存じてをります。怠け者の
私にも、この御本はわかりやすく、なつか
しくございます。先生には近來御健康の御
模様を御高著の次々の出版によつて拝察さ
れ、ひそかに喜んでをりました。私もどう
したことが、八年目に子供が生れ、(この
八月に)、それが初男子でしたので、うれ
しく、何やらそのため元気を覚えるやうで
喜んでをります。

昨日保田君から「芭蕉」送つて参り、先
生のことふれたところ当然ながら愉快で

ごらんになつてをられることでせうか、寒
気は流石に烈しいことだらうと存じます。
先夜はほんとうにいろいろおもてなし下
さいまして、うれしくまた恐縮ございま
した。おそまきながら心からお礼を申し上げ
ます。あれ以来私は相不変学校と家とを往
復するだけの何の要哲もない毎日をすこし
てをります。富士君は応徴で、何とかいふ
軍需工場に働いてフアラになつてゐるや
うであります。高等学校の諸先生にも、桑
原さんのおいでにならぬと何やら縁が切れ
たやうに相成り、一向お会いする機会もあ
りません。友人いよいよ少く、知つた卒業
生らも殆んど入営出征して、心さびしく、
夜は早く床について何やかやまとまりない
読書を少しづつしてゐる近況であります。
今夜は少し心がおちつきましたので、お
礼を兼ねて、少しはにぎやかな文面のお手
紙しようと思立つて書き出しましたが、さ
て生活が生活ゆゑ、一向うまくゆかず、こ
れでどうやらおしまひになり、へんなもの
になりました。少しでも愉快な御生活と御
健康をお祈りいたします。

二十九日

伊東静雄

桑原武夫様

(一月二十九日、堺市北三国ヶ丘町より仙台市)

十二月中旬伊東は次の書簡を高安国世氏に送つてゐる。

「拜啓 先夜は色々失礼の段、お許し下さい。この九日に富士君は大阪の何とかいふ工場に徴用になりましたさうで、大変だなど存じてをります。

御高著「ミュンツトの手紙」御恵与下さいまして、まことに有難うございました。私はこの三、四年志すことがございまして外国の文学見ないで過したのであります。先日、ふとした機会にて、リルケの「風景画論」(谷氏訳)といふものを読み始めまして、わが国古来の風景観との差違など今更色々考へて興味深く、今少しリルケのもの改めて読直しもし、新しく読んでみよるかといふ気持ちで存じた次第であります。リルケのものしばらく読まずにゐた間に、殊には現下の時勢で、自分がどんなに変化してゐるか、(或は変化してゐないか)それを検してみるのは、何だか楽しい期待であります。そしてわが国古来伝統の詩想を考へる上にも一番いい西洋の詩人ぢやなからうかと、これも今更のやうに考へてをります。

少くともそれには最も邪気のない詩人ではなからうかと存じます。取敢へずお礼のみでございます。十二月 伊東静雄

高安国世様玉机下

(昭和十八年二月一日、堺市北三河ヶ丘町より) 京都市左京区北白川小倉町五〇高安国世宛封書) この書簡の宛名の高安国世氏も書簡中に現れる谷友幸氏も、共に京大独文学雑誌「カスタニエン」の執筆者として伊東には馴染であつた。

伊東と高安氏が出会つたのは十月十七日富士氏の結婚披露宴に於てであつた。高安氏は上野照男氏等と一緒に出席してゐた。午後二時頃から夜の九時頃までも続いた酒宴で、「われ一寸酔うた」と伊東は日記に書きとめてゐるほどだから、アルコールに浮かれた彼は独文学について、短歌について、高安氏とアララギについて、リルケについて、或ひは、論ずるところがあつたであらう。或ひは、三四年外国文学を見ないですぎた由伊東は述べてゐるが、「春のいそぎ」期に於ける日本詩精神への没入と精進と深齋に関して論及するところがあつたかもしれない。この書簡の冒頭「色々失礼の段」とあるのは、そこらの賑やかな雰囲気を感じさせる。伊東は高安氏よりリルケの「ミュンツトの

手紙」(昭和十八年二月)を贈られて同じリルケの「風景画論」(谷友幸訳、昭和十八年)を思ひ出してゐる。この方は買つて読んでゐたのだらう。

ギリシャの昔にあつては風景とは遊戯場や舞踏場へ通ふ道にすぎなかつた。中世の宗教画時代にあつては、風景とは上に天国下は地獄につながる縁に蔽はれた墓地でしかなかつた。人間や神で肩身を狭くしてゐたこれらの風景が、やがて天国につながる輝やかしい存在としてマドンナを飾るアクセサリーにまで昇格する。その昇格した風景にルネッサンスのレオナルド・ダ・ヴィンチは喜びや悲哀や体験や未来を表現させて、いはゆる芸術としての意味を与へた。たとへばモナ・リザの肖像画を見給へ。彼女の静かな肉体に肉人的な総てのものが内包されてをり、その他人間の前や人間を越えてあるものは総て、背景の山脈や木や橋や空や水の関連の中に包含されてゐる。このダ・ヴィンチによつて発見された風景芸術としての意味が確立されるためにはまだ数世紀にわたる、孤独者たちの手さぐりが必要であつた。この手さぐりの果に、自然を對象的な偉大な異体として感得しだしたのだ。自然は人間より遙かに持続性を持ち、偉

ポスト

杉山平一

一本の道の果てに
真赤なポストがともっていた

人通りが途絶えたと

いつも僕は問いを投げ入れていた
返事はすこしも来なかつたけれども

このころ僕はもう問いを投げないが
ポストは色褪せても 尚
僕の片隅に燃えている

一つの返事がやがて来る筈である

大であり、幅があり、静かであり、孤独である。こゝに風景画が独自で成立する契機があつた。人々は何の変哲もない海を描きだした雨の日の白い家々や、人の通つてない道や、淋しい水を描いた。人々はさらに沈潜して風景的な存在の事物としての意味を悟つた。事物という存在は、なほに期待を抱いたり、或ひは焦つたりせずに、静かに法則の裡に過ぎ去つてゆくものであることを識つた。そこで人間は事物にさへなりたと思ふやうになつたのだ。

不十分な紹介だが、このやうな比喩で織りなされてゐるリルケの風景画論を読んで、伊東は日本古来の風景観との差違を思ひ浮べたというのである。過日皮肉にも米艦の艦砲撃を浴びた南鳥島の命名者だと言はれる志賀重昂の「日本風景論」を思ひ浮べたであらうか? 同著は保田氏が折にふれしはば論じたところで、日本風景の優雅さが日本を日本人を西欧から冠絶せしめたという素朴な国粹論であるが、「風景のなかにとけこんで貧を忘れたことは、たしかに諸外国の貧民と日本の貧民との一つの差違であつたらう」(昭和三七中央公論社刊桑原武夫篇「日本の名著」)というほど松田清雄解説の彼我の風景観の差違を、伊東は思ひ浮べたかもしれない。

しかし実証的に伊東の風景画観を確かめるために書簡中に彼好みの烟霞をさぐらねばならない。昭和二年十一月二十三日附酒井安代さん宛書簡に京都博物館で藤原信実を見てゐたことがしるされてゐた。昭和五年七月五日附酒井百合子さん宛書簡には日田に遊んだ伊東が田能村竹田に驚ろいた事実が書かれてゐた。しかし、信実の方は三十六歌仙の人物画であつたから論外として、竹田の繊細高雅な南画が伊東の故郷の清澄な風物とあひまつて彼の日本風景画観の、相当部分を形成したのであらうことは間違ひない。先の松田道雄氏の解説のやうに、貧を忘れて人が、山に、木に岩に、流れに、草屋に、同化し、調和してゐる竹田の風景画の境涯を、リルケが説いた西歐画のいづれの期に伊東は対応させたであらうか? 或ひは伊東は、アルプスの岬々とした山や、岩礁や、雲群や、羊や、牛馬、その他の物象を含む壮麗な風景に対し、貧が骨身に徹してゐる山棲みの人を克明に描いた馴染みのセガンチーニの画幅を對象として思ひ浮べたかもしれない。つまり、竹田に於ける風景と人との同化による調和……。セガンチーニに於ける風景と人との対応による均衡……。同じやうであつて本質的には全く反対なこの差違を、伊東は彼我の風景画観の相違

の結論として胸に納めたかもしれない。

又、伊東はリルケを再読することによつて戦時統制下に於ける、自己の詩心が、変化してゐるか、変化してゐないか、測らうとしてゐる。リルケを尺度とし、或ひは道標とする傾向は、今に限つたことではなかつた。彼の詩心が低迷をしたり、或ひは転機を求めめる場合は、必ずと言つていいほどリルケを呼んでゐた。

昭和七年二月二十三日及び三月十二日附百合子宛書簡に、リルケの詩の翻訳を毎日やつてゐる由書か、れてゐた。伊東が処女作「公園」を「呂」誌上に発表したのは二三ヶ月後の五月であつたから、詩の骨格と詩精神とを、独逸語を解体して日本語に組成することによつて学んでゐたのである。

昭和十四年十月十九日附大山定一氏宛書簡には、「私が詩を本気に書く気持になりましたのは、リルケの新詩集をよんでからであります」と書いてあつた。その三日後の富士正晴氏宛書簡では、「リルケを殊に新詩集をしつかりよんでみようと思つてゐます」とあつた。伊東はリルケの新詩集に学んで三行三聯の詩形式で新風を出さうと苦心してゐた時であつた。

その後は前掲の高安国世氏宛書簡である。

戦後にも昭和二十二年九月一日附富士氏宛書簡で、「リルケ約六十篇を独逸語でよんだ」由を伝えてゐる。戦前から続いてゐる詩想からの転身を意図したからと考へられる。

伊東がいまこに谷氏訳の「風景論」を讀み、高安氏から「ミュンツトの手紙」を讀いたのを機に、なにかの反省を意図するとすれば、第三詩集「春のいそぎ」で「一応頂点を極めた」と自負する日本伝統の詩想を、文語ではなく日常茶飯の口語で造型することではなかつたかと思ふ。事実、「春のいそぎ」に収載する二十八篇の詩中、口語を駆使してゐるのは、二割にも満たぬ五篇にすぎなかつた。リルケを「最も邪気のない詩人」と呼んでゐる意味には、さうした造型的な意図で骨身をけづつた古典的な毒気のない西歐詩人……と言つたほどの意味かもしれない。

わなみに「ミュンツトの手紙」中で伊東の関心を最も引いたと思はれるのは「ドゥイノの悲歌」の完成を伝えるタクシス侯爵夫人宛書簡であつたらう。

「ついに、

侯爵夫人、

ついに恵まれた日が何という恵まれた日か来たことでしょう、あなたに悲歌

神經

吉本青司

机の上の

ハマユウの果実を見て

△これは何だ△というから

△猫の脳髓だ△と答へたら

友だちはほんとうにした

雪は南窓に散りこぼれ

ハマユウの果実から

指先に 白い暖かさが伝わる

早い春の来信に似た

この植物性ノイロンの

微細な反射は

遠い空からの発信に違いない

ハマユウの果実を

△猫の脳髓だ△といったのも

まんざら

嘘ではなかつたのだ

詩人

福地邦樹

恋をしている時は

だれでも詩人だと

プラトンは言ったが

あれは昔の話だ

近頃 恋は全く無力で

悲しみだけが詩人を支えている

それはちょうど老人の嘆きのように

だからもう 詩は死にかけている

の完結—私の見るかぎりでは—
をお示しできる日が。

十、悲歌です。

最後の大きな悲歌。(かつてドゥイノで書きはじめたハわれいつの日か、恐ろしき悟りの果ての日、よろこびのほめうた^{ハッペン}の天使らに捧げ得んことをVをもとにした)この最後の悲歌、それはもうそのころから最後におくことにきめてゐたのですが—この悲歌で—私の手はまだふるえています今ちょうど、十一日土曜日の夕方六時、それを書き終えました!

すべてが二、三日のうちに出来上りました。それは名状しがたい一つの嵐、精神の^{クワウ}颯風(以前のドゥイノの時と同様)でした私の内部のすべての繊維、すべての組織は、めりめりと引裂けてしまいました、一食事などは思ひも寄りませんでした。誰が私を養つてくれたのかふしぎなくらいです。でも、もうそれは出来たのです。在るのです、在るのです、
アーメン。

私はこうして、このものために生き抜いて来たのです、すべてに堪えて。すべてに。そして必要だつたのは、これだつたのです。ただこれだけだつたのです。

一つの悲歌は、カスナーに捧げました。全体はあなたのもので、後爵夫人、どうしてそうでないわけがありません。題は

ドゥイノの悲歌

本には(だつてはじめからあなたのものでつたのに、あなたに捧げることはできませんから)、献辞は書かないで、こうしようと思ひます、

……の所有から。

さて、あなたのお手紙と、いろいろの御消息とに感謝いたします。ずいぶんお待ちしていたのです。

私の方からは、今日はこれだけにしておきましょう、ね……ああ、とうとうそれも△物△になりました!

どうかごきげんよろしく、親愛なる侯爵夫人。
あなたの

D・S・L

伊東はタクシス侯爵夫人をパトロンに持つたりルケをうらやんだこと確実である。サロンもパトロンも持たぬ日本の詩人の寒生涯を伊東は歎じたことがあつた。五年前の百合子さん宛書簡でも、次のやうに歎いてゐた。

「学校教師もつくづくいやです、毎日ぶらぶらして暮らしてみたいです、そして気がむいたら、思ひつき次第の文学書いて暮らして

みたものです、そのくせ文筆業をしたい気はなく大へんわがま、な贅沢な考なのです、ゆり子さん、そんない、パトロンになつてくれるものはないでせうかね、日本にはい、詩人がゐないのだから、新詩の伝統をつくらせるために、わたし一人位はそんな生活させて詩か、せてみて日本に恥にはならぬと思つてゐるのですがね、(これは冗談) (昭和十三年一月二六日)

これは貧寒な日本の社会には実現されぬ夢のまた夢として、伊東は冗談にしてゐるが、彼がリルケの境涯をうらやみ、翻つて日本の詩人が世から与へられる処遇を歎くのを、私も聞いた覚えがある。

先の高安氏宛書簡の三日後、伊東は詩「うたげ」を速達にしてゐる由、日記に見えてゐる。日記を遡ると十二月二日の項に、「『新女苑』から原稿注文。書くといふ返事。この雑誌はきれいな女の子の雑誌ゆゑ書いてみたいと思つてゐるから承諾」……とある。たぶん「新女苑」昭和十九年二月号の所載であらう。

うたげ

神にささげてのむ御酒に

われら多ひたり
二めぐり三めぐり
軍立すがしき友をみてのめば
はやもゆたかに
われら多ひにけり

座にあるひとりの老叟
わが友の肩をいだきて
多みこほれいふ言は

「かくもよき
頼もしきをのこに
あなあはれ
あなあはれうつくしき妻も得させで」

われら皆共にわらへば
わが友の目見(肩)はちらひて
うたひ出しふる歌ひとつ

「ますらをの
屍草むすあららに
咲きこそほへ
やまとなでしこ」

さはやけき心かよひの
またひとしきりわらひささめき
のむ神酒や
門出をうながす声を

きくまでは

どこかルバイヤットの声調に通ふものがある。伊東が愛誦した森亮氏の「ルバイヤット」のそれである。それはとにかく、この「うたげ」の取材は日記九日の項に見える庄野潤三氏の送別会であらうと想像される。つまり二日に詩の註文があり、九日の送別宴に、発想を得、十五日に完成したということになる

「九日 放課後庄野君の家へ送別会にゆく、大竹海兵衛入隊、餞別方々から七百円貰つたという。二人で写真とる。集るもの帝塚山の先生、友人、親類、隣組等約二十名。自分が正客。あゆと、つるしよのいやなふんいき也。あんなふんいきになれてしまつては庄野君も文学者としては駄目なり。はつと目覚めて、周囲をふりかへる日はいつか。お祝に、朝、鶏一匹贈つた。十時住吉公園に一同で送る。」

つまり、こゝで伊東がもつとも辟易してゐるあゆとつるしよのように取材してゐるわけである。詩でいう老叟は帝塚山の先生か、親類か或ひは隣組の一人なのか明確ではない。入団する若者には妻なぞない方が心残りなく奉公できてい、筈なのである。もし妻があつたらば、はたして老人はその袂別を祝福しえた

であらうか? 祝福しえなかつたはずであるこの嘘にあゆのあゆたるゆゑんがある。若者の犠牲の上で安泰な老人のつるしよがあるこの「うたげ」と九日の日記——詩と真実、

へリック詩抄 (二十六)

森 亮

飲寮の歌

運命の神さまがたが御手柔らかに諾なつてく
ださる間に、
なんと、われら一同飲を尽くさうではないか
飲むもよし、睡るもよし、笛吹き囃すもよか
らう。

日夜女らをくちづけ愛撫するもよろしかろ。
葡萄の房の見事な冠をいだいて、
われら一同こくりこくりお酒をやらうではな
いか。

バックスをお呼び申して讃歌を唱はう。
信徒らしく神杖うち振り、月桂樹の葉でも囁
みしめるか。

アナタレオンを幽界の眠りから起き上がらせ
酔ひが回るまで寝所には帰らずまいぞ。

の対照は興味ふかい。それにしても、死地に
門出する若い友に対する戒言としては、いか
に公表せざる日記とはいへ峻烈である。反面
それは伊東は、庄野潤三氏に期待するとこ
いつちよ、ホラスに上越す歌を出そ。さうで
はないか、
死の足音が直ぐ近付いてわれらから歌が奪は
れる。
その時には此処なウィルソン君やゴーチエス
んが
歌を唱ひ、琴を爪弾く姿も地上から掻き消さ
れる。

ケインブリッジでの比較的晚い学生生活を終へてロ
ンドンに戻つて来たヘリックは三十代の約十年間、
官廷に出入りし、有力な貴族に恩顧を求めつつ、詩
人や音楽家たちとの交際に日夜ふけた。「飲寮の
歌」(一一)は明らかにその時期の物で、古典文
学に対する彼の趣味を露はに出してゐる。きつた又
は葡萄の葉で巻いた杖で上端は松かきに象られた物
を酒神バックスの信徒は携へたとか、アポロを祭る
神官たちは預言の靈感を得るために月桂樹の葉を食
べたなどといふ神話的知識が第八行の背景になつて
ゐる。ホラスは数々の完璧の歌章を残したローマの
大詩人ホラチウスの英国での呼び名。

があつたのだとも言へさうである。

昭和十九年は松の内明けから中旬一杯……
学校の授業はなく、隔日か二日おきに勤労奉
仕があつたことが日記によつて知られる。

八日、桜島の軍工場に勤労奉仕。十日、松
下造船に勤労奉仕。十一日、登校授業なし。
十二日、登校授業なし。十三日、大阪電機に
勤労奉仕。十四日、登校授業なし。十五日、
登校授業なし。十六日、大阪電機に勤労奉仕。
十七日、休日。十八日、登校授業なし。十九
日、午後職員会あり……とあり、特に片仮名
まじりで「コノゴロラバウルラメグル空中戦
熾烈ナリ」とある。

若い生徒達に二日の休養を与へ、蓄積され
た爆発的な体力を作業に利用したのだらう。
非力な伊東はもつぱら監督に廻つたわけだら
うが、十六日の大阪電機の勤労奉仕のをりな
ぞ、「控室で秋声集をよんですこす」とある
ときに要領よく廻つたのであらう。

二十一日の日記は、正規の火がない職員室
の有様を伝へてゐる。缺乏はすでに教職にあ
るもの、綱紀をさへ蝕んでゐることが判る。

「十二月の末から教員室には火がないので
どこからとなく木ぎれを見つつけ出して来て
それをさかんに焚いてゐる。工作室の教員

が自在鍵のやうなものまで作つてきてかけてある。木ぎれには、そこいらの物をこはしたやうないかがほしいものも交つてゐる約一ヶ月でもうこのごろでは木片にもつまつて来たらしい。室中煙だらけにして、しかし、火がないと、事務も読書も出来ないの、焚火のぐるりに集つて、毎日同じやうにたべ物の話ばかり。自分はなるべく仲間に入らぬやうしようと思ふが中々それもうまくゆかぬ。日の照る日は南の窓辺に立つて暖をとる。」

すでに校紀も教風も正常を逸しかけてゐる荒廃した雰囲気のだななで、なほせめて伊東だけは、詩人の名にかけて正気を保たうとする姿勢だけはうかがへる。その伊東の正気の支柱は、一月末に歌人・安田章生氏に書き送つた、次の書簡で知ることが出来る。

「お手紙ありがとうございました。お噂はかねがねよく家森さんに承つてをりましたどうぞこれを機会にお心安く願ひ上げます。拙詩集よんで下さいました由うれしく存じます。」

本日たしかに御歌集樹木拝受いたしました。わたくしも近來専ら和歌に関心いたしてをりますが、作歌の機会はなくてすこしをります。しかし「春のいそぎ」の根柢

古本屋

堀之内 歴

寒風は 夜に入つて一そうつのる
雪がまじりはじめる 雪の粉は
開け放しの店内を回わる
町は宵から もう深夜

早仕舞いに 戸を立てていたら

△間に合うた 野径 とんで来た：▽
町を十丁は出た野原の中で 豚を飼う
韓国人の青年が 自転車で駆け込んだ

△風がきつうて 小川に落ちかけた：▽

こんな晩は 小屋じゅうが鳴って
寂しくて寝られないから 此の店の本が
無性に読みたくなつたのだ と言う

その全身が まだ息を弾ませている
陽にやけた四角の顔が 赤く火照つて
ボカ／＼湯気が立ちそうだ
真黒な瞳は あの野っ原の闇の色

さし出された百田札が暖かい
△なんや そんなにまけて損ないかァ：▽
野径を越えて来た人の 顔みただけで
今夜は倅せ とは言わなかったが

一九六三、一、二五

曙暁、秋成の諸先生であります。毎晩床には入つてから、それらの歌を二、三首づつ読みますが、このごろの唯一の勉強であります。

学校のおかへりなどもしお暇ございましたら、任中にもお立寄り下さい。家森さんと一緒に話うかがふことたのしみにして待つてをります。

三十一日

伊東静雄

安田章生様

侍史

よみかへして、自分のことのみ書きましたこと気付き、まことに失礼な手紙になつたと存じます。お歌についての感想はきつとその内親しくきいていただく機もあらうと存じ、わざとひかへた気味もございませう。御諒承下さい。」

先師

浅野 晃

たけ低き樹々は雪に埋もれた
幼ない芽は甘んじて待つてゐる

雪の下に地は燃え
雲と風とのむかふに日は燃えてゐる

私も埋もれて待つてゐる
私は日を忘れてはゐない

日はいつでも急におもむく
かの樹々を誰が忘れよう

(昭和一九年一月三十一日堺市北三ヶ丘町より豊中市新見 安田章生宛封書)

これは「伊東静雄全集」未収録の書簡である。

安田氏は当時、丹波市にあつた奈良航空隊の海軍教授であつた。たまたま三越で伊東の「春のいそぎ」をもとめ、共感するものを買えたので自著・歌集「樹木」(昭和十八年二月) (紀元発行所刊)

わが先師をいかで忘れ得よう
師は身をもつて教へられた

自己を裏切らず真を裏切らず
勇敢に汝の道を生きよと

私は先師の眉目を見る
師の大きな顔がいま呵々大笑する

地の火の燃えてゐるなかで
天の日の注いでゐるなかで

日は私を知つてゐる 私を忘れない
私はそこに先師を見る

を贈つた。これはそれに対する礼状である。

この歌集には東大での恩師である久松潜一博士の序文が附いてゐる。久松博士はかつて蓮田善明が主宰した高野山講堂で講演されてをり、出席した伊東は顔馴染みであつたことも親しさを覚えさせたであらう。それに、伊東が勤務する旧制住中には安田氏と東大国文同期であつた家森氏も勤めてゐた。そのことも伊東に一層親しさを覚えさせたことは確実である。二伸で「自分のことのみ書きました」とあやまるほど、伊東はよくペンを走らせてゐる。伴林光平、加納諸平、橋曙暁、上田秋成が詩の先生である由まで伝へてゐる。この事實は、先の高安国世氏宛書簡の「この三、四年志すことがございまして、外国の文学見ないで過したのであります」という言葉に照応する。つまり、「春のいそぎ」期に於ける伊東の詩精神の所在を、はからずも解明する手引きとなる。この近世の四歌人のうち光平、曙暁、秋成については既に触れるところがあつた。

光平に関しては、ごく最近第三詩集の題名「春のいそぎ」をへたが宿の春のいそぎかすみ売の重荷に添へし梅の一枝▽から借用したところであり、この光平の歌は、伊東の昭和二年酒井安代宛書簡に見えた短歌八大きな牛の

炭引き牛よ白々と山の雪をばいただいて来る
Vに似てゐた。本質的には、光平の炭には梅
が添へてあり、伊東の炭には雪が載せてあつ
た違ひがあるだけであつた。

曙覽に関しては、昭和十六年五月十三日附
蓮田善明宛書簡に、春陽堂の新文庫の一冊と
して「志濃夫適合歌集」の編纂方を願ひ出た
由が見えてゐたし、拙論も善明・長明説に対
し静雄・曙覽説をるるとして論述したところ
であつた。

秋成に関しては、昭和十五年二月二十六日
附頼原退蔵宛書簡に秋成全集を読んでゐる由
記述されてゐるが秋成の「つづらふみ」に見
える螢の屈折的な抒情と伊東の「螢」の相関
論に關し、中也の「月の光」までひきあひに
だして拙論は論じたところであつた。

諸平は初登場である。光平の師匠である諸
平のどこに、伊東が学ぶところがあつたか、
今後の究明が必要であるが、曾遊の熊野に取
材した歌の多い点なぞ、伊東に懐しきを呼ん
だことは確実である。「春のいそぎ」冒頭の
「かの旅」「那智」を作るに際し、風土的な
気分をだす意味で諸平の「柿園詠草」を読ん
だか？とも想像される。

汽車で

美堂正義

私の座席の向ひで
酔つた赫ら顔の男が
女のひとを相手に大声で話し掛けてゐる

地球は恒に同一の軌道を廻つてゐるのではな
い

遠心力で少しづつ、離れ
また引力の求心力が近づいてゐて
太陽からの巨離は変動する
その間は幾万年の歳月で循環する
地球が冷えるのであれば
氷河時代があり
巨龍時代があつたことは解明できない

語調からは先生らしい

私は興味深く聞きながら暗い海を見てゐた
汽車は海岸沿ひに入江を巡つて
岬の燈台の光が流れてくる
その間隔の正しさに瞳をあて
面白い理論を肯定しさうになつて反芻する

天体の無数の恒星からの光が
いま私の上に降りかゝる
氷河時代に発した光もあるだらう
巨龍時代に発した光もまたあるだらう

それが同時に地上に届く
無限の天を想像することは楽しい
それを超えた不可思議さは
生活とは縁遠い話
人間臭の少しもない話ではあるが
どこかで結び合ふ固い縛きずな
天体研究者をうらやましいと
この時程思つたことはない

貸室

XVIII

その2

萩原葉子

私は震えながら、鬼林の後に従いて行つた
怒つた肩は、四角ばつたまま猫背に固まり、

短くて赤い首は象の皮膚のようにぶよぶよに
たるんでゐる。

「この通りのさまだ！これをわしに始末さ
せる気なのか?!」声は一段と高く隣近所に迄
まる聞えてゐる。

「おやおやちうもんはたなこの引越してゆく
時くらいは、見張つてちやんと監督して、ち
りつ葉一つ落としていっても、文句を言うの
が務めじやないかね?」

「……」一所懸命何か言つたつもりでも声
はつまつたまま、出ない。
「それを家に引込んだまま出て見もしない
でよお。このざまにされても知らないとは、

噴水

渋谷晴雄

ほとばしる巨きな力が
すみずみまでもわたしをつらぬき
くりひろがる大気のなかにわたしを保ち
かつ浮ぶ無数の微分をひとつに集め支えてい
る

所在なく開いた頁にむかい
目は滑ってしまふ
狭い部屋に彼が滾つていった微笑を
ひとときの朝の仕事のあと

わかれゆく島まりに樹木は映り
まっ青な空はおちこみ
泡立つばかりのはげしさがいつまでも一定の
高さを占める

用意した材料を美しいナイフに截るように
彼の帰宅までの時間を整えていく
習わしのように並んだ序列の
明るい剰余の休息が彼女にはすこし広すぎる

みちながら刻々にうしなわれてゆく
めくるめく果もないむなしさ
消えながら
サファイアの弓なりにまどろみ
仰向いておちていくながれ
深いおもてにわずかに記憶のような水紋をひ
ろげて……

彼女が窓に凭れてくつろぐ
すると 思いかけず
ともすると拡散する未来を前に
ただ目を睨んでいたあのひとりだった少女が
そつと彼女のところに來て坐る

詩集「噴水より」

おやおやちうもんは、無責任すぎるよ。えノ」
「すみません」蚊の鳴くような声でやっ
と言い終らないうちに、大声はかぶさつて來
た。

「おおやは、金をもらつてゐるだけが、能
じやあるめえ?金さえ儲けりや後の人の迷
惑なんかかまわないう腹なのか?そんな
精神でおおやが務まると思つちよるのか?」
「……すみません。すぐ片付けます」

「KもKだがおおやおおやだ、だいたい
たなこの引越す時くらい、家に引込んでいね
えてよお……」

同じことをしつこく繰り返されても、怖さ
ばかりで言い訳一つ出来ない自分が、何と不
甲斐ないことかと思つた。鬼林なんかにな
も言われつ放しになってゐることはないのだ
と思つても、うろたえるしか能はない。

貸室の人達は、気のせいかしんとして、皆
おもしろがって聞いているようである。

早朝からこんなさわぎで皆に気の毒だが、
こんなひどい目に合わされてゐるのに、小峰
くらいは出て来てくれないものかと思つた。

それにどんなひどい塵の山があるのかと怖
れたが、ボール箱一杯だけの塵である。これ
なら私も後で塵屋さんを持って行つてもらふ
つもりでいたのだから、何も驚ろくことはな

い。

それを早朝からどなり込まれ、金さえ儲けりやいいとは何と云うことだろうか。ラジオを注意したことを恨んでいるのか。Kさんが引越して行ったことが不機嫌なのか、ともかくあまりのひどさに二の句が出ない。それも朝から、酒臭い息では、やりきれたものではな。

このままですと家へ帰れば子供に意気地なしと笑われると思ってもよろやくすみません。しか言えないとは！

その日はとうとう机に向っても一行も書けないどころか、くやしきといつまた来られるかという心配で落ち着かなかつたが、果して夕方また裏庭から鬼林の大声が響いて来た。

「Kのやろうあんひでえ塵を置いて行ってしまつてよお……」

「だいたいあれはおおやの責任ぢもんだよ。」

そこでお酒を飲んだらしく、コップのかけ合音に続いて娘の声が出た。

「大鵬は強いね、父ちゃん！」

「だいたい、ここのおおやは変人だよ。正月だというのに門松も立てなかつたじやないか。正月は門松を立てるのが世間の常式ぢもんよ」

つた。

数日していつもの幹旋所から良い客が来ているから案内してゆくという電話がかかったいつものように、学歴や勤務先まで自慢そうに言うとお宅には良い人しか紹介しませんよと、つけ加へた。鬼林は良い人と思つてい

るのだろうか。
やがて四人の男達がどやどややって来た二人が幹旋所の男で、あとの二人がお客らしいが、一人の約束なのにおかしいと思つた。Kの部屋に四人が入つてゆくと、幹旋所の男は、いよいよ環境が良いとか、部屋代が安いとかしまいにとおおやさんが良い人だからと、勧めはじめには驚ろいた。汚れているので一層そんなことを言う、商売人の誠意のなさが気になった。

二人の男はしかし挨拶もせず、初めから私を無視したまま狭い四畳半に突つ立って、あつちこつちを見ている。

一人は背の高い中年に近い男で、一人は瘦せ形のどこか女のようなしなをつくる男である。こちらはどんな人間が入るのか、それが心配でも相手はおおやなんか問題ではないの

「父ちゃん！」

「それによお、毎日常にいろのかいねえのかさつぱり分らなえ、こんな監督不行届のおおやちうもんはあるもんか！」

「父ちゃんつたらもう止めてよ……」

「やめろつて？父ちゃん言うだけ言わな

いことにや腹の虫が納まらないんだ。それに

よお、昨夜は五反田で水つた道路でスリッパしてはねらかしてしまつたんだ。あの野郎が悪いんだ。畜生ノ酒買つて来てくれよお」

何か事故でもあつたのか、そのために私にまで当つているのか、ともかく鬼林は性格的に落伍者ではないかと思ひ当つた。それとも酒乱なかも知れない。いづれにしても気の毒に違いないが、私の方はたまつたものでない。

だがよく考えてみれば、鬼林の言うことに

も一理はあつて、自分の弱点を突かれた思ひでもあつたのだ。

鬼林に部屋を借してからは、気になりながらついでに貧室に行つてみることもなく過ぎていたが、それは忙しいためもあるが、貧室に行つて監督するのが嫌ひだつたのだ。前に八年間もいたアパートのおおやさんのように、台所や部屋の中まで厳しく見廻つて、少しでも汚れていると文句を言つて歩いたが、そんな

そうと分つていても、俄におおやのために、見に来る度に落ち着かず、おおやらしくふるまおうと精一杯に神経ばかり使つている。

鬼林に懲りているので、今度こそは人を選ぶのを慎重にしようと思つた。相手が気に入つて入ることに決めてからでは遅く、入るから入らないか迷つている状態のうちに、こちらの気持を決めてしまわなければならないのだからむづかしい。

見合いのようにつき合つてみて良ければ決めるという余裕はない。

こうして、相手が部屋の中に突つ立っているほんの数分の間が余裕である。だが人を選ぶといつてもつき合ひのでないから部屋代をきちんと払つて、迷惑をかけない人ならば誰でも良いわけである。世界や人種が違ふほどかえつて、良いのだ。

いずれにしても二人の男はあまり気に入つたふうではなく、返事は後でと言つてまたぞろぞろと帰つていった。

(つづく)

おおやになるくらいなら汚れたま、放つてお

いた方が気が楽である。だがあまり長く放つておいたので、こんどは悪いことをしているように、気が咎められているところだつたのだ。

Kさんの引越しの後も早く見に行かないと、また鬼林にやられることは間違いない。それに気がつくと思朝鬼林の留守を幸い恐る恐るKさんの部屋に入つてみた。

案の状、部屋は汚れ放題に汚れ、芥は無いが畳はざらざらにささくれ、壁は黒光りするほど何かで汚れている。Kが入つた時は真新しい木や壁の匂いで、清潔そのものだったのに、見る影もなくなくなつていた。

情けない気持で汚れた壁や畳を見つめてみると、部屋代を払つた分だけ汚しましたよと、Kの声がしているような気がしてくる。

鬼林の言うように、引越しには立ち合つて汚された分は、敷金から差引くようにすれば良かったと思つた。それでもできない私では言われても仕方ないと思つた。

鬼林に見られては大変と、しつかり鍵を掛けてしまつたら私はやっと安心出来たが次の人が入る前に壁や畳は替へなくてはならないだろうか、と考えるといよいよ気が重かつた。とてもそんなことをしている暇はないので、あれでも良いという人が来るまで待とうと思

生老病死

(九)

青木 敬磨

夏

六月廿九日

吉水の法然房こそたふとけれ日々夜々に哀しとのたまふ

子供らをかへらしめける樹の茂り星を見ざりしことぞ久しき

六月廿日小染牧師の呼出しにより上京。不意に清に引合はされる。驚駭無限。

四条小橋不二屋の午後のいろどりに落付かむとす山法師われも

人さばに出で入る茶舗のおくどにして云ふすべもしらず人に向ひて

五條ヨハネ教会。子供の語のみ。

卵塔婆ならび雑木の茂りありわが云ふことは世のことに非ず

梅雨のあとの木立さやけき入日あしとはく澄みゆく命をそおもふ

ひさかたの光のしたに生きてあれば影と形とそのままだにあらぬ

このからだすでに死にきとおもふこと一日のうちに行くそたびかも

飯 途

山崎の旧街道に轍たて米売の店を見てをれば過ぎぬ

渋谷晴雄著

詩集 噴水

¥ 300

日常のことは世界を否定して「体験」をききとりそれを逆に表現に転換した清澄無比な詩五十篇。リルケの影を想はせる堅確な抒情……

文理 図書出版 社

申込先

・府中市下染屋六二二

渋谷晴雄宛

淀川の堤あふれて落ちし淀に梅雨晴れの日の
かがやき白き

七月三日上原

梅雨晴れの野川ゆたけき水量あり植付けすま
ぬ田は誰の家

入しくて日の光てる朝道を用もちてわれは今
日も出でゆく

東 坂

植付けすみ月てる道のしづかなるこの夜をな
きあかす蛙にかあらむ

山に入る道の月夜に聞えくるいろいろの蛙の
声をいとしむ

山かひの池にうつりし山の形月てりわたり蛙
おちこちに

塩屋、児島賢二君宅

ぬばたまの夜の更けゆけば寛もるる水の音の
み家しづかなる

あかときの夢ははるけし君と我と善導和尚を
論じりたりし

布 引

夏山の茂木のしたに立ちよどみめをつぶりを
り滝のとどろきに

七月廿三日上原、五日前より黒田巧
検査の話をきき、胸もつまるまま、
ひとり六甲の山小屋に登る。

ますらをの黒田巧がとらへられほほろみそら
む牢屋をぞ思ふ

こよひと夜しづかにあれな松風ふく山のと
んとにつつしみ坐る

八月九日

運月夜くさ木そよがぬひそけさにこほろぎな
くも鈴虫もまじり

入海に波の音する運月夜いねんと思へどなに
かむなしき

大いなる仕事と云へばうなづきぬ友は澄みと
ほる腫の奥に

八月十五日夕

颱風は去りて磯浜のあらけな魚群ににたる
流木のみだれ

つつがなき貯油庫に手をふれてみたり波にあ
らはれし石垣の上に

残り雲のなほも垂れはる浜に来て漁師らは
もだしくかたまりあへり

八月廿四日、原野栄二結婚式。

わが友の結婚式とつつしみてなけばまであり
き其のあととは知らず

岬の海風おさまりて明けんとす新しき日を君
がために祝ぐ

廿五日夕

坂の下に人を見送るわが眼には歎びもあり悲
しみもあり

編輯 後記

一月十一日から毎木曜「東京新聞」に三島由紀夫氏の「
私の通歴時代」が連載されてゐる。それを私達に送ってくださ
ったのは三島氏の恩師清水文雄博士だが、私達の青春の日に
に親しかった人物が次々と登場してきて懐しい。私も中河
与一氏編纂の「文芸世紀」に幼少小説や詩を発表して、三
島少年と誌上で顔を合せたことがあったと記憶してゐるが、
私もともと赤の他人ではないからさうである。

「私の通歴時代」②の中に「保田聖重郎氏も、佐藤春夫
氏も、萩原明太郎氏も、伊東晴雄氏も、一回ずつしか訪問
する限り二回訪ねてゐる。次号の拙稿あたりから、伊東少年
が登場するが、「花ざかりの森」の序文の執筆方を三島氏
は忘れてゐるかもしれないが伊東に頼んでゐるその。依頼に
対して伊東が断り状を出してから半月ばかりして、三島氏
は西下する和学校に伊東を訪ねてゐる。その五日後に三島
氏は学校に再訪して夕食を共にしたと日記にあるから、たぶ
ん北三国ヶ丘の家にも訪ねたのである。

ここまで書いてあるところに富士正晴氏から端書がとどい
た。「三島自身は気づいていませんが、彼のこの処女短編
集を出してやってくれとわたしに大変せがんだのは伊東静
雄でした」とある。もしさうなら伊東に序文を求めたとし
ても別に不思議ではない。

なほ、第八三号拙稿に出る「京都の七支書房」は「東京
の七支書院」が正しいので訂正する。(O)

果樹園 第八十五号 (毎月一回日発行)

昭和三十八年三月一日発行

池田市野町一六八

編輯 兼 小高根二郎

大坂市東住吉区桑津町五の八

印刷所 元市印刷株式会社

池田市野町一六八

発行所 果樹園 社

定価 三十円 送料 十円

果樹園

第86号

詩人、その生涯と運命 小高根二郎

小 信 富士正晴

ヘリック詩抄 森 亮

水	銀	灯	堀之内	歴
坐	禅	吉本	青司	
貸	室	萩原	葉子	
夜	曲	浅野	晃	
生	老	病	死	青木敬磨
酒徒	曼陀羅	国弘	浩介	
編輯	後記			

詩人、その生涯と運命

書簡と作品から見た伊東静雄 (七十四)

小高根二郎

昭和十九年二月の伊東日記はマーシャル群
島戦の不安を次のやうに伝へてゐる。

一日の項に、マーシャル群島に敵の大攻撃
があつた由の報導があつたが、詳報がないた
めに「国民不安と、期待の入れ交つた気持ち」
と書いてゐる。四日の項には、「このごろ、

学校では、辨当盗難毎日続々とおこる。今日
も、七人。中食の時全校生徒のを点検する。
その外に竊盗、食巻偽造、喫煙、等不良化の

傾向著しい」とある。職員室に流行してゐる

食物談義や焚火と照応してゐるわけである。

マーシャルの戦況に関して、「その後何の報
知もない。不安。国民一様に不安と焦燥の気
濃し」と併記してある。五日の項に、「マー

シャル群島戦についての発表があつた。阪井
君の家のかへりに住吉公園駅で、夕刊買つて
よむ。全力をあげて激闘中とのこと。駆・巡

各一隻撃沈、飛行機五十許り撃墜。しかし決
定的な戦果ではないやうだ。二つの島に敵上
陸。不安と、歯がゆさ。又将兵に対する感謝

。国民は時局の重大感をひしひしと感してゐ
る。内にこもつた悲憤。」と書いてゐる。十

九日の項に、「敵、トラックに攻撃して来た
(発表があつた)ので、国民の感情は憂鬱と
焦慮不安の色濃いものがある。」とある。

二十三日の項に、「東条首相の参謀総長、島
田海軍大将の軍令部長兼任発表される。容易
ならぬ事態を思はせる。不安の気国内に漲つ
てゐるのを感ずる。心がおちつかぬ」。二十

五日の項で、「夜のラジオはマーシャル群島
中のクエゼリン、トロット島のわが守備の
陸海軍部隊四千五百名、軍属二千の玉砕をつ
たへる。悲壯、慨嘆。中に音羽候爵ありとい
ふ。まさきさへその発表さきながら憂慮に堪

へぬと云つた面持をする、泣き出しさう。祈
り。」とある。

二十八日の日記には、富士正晴氏に召集令
状がきて三月三日に入隊する由がしるされて
ゐる。翌二十九日は富士氏の送別会があり、
「大山定一、高安国世、堀内兄弟来てゐる。
フグの馳走で送別会。歌ふ。餞別十円。帰れ
ば十二時。」とある。敗戦の兆いよいよ明ら
かになりつつあつた厳しい時局に、伊東は身
辺から若い友を全く失つて了つたわけである

。なほ、敗戦の兆は日本だけでなく、欧州に
あつて孤軍奮闘してゐた独逸軍にも東部戦線
で全面的な敗色がみなぎつた。

この寂寥のただなかに、昨年の六月に詩集
を贈られ、「四季」寄稿に関連して忠告をし
たことによつて交渉をもつた田中光子さんが

改めて、女弟子として身近かに現れたことはたまさかに恵まれる、温い日射しのやうな思ひを、伊東に与へたであらう。

三月九日の日記は次の事実を伝へてゐる。

「九日 考查。おひる頃、東京文理大助教 塚大塚高信といふ者面会を求め。行つてみると五十をすぎた位の年輩の紳士である 田中光子の従兄であるが、かねがね田中が敬意を抱いてゐて、詩稿を見てほしい意向がある。ついでにはこんどの旅行にも一緒について来たいと云つてゐたが次の機会にせよ、今度は自分が一人で頼んで来るからと云つて来たのだといふ。承諾する。話が弟の結婚のことになつたら京都の栖鳳の孫娘を貰はないかと云ふ、突然なので笑ひ出してしまふ。

この大塚高信氏（現甲南大教授、特）の訪問をうけ、伊東は次の書簡を田中光子さんに送つてゐる。

「けふ大塚様がわたしの勤めてゐます学校においてになつてあなた様の御意向を承りました。

果して私でお役に立つかどうか怪しいのでありますが、幸國語の教師を致してをりますから文法の誤位は発見出来るかと存じます。お申出に従ひたいと御返事申上げました。

けれども衰へたものでもありません。たゞ地下ゆく水の姿に保守の形をかへたにすぎません」と、なにげなく述べられてはゐるが、塵巻勧告に基く悲壯な終刊であつたのである。

伊東は盲腸らしいのを理由に執筆を断つてゐるが、日記によると清水氏宛に書簡を書いた前日の二十日の項に、「病臥、盲腸炎の疑あり」とあり、引続き二十五日まで臥床してゐる。ところが、これは風邪による副次的な症状であつたらしく、月末には腹を切らなくてすんだ代りにホクロを切る決意をしてゐる

小信

富士正晴

昨年九月、一向に台風は来ず、本年一月、裏日本に豪雪来て、何とも間が悪く

ためにおれは何の作品も書く気がせぬ、

人あつて三月を歌えという、

三月、例年ならば春のほころびを歌うが

どうもまあ、おれはテレビで見て了つた、

日本に南北あり、裏表あることを、

何でも一時に知つてしまうことは、おれを砂漠の面のようにサクバクとさせる、

どうぞお作お示し下さい。近來ともすれば淡くなり勝ちな詩へのわが関心をも刺戟される結果になりますればかへつて自分のためであらうかと思ひます。

その際大塚様にも申上げましたが、この夏までには東京に出る用事が多分出来さうでありますから、その時は是非お会いする機会もあらうかと存じます。けふはこれだけに致します。追々率直に色々お書きするやうになると存じます。

大塚様にもよろしくお伝え下さい

十日

田中光子様

伊東静雄

（昭和一九年三月九日、堺市北三國ヶ丘町より東京明石町、田中光子宛封書）

昨年六月十日附の田中さん宛書簡では、「自己をうつつ鏡」をそんなに安直に外部に求めることは自分の詩をいたはるよい方法ではない」と言ひ、「知己といふものはかくれて案外多いのではありますまいか」と、それとなく招待の意向をほのめかしてゐたが、この書簡で改めて伊東は、田中さんを女弟子として認めたのである。

書簡の末尾で伊東は夏に上京する由、述べてゐるが、それは二月中旬にビルマの映画撮影を終へて生還した弟寿恵男君の縁談を予定

のである。右眉の上と右鼻柱にあつた伊東の看板だつたホクロを切るべく、わざわざ京阪電鉄沿線の蒲生の外科医院まで相談に行つたのである。

その結果、伊東は四月一日に鼻柱のを、十二日に眉の上のを切除し、四月中傷痕の治療のため蒲生まで通つてゐる。若き日の伊東のボートレの撮影者であつた栗山理一氏は伊東がどうしてそんな莫逆げなことをしたのか気がしれん……と述懐してをられるが、それは伊東が生涯に敢てした、数少いかなしいお洒落

おれは幾分親切だから、あちこちの人々の哀れな死の散在の中で

春の歌が歌いにくい、

おれの家の庭に迎春花の蒼は黄に赤を点じ、

梅のつぼみは太り、

小鳥らは幾分ゴキゲンな囀りをきかすが、

おれはテレビを見てしまったので

このような散文的なつぶやきしか出来ない、

ガラガラとした有様は

近頃の新聞紙にさも似た、

知るといふことはウトマシイことだ。

しての上京なのだらう。先の日記によると、大塚氏は竹内栖鳳画伯の孫娘とやらをすすめ伊東はその唐突さと法外さに、失笑してゐるが、それは伊東が弟の嫁選びに上京する由を語つたからであらう。

伊東は三月中旬蓮田善明氏が応召以後「文芸文化」の編輯をしてゐる清水文雄氏に次の書簡を送つてゐる。

「お葉書拝見しました。すでに池田さんからもおすすめいただいてゐたのでありますところが数日前から臥床、まるで身心に力がなくて、へこたれています。盲腸炎の軽いのおやないかと思ひます。到底ろくなことは書けさうにありません。

月末に大阪においての由、それまでにはきつとよくなつてゐると思ひます。是非立寄つて下さい。久しぶりに色々お話うけたまはりたいと楽しみにしてゐます。」

（三月二日、堺市北三國ヶ丘町より東京都）
（学芸院官舎、清水文雄宛はがき）
清水氏から「文芸文化」の終刊号（第七巻通巻巻）になにか書いてほしいと依頼したのに対する断り状である。同号の「終刊のことば」

「私たちの終刊の決意の一端を洩せば、玉碎を以て悠久の大義に生きた益良男の神忠を慕ふものとても申せませうか。それ故、小誌は終刊しても我々の志は決して喪はれたわ

の一つであつたと解釈できないであらうか？それは「呂」時代の伊東が、会同に真新しいカンカン帽をかぶつてゆき、同人の注意とやゆを喚起したあの趣向と同巧異曲と言へないであらうか？カンカン帽は風に吹き飛ばされ伊東は狼狽して曾根崎署前を嘲笑を浴びてつゝ、走つたが、伊東は初夏に予定した上京の際に、看板を降した顔で友人達をあつ！と言はず趣向だつたのかも知れない。

伊東は「文芸文化」終刊号に執筆を断つた次の日、東京の田中光子さんに、次の書簡を送つてゐる。

「三、四日前から、どうも軽い盲腸炎ではないかと思はれる腹痛でね込んで、今日あたりだいが気分もよいなと思つてゐるところに御原稿とどきました。

先づ四冊の内最近の一冊と思はれる紀州のこの出るものを可成たんねんに拝見したところであります。そして田中調に飽満した気持で横つてゐたところあります。お作を認める気持にはやはり変りありません。これらは日本の現代詩に類例の少い豊潤な恋愛歌ばかりであります。詩の生命の一つは相聞にあると私は思ひますが、それが現代の日本に少いことはいぶかしいことの一つに思つてゐた私にとつてお作は甚だ

痛快であります。趣味も亦決して悪いものではないと思ひます。只烈しい発想にありがちな缺点として詞藻の暢達を缺いてゐることは是非申上げねばなりません。中学生がよんでも文意は通れるものでなくてはならぬと思ひます。詩精神それ自身は難解なものであつても文脈は平明でなくてはならぬと存じます。又第一級の作品はいつもさうであります。あなたのお作の各々の言葉には夫々深い想がこもつてはをるやうですが、それがバラバラで出たとこ勝負の嫌ひがないではありません。大へん惜しいことでもあります。発想は熱く烈しくなければなりません。発現に於ては沈着暢達でなければいけないと思ひます。そのためには深く思つて浅く出す心組が必要かと存じます。方向には決して誤はないと思ひます。只今少し熟練を要するのであります。熟練といふことはともすると卑俗を伴ひ勝ちなものです。熟練して卑俗になるやうであつたら、もう詩をやめるより仕方ないことと存じます。(真の熟練といふことは語をかへて真に柔軟などとは異なることのない風雅であります) あなたは失礼ながら御氣質が内攻的なのはいいところもある方のやうにお見受け申します。そんな方が規矩を尊

ぶ詩作におは入りになりやがては平明大様な詩風にお達しになることには個性の上から申しましても深い意義があることと存じます。私自身「わがひとに与ふる哀歌」から「春のいそぎ」へ辿つた道と思ひ浮べ、個性の宿命といふものを不思議なものに思つてをります。「説書新聞」といふのに「春のいそぎ」を評して「作者の温厚篤実な人柄のままにうたはれた云々」とありましたが、哀歌の当時誰が私を温厚篤実などと評しましたらう。

保田君の著「南山踏雲録」はおよみでしたか、是非これをおすすめします。解説書による万葉集や古今の勉強もよろしいが、光平や諸平や橘曙覧の作歌を通じて万葉集や古今をほんたうに知つて行く勉強法がもつといいことと存じます。

近い内にこちらにおいでとのこと楽しみにしてお待ちすべきですが、こんな交通のはげしい時勢ではありますし、又お会ひしても一向うまいことも喋れさうにもありませんし、又自分の興ぎめの実生活をあなたに御らんに入れるのも面はゆいことですから、あまりおすすめてできません。

又今少し具体的な感想書くべきですが病床では果せません。取敢へず御原稿といた御報告まで。
以上
伊東静雄

田中光子様
(三月二日、堺市北三國ヶ丘町より東京明石町、田中光子宛封書)

病臥してゐるとすると誠に篤実な返事である。田中光子さんの豊潤な天稟を発見し期待するところ多かつたからであらう。伊東が注意してゐる、詞藻の暢達性の缺除、必要な文脈の平明さ、熟練……というだけでは、どんな詩であるか判らないので、伊東が飽満した田中調の一篇を例示する。

廃園

田中光子

海ほとりの廃園に
紅紫の無花果を偷む
しろく
泡立つ汀にひとり
美しい秋果に秘められた
蜜を吸ふ唇
はるかに嵐を含んだ海にとぶ
海鳥のくちはし
うすら冷い潮にくちづけ

海鳥よふるへるつばさよ
ひとにかへり見られなかつた
十月のゆふべ
すべて咎められぬやうな
おもひして

秋果を偷み
なきぬれし渚

「舞踏昭和二五年二月号

伊東の批判がいかに正確であるかを証明するに足る詩体である。どこもかしこも隙だら

けた。その隙だらけの不完全さが靈感となつてゐるやうな妖しさを秘めてゐる。
このやうに妖麗さを思はせる女性に、伊東は保田氏がねんごろな解説を添へた光平の「南山踏雲録」(昭和八年一月、小学館刊)を必読するや

ヘリック詩抄 (三七)

森 亮

テームスに別れる歌

お前、銀の足光らせるテームスの流れに
わたしはお別れのくちづけをここから投げか
けるよ。

どっしりした建物が数多立ち並ぶ河岸を
もうこれからは煉り歩くこともあるまい。
晴れ上がった夏の夕べに数しれぬ都人にまじ
り

お前の水に浸って涼をとることもまたとある
まい。

木の枝や燈心草で美々しく飾つた屋形船で
お前の透明で滑らかな水の面を遡つて
リチモンド、キングストン、或はハムトンコ
ートまで

雅びやかな乙女たちと試みた清遊も帰らない
思ひ出だ。

漕いで水をきれいに切りながら、黙って見送る
岸を離れ、
わたしを待ち受ける岸へと又船を戻したものだ
だった。
あちこちで気軽に船から下りて、足を運んだ
のは――

或るときは馴染み深いウエストミンスター、
或るときは黄金まばゆいチープサイド(その
足乳根チエリアナがわたしをこの世に送り出
したところ)。

わたしは願ふ、清浄な水の精、妙な容をほ
こる水姫たちが
白鳥の高い気品でいつまでもお前のうへに浮
かび回ることを。

又いつの日か早に見舞はれて滔々たるお前の
流れが
水ほそり姿寝れることがあつてはならぬ。

又、大波立てる風の此方へ吹き寄せて
白い手首を覗かせる清げな水波女たちをおび
やかしてはならぬ。
悠揚と流れよ、お前テームスの大川。でも、
豊かにふくらんだ
その水が溢れて岸辺を悩ませてはいけない。
時世の移るにつれて若返れよ。お前を見るこ
とは最早ないが、
わたしの心からの願ひだ、いつまでも健やか
に流れ続けてくれよ。

ヘリックが長年住み馴れたロンドンを離れて、デッ
オン州の寺院に赴いたのが一六二九年の秋、「デー
ムスに別れる歌」(一〇二九)はこの都落ちの前夜
に書かれたものと推定してよからう。水の精のやう
な古典文学的附風物がやや不消化のまま取り入れら
れてゐるのよ比較的若い頃の作であることを証明し
てゐるやうである。チープサイドには金銀細工を業
とする者が軒を並べた横町があつたので「黄金まば
ゆい」といふ句が添へられてゐるのである。

うにすすめてゐる。伊東はこの天忠組の戦誌に保田氏が云う「筆硯で誌される代りに、生命の血で描かれ、行為の中に写される思想」を読ませるつもりだったのだらうか？ 五糸代官所襲撃による旗挙げから、南山、十津川に於ける戦陣、果ては悲痛なる解散後の逃亡と潜伏と逮捕……。その間に於ける微動もしてゐない不退転の光平の練達した風雅を、初歩の彼女に知らせるためだったと想像されたりわけ、平郡山中で、光平が奈良奉行所の役人に逮捕されたときでさへも、悠然八椀を無み乗りて連れむ世ならねば岩船山も甲斐なかりけりVの技巧の歌をなし、捕吏の乞ふがままに幾枚も書き与へたという條なぞ、この道に参入する初心者への手本として読ませたかつたに相違ない。

この光平に関連し、彼の師諸平や、曙寛や、いはゆる近代歌人を通し万葉や古今集の根源の精神を知るといふ勉強法を説いてゐるところが、はなはだ興味ぶかい。当時の風潮としては、一つ氣に記紀や万葉に飛翔して、逆に近代や現代を語らうとしたのが浪漫的な常套であり、流行の勉強法だったと言へるからである。この風潮に対し伊東の溯及法は明らかに異質である。当時の風潮の代表者であつた保田与重郎や蓮田善明氏等に伊東は親密な交

渉を持つと同時に、いささか異質に属する桑原武氏等とも親懇な交際を保ちえたことに一寸不思議に感じたりすることがあつたが、それは前述の伊東の伝統に対する異質の見解によるのである。桑原武氏は中公新書「日本の名著」序に伝統主義に対する見解を述べてゐるが、それは前述の伊東の見解に照応してゐる。

「日本では、伝統という近代を無視して、古代、中世に力点をかける風潮がつよい。すぐ法隆寺、「万葉集」といつたことを考えたのである。現代から遠ざかるほど過去は美的鑑賞の対象となりやすく、現実的行為の基盤とはなりにくいという事情を知らねばならない。過去は現在に近いほど大切だとする歴史観が必要なのである。」

つまり、この桑原氏の見解との照応が「春のいそぎ」出版を斡旋し斡旋されるという關係を生んだわけである。

伊東は田中さんに懇ろな手紙を書いた五日後、故郷の部隊に入営した富士氏に次の書簡を送つてゐる。

「お葉書有難う。」元氣の様子なのが、大へん安心。わたしまでが何だか自信がつく

次第。こちらはその後何の変化もありません。文学もひとつも面白くありません。わたしも何も書きません。この春休みには十日間ほど盲腸の工合わるくてねました。いつのまにか桜の気候になつてしまひました「文芸文化」もいよいよ廃刊の由。「コギト」はまだぼつぼつ出てはゐます。

瓜生君の妹さんとは割に強引に見合ひさせられた由弟から通知がありました。これで、あなたには何の責任もないことになつたわけで、私も安心しました。営内でも筆墨が使へる物心両方面の余裕があるらしいのを、お葉書見てうれしかつたです。初めての筆画通信だつたから。」

(三月二七日、堺市北三国ヶ丘町より徳島市蔵)

(本町西部三三部隊高木隊口、富士正晴宛がき)

富士氏が墨絵入りの軍隊通信を寄せたのに對する返信である。「文芸文化」の廃刊、「コギト」ががさかな余命を保つてゐることを伝へてゐる。伊東は執筆意欲もなく文学も面白くない由を伝へてゐるが、前日の日記に、

「一日中暇あれば陽外をよむ。一種の創作的活をいれられる思あり」という記述がある。この頃より四月にかけて伊東は陽外の諸作、「滯留日記」「青年」「灰燼」「淡江抽斎」等をアトランダムに読み進んでゐるが、それは詩から散文への展開を意図しての心づもりを

水銀灯

堀之内 歴

夜が更けるにつれ 早春の

広場の明かり水銀灯が

いよいよ白光を極める

あれはたしか あちらの世界のもの
今盛りと燃焼している筈なのに
高々と 冷めたく離れているのだ

いつか 目は離れなくなっている
停んで そうしていないと
凡てが私の中から崩れそうで……

白色光の中心からは或る清いものが
も一つの太陽に跪拝する闇の環に向けて
しきりと撒き注がれているのであつた

一九六三・二・二七

するためだつたか？ と想像される。この陽外の散文への参向に伴つて伊東はホクロを一つ一つ落してゆくのであるが、それは詩藝を切除するといった心理的な効果を予期しての決心であつたのかもしれない。

弟の寿恵男君が瓜生忠夫氏の妹さんと見合ひをしてゐるが、それは古い話で、昭和十五年四月二日附富士氏宛書簡に見えてゐた。

三月下旬入営中の富士正晴氏に書簡を書いた次の日、伊東は次の書簡を田中光子さんに送つてゐる。

「ずるぶん暖になりましたがお変わりありませんか。お作品早くよんでしまはうと存じながら、頭はつきりする日少く、少しづつ拝見し出来るだけ詳しく意見書かうと思つて、急いでお送りする必要があるのではなにかとふいに今日心づき、それが氣になつて急にこの手紙書きました。」

もしさうでしたらその旨仰有つて下さいしかしさうでなくとも、一週間以内には発送申したいと存じます。

それにも一つお詫しなければならぬのは、あんなにきれいに清書していらいつしやるのに、無遠慮にもあれにじかにわたくし

の手で方々に書き入れをしてしまつたことでもあります。それは一つは病気で寝てゐる時によみ始めましたので、別紙に感想書くのが、とても大儀であつたからです。又も一つにはやはりこのままでは出版などの場合惜しいきすになると思はれる箇所について筆がいつてしまつたのであります。御面倒でももう一度最後のものになさるためには御清書して下さい、わたくしの失礼お許し願ひたいございます。

あれ以来大家様には大へんお心やすく願ひましてお手紙など時々いただいてをります。

三十日

伊東静雄

田中光子様

(昭和一九年三月三〇日、堺市北三国ヶ丘町より)

(り東京都明石町、田中光子宛封書)

鄭重を極めすぎたやうな書簡である。弟子の側である田中さんの方からすれば、先生の加筆が多ければ多いほど光栄なはずだからである。東京文理大助教授の大家氏の姪であるというふれこみに、伊東は卑屈と思はれるほど氣を使つてゐるやうにみうけられる。さう言へば伊東にとつて東京文理大には弱身があつた。丁度、五年前の春頼原先生を介して東京文理大助教授であつた能勢朝次氏をお訪ね

し、就職をお願いしたことがあったからである。
(参照、昭和十四年二月一日、二月二日、二月三日、四月三日、附録原稿宛書簡)

話は考へておく……ぐらゐるところで、形式的にはおあづけになつてゐたはずだからである。伊東の心の奥所で、まだ一縷の望となつて、燃つてゐる仄かな思ひのやうなものが、詰屈して一種の卑屈さとなつたのかもしれない。
田中さんにこの謙虚すぎる書簡を書いた日の翌々日、日記によると伊東は右鼻柱にルビのやうに附いてゐたホクロを切除したのである。

十二日に鼻の上の手術痕が治癒したのであらう、ガーゼを取り、今度は眉の上のホクロを切除してゐる。

十九日の日記には大山定一氏より芭蕉座談会の招きがあつた由しるされてゐる。「頼原吉井勇、大山、西谷、桑原等の顔ぶれの由。断るつもり(時間がないこと。人々に興味のないこと。芭蕉について——といふより俳句といふものがよくわからぬこと)」とある。吉井勇、西谷啓治両氏を除いては親しい人々ばかりである。特に桑原武夫氏は仙台から馳せ参じるわけであらう。伊東が興味を感じぬ方が不思議なほどである。上述の伊東不参の理由の他に、看板撤去中の医学的工事を特に親しい人々に見られるのがいやだつたことも

あげられるであらう。それかあらぬかこの日の日記は自己嫌悪に満ち満ちてゐる。中川一政氏の「美術の眺め」を読んで「何といふ才ばしつた俗人。自分にはよくわかる。自分の中の俗人に。」とあり、日記自体を反省して「何といふ低俗な日記。もう四ヶ月も詩を思はぬ生活」と書いてゐる。

この自己嫌悪で一杯だつた四月に、手術後の治療と共に田中さんの原稿だけは丹念に読み進んでいつたやうである。その事実は五月一日付の次の書簡に詳しい。

「貴原稿お返しします。水い間かかつて失礼しました。「高原」より一層濃密、哀婉の度を加へたものと拝見しました。近來甚だめづらしい敬重すべきものと存じます。一概に申して長い作よりも短いものの方に佳作が多いと存じます。長いものは途中から表現に、落着きを失ひ、自ら陶醉の気味に陥り、文脈が飛躍し勝て、どうも都合点になる傾が多かつたやうであります。これは雅文擬古体に習熟していらつしやらないためでもあります、それよりも表現といふものに対する醒めたる意識考量が途中からあいまいになるためにて、結局詩想の不明確によるものであります。短いものは措辞に瑕瑾少く破綻をまぬがれてゐるも

の多いですが、只あまりに印象的小品に過ぎるのを残念に存じます。もしあの調子にて長いものに成功されたならば「珊瑚集」の中のノワイユ夫人(原詩はフランス語を知らないの何とも云へませんが)をよむが様でありませう。

御精進を期待します。いかに難解な詩想にても文脈だけは充分明確に通さなければいけないのであります。それには江戸中期以降の和歌、擬古文に習熟して、しかも現代語の根幹と離れないやうにすべきではありますまいか。(現在のままのスタイルを保持してゆくおつもりならば)それに文法のおやまりもかなりあるやうです。又無理な造語も少くない。テニヲハも慎重でないやうなところもあります。これらは、大したことではありませんが、詩作品の独立性のためには無視出来ぬと存じます。それらには出来るだけ書入れをしておきました。又行わけにどうも無理と思はれるもの、漢字にすべきところを仮名にしてあるために意味の不明確なものも相当ありました。むしろ散文を書く位にそんな点では常識に従つておいても詩想さへ明確なら、充分言葉は魅力を発揮するものと存じます。もし世に発表をされるものとしますれば

あれらの中からずるぶんはぶいた方がいいものが多いでせう。又誤りらしいものはなくとも、今少しかへたらもつと立派になるだらうと考へられる詩句も多くあります。私は夏までに必ず上京するつもりでありますから、その時一日か二日ばかりで御一緒に訂正の事をやつたら随分よくなるのぢやないかと存じます。文字の書入れだけではどうも思ふ様にゆかないのです。わたしはこのごろ一向に詩書きません。暇がある時は十歳の女の子と野原に出て野

遊びをします。小さい野艸の花をつむのです。そして夜は詳しい日記をつけまします。世相の変遷を記しておくのが目的であります。これを草稿にして小説にしたいものだといふ野心もあるのです。読書はずつとひきつづいて隅外の考証ものをよみます。隅外といふと「歌日記」はおよみですかあれには擬古体の殆どあらゆる作法が試みられてゐるやうに思ひます。

五月一日 伊東静雄
田中光子様

坐禪

吉本青司

へ教室へ変なひとがきてのぞくから恐ろしい〜という注進があつたので行つてみたら二人の青年が無理に女生徒をとらえて語しこんでいる。国語を教えた卒業生だつたかし。へ教室であいびきとはけしからん〜

と思つたので叱りつけたら食つてかかつてきた。殴つてきそな様子なのでへなぐれるならなぐつてみよ〜とあぐらを組んだらさすがに殴ることはしなかつたそこで思いっきりことばの雷を浴びせてやつた。へ紅茶の後〜ではないがときに胸のすくようなたんかも必要だ

(五月一日、堺市北三国ヶ丘町より東京都明石町) 田中光子宛書簡

この書簡であるのと述べられてゐる諸注意はすでに三月二十二日附書簡で記述したところを、より細かく、よりに述べてゐるにすぎない。直感した印象は、そのまま真髓をついてゐたわけである。文学では委曲をつくしえぬ点は、上京の折に一日か二日費して、直接口で指導してもいいという、師匠としては最高の好意を伊東は示してゐる。というのも、伊東が女流詩人として最も愛好した「珊瑚集」のノワイユ夫人の片鱗を田中さんの短い詩篇のどこかに感応してゐるからである。伊東はノワイユ夫人の諸作を愛好したことは幾度か既述した。とりわけ「ロマンチックの夕」を愛誦した。

ロマンチックの夕

伯良夫人、シユウ・ド・ワイユ、永、井、荷、風、眠

夏よ久しぶりけり、われ夏の恵み受けじといどみしが、今宵は遂に打ち負けて、身中つかる、までの快さ。
われ小暗きリラの花近く、やさしき木の木蔭に行けば、見すや、いかで拒み得べき

と、わが魂はさ、やく如し。

よろづの物われを感しわれを疲らす。行く雲軽く打頭ひ、慾情の乱れ、ゆるやかなる小舟の如く、しめやかなる夜に流れ来る。

列車は過ぎたり。燃るよろこびよ。その響空をつんざく。神経は破れて死ぬべくも覚えず、いかにせん、又生きんとする願ひになやむ。

あ、われ此宵、わが肩によりかゝる、若き男の胸こそ欲しけれ。ロマンチックなる事柳のかけにも優りたる吾心の頼き疲れをかの人は吸ふべきに。

われ彼の人に、「誘ひしは君ならず、それはあらゆる夜のさま、わが胸をして場の如くにふくれしむ。

されど君はあまりに若ければ、黄金の血潮と溶け行く心、骨に徹する肉のかなしみわれを訴へん夜にのみ。

あらゆる樹木は官能鋭く、あらゆる夜は打ち解けて、絶えざる吸り泣きの声、煙り

し空に上り行けり。

うるはしき夜のみ眺めて語りたまふな。傷しくも悩める君をのみわれは求むる。狂ひて叫ばん唇に、消えも失せなん心して、わが愛する人よ。泣きたまへ。唯泣きたまへ。」と語るべし。

この優艶、濃密、哀婉さが、日本の閨秀詩人にもつとも欠けた素質として、田中さんの将来の成長に、伊東は期待したのであらう。

又、伊東は夏樹君の誕生以来……詳細につけつけてゐる日記を素材にして、将来小説を書く野心を告白してゐる。併せて隔外の考証小説を勉強する由も述べてゐる。伊東は和製ノワユの雛型との今後の交渉に、或ひは未完の小説に現れる一紅彩として、期待するところがあつたのかもしれない。

貸室 XIX

萩原葉子

幹旋所の男は、この間の客はその後何の連絡も無いからといって今度は若いBGを案内して来た。

渋谷の有名な洋菓子店に勤めているそうで

始める。

それを聞いているうち、自分はなにもこの女の教育者でも保護者でもないのにと自分乍らの立場に嫌気がさしていた。

おやおとなこの間柄でさえなければ、そんなことは私にとってどうだって良いことだった。せめて決まった恋人がたまに泊るぐら

こんどこそ本当の世界の夜が来る

本当の美しい朝を迎へるべく——

いままでの黎明がうそであつたやうに

いままでの夜も仮りの夜であつた

こんどこそ本当に底知れぬ暗黒がわれ

われを閉ざす

そして朝が来たとき

眼前にひろがった途方もなく広大な地

平に仰天して

人はそこにいつたい何を見るのか

われわれの超特急はすべての駅を飛ばし

て疾走する

大いなる夜のなかに疾走する

加速された速度で無限に厚い夜を疾走す

る

何処へ 何処へ

幹旋所の男とは、かなり馴染みらしく、「おじさん」と呼んでいた。

朝から青いアイシャドウをさしているが、これから出勤するという元気を身体に漲らせていた。あちこち見廻していたが

「おじさん、この部屋は外から入れないの？」といった。外から入るとはどうゆうことなのか、まさか窓を這い上って入ることではないだらうと不審に思っていると、男は窓の外にひよいと短い首を出し

「そりや、ここを飛び上ってこようすれば入れますさあ」と冗談かかしに言っている。

「もしあたしの留守に友達が来た時、入って待ってもらえないんじや、困っちゃうのよ」女は何の臆するところもなく言う

「友達を泊めたっていいんでしよう？それを聞いておかなくちゃあね。いま貸りてる家は、それをうるさく言われるので、出るのよ」と私に言った。

私は友達がたまに泊まるくらいは本人の自由だから、一向にかまわないと答えた。

「そう、良かった。ちや、ついでにボーイフレンドもゆるしてね？」

「ボーイフレンドは困ります」私はあわてて答えた。女は急にがっかりしてアイシャドウの目を伏せると、ぼつんと言った。

いのことならば、見て見ぬふりもしていられるのに、初めからこうも大つびらに条件を出されたのでは、やはりおやおやとして断るよりないだらう。

実際いま迄に入った女の人は、皆陰れてそうしていたらしい。F子ばかりでなく深夜こっそりと帰って行く男の足音を、何度不快な思いで聞いたか分らないのだ。

同じでも男が女を連れて来て、深夜送ってゆくのを見てもそれほど不快感を覚ええないのは不思議である。女同志の潔癖感が不快の思いになるのであらう。こんな時には家と貸室の距離が離れていればと、何度も思ったことだった。

次に来たのは、お腹の大きい女である。この辺りを歩いたら偶然目についたので、立ち寄ってみたというのだった。

女のだぶだぶのトップパーの下で異様にふくらんだ腹部を見た瞬間、ふとF子のことを思い出した。すると或る懐しさをF子に覚え、いまごろは若い母親になつてゐるだらうかと安否が気遣われた。F子に出て行ってもらって、気の毒だったと今更濟まない思いに噴まれるのだった。

あの年寄りの男の子を産んで、やっぱり奥さんらしく買物したり、夕食を待ったりの生

「やっぱし？こもだめなの？」

私は気の毒でも、窓から男女達が自由に入りざれたり泊るのではいくらなんでも、世間体が悪いからこまると、それだけは言つたすると、幹旋所の男は女の申出を辯護するよりに、「この人は真面目なんですよ。××洋菓子店にも信用だつてあるし……。」と言ひ

夜曲

浅野 晃

夕ぐれは時のとばり

生まれて死ぬる時のとばり

そして夜のなかで

なにかが失はれる

誰かの手が唇をめくる

あたらしい時が奇怪なうぶ声をあげる

ここ風化と侵蝕のあとに残つた古い台地

と

わたくしと

草は蒼茫と吹かれ

はるかな灌木のしげみから

夕ぐれはいそいでやつて来る

活を繰り返しているに違いない。今更F子の人生が哀れだと思った。

それにしてもいま目の前にいる女は、F子とは違う境遇にしろ、この部屋を借すことはとても不可能である。おまけに夫と子供と三人で借りたいというのだ。それに赤子が生れると四人が三畳に住むことになる。

住宅難とはいえ、あまりにひどい貧しさに驚ろいた。まだF子の方が幸せかも知れないなどと思しながら、気を悪くしないで帰ってもらうことに気を配っていた。

数日すると、今度は幹旋所の男と一緒に大学生と奥さんが来た。一見して上流家庭の有閑マダムという感じだった。

蟬の羽のように透き通った薄いストールで、顔をかくすようにしていたが、こんな美しい奥さんの気に入る筈はないと思った。

奥さんはまるで場違いの部屋に入って来た、貴族のような恰好だった。足袋も細い指先も白くて部屋の汚れが一層目立った。部屋に入るなり傍の学生を目のふちでふり返ると

「じゃ、お返事はのちほどに」と、明らかに断りの仕草で誰にもなく言うと、ストールを直し乍ら部屋を出て行った。馴れた態度だった。さすがの幹旋所の男も一言もさしはさむ余地がなかった。

京都博物館

秋 漢

うれた柿うれかけた柿が六つならび列をはなれて一つはちひさき

うれた柿うれかけた柿が六つならびさりげなく並べど二つ心のみ

うれた柿うれかけた柿が六つならび何か云ひあへりひとに聞えねど

却連の流れ音たててここにとまり静かなるかなや柿の実が六つ

鳥 恭

赤松の木立かそけきむかふには平等院の棟造りも見ゆ

佛 像

秋曇りひかりともしき部屋のなかに親しみ多し木のはげ達

正面の平安仏の垂頬さへ久しく見ずて年月すぎぬ

北白川、立川・真坂兩君の下宿

相寄りて言葉もつきぬ夜深く土にしみ入る秋の音

室生寺へ行かなと云ひし朝明にふりつぐ雨かしげくもあらねど

萩すすき三坪の庭にふる雨はひと日やまさり桔梗もぬれて

こんな上流婦人にもし借してほしいと言われては、気分が悪いしそうかといって断る理由がなくて困ると、私は見た時から考えていたのだった。

それに奥さんと学生の問柄は「年上の女」という雰囲気、どうみても漂わせている。恋人である学生のスポンサーとなって、身の廻りのめんどうを見るという、世間によくある例だらう。

いつもはすぐに決まってしまう部屋も、今度はこんなことが続いてなかなか決まらなかった。やはり壁を塗り替えさなくては、ならないだらうかと、困っていると幹旋所から客が決まったという電話がかかって来た。

一番初めにこの部屋を見に来たまま、返事のなかった二人の男のうち、一人だということだった。

一人は背の高い中年に近い男で、もう一人は瘦せた女のような感じの男だったことを、私は思い出してみて、どっちの人が入るのだろうかと思つた。

つづく

生老病死 (十)

青木 敬 磨

秋

蘆屋川

わが道は一つまづしくおろかしき身ときはまればなになげかむ

高山の岩根しまきて死にせばや波にみづかばやみなみな安けし

蘆屋川の坂の通りにて秋日あかとんぼうう手にとらへたり

十月一日。夜来の風は遂に今夏二度目の颱風となる。

まよなかと風のときれに鳴る鐘は連打か不吉に鳴りやまざるは

みんなみの山鳴りとよむ夜の深さなにかかなしき思ひに眠らず

乱れ雲の上は月あり入海の暴れに下りゆく道ほの白し

家のあはさ覗きみる浪は夜目にしるし生きもののごとき波頭はしる

浪のひまを人ら走せかひ叫びかはしかにかくに助かりしどらむを数ふ

準備すて終へて家陰にあつまりくる顔はわからず煙草の火に白く

あらし落ちて月きよらけき山と海とほさかりゆく練習機あり

月の下に波止は崩れてあらはなる光にたり颱風のあと

阿 武 野

玉のをのいのち死にせず今日もあれば古野の道に触れし秋花

こみあげくる愛別離苦に負けしのみ秋草花にむきてまはたく

わが手もて植えし伊吹の葉はしげり秋日にきららふ遠山も見ゆ

五 百 住

三日月は鎮守の森の上でありわが足音のかくも之しく

駅一つ吹きぬける風は秋にしてたそがれの野を行く人ぞなき

蘆屋あたりを過ぎて

わだつみの豊旗雲に入日さしあきらけくこそ大和島根は

飛行機の音は汽車なかにまぎれなし秋日和つづく稲の穂のおもみ

館 屋 町

きぞの夜はほとほといねず奥山のみねの深池は夢なりしかも

大 阪 駅 食 堂

兵士らが榻辨当のうしろ姿みてをればなかつ胸ふたがりて

腰に着くる小網袋の榻飯梅干ひとつあらむなどおもふ

夏以来颱風禍あることすでに二回つききよく虫なく磯に立ちつくす

磯浜に形のこりし漁小屋のいくつあれやも風のあとの月に

がらす戸に木の葉うつろふ月夜にいていねんとすれど波の音もなき

三日月本にて

久方の月夜松原わがくれば海光るなり舟もあらなく

三熊野の松はわれしる幹高し月更けて宿にかへるこの道

山のまに傾く月よ島に来て家なる児らをおもひ更けつとも

旅にねて安きに似たれいつか汗ゆる眼は開きをり月夜あかりに

五日夜黒田巧と三宮高架下に見月す。入年中は肥えたり、出年以後却って神経衰弱になりしなど。

すこやかにあれとおもふのみ敷島のやまとの国に人もあらぬ世に

六日飯塗再び異郷へ

紙一枚めくれれば役人の仕事は済む五十戸の世帯が紙の上にあるや

ますらをやふたたびすべき五たびまで人をこさしめし役人に対す

資材不足の故とは雖も、一組合が一ヶ
の生活単位をもち、水揚すら共同にす
るこの頃なり。

願書一つ通りしときよろこびは凱旋将士が
汽車にのるごとし
顔のちがふ六十人が一つ釜に飯くふ世となり
忙しきこそよし

伊保
多哥万呂がすることは間違たらけと云ふわれ
もしかおもふ秋ふかき夜に

十月七日、ふとして連立ちし平野誠
哉君の新居を祝きて、

松の枝のこまやかなれや天つ日は惜しみなく
君がにひ家にそそぐ
村なかに幾代か経にし家屋敷松と石とある庭
の幽けさ
玉ほこの道くれば秋の日はしづか今在家と云
ふ小村を知りぬ

飯院

こすもすの白花もあり風と雨にさらされて萎
もともしくはあれど
白萩ちり芙蓉すぎてわが庭の秋や風へのこり
しこすもすが十株
わが庭の秋たけなはとこすもすの白花さけば
足らへるごとし

瑠子

をさな児はいそがしそくに絵本もちわが膝に
すわる話あるごと

冬に入り風なき朝のあたたかさ松の樹株にこ
しかけるわが子と
山の上の空に雲ありしろじろと入海に映りう

酒徒曼陀羅

一言井勇忠におくる

国弘浩介

身に泌みてさびしからずや太祇忌の京の
夜ふけの冬酒の味
京竹のさやらと鳴れるわび住みに安良居
祭まわちてほろ酔う

鉄奔の虎に学ぶと寝ころびて祇園会の歌
詠みし勇は

奈良茶粥食いはぐれしとかこちつつ比良
八講の荒日和過ぐ
浅草の酸漿市はいつぞやと涙ぐみたる京
のわび住み

追憶の博多山笠いまはなきちよんちよん
格子を愛でたり君は

ほろにがき博多蘇小のあばれ酒因陀羅行
の旅をゆくひと

おもい出はつづるよしなし大土佐の菫生
の峽を怨いもこそすれ

をさな児と話すことも珍しき日頃をおもふ
膝の上に抱きて
膝にすわるをさな児は絵にあくことないうつ
ける父ゆえひとり歌へる

拾遺

夜一回眠りしあと、あかりをせせば月あ
り、いつか雨はれしや

月よみはまた照りかへり照りかへしいつのみ
にかもこの年も暮る
わがつみはついに休ろうことをしらすおそき
月よにうごく小波

某日

わが庵のむかひの山の山はらに家居ならべり
薬屋根の家
冬に入り日のあたたかさ昼さがり遠くに聞ゆ
る婚礼の唄

あの家は娘嫁入ると人の言へば言には云はね
どことほぎおくる
山の上の竹藪の秀のなびきあへば冬空すめる
上とぶ飛行機

某夜

部屋のうちじつと居ることの気うとくて子
どもとつくる小篠の鉄砲
いささかの酒に酔ひあるく村の路さか路くれ
ば月海にひくし

某夜

わが家のあかりみなきえしづかなり月よの庭
に門口たたく

こくしづけさ
子ども一人長き波止のはなに走りゆきいま坂
る舟に手をあげてをり

酒麻呂忌忘れもせずに炉端酒汲みかわし
たる土佐の焚燗

天連の書

病み臥やる浄土の寺の枕頭に南蛮の書伴
ゆくりなく救世観音を夢みしと後生を祈
る勇もあわれ

蟬丸の能面に魅し光悦の時絵を愛でて近
きし勇は

末の世の劫火となげく金閣のあわれも聴
きし宗の梅雨寒

さびしさのきわまるどころ龍安寺の石の
浄土に泣きし勇は

相阿弥のふかき心に泣き濡れし寂山吾も
すでに古りたる

夢阿弥とみすからよびて石庭の縁に半跏
の吉井勇は

犀星も茂吉おきなも讃えしと言あけし勇
すでに逝きたる

宗達をかたり利休を愛したる勇もいつか
京に老いしと

薄雲の日は寒けれどしづかなり子供きてあそ
ぶ今日は日曜日
土の上に子供独楽まわす一心にまひすむ独楽
と子どもの顔と

うすら日は照りてはかけるしづかなる通りに
ひびき独楽のあふ音
子どもらを見おくる門のくらがりにたたずみ
て言うさむき星夜に

裏山の杉の木立の秀の上に三つ星たちきよら
けき夜ぞ

某日

この坂の松の木の間よ見おろせばわが村よき
村ささやかながら

朝凧の入江ささなみ波止よりのこりはふか
く浜までとどく

朝潮はひたひたと寄り江の底の村までよりて
石垣をぬらす

内の海しづけき島をめぐる潮のよりより移り
この江によどめり

山の下に百余の家があひかきなり朝の浦にみ
な照りはえる

朝舟はあとよりあとよりつづき取り発動機の
音しだいにふえくる

山かこうこの一廓の小港に朝市はじまりあつ
まる人みゆ

おほけなく勇が怨いしみほとけは尼にて
在す天寿曼陀羅

秋成の墓に詣てし霜の夜に板敷の味に酔
いしおもい出

祇園会の歌に秀真の銅印を刻みし団扇秘
蔵たりわれは

瓢箪の水音聴きし朝粥に別れし酒の恋し
からんに

酒の鬼断ちたる追儺の夜をかこつされど
ほうふり酒には酔はず

撥の寂びうつらに聴けり大石忌の力茶
屋の濃漿図のいろ

阿羅漢の山おもしろと城南の安居に冬を
むさほるもまた

古庭の苔の青みに経を誦す智照尼を訪い
し嵯峨の祇王寺

灯を消して卯月の黄菊吾も咲がん泥龍窟
の達磨忌の夜半

めぐりくる勇忌の冷えかなしきは祇園の
水の冬の日のいろ

おもい出の一つ二つものばれて勇は恋
し京の舞姫

真山の松の林に雑木まじり雑木は黄葉して冬に入りけり

雨雲はおくへかさなり走りつづけ夕づく雑木に又風いでし
山の家の柿の古木は実がなくなり葉もなくなりて細き枝多し

入海の丘の立木に人日さし少くなりし葉がうごく見ゆ
岬山はすでに暮れつくし雲かかる雲のあはさよ航空灯のひかり

月はいま真上にあれど雲絶えず遠き岬より浪の音する

東の坂のひくみより日がこぼれ学校にゆく子供をつつむ
冬に入りてうれしき朝日村にこぼれ山のかげらはいまだをぐらし
島山はすでに日が照りたらひたり岬のあたり白浪もみゆ

あかあかと日は照りながら夕かけて西吹きつりのりが歩み難し
夕かけてさむき西吹き埃とばしわがほそき羈をかたよせてゆく

冴えかへる空のいづこを行く風か耳をも頭をもつきさして通る
広つばに砂と木くずと葉ごみとちさき子供ら
まつこより西ふきつくる口も鼻もかわききりたる寒さのものなか

夜に入りて風は少しもおとろへず杉山の上にしろき月たち
門にたてばわが家の上に月来たりしろく澄みとほり風にむかへり

山の池すみとほりたり切岸の上をまわつて道なほつづく

冬山に松の葉をかく音しづかも言はんとする間に過ぎし
峠出でて眼の下にある川のうねり川口あたり海の光れる

山下の雑木の原に冬の日みち下草をかる人ひとりとふたり
吹きつぎし西風もおさまりとよりよろふ低山なみにうく雲のあり
この山のしだいに低まり海にとどきこの橋わたれば赤穂の城町

果樹園

第87号

詩人、その生涯と運命
逢い引き 小高根 二郎
酸 引 林 富士馬
み が 素 吉本 青司
風 に ゆ れ る 天野 美津子
浅野 晃

時のなかに 渋谷 晴雄
内海の暮色 森 鮎子
一匹の鮎室 萩原 葉子
モノローグ 美堂 正義
温室で 堀之内 歴
ヘリック詩抄 森 亮
生老病死 青木 敬麿
編輯後記

詩人、その生涯と運命

書簡と作品から見た伊東静雄（七十五）

小高根 二郎

伊東は六月下旬に六日間上京したが、その間女弟子田中光子さんに三度出会つてゐた。一回目は大塚高信氏を加へた三人で銀座の翁亭で会食してゐた。二回目は田中さんがアパートに来訪し八時間すごしてゐる。五月一日附田中さん宛書簡に「二日か二日ばかりで御一緒に訂正のことをやつたら随分よくなるのぢやないかと存じます」と書いてゐるが、その約により原稿を訂正したのであらう。三回目は新宿で出会つてゐた。その間伊東の留

守に校正の礼であらう田中さんはおほきなぞ持つて来訪してゐる。伊東は二十五日帰阪すると二十八日次のやうな書簡を田中さんに送つてゐる。
「滞京中はほんたうによくしていただいて真にうれしくまた有難くございました。厚くお礼申し上げます。想像通りに本当の紛ふ方なき詩人の御性格で、安心して満足しました。それに反しわたくしは御期待にもそむき、また大塚先生の御信頼にも充分お応へ出来るやうな器量でないことを露呈したのではないかと、はづかしく思つてをります。そして、初めての方にお会ひした後に覚える自己嫌悪の感を——よく思はれようとして思はれそなたといふやうな嫌悪感を感じてをります。しかしこれは仕方もない

編輯後記

二月一四日。京大教養学部の高安国世氏をお訪ねした。先号で高安氏宛伊東書簡を発表したが、それらのことに關して幾度か書簡で教示を仰いでゐたので、直接お目にかかつて御礼を申し述べざる必要もあつたからである。
この日高安氏より八四号拙論に關し訂正の便りがあつた。富氏の昔の面談を「上方落語の師匠の故」と書いたが、左官の棟梁となつた人の末裔であつたといふ頃の話で、誤謬をしたわけであるが、ほとんど毎号のやうに拙論に關しこの種の訂正や異説を寄せられることは稀い。いづれもたたくつもりであるから、研究家には好むの資料となるであらう。

二月一六日。桐生に旅した歸りに前橋に立ち寄り寄つて図書館に館長森谷國忠氏をお訪ねした。篤実な明太郎研究家である。つい暇と興の先の越井小学校の校庭に移築されたりに敷島公園の松林の中に「歸郷の」詩碑も訪ねた。歸郷歌集「生老病死」は、二号で完結する予定なので、青木君の後に森谷氏の解説で明太郎の未発表ノート「浄罪詩篇」を「オト」と題して連載する予定である。連田善明の絶作「有心」も予定に組んでゐるが、生原稿と「祖国」へ既発表の作品の間に校正上の疑問が若干あり、清水文雄氏に既発表の校閲をお願いした後でなければ安心できないからである。

果樹園 第八十六号（毎月一回一日発行）
昭和三十八年四月一日発行
編輯者 小高根 二郎
大坂市東住吉区桑津町五の八
印刷所 元市印刷株式会社
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円 送料 十円

ことであります。只、これから、出来るだけの努力するより外ないと考へてをります。
只、目下の私が、詩作といふ点で緊張の去つた一時期にゐますので、自然あなた様
に何の刺戟もお与へすることが出来なかつたのぢやないかと、文学者としての今の自分に不満を覚えました。それどころではなく私の方こそ一種の刺戟を受けましたことは事実であります。酔乎とした詩人がやはり存在してゐることを知るのは今の世情で大へんな力と慰めと親愛を覚えるのであります。あなたの御詩情は今のところ充分広い、歴史的なものとは云へないにしても、又趣味の上で完全な一致はないにしても。
どうぞおからだを大切に御精進を祈ります。沢山の同情者を得ることよりも確乎たる詩人としての自覚をお生きなされるやう祈ります。
前々から危ぶんでゐました御日常の生活の苦しみといふことが、殆ど御容貌の上に見出されなかつたことは、安堵でありました。どうぞ平和に素直にこれからお暮しになれるやう祈ります。
大塚先生には私のいいところだけお話し

下さるやう、又つまらぬ私の手紙はお示し下さらぬやう願ひます。先生にはいつまでも出来るだけよく思はれてゐたくございませう。どうぞ今度のいろいろな御配慮、あなた様からも、くれぐれよろしくお伝へ下さい。

あなた様のことお話ししますと、家の者らも大へんお慕ひし、よろしく申上げてくれとなつかしげに云つてをりました。赤ちやんの顔一週間にみてもかはいく思ひましたしかし私が毎日仕込んでゐました、口に手をあててあばあばといふ芸を、私がゐないともう忘れてゐましたので一寸悲観しました。

又お便します。これから方々に手紙かかねばなりません。学校にひとり残つて、これ書いてゐるのです。

二十八日

伊東静雄

田中光子様

(六月二八日、栗市北三国ヶ丘町より東京市明石町、田中光子宛封書)

伊東は「紛ふ方なき詩人の性格」或ひは「醇乎とした詩人」と彼女の性格に手放して感歎してゐる。又、日常の生活の影が容貌に現れてゐない点にも安心してゐるが、恐らくのびやかな彼女の性格と容貌に打たれたからか

? と想像される。あまつさへ伊東は「一種の刺戟」を受けた事実さへ告白し、彼女の存在に「力」と「慰め」と「親愛」をさへ覚えてゐるが、日々急角度に殺伐化してゆくあまりに非詩的な世相と世情とに、伊東が飢渴してゐた何かを彼女は感応させたからであらう。

リルケは伊東の好きなノワイユ伯爵夫人に出会つて「狂暴な小さい女神」といふ意味な印象を受けたが(リルケの思ひ出、昭和三年養正社)伊東は空想してゐたノワイユ夫人の離型に出会つて「おほらかな小さい女神」といつた好感を抱いたやうである。

それにしても伊東はいささか卑屈にすぎてゐる。既述した東京文理大に対する心理的な弱身もさることながら、詩藝ともいふべきホクロの看板を降ろし、歌を忘れた詩人……という虚脱さが自己嫌悪となつて、さうさせてゐるやうに感じられる。

伊東は書簡の末尾で、この書簡を「学校にひとり残つて」書いてゐる由をしるしてゐるが、過日ひさしぶりで出会つた百合子さんにも「わたしひとり職員会に残つた午後五時十分」(昭和十三年十月)と書いて書簡の結びにしてゐたことを思ひ出す。あの日伊東は百合子さんという仮象に向つて文学を試し、

逢い引き

林 富士馬

少年の時 父母はイヤがった
私の「恋」を まるで「死」のように
それから大きくなって 私の妻は
イヤがった 私がいそいそと出掛けるの
を

私自身にもよくわからないが
ときたま街角でぶつかりそうにして
そういう風にしてしか逢えない
奇態なもの? 恍惚となるもの!
併し 私はみている

貧しい老母が 大勢の孫達にかこまれて
まるで月光のように「死」に飾られてい
るのを。

あの やつと休憩出来る世界!!

らから一つものさす見つけ出す場。」

食に窮乏した世相を語る散文詩である。この大阪の食にとんがらがつた世相に対し、東京での思想上にとんがらかつた険悪さを伝える次の身近かな出来事も記述されてゐる。丁度「ゴキト」同人の伊藤佐喜雄氏が西下し、伊東を訪問して伝へたニュースである。

「伊藤佐喜雄の話は出版界のこと、影山正治の部下の暴力。中河、檀、亀井がなぐられた話。保田の『文芸世紀』脱退のこと。大東塾の影山正治氏の門下生が『文芸世紀』の主宰者である中河与一氏や『日本浪漫派』の檀一雄、亀井勝一郎氏等を撲つたというのである。大東塾の影山氏に親灸してゐた保田与重郎氏は自然……撲られた中河氏の『文芸世紀』からは脱退せざるをえなかつたのである。このニュースは風の便りで蘇州にあつた私にも当時伝へられたものである。色の濃淡こそあれ、いづれも右派と信じられ、また自ら信じた人々の内紛である。これを裏返せば、敗色顯著となつた時局のもとに於ける硬派と軟派への分岐を物語つてゐるやうである。

それから末世風景の一つとしてヒステリカルな配属将校の狂態が一、二、三日の日記に連続して伝へられてゐる。

誰に対するよりフランクに文学観を語りかけた。いま伊東は光子さんを強ひて仮象に祭りあげることによつて、枯渴した詩藝に充満するなにかをうれば……という仄かな期待を抱いてゐるのかも知れない。

伊東がこの書簡を田中さんに送つた日、サイパン島の洞窟陣地に拠る日本軍は、圧倒的な米艦隊の艦砲射撃を浴びると潰滅にひんしてゐた。一週間後には「一人克く十人を斃しもつて全員玉砕すべし」という斎藤第四十三師団長の命令が出たまま消息が絶えたのであつた。(岩波新書、林三郎著)七月六日の伊東日記は「今日の大本営発表によれば七十五機を撃墜して敵を遁走せしむ。わが方三十機、船舶四隻を失へりとなり。民心不安を極む」とある。

田中光子さんに懇切丁寧な手紙を書いた昭和十九年五月一日の日記に次のやうな詩的な記述がある。

「青い麦の穂をみれば一種の悔恨に似た情を感ず。れんげ少い。畑に直接行つて野菜を交渉してゐる女の買出部隊。よもぎ摘む娘。食べ物もなくぼかんとして神社に休んでゐる錬成会の一行(あの食ひしんぼうの大阪人が)。物食べてゐると、あまつまつて来る場のむれ、餅のかけらを投げると草む

一日の記に「配属将校(三十歳、大尉)の変質、居丈高、愚昧、そしてひがみ。」とある。

二日の記に事件の概要が伝へられてゐる。「校長から配属将校の件に就いて話がある。

前週水曜に四ノ三組が、初めて軽機を持つての動作をする時間に小隊長の敬礼、片手間隔でひらく動作に於て生徒がまちがひをやつたのを配属将校がひどく叱責した。ところが生徒が、その動作に就いては未だ教はつてゐない由を答へると、大いに怒つて絶対に教へてゐないことはない、以後この組には教へないと云つて教官室にひきあげた。週番と、返答者が行つて詫言ひが許さない。もし教へてゐないのだつたら切腹をする、といひ、又この組には教練合格証をも手へない、以後教育もしないと頑張つたのである。この男は常に切腹切腹と云ひ、又ある組では、卒業までに三人殺すなどと放言する。三組の生徒は絶対に習つてゐないと云ふ。昨日このことを校長に報告しておいたら、配属将校に話をしたらしい。教はつたものは教はつたやうに素直に告白して詫言ひたら許してやる。教はつたものを教はらないかの如く言ひ曲げて只心にもなく詫言ひるのは、合格証ほしいからの功利的な態度である。この大阪人根性をたたき直さねば

いけないのださうだ。ひねくれ者。」とある

三日の記に「氣にかかつてゐた例の事件、配属将校が何にも云はず、ぬけぬけと授業したので（教へてない証拠が段々出て来て、のつびきならず）うやむやに決着」とある。又「職員会議で、又居丈高になつて、馬鹿なことはかり要求する、職員苦笑し、冷笑す。又腹立ち、小便に立つもの続出、滑稽なることなり。」と結論されてゐる。

ニューギニア戦線の敗退、トラック島、サイパン島が上陸作戦の脅威にさらされてゐるとき、配属将校の閑職が当てられてゐるほどの者は、どこかに重大な欠陥があるものに限られてゐたらう。三十才の血気ざかりでこの閑職にある切腹大尉は明らかに精神分裂症のやうである。

六日の記に「古賀聯合艦隊司令長官の殉死（三月最前線飛行上にて）発表さる。再度司令長官の殉死。」とある。記述はこれだけが昨昭和十八年四月十八日の山本五十六司令長官の戦死に次ぐ悲報だつただけに伊東は明らかに戦局に対し疑念を抱いたやうである。その日より三日して伊東は次のやうな書簡を頼原退蔵先生に送つてゐる。

「永く御無沙汰いたしてをりますが先生にはいかがが過ぎませうか。御健康

酸素

吉本青司

名を告げると
青白い顔がかすかにほほえみ
死に臨んでもなお失われぬ
きよらかなものを見たと思つた
それは
一時の慰めやはげましを近づけぬ
厳肅な何かであつた
手術を担当した若い医師は

穏やかに自信ある態度で
脇が 胃の外がわにしているため
手のほどこしようが無かつた旨を述べ
最後に こんな絶望的な患者が
もちなおした例も稀にはある
とつけくわえた
婦りの夜道で ほくは
病人の鼻孔に送られていた あの
酸素発生器の透明な気泡を想い浮べ
奇蹟 ということばを生みだした
人間のころの真底を
いつまでも見つめていた

草などして遊びます。

さて先日は御高者「芭蕉講話」をお送りいただきましてまことに恐縮に存じました厚くお礼申し上げます。先日大山定一氏から手紙が参り京都で、頼原先生にも御出席を願つて、芭蕉研究の座談会をするから出ないかと勧誘をうけまして、先生にお目にかかること、お話を承ること、大へん楽しく思はれましたが、あまりに自分が芭蕉について知ることが少く、座談会と云ふ以上、聞いてばかりゐても責任が果せないやうに

存ぜられましたのでお断りを申述べたのであります。そんな時でありましたので御本は、勉強の手がかりに丁度恰好のものとしてうれしく存上げました。

「コギト」も、「文芸文化」もいよいよ廃刊近づいたやうでございます。わたくしにはしばらくはじつとノートの端にでも思を述べておくといたつたやうな文学生活が始まるのだと心を定め、かへつてふかぶかとした静かな気分がいたします。

九日

伊東静雄

頼原退蔵先生

（五月九日、堺市北三国ヶ丘より京都市大
將軍、頼原退蔵宛封書）

伊東は勉強や詩作のできない理由として、日常の「煩雑多岐な勤務」を挙げてゐるが、勤労奉仕が先なのか、学問の授業が先なのかわからなくなつた倒錯した事情をさしてゐるのである。現にこの手紙を書く五月初旬も勤労奉仕ばかりである。四日は午前八時から午後四時まで阿倍野交差点と中道の西町会の貯水槽掘り。五日は雨だつたが午後二時まで阿倍野交差点の勤労奉仕と夕刻からは防空訓練

みがく

天野美津子

みがく 窓硝子をみがくように
うす汚れた日々を
舞踏病患者のひきつった努力のように

真実のためになら
苦しみを 傷つくことも 美しかった
虹色のむかひ

行つては戻る暮しの通路

いとなみは美しいものと

告げることに耐えられない 敵意の巷に
ひとり疲れた神経はすすりなく

まことしやかな この世の約束
問いもなく答えない静けさの 深まりゆく
黄昏を

騒がしい声で打消すためにのみ 私の手は

みがく 刃を銀色にみがくように
恐怖の時間を
うつつない 稚な子の 手すさびのように

である。六日。七日。八日。貯水槽の粘土張りの勤労奉仕……といった現況である。その間、分裂症の例の切腹大尉の巡視があるのである。勉強や詩作をする心境とならなかつたのが当然であらう。

こんな疲勞困憊の中で芭蕉研究の座談会どころでなかつたらう。四月二十一日の日記に大山定一氏が案内をうけ、時間がないこと人々に興味がないこと、芭蕉について——というより俳句というものがよくわからぬという理由を断りの材料に挙げてゐた。この座談会は八束清氏の世話で北白川の農大前の秋田屋京都編輯部の二階で催され、主として頼原退蔵、吉川幸次郎、大山定一、小川環樹、湯川秀樹、西谷啓治、土井虎賀寿、遠藤嘉基諸氏が出席、時に新村出、吉井勇、井島勉、貝塚茂樹諸氏も顔を出した。いづれも京大関係者がほとんどで中学教師の伊東と違ひ勤労奉仕には無縁の人々である。「先生にお目にかかること、お話を承ること、大へん楽しく思はれましたが、あまり自分が芭蕉について知ることが少く……」と修飾してはゐるが、日記に出てゐる不参理由の忌々しさが真実の心境であつたらう。芭蕉座談会に出席できぬこの伊東のために「芭蕉講話」（昭和十三年三月）を贈呈した頼原先生の愛情はまことに深いも

のがあると言はねばならない。

この頼原先生宛書簡の一週間後、三島由紀夫氏が伊東を訪問してゐることが日記に見えてゐる。

「十七日 学校に電話かかつて、二時頃平岡公威来る。その前富士正明「正晴の異名」いよいよ大陸（中文）に出征するといふので休暇貰つて帰つたといつて学校に来る大へん肥えてゐて、かねがねその健康危んでゐたので驚いた。平岡と一緒に富士を訪問、晩めしの馳走になる。富士の妻君来る朝早くついたのに奥さんが来たのが七時頃家の者が（妻君の。妻君は目下別居中のこと）知らせてくれるがおくれたのだと云つて何とも云へぬ悲しい、辯解の余地がないと云つたやうな哀れな表情で挨拶する。富士は「おれは戦争に行くんやで」と大きな声で云つただけで千代紙を切つてゐた。平岡の本の装幀の図案である。……中略……富士君の家に行つた時先づ最初に「奥さんは」と自分がきいたら「別れるんです」「何故」「僕が大切にされてゐたハッピや筆（だつたと思ふ）（紙だつたかも知れん）を勝手に里に持つてかへつてゐるんですからね」とただそれだけ言つた。……中略……いろいろな事情があるのだらう。

のはほとんど消えた顔に微笑を洩らしたであらう。

六月になつてアメリカ機動部隊のマリアナ諸島への進攻が開始された。六月十三日にサイパン島とテニアン島に数時間にわたる艦砲射撃を浴びせると十五日からサイパン島西岸

十時頃平岡と北島で別れる。

なにか異常さが凝縮したやうな記述である軍隊生活の激務で憔悴してゐると想ひのほか案に相違して富士氏が太つてゐたのにまづ驚ろいてゐる。それに訪問早々に聞いた離婚話と、渡支を前にしての休暇の落着かぬ雰囲気のなかに、若い友三島氏の小説集「花ざかりの森」のために千代紙を切つて装幀に苦心をしてゐる憑かれたやうな富士氏の姿が浮び上つてくる。「もし誰も一冊にしよとしないなら、自分が骨を折つてもいい」と公言しただけある執心ぶりである

伊東日記に「花ざかりの森」の遅刊を気にして三島氏が伊東に幾度か書簡を寄せてゐる事実が出てゐる。特に序文を伊東に求めたらしく、四月三十日の日記に伊東は執筆を断つた事実まで出てゐる。三島氏の今度の訪問は、伊東に再度執筆方を要請するためであつたのかも知れない。二十二日の日記にも三時頃学校に三島氏が訪れて、夕食を共にしてゐる事実が記されてゐる。二十八日の日記に帰京した三島氏からの礼状であらう「平岡から手紙、面白くない。背のびした無理な文章」と、いかにも伊東らしい峻厳な批評がある伊東は富士氏が執心したほどには三島氏がまだ理解できてゐなかつたのか、それともあま

に上陸作戦を開始した。伊東日記はその悲痛さを次のやうに伝へてゐる。

「十六日 一日中警戒警報。ラジオの報ずる大本営発表によれば、敵はサイパンに上陸を企図し二度水際で撃退され、三度目の激戦中とのこと。又午前二時北九州を二十機で空襲

風にゆれる

浅野 晃

風にゆれるつめ草の花
光の中に列を組んだ馬鈴薯の花
また雑草のみどりの葉
みなうつくしく清潔で
快活で悦ばしく愁はしく
ゆれては静まり静まつてはゆれ
わたしらは生きてゐるんですよ
その身心で語りかける
けれどにはかに光がかくされると
全景は灰色と化し
すべてが沈みゆき遠のいてゆく
生が去つてしまつた感じである
山はみるみる冷えてゆくし
海もいちめん影になり

わたしのつく息ものどにつかへる

囚はれの歎きを訴へるやうに伝はる
そこへふたたび光が返つてくる
惜しげもなくそれが注ぐと
なんといふ明るさであらう
なんといふ悦ばしさであらう
光といつしよに生が
往つたり来たりするのだ
山も海もいつせいに輝きわたる
満眼のみどりも空の青も
いつせいに輝きわたる
赤に黄に白に紫に
花の色が軽快にゆれる
みんなにこにこしてゐる
あわたしらはひとり残らず
大地に生きる光の子供です

りに親しい友清水文雄氏の教へ子……という心理的な落差を、自分の教へ子の背丈になぞらへて考へてゐるからである。

二十九日の日記は仙台の桑原武夫氏からのびやかな来信を伝へてゐる。
「その一節に「牛乳、大根おろしも凍つたりします」「私も寒くて夜更しのできぬためか来仙以来極めて壮健です」「五月はじめに桜、桃、木蓮、つつじ、藤等々踵を接して開き出て、それに各戸どんな小さい家も花の木を植ゑぬところはないので全市花の都を呈し」「ガスのメートル調べや郵便屋が台所に腰を下してお喋りして行つたり」「今朝二階で書見をしてゐると、余り間近かにチイチイ声がするのでよく調べると私の部屋の不用に帰してゐる——ガラス窓に突つたため——戸袋の中に小鳥のヒナが四羽ゐる親が虫を運んで来るのでした。ひわ位の大きさですが名はわかりません。しかしそのためにこの家が一そう好ましくなりました」とある。よんでゐてよい気持ちになつた。」

今里の勤勞奉仕から帰つてきて午後二時、まだたじろぎをみせぬ確かな光の中で伊東はこの書簡を読むと、まだ日本のどこかには春が残つてゐたんだな……と、ホクロの手術痕

し、我方は内七機撃墜、三機撃破、我方の損害死者数名、火事数ヶ所におこり五時に鎮火。損害は極く軽微。又小笠原諸島を機動部隊を以て攻撃十七機撃墜。南朝鮮に敵機飛来。本土周辺の戦況相次いで報ぜられ、憤怒と憂慮。敵愾心。八時から十二時間学校で警備。学校防護の生徒らは三班に分れて、交代に警備し、宿泊、教師も三班に分れる。明日から自分は八時から三時までの割当である。自分は監視の係である。することなく退屈至極。といつて何とも頭張り様がない。雑談し、又ひとり心の中で折り、覚悟を深めるより外仕方がない。花子は七時すぎ帰宅、自分は九時すぎになつた。それから夜食し、又パンを作つて皆でたべる。壽恵男の結婚の一頓挫を思ふ。」

伊東は迫りくる緊迫した非常時態を察して停滞してゐる愛弟の結婚問題を一つ気に解決しようと思つたのであらう、三日後の十九日から二十五日まで一週間ほど上京してゐる。「二十日 朝九時七分東京駅着、壽恵男出迎へてゐる。大塚氏に電話すれど今日は登校なき日。下宿にゆく。中食後、大森の酒井先生宅（太郎先生）にゆく。練乳二罐が土産也。三時半までゐる。大森郵便局から森君に電話

。銀座に出て食事とる店をさがし、やつと一軒ある。ひどいひどい食事。二人で五円二十銭也。雨至る。有楽町の朝日新聞前にサイパン島周辺の海戦のニュース出てゐる。人雑踏す。聯合艦隊の一部出動すれど徹底的打撃を与へ得ず、わが方の被害相当あり、との報道に人々暗然たるまなざし也。雨ひどくなる。池袋に林氏（註・林富士馬氏）を訪ふ。平岡君もあり。腹へつて叶はぬので握り飯を所望する。同夜自分は泊る。壽恵男、平岡傘借りて帰る。

二十一日 朝十時頃壽恵男至る。中食を馳走になり文理大に大塚氏を訪ふ。壽恵男に座を外して貰つて話す。銀座に壽恵男の会社を訪ふ。五時約に従つて、大塚、田中光子の両氏を服部時計店の前に待つ。打揃つて翁亭で夕食の馳走になる。

二十二日 昨日の約に従つて、大塚氏と代々木八幡駅に落ち合ひ、林正子嬢の家を訪問、主人は京城旅行中にて留守。中食の馳走に与り、同駅にて十二時半大塚氏と別る。この日壽恵男は出勤。五時頃帰る。

昨日の約に従つて一時、田中光子アパートに來訪。ウキスキー三本。滋養糖のかたまり等くれる。九時までゐる。駅まで送りウキスキー一本持つて、祖師ヶ谷大藏に栗山君を訪

ふ。栗山、清水二君は家族を田舎に疎開せしめて、同居せり。栗山君の姪炊事のことをやつてゐる。池田君も同じく家族を田舎にやつて、近所に自炊してゐる由。栗山君は十時半頃かへる。会議あつた由。それまでに池田君来て四人で話す。栗山君も帰る。ウキスキー飲む。壽恵男下宿に帰る。自分は泊る。

二十三日 朝九時下宿に帰る。壽恵男は休日。林君、電話。林君の母上午後から来てくれとのこと也。午後壽恵男と共にアパートを出、一緒に交番にゆき旅行証明書を買ふ。壽恵男は嫁候補者の件につき友人田中某を訪ひゆく。自分は林君にゆく。新宿駅で大村中卒の平山に会ふ。喫茶店で一寸話す。母堂と共に本郷弥生町の某家を訪れたが留守（その親類を見る打合せのためである。）近所の停留所で元住中教員米山氏に会へど声はかけなかつた。夕方アパートに帰る。壽恵男と共にウキスキーを持つて、栗山君にゆく。栗山、清水、池田、林、平岡相会す。（この日、田中光子嬢留守中に來訪したらしくおはぎ、きうり、お茶等を置いてあつた）。壽恵男帰り、自分は泊る。

二十四日 壽恵男は出勤。十一時頃ゆり子さん來訪、おはぎをくれる。十二時半共に新宿に出て別れる。約に従つて田中光子駅に自

時のなか

渋谷晴雄

流れる時のなかに ぼくを投げる

光は 同心の波紋をつくり

まぶしい そのあたり

動かない浮子のように浮かぶもの

見えない錘りにささえられ

いま

忘却に似た明るさの一点に在るもの

内海の暮色

森 鮎子

あざらしの群？

いや、あれは

天逝した人々の魂が

いましがた乗込んで、

暮れかかる沖に向つて急いでいる

黒い船の群だ。

夕日の残光の中に、

沖合いはるかネオンの街が出来あがつて

彼等に歓楽を与えようとでもいうのだろうか。

船群は沖へ沖へと急いでいる。

分を迎へる。共に省線にのり、自分は林君に、田中光子は大塚氏を文理大に訪ふ。別る。昨日の弥生町の家にゆき娘さんを見る。夕食を林君と一緒にし、八時アパートに帰る。三人で十二時すぎまでウキスキーのんで話す。林君はアパートに泊る。

二十五日林、壽恵男と共に下宿を出る。忘れ物をとりに壽恵男代々木八幡でひきかへす。東京駅で林君と別れ、壽恵男を待てど中々こない。発車前十五分やつと壽恵男来る。汽車は空席多し。連日の疲労に困憊し、ずつと眠りつつける。

この六日間にして、伊東が出会つた拙論に登場する交友との回数を列記すれば次のやうになる。
林富士馬 五。大塚高信 三。田中光子 三
三島由紀夫 二。栗山理一 二。清水文雄 二
池田勉 二。酒井小太郎 一。酒井百合子 一である。

特に興味深いのは二十四日の項である。伊東はアパートに訪れてきた酒井百合子さんと一緒に新宿に出、彼女を品川線のプラットフォームに送り、その足で東出口で彼を待つてゐる田中光子さんと出会つたのである。伊東はホクロのないことをけげんに思ふ女性と、なんの不思議をも感じない女性とに出会つた

のである。同じ新宿駅構内二、三百米の距離に伊東は十五年間の時間を圧縮して踏んだであらう。ホクロ喪失を介在して圧縮された時間の中に佇むわがひととノワイユ夫人、否ノワイユ嬢……。伊東が胸中で構成してゐた未完の小説の一つのプロットとなつたことは間違ひあるまい。

貸室

その2 XX 萩原葉子

二人のうち白色の女のような仕草をする方の男が入ることに決まったが、言葉がおかしいのは閉口した。

「とんでもございません」「いやでございませわ」と言いながら上体と腰の辺りを、しなしなとくねらせる。そのうち「ホホホ」と唇に手を当てて、しなを作つて笑う。

なんだかこちらが男になつたような、へんな具合である。もともと私は言葉が単純なので「ございませ」調は苦手である。

よくゲーボーイとかシスターボーイなどというのを聞か、こようゆう男を言うのだからか。それにしてもあまり顔も良くない。せめて美男でアラン・ドロンほどでなくと

も、アンソニーバーキンスくらいのイカス男ならば興味も沸くだろうが、田舎くさいので話すのも重々くるしい。

だが鬼林の荒っぽいのに懲りた後では、やさしい分には少しくらいおかしくても文句ないと思つた。

数日後、夜更けて戸口を敲くので開けてみると、小峰少年が立っていた。久しく会っていなかったので小峰に悪いような気のひける思いで、戸感っていると

「すみませんが、鬼林さんと中谷さんがけんかしているので来てください」というのだ。中谷」というのは、れいの男の名である。もうけんかなど始めたのだろうか。鬼林がわるいことは分つていふと思つた。

それにしてもおおや、というものは、他人のけんかになんか立ち合つたり責任を負つたりしなくては、ならないのだろうか。

今夜はまだこれから書き上げなくてはならないものがあつて、一分でも惜しいのだ。放つておけるものなら放つておきたい。

「すみません。鬼林さんがおくさんを呼んで来いっていうのです」

仕方なく小峰と一緒に貸室に行くとな案の定、鬼林が赤い顔をどす黒いままですこませて大

一匹の鮒

福地邦樹

私の乗る駅の構内に、一坪ほどの金魚池があつて、そこで電車を待つのが楽しみだ。去年の秋の頃まで、金魚が十匹ほどに、小鮒が二十四ぐらい居たのだが、此の冬の寒さは六十年ぶりという厳しさで、毎朝二、三匹白い腹を浮かせてしまふのだった。やがてその溜池に氷が張る朝が多くなり、間もなく、すっかり魚の影が見えなくなつてしまつた。そして私は、その池のことは忘れられるもなしに、忘れてしまつていた。

春の彼岸も近づいた暖かなある日、水面にたつた一匹だけ、五種ほどの鮒を見

つけた。陽のあたる水面に、ほんやり浮かんでいる。よくみると、寒さのためか尾ひれはほとんど腐つて失くなり、油いため魚料理みたいな哀れな恰好で、静かに日向ほっこをしてくるのだった。しばらくの間、眺めていたけど一向に動かないので、生きて居るのか少しあやしいような氣になつて、人さし指でつづいてみた。するとあわてて浅い水の底にもぐつて行つた。尾ひれがないので、丁度不具の子供がやるように、全身をくねらせながら。

私は電車に乗つてからも、安心したような、痛ましいような、そして、何か親しみのようなものを覚えながら、たつた一匹生き残つた、一坪の池のことを考えていた。

声を挙げて居る。猫背な背中にはいかにも貧弱である。

「後から人つて来た青二才のくせに何をぬかしやがる！」

「いいえ、そんなことを申しているんじゃないぞ」

「酒を飲もうと飲むめえとおめえらの青二

才に何が分るかちゅうんだ！」
「いいえ、ほんの少しだけ静かになさつて下さいって申しているんでございます」
中谷均はこんな言い争いの時にも、丁寧な言葉使いで仕事もしなやかである。ちょっと鬼林に注意したら逆にしつこくやられて居るのだから。鬼林は私に氣がつくと

「だいたいがだね、おおやが悪いよ。こんな監督不行届のおおやなんかいるもんか！」
腹は立つても鬼林に言われるままなのが、今更情けない。

「おおやが見張つていねえから、こうゆうことになるんだ！おおやのミステイクちうもんだ」

モノローグ

美堂正義

いしみちのうへに雨が降り
灯が流れてゐるところだけが
ぼくの傷口のやうに開いて
深い闇のそこだけが光つてゐる

かつておなじ思ひに打たれたことがある

北国の冬の荒れた海を

岬の断崖から見下してゐた

鳥も飛ばない黒い海面を

風だけが激しく吹きすさび

雲の裂け目から

太陽の光が束となつて突き刺つてゐる

水泡に似て浮ぶかすかな記憶が
棘となるひとときの存在
関連のないことが
不意に人間のうちに波紋を起しては消え
る
不確かで曖昧な過去が
いつまで痕跡を残すのだろうか

灯の流れるいしみちを
ひとは思ひ思ひの姿で過ぎ
屋根の下ではそれぞれの匂ひを持ち
違つた生活に身を深まして
伺ひ知られない断面をもつ
そんな人間を不信したことがあるが
どこかで肯定したいところが
ぼくの視線のとどこかない遠くで
静かで激しく燃焼しようとする

人にぐうの音も出ないようにはしてもらふより方法はない。とても小峰ではだめである。
小峰はさつきから黙つて隅に立っているだけである。何とか少し私の味方になってくれても良さそうなのと思うが、ずつと会うこともなく過ぎていたせいも、よそよそしい。
薄いバジマに半コートを羽織つて居るが、瘦せて寒そうだ。顔いろも良くない。
私は小峰に風邪をひくといけないから寝むようにというところ「じゃ」と小さくいつてすぐ部屋に入つて行つた。それと同時に中谷均も「じゃ、わたくしも失礼させていただきます」と、さつきと部屋に入つてしまひ、私だけ残された。

鬼林と二人になると、また初めからおおやの監督不行届だとやり出したが、疲れた皮膚のたるんだ顔や肩の落ちたジャンパーの垢を見ると、くやしきよりも哀れっぽくなる。来た。こんな男になんといわれても怖がることはないと思つた。

鬼林の氣持を荒げないように、今夜はもう遅いから話は明日聞きますと言つて、急いで帰りに鍵をかけて、戸閉りをした。

数日経つた夜、また小峰がやつて来て何か言いたそうにしている。鬼林にきつと言われ

たのに違いない。良い機会だから事情を聞きながら暫くぶりで小峰の生活状況も聞いてみようと思った。

小峰の用件は鬼林のことではなく、明朝沖繩へ帰ってくるということだった。態度が妙に固く最初に会った時のような意固地さである。

菓子や紅茶をいくら勧めても食べようとならないどころか

「いま頃食べると胃が悪くなるからいりません」といふ。胃が悪いなら、カステラなら良いだろうと思つて、勧めると

「けっこうなんです。さっき夕食済ませたんですから」という。では紅茶だけでもという「寝られなくなるから」と取りつくし、まもない。まるで毒入りの菓子や紅茶を勧めようというやいなや気が持たせられる。

もう以前のようなお母さんと思つて良いですか」などという親しみはまったく無い。

小峰はテーブルの菓子をじっと見つめたまま、会社は将来性が無いように思うし、給料をもらつても貯金ができないと、始めて仕事に熱のないことを言った。

この間までは一生懸命に働らいているから安心してくだささいと、喜んでいたので、急にこんなことになるとは思わなかった。

知人にやつと頼んで技術の身につく仕事を与えてもらったのに、まだ一年や二年で将来性を言うのは早くはないだろうか。

それにしてもやめたいのを、私に遠慮してやめられずそのためによそよそしいのかも知れないと思ひ、そのことを言うとうとうでもないらしい。他に何か嫌なことがあるのか、永續きのできないのは性格的のものだろうかとあれこれ考えたり、気を採んだりするばかりだ。

給料を聞くともうかなり昇給していて、大卒の初任給より良い。貯金ができないというが誰だつて今時貯金のできる人などあるだろうか。現に私の家にしても貯金どころか、赤字で追われているようなゆとりのない暮しである。自分だけなら良いが扶養家族も抱えているので、目の前がまっ暗になることしばしばである。

小峰は貯金ができないのは、まるで私のせいであるかのような勢で働いても残らないと菓子をじっと見つめている。

一度閉じてしまうと、て、こでも動かない性格をいくら最良めに見ても、可愛さはないと思つた。やはりどこかひねくれてるのだから、それとも私を見る心のどこかに鬼林のようなおやおや」という意識があるのだろうか

か。

ともかく沖繩へ帰つたらお母さんと相談して、今後のことをよく考えてくるように言い私にできることなら、力になるから遠慮なく相談してくれるように言つた。

手をつけないカステラに菓子がある丈足して半紙に包み、小峰に渡すと

「けっこうです」とまた言われた。菓子は私の掌の中で包みがほどけ、屈辱されたような恥しさを覚えた。

「捨てても良いよ。捨てても良いから持つていってちょうだい」

「いや、けっこうです」

「ごみ箱に捨てても良いから、持つて行って……」

やけ半分のけんかをしてるような、やりとりの末にやつと小峰の掌に菓子を納めることができたのである。

小峰の帰つた後自分ながら、なんとという大人げなかつたかと恥しかった。なぜもつと年にふさわしい態度で大人っぽく小峰と応接することが、できないのだろうか。我ながら不甲斐ない。だから鬼林にはかにされるのだと思つた。

小峰はその後一週間で帰つて来る筈なのに二週間経つても、まだ帰つて来た様子はない

温室で

堀之内 歴

おおばなくんし蘭 でんど ラビニウム
サイネリヤ シンジビニウム
カトリヤに ベにうちわ

仮名書きの 小さな標識を
読んで進む 窄い通路

どの花が どれだったか
みな似ている 洋蘭のるい
大まかで脾弱な 妖しい原色

真冬 ここに来たとき かくて
肉厚い 恐ろしげな羊歯のいがあつた
三月いま 肌寒い午後

再び迷い込んだら これは！
羊歯の這う上の棚に ずらりと並んで
一せいに花をつけている鉢植えたち
熱っ気と湿度に むせかえる匂い
私の外は 誰もいないところ

その豊かなものに あたり見回わし
うろ／＼と顔よせて 嗅いでみる

一九六三・三・二七

つた。
友達から電話はかかって来るし、速達郵便は預っているので困つていても、沖繩ではどうすることもできない。
ふと何だかへんな予感が出て、小峰の部屋に行つて見ることにした。ドアを敲くと手応えなく戸が開いて冷めた風がひんやりと、頬に伝わって来た。

生老病死 (十一)

青木 敬磨

拾遺 承前

赤穂町

知らぬ町をあるいてゆけば家のあはさ垣ねに
小さき月あらはれし
雪ふりてしまひの早きこの町の通りの上に小
さき月あり

しまひ早き町の上の月片面はなし西ふきおち
ていよいよつめたき

家のきれめ町裏の山ひくくして雪すこしとび
月よの深露

西風はいまだたわやすくしておとろへずおそ
き月夜に山の松風

さむき夜はやくねなむとおもへども岬の
かの潮鳴りやます

坂道に埃まひはしりさむき朝を小翠かいだき
法界屋ゆく

西風つづきかわききりたる朝道にたちまちう
たう法界屋あはれ
年せまり旅人多きこの日ごろ埃たつ道にたち
て見送る

某 日

よき人はまことに少し齒染の葉の裏と表とち
がうぞ多き

無慚無愧無智無識とこそかなしみし祖師のあ
と行く人は誰と誰
山さかる鄙の磯べに住むわれをいかなるさま
か人のおそるる

小窓には月かげ見えす遠き崎によせひく浪音
まさやかにして

この坂のむかひの山の山くぼに松たちならび
うすれし入日

この坂の切通しにきて吹雪の風かたまり通る
ひつきりなしに
夕ぐれの道しろくかわき西風つよし歩いてか
へるわがほほべたに

夜のうちに風おちひそかにおきし霜か朝靄な
かの村屋根しろし

山せまる入江の小村棟そろはず東の坂にたち
し朝日子

朝窓の机の上にまなことちまなぶたをうつ日
さしのうごき

朝水のつめたきほどに息づけはわが息みゆる
いきつくことに

ヒサに
朝夢に汝のことをみたりしがけき霜しろしつ
つしみてあれよ

寺にうつる
今宵こそこの窓にたつ終りぞと言へば眼の前
に大き帆の過ぐ

昼も夜も馴れしこの窓ぞしらじらと宵雪はれ
ゆく海のしづけき

明日の朝わかれて出づるこの窓よ夕飯あとの
しばしのひまを

手にさすり涙ぞにじむ幾年をわが馴れし
小窓の手摺

何もかも今宵一夜にみておかむとこの窓によ
ればむなく泣かゆ

ようやくに晴れゆく室の夕あかり浪の音もせ
ず立ちよるこの窓

山の端にかがよふ月よ窓によりたたつめばわ
が顔の上の月よ

寺 院

久方の空ゆく雲のきれめよりこぼるるものぞ
この日の光

わが子いかに木馬にのればうれしいか広庭の
上にこぼるる光

わが心いたくむなしきかなしみあり夜ふる雨
をききつつねむる

たまさかにこの小机にむかひはすれ沖島のご
とし人みなかすめり

閑 日

つはべ楓すべて若葉のつやつやし雨ふりそそ
ぐ庭にむかへり

この日日なかわれをさまたぐる人もなし大き
ちいさき雨垂の音

縁側にたたずみおもうことみな美し若葉みて
あれば足らへることし

わがおもうこと一つも成らずと口に云へど仏
たちみなほほ多みたまう

ほのかにも臉にみゆるほほ多みはきよらかな
れや仏の口もと

朝の雨は葉末にたまり光りおちわが手のひら
をこぼれてゆきし

広庭の桜若葉にこもる風のさやきや嗚れば月
も出でくる

しづかなる時計の音か広庭よりつづく杉山の
上に月あり

いづくよりか蛙の声す月ちかしわがたちなが
むる杉原松山

庭草に水うてば卑くさぶしきよ日のおち入り
し山に向へり

萩の根に萩の若芽の生ひそだちその下石にわ
れはつくばひ

海の音とほくひそけし縁側に雨蛙きてひとり
あそべり

某家法事

わが前にわれの見しらぬ老婆が来て古きこと
を云う恥ぢらふわれに

乳 母

眼の前にむなちをみれば一つ一つ忘れしこと
の思ひ出でくる

幼くてわれらさぶしき家なりき兄も早く逝き
父もあと追へり

わが兄はまこと死ぬべき命なりしや否や今更
にきけばよくやしや

ようやくに歩きはじめし我が手をひきわが兄
はかよわきからだをもちし

わが母はそのころも尚かはりなし心なしまぬ
さがに生れし

上 筒 井

夕ぐれの廃園の径ほのしろき槐の花の咲きつ
ぐこの径

うつむきてわが行く径の樹のかをりともしび
つかぬ廃園の径

土を眺めて

ああ、土よ、大地よ、わたしの願ひを聞いて
くれよ。

慈悲深く、やさしく、わたしをくるんでくれ
まいか。

産土のお前から割かれて生きるわが身は
亡骸となつて素焼の壺に納まるまでお前の許
に戻れないのか。

ヘリック詩抄 (三二八)

森 亮

晩 国

誕生このかた、此処で味はった不快ほど
はなはだしいものをわたしは知らない。
わたしは今までも、今もげっそりしてゐる、
この退屈なデヴォン州では。

でも正直言ふとかうなのだ、
姿高く心すなほで活字になる詩が
これほどに作れたのはほかでもない
わたしの好かないデヴォン州に来てからだ。

★

某 に

わが身には役にもたため明地をもちこのせま
き村にゐるつもりか

働けば働くほどにつまり行くわが村人ら舟を
つなげり

海山のあわさの小村その中にも貧と富とわか
れ山と浜とわかれ

入海に向きて傾く村の家よ貧しければこそ山
の上に立つ

内の海島山けぶり日はおちぬ間遠にひびく浪
の音のみ

いづこにか猫の子のなく朝曇りいまだこの日
の見積たす

むくつきき露の広葉よこの朝の曇りの下にう
ごくとせす

大庭は今日もくもれり身の内の力あまれば何
をすればよき

富岡鉄斎

小高根 太郎 著

【本文】

その生涯と時代
石門心学の影響
文人画の系譜
偉大なる鉄斎の芸術

【図版】

青緑山水図他三十七図

定価 六〇〇円

東京都文京区音羽町三一一九

講談社

たわやかに虞美人草は咲きいでし今朝土の上

にならぶ散舟

紅の花柄かほそしゆうへまでこれが苔もとた

れがおもひし

糸のごときかなしき茎に風よればその花びら

がこぼれやせんか

南天の小花ちりしく鉢の中に高空よぎる雲も

映れり

白花は南天の下あかつきの空のすずしさにこ

はれおちしや

縁先の飛石ぎわのくちなしの白花さけりこの
朝起に

静かなる朝の曇りよ蓮の葉の広葉の上に乗ら
ばやおも

小池ながら蓮の広葉のつゆけしや朝の曇りに
また来てたつむ

蓮の葉は池一杯に生ひかぶさりおもひおもひ
に傾きあへり

子どもらは朝早くから立ちさわぎわれは静け
き蓮池にくる

蓮の葉の大きひろがりよわが心とほく見知ら
ぬ父母をおも

広庭に落ちくる月は水のごとし一人立ちつく
すわれは何の子

鬼の子われにも言う人もなしやわが登音に
なきやむ虫あり

月清しこの庭に夕顔かをりひたすらに我がた
たつみ通す

枝にさわり木の葉の一つ落ちくればしづけき
夜ぞ山は月代

四方の山になき澄む虫か月きよき庭の上にし
てふとして聞えず

【完】

果樹園

第88号

詩人、その生涯と運命 小高根 二郎
催 眠 吉本 青司
庭 の 木 浅田 二三男
ヘリック詩抄 森 亮

浄罪詩篇ノオト 竹越三男編
わ が 存 在 浅野 晃
若 葉 の 頃 福地 邦樹
貸 室 萩原 葉子
高 校 生 の 詩 福地 邦樹
毛 虫 堀之内 歴
編 輯 後 記

詩人、その生涯と運命

書籍と作品から見た伊東静雄（七十六）

小高根 二郎

昭和十九年七月八日の伊東日記は、疑念と不安を払ひ、自らに謹直と散漫とを強ひるやうに、たまたま街頭で迎へた遺骨の凱旋に關して、次の逸話を伝へてゐる。

「今日大手前に行かうかと塚東駅に來たら遺骨の凱旋に出会ふ。皆直立し頭を垂れて迎へてゐると、群集中の一人の四十位の男一編のワイシャツに半パンツ。地下足袋ばき、戦闘帽をかぶつてゐる。服装は清潔だが、顔色実に黒く、一見して屋外労働に従事してゐる男

編輯後記

三月一七日、小学館の「現代国語」編輯委員をしてられる中石孝氏から、高等学校教科書に収録されてゐる伊東作品を教へていただいた。「おがひと三よふる哀歌」三省堂三年「自然に充分自然に」尚学図書二年「夢からさめて」大原出版二年等がある由である。それに大学入試問題にもよくよく現れるとのことである。私の知つてゐるかぎりでは早大と奈良女子大で出たことがある。それぞれ川副國基、横田俊一氏等のやうな伊東信者がをられるからである。それからあらぬか近頃毎月バックナンバーを求められる人が増えてきた。想像するに教学に關係ある方々のやうである。創刊号と第七五号を除いて若干在庫があるので当分需めに応じられるはずである。三月一十九日、京大の大山定二教授より面白い便りをいただいた。氏はこの数年ゲーテの「西東詩集」に没入されてゐる由であるが、晩年のゲーテにははやギリシャもヘブライもベルシヤもアラビヤもなく、ただポエジイの原型を確信してゐたといふのである。この原理は共通普遍なものであり、永遠なものであり、その他は無限に繰返されるメタモルフォーゼにすぎず、地方色、時代色を洗ひ落して、いよいよ素地の強さを発揮するといふ、この不拔の確信だつたといふのである。拙誌の信念も万幸も、この教示の確信に添うて歩みつづけた。

果樹園 第八十七号（毎月一回一日発行）

昭和三十八年五月一日発行

池田市野町一六八

編輯者 小高根 二郎

大阪市東住吉区桑津町五の八

印刷所 元市印刷株式会社

池田市野町一六八

発行所 果樹園社

定価 三十円 送料 十円

らしい。直立不動で、最敬礼し、やがて、遺骨に向つて朗々と何か歌ひ出した。詩吟に似たうたひ方で、又和歌の朗詠のやうでもある二度ほどくりかへしうたふ間に、遺骨は駅の構外に出て行つた。
富士、清き流れ、もののみ（ますらを）、桜の散るごとく、神武天皇様、靖国の社といつたやうな語句からなるうたで、二度くりかへす又句が少しづつ違ふところをみると、即興詩らしかった。人々は半ば感動し、半ばうす笑ひ、不思議さうにみつめていた。その声は堂々とさびがあり立派であつた。自分は眼底のあたたくくなるのを感じた。いくらか常軌を逸した人らしい眼光もないではなかつたが、狂とも愚とも人は見るこの男の胸に素

直に宿り、やがて率直単純に表現せられた皇國の詩情とまごころにうたれた。自分の近來の不安焦燥と、詩人としては緊張のゆるんだ生活を省みることが痛切であつた。まじまじと人の見つめる視線の中で語ひをへると、はるか彼方の遺骨の行先に最敬礼し、やがてプラットホームの人の少ない辺に行つて直立しつづけてゐた。女の子らがひそひそ話し笑ひ合つてゐた。じつと一とところに電車の來るのを待つてゐた。電車は中々來なかつた約二十分ばかり。やがて電車が來て停ると乗客が殺到したが、その男は一番おしまひにひつそり乗つて來て、自分の隣に立つて、プラットホームでと同じやうにいくらか堅い表情で、じつと窓外の方に顔をむけて立つてゐた。どの奥をうごかして、ひとり心の中で何かうたひつづけてゐるやうに見えた。そして時々ひざがしらがビクビクとうごいてゐた。周囲の二、三人はさつきの男だと知つてゐるやうであつたが、無関心な顔をしてゐた。住吉東辺に來ると人々が入れかはり、その男は全く、只の乗客の一人になつて人中に立つてゐた。地下足袋の下にはいてゐた黒の薄絹の靴下。演台に立つた小学生の唱歌する時のやうな堅い、謹直な態度。その声の美しさに似ず、それに自ら酔つたやうなひそかにそれを語つて

るやうなところの皆無なことが氣持よかつた。又人を庄するやうなところもなかつた。謹直と敬虔。英霊と遺族はどんなにうれしかつたらう。」

伊東は寄留地で簡闊点呼をうける手続をするため大手前の聯隊区司令部に行く途中での即興詩人に出会つたのである。戦闘帽、編のワイシャツ、半パンツ、地下足袋といひかにも肉休労働者のいでたちであるが、絹靴下を穿いてゐるといふことを確認して、伊東はことさらに奥ゆかしさの発見に努めてゐるやうに見受けられる。伊東は謹直・敬虔・素朴な草もりの愛国詩人を発見して異常に感銘したのである。感銘したときの癖で、伊東はいくぶん泪ぐみながら、「自分の近來の不安焦燥と、詩人としては緊張のゆるんだ生活をいたく反省させられたのである。」

この日の十日後——七月十八日にマリアナ敗戦の責を引いて東条内閣は総辞職し、代つて小磯大将が首相の座につくと閣内及び参謀本部の刷新を図つた。丁度時を同じくして東欧敗戦の責を衝いて枢軸独逸ではヒットラー暗殺未遂事件が突発した。

翌二十一日には米歩兵・海兵二ヶ師団はグアム島に上陸作戦を敢行した。三日後の二十四日にはテニヤン島にも米海兵二ヶ師団が上

陸作戦を展開し、共に装備の脆弱な日本守備隊を圧倒した。この激戦のさなかの二十八日伊東は次の書簡を田中さんに送つてゐる。

「原稿確にとどきました。その中熟読して感想申述べます。この頃昼は防空貯水池掘り（もう三ヶ月以上連続）夜は在郷軍人の訓練を十時まで実にくたくたになつてゐます。御元氣を祈ります。私も頑張ります。作業場附近の郵便局で立ちながら。」

伊東日記によると二十二日から二十八日まで難波元町で貯水池掘りの勤勞奉仕をやつてをり、二十日から二十六日まで夕方七時から在郷軍人の訓練をうけている。脆弱な伊東は疲労困憊の極にあつたらう。夜は夜で生徒なぞが来訪してゐる。やむなく勤勞奉仕先の難波郵便局でこの返事をかき投函したのであらう。

伊東は八月に入ると西天下茶屋の昭和起重機会社に勤勞奉仕で出勤してゐる。三日の日記に「まき子のために小刀をつくる」とあり四日には、「オネーギンを工場の応接間でよむ。退屈を極める。又小刀をつくる」とあるから、伊東の任務は生徒の監督だけだつたやうである。私物の小刀なぞを作つていささか

てやるせなくなることもありませう。しかし大概はすぐぐうぐう寝込んでしまふ始末です。どうぞ私にはもうあまり期待を持たずに下さいませいか。これが正直なお願です。あなた様の方が今日では私よりえらい詩人と存じます。

（これは皮肉や何かでは決してございませぬ）

それでも前の御詩稿カバンに入れて、毎日工場に持つてゆき時時一つ二つ読んで自分の頭をたいたいてぶつてゐる頭に感想を催促したりします。そんな時皮肉にも、「文芸春秋」で佐藤春夫先生が僕らの詩に期待をかける意味の文章書いて下さるのを読んで悲しくなりました。しかし氣候が、これからは私の身心にいくらかおちつきを与へませうし——その証拠にこんな葉書でも書く氣になつてゐますし——それがいくらかでも私の希望になつてゐます。どうぞお達者にこの激しい時代を生き抜かれることを祈ります。

（七月七日、堺市北三国ヶ丘町より東京都明石町、田中光子宛はがき）

この書簡は田中さんの批評の催促に対する返事ではがき二葉に書かれてゐる。一枚に師匠辞退の言葉をつづり、それではあまりに酷

頽廃してゐる。伊東は四日ばかりでプーシキンの「オネーギン」を工場で読了してゐるが主人公のやうな、時局の局外者という感銘とタチャーナとの当て外れ、季節外れの恋に、いささか身につまされるくすぐつたさを感じたかもしれない。

九日の日記は寝苦しさで夫婦して見た夢が記述してあつて面白い。「花子も自分も充分眠れなかつた。そしていろいろな面白い夢を見た。わが軍大快勝して、巷に国旗や海軍旗があふれそれがアツと思ふ間に一斉に空高く林立した。驚いて周囲の人々に尋ねるとわが国が、決定的な勝利を占めたといふのであつた。大イルミネーションが夜空に壮麗に映えるそんな夢を見た。声を放つて泣いて歓喜してゐたやうであつた。花子は、ねむりながら相当大きな声で歌をうたつてゐた。ゆりおこしてきくと、日比谷の大音楽堂で独唱してゐる夢であつたさうだ。」

この夢は逆夢だつた。翌十日にグアム島では小畑軍司令官以下全員玉砕したからである。九月に入ると米軍のフイリッピン作戦が始つた。三日間の砲撃の末、十五日にニミッツ艦隊の海兵師団はペリリュー島、十七日には米歩兵師団はアンガウル島の陸上作戦に成功した。

な幕切れだと反省して、二枚目にまだ勤勞奉仕の工場で校閲の仕事をしてゐる由を彼女の氣休めのために伝へてゐる。伊東は「文芸春秋」での佐藤春夫氏の期待の言葉に悲しんでゐるが、すでに伊東は日本がやがて当面する敗北の運命と、その際に於ける日本浪曼派詩人が受ける処遇を感知してゐるのであらうその運命を知らぬげな佐藤氏の言葉に、恐らく伊東は悲しんだものと想像される。

事実、翌十一月の二十四日の正午から約二時間にわたりB29爆撃機七十機による焼夷弾の洗礼を帝都はうけた。七月に陥落したサイパン島を基地にしたハンセル麾下の第二十一爆撃隊である。数梯団となつた敵機は一万米ほどの高度から帝都に侵入したが、僅か五機しか撃墜しえなかつたのである。

翌二十年二月二十五日は午前午後二回にわたつて関東及び帝都は空襲にさらされた。即ち、午前七時三十分から十一時までは敵機動部隊から発進した艦上機約六百機、午後二時二十分から三時四十分まではサイパン基地からのB29約百三十機の奔放な跳梁をかうむつた。宮内省主馬寮附近及び大宮御所門前衛所附近にも焼夷弾が落下、帝都各所から火災が発生した。被災は帝都だけでなく、群馬、長野、千葉、埼玉、茨城、静岡、山梨の関東

その戦局の真相は新聞に報導されなかつたらうが、伊東はもはや日記を書き続ける氣力を失つたのであらう、十九日の日記をしるしたまま翌昭和二十年八月に終戦を迎へるまで擱筆されている。その最後の日記は夏樹君の成育ぶりを伝へてゐる。「このごろの芸、萬歳おいでおいで、パババ、一、二、三、四のドッコイショ等、機嫌よく絶えず笑ひかけかはいいいこと限りなし」と、ある。「春のいそぎ」期の作品に「わが家はいいよ小さし」といふのがあつた。それは耳原三郎の片ほとりの家を、あたかもヘリコプターから見下したやうなつましい抒情であつたが、そのささやかな家で這ひ這ひをしさうにまで成育した夏樹君にかける夢が、伊東の唯一の夢になつたやうである。

翌十月初旬に田中さんに送つた次の書簡はその模様を如実に伝へてゐる。

「お手紙すみません。身体疲れてゐてあなた様に対するお約束も充分果せずすみません。このごろは月が美しいので寝る前など五分間か十分間窓のところで月をみてもう秋になつてゐるのだな、去年ごろまではこんな夜はよく詩を書いたりしたなとひとごとと見たいに思ひ出したりしてゐます。そし

一四に及び、神戸にも飛火した。しかし人心安定のため防衛司令部では「被害僅少なり」としか報導させなかつたのである。

京橋明石町に住む田中光子さんも焼けたはずである。酒井家は大森にあつた。伊東は空襲から半月ばかりたつて酒井百合子さんに次の見舞状を出してゐる。

「東京に大空襲のある毎に、どうしておいでかいつも思つてをりました。大へんな事情になつたやうです、充分気をつけて、命を全うして下さい。今のところ大阪は大したことはありませんが、まき子はこの四月にいよいよ疎開せねばならぬやうですの、いつそ皆で田舎に行かうと堺のずつと田舎の村に家をさがしてゐるところです。花子の姉(二十六字省略)、結局私の家に寄居することになるらしく、おやおやおと思つてゐる内に、又負担が一つふえることになりました。夏荷は、かはいくてなりません。やつと物につかまつて立ち上り、ハイタイちゃんといふ片言を一ついひます。寿恵男の嫁さんは二、三あるやうですが、こんな時勢ですので、中々事がはこびません妹は近來大へんよろしく、私もやつと安心してゐます。これは時勢のいい影響で、甘えがなくなつたのでせう。私は毎日工場通

ひ。先年河出書房から出た「現代詩集」三巻の内、私の作のつてゐる第二巻だけが戦時何とか版になつて大量に印刷されるさうです。又、「八雲」第四輯が詩歌版になつて、私も久しぶりに詩のせました。これが私の文学に関する近來の唯一のニュースです。興地さんはよく私も知つてゐる方です。お酒が好きな人です。家島の殿様の家柄ださうです。よい人のやうな、ずうずうしい人のやうな変つた人らしいです。陸士の先生も、私も名前だけは知つてゐます。

もと左翼で、色々問題おこした人です。気の弱いやうで強いやうで、この人も変つた人だといふ噂でした。

「密蜂」、淡淡々としてゐるといふ御批評一寸意外でした。私はしつこいしつこい文章だといふ印象をうけてをりました。「結婚とは仕合せなものではない」との歎きいはれる方があるとのこと、何でもそのままで仕合せといふものはないのでせう。何が仕合せかといふことは、人が一生かかつて次第にわかつてゆくのでせう。又人の一生は仕合せせばかりを求めるものでもないものでありませう。このごろやうやく、一年間詩言つてゐたのが、また何か書きたといふ気分が濃厚におこりつつあります

よるこんでおります。ゆり子さんが、このあわただしい生活の中でお手紙下さる余裕何よりうれしく、御元氣祈らずにはをられません。いろいろ御不自由もあることでせう。私共はどうにか人の情でその日の食事にはこまらず暮してゆけてゐます。今日はひさしぶりに学校に出て、お手紙見、ひとりのこつてこれを書きました。

三月十一日

静雄

ゆり子様

(三月二日、住吉中学校より東京市世田谷区北沢二丁目四七番五号住、酒井ゆり子宛封書)

昨年六月伊東は上京したとき大森に酒井家を訪れてゐた。この書簡は下北沢のアパートに出されてゐる。たびかさなる空襲で、酒井家は疎開し、その疎開先を住吉中学宛に知らせてきたのである。学校はいにく勤勞奉仕で休校状態であつた。したがつて登校することも稀れで、空襲後半月にもなつてからの見舞ひとなつたのである。

伊東は百合子さんに書簡を書くときは、必ずといつていいほど文学を語ることになるから不思議である。まるで文学上の報告をするのが楽しい義務であるかのやうである。しかもいさか得意げであることも特徴である。「わがひとに与ふる哀歌」「夏花」「春のいそぎ」三冊から二十二篇を選んで「反響」と

題して作品が収録されている「現代詩集」第二巻(昭和五年一月二〇日)だけが、戦時普及版となつて大量に再刊されることも得意げに伝へてゐる。又、「八雲」第四輯の詩歌特輯

催眠

吉本青司

ほとくの転任した学校は
田んぼの中になたれた
鉄筋コンクリートの三階だ
グングの絨毯にそびえる
白い童話のお城みたいだ
本館は バルコニーを空色にぬり
別館は 太陽色にぬつてある
いままでボロイ校舎にいたので
はじめ ちょっとめんくらつた
ハキョウトウ先生Vと呼ばれた時も
人ごとみたいに キョトンとしていた

ほくは この童話のお城のなかで
ジムをとる
ほとんど一日机にむかつて

にどの作品であるか判らぬが久しぶりに作品を掲載したことを伝へてゐる。

この伊東の得意げな態度は田中光子さんに對するときの謙虚さにくらべると大変な相違
乾パンみたいなジムに没頭する
まったく魔法の催眠だ

いろんな報告書がある
行事予定表
学級編成表
ガラス破損調べ
学校基本調査

その間には PTA予算の検討だ
入金伝票だ
会計簿記だ
消耗品の買入れた
納品書の整理
小切手……

ハキョウトウは 狂頭だV
——白い童話の
お城のなかのものがたり

がある。昨年十月の光子さん宛書簡には、「私にはもうあまり期待を持たずに下さいませまいか」という、謙虚を通り越した自棄的な表現さへ使はれてゐた。光子さんの場合は弟子であるから、その間に自ら拘束的、義務的なよそゆきが伊東の心を硬直させるのかもしれない。百合子さんの場合は、身内といつていいほど長年の交際裡に身内だけが許容し合ふあのあけすけな一種の自慢に似た心境がのつと蠢めくのかも知れない。

伊東は中勘助氏の「蜜蜂」の百合子説に異論を唱へてゐる。百合子さんは淡淡とした作品であるとするに對し、伊東はしつこいしつこい作品と見てゐる。まつたく観照が反對である。伊東が「蜜蜂」を読んだ由昭和十八年九月の日記に見えてゐた。「一字一字指で押へてよみたい心持」とあつた。それに「静粛・沈静の気分を与へてくれる」ともあつた。恐らく昨年十九年六月の上京で百合子さんに出会つた際、必読の書として伊東はすゝめてゐたのであらう。百合子さんは約によつて読み感想をした、めたものと、想像される。しかし男気をいまだに知らぬあつさりすぎた百合子さんには、兄嫁に寄せる勘助のしつこいしつこい敬慕の情は理解できなかつたのである。淡淡とした変化のない日常茶飯と映つた

のである。

それにしても伊東の文面の裏に感じられるのは、百合子さんが思ひ惑つてゐるらしい縁談の存在である。「蜜蜂」の兄夫婦の生涯の不幸から関連し、結婚とは仕合はせなものではない……という第三者の敷きに、まだ耳を傾ける傾向の百合子さんに、伊東は人生の目的は仕合はせばかり求めるものではあるまいと戒めてゐる。仕合はせや不幸が入り交ふところにこそ人生があるのだと暗示をしてゐる。さういへば二十年前の安代・百合子さん宛書簡に、誰の詩であるか判らないが、

あゝ島が見える

そこからひばりが立つてゐる

雲雀が立つのは畠のある証拠だ

はたけのある所には人が住む

人の住む所には恋があるんだ

という詩句を紹介し、その結句として

そこには又必ず悲劇がある

という伊東製の詩句を附け加へることを忘れなかつた。

あの大学一期生の少年の日、伊東は交渉をもつたばかりの少女——安代・百合子さんのつけから詩人が象徴する人生の幸福の裏合せに、彼女等がまだ目覚めてはゐない悲劇を提起してはばからなかつた。その一人である

庭の木

浅田 二三男

植木屋が

弟子を二人も連れてやってきて

ご立派な庭木ですなア

そして

ふたことめには

ダンナダンナという

木の上からでも

ダンナという

正助さんは苦笑する

三反百姓であくせくし

瓦はずりおち

トイはくさり

植木屋どころのさわぎでない

先祖がこんなものを

こしらえておくからだと

いちおうは肚をたててみる
しかし

年古りた少女の百合子さんに、伊東は幸福と不幸という極端に背離した反対観念を提起せず、その交錯にこそ人生があるという新提案を出してゐる。二十年……伊東は酸いも甘いも噛みわけたものである。

この百合子さん宛書簡の三日後の十四日には学校授業一ヶ年停止の非常措置がとられたほど緊迫した時局だった。そのただ中の書簡としてはどこか春風が吹き通つてゐるやうなごやかさがある。ただ命をまつたうするところが関心事であるやうな時勢に、ついこのんびりと文学を談つてしまふやうな内部世界——第三者からみれば外部世界が、伊東と百合子さんの心奥のどこかにひそんでゐるからだらう。

その日から半月後の四月一日にはつひに米軍は沖繩本島に上陸作戦を敢行した。日本は咽喉元と腹部に刃をつきつけられた形で、死活的鍵はもはや米軍に握られてしまつた。五月五日には独逸が降伏した。孤軍死闘する日本はまさに断末魔の死相を呈した。

胸部に当る近畿地区の空襲も二ヶ月後には始つた。七月三日深夜から四日未明にかけてB29二百五十機が姫路・高松・徳島・高知各市に爆弾と焼夷弾の雨を降らした。七月六日の二十二時三十分B29約百十機は

紀伊水道より侵入し海南市・明石附近を爆撃した。

七月九日十二時頃P51約五十機はB29四機誘導のもとに熊野灘より奈良を経て大阪に侵入、少教機ごとに分散して和歌山・大阪・西宮・伊丹・京都北部・大津を空襲した。昼の爆撃がすんでほつとしてゐる矢先の二十一時より翌十日二時にかけて、B29約二百七十機は五群に分れ熊野灘、紀伊半島、紀伊水道及び土佐附近から侵入して、主力をもつて和歌山・堺市・大阪市南部・高知市に焼夷弾攻撃をした。堺を空襲したのは約百機で反正天皇陵とつい眼と鼻の先で田野に近い北三国ヶ丘の伊東の借家もつひに罹災するにいたつた。

伊東はその罹災の状況を次のやうに昭和二十三年一月末大阪高等学校での講演会後の座談会で語つてゐる。

「僕は家主と喧嘩してゐたんです。そこへ焼夷弾が落ちて来たんですよ。僕は近くの松林へ行つて手を組んで見てゐました。そりや気持ちよかつたこと。あとで家主がなんと残念がるかと思うと、燃え上るのがうれしうてうれしうて。」(昭和三十一年「果樹園」論考)

これは皆を笑はすためのフィクションである」と講演会の講師だつた田中克己氏は看破し

てゐる。事実、伊東は北村透谷賞の正賞である富本憲吉作の陶板を無事に持ち出してゐる知己親友たちからの米筒も、一人一通を最低にして振り分けておいた風呂敷包さへ運び出してゐる。手をこまぬいて借家が燃えるのを鑑賞してゐたというのは嘘である。

焼けたされた一家はひとまづ南河内郡平尾村菅生に落ちついた。罹災一月して伊東の詩の愛好者であり詩人志望者であつた亀山太一氏(現三洋電器常務)に次の書簡を送つてゐる。「いつか焼跡に行つてみましたら、あなた様のおいでのこと知り、又お心こもりし品にたいてゐたことがわかり大へん感謝してをりました。すぐお礼をと存しながら御住所書き焼失してどうにもならずしたのであります。おそまきながらお礼申し上げます。

このころは田舎からの通勤不便ゆゑ、殆ど学校(住吉中学)の宿直室に泊りつづけてゐます。お暇の折はお尋ね下さい。前以つて日時わかつてゐたらお待ちしてゐます。住吉中学はアベノ橋から上町線にのり北畠で下車すれば、そこです。」

(八月一〇日、住吉中学校より大阪府北河内郡(枚方町大字中振二五四四、龜山太一宛封書)

亀山氏と伊東の交渉は昨十九年五月、亀山氏が自家版詩集「神々に捧げるうた」を献呈

したことから始つてゐた。彼は塙の空襲後に焼跡に見舞の品をとどけてゐたので、伊東のこの札状となつたのである。

この書簡の四日前の六日には米軍は広島に原爆を投下してゐた。一日前の九日には伊東の故郷長崎にも投下……この世の地獄を現出してゐた。それにしても伊東の文章は落ちついてゐる。伊東自身被災という地獄に遭遇し一種の虚脱状態に陥つてゐるためか、或ひは悲劇不感症になつてゐるからかもしれない。

伊東は南海鉄道・高野線の北野田より東方二キロの山近い菅生から北畠までの通勤を勞として、学校の宿直室に寝泊りする習慣がついてゐる由述べてゐるが、この簡易生活がやがて栄養失調を招き、四年後に肺結核を発病しようとは、五日後の天皇による終戦放送よりも、さらに想ひ及ばなかつたことであらう。

人間が住むより家畜が棲むにふさはしい菅生の里のあばら屋に起居する運命となつた伊東にとつて、昭和二十年八月十五日の終戦がどんな思ひを肝に銘ずるにいたつたかは興味ある問題である。

伊東は終戦の瞬間を次のやうに日記に書き残してゐる。

「数日前から心臓ひどく圧迫を感じて痛み

祭壇の灯を絶やすまいと図つて、彼自らの生命の灯を絶やすこととなつたのである。彼は

ヘリック詩抄(二九)

森 亮

五月柱の歌

五月柱が立つたぞ立つたぞ。

さあ、さかづきに酒を注げ。

柱の頂の花飾りを讀へてわたしは飲む。

でもまづ乙女たちを讀へよう。

その優しい手に手が寄つて

輝くばかりの花の冠を編み上げたのだから。

健やかであれよ、乙女たち。

わたしの願ひが叶へられるなら

伯爵さまや御領主の奥方にそなたがたはなる

嫁ぐ日が来てこの人たちが

館の床に起き伏しすれば

魚のやうに子孫が殖えてゆくさうな。

★

脈搏時々乱れるので、十五日は休養してゐた。高岡の西のおばあさんが来て、今日正午天皇陛下御自らの放送があるといふニュースがあつたと云つた。門屋の廂のラジオで拝聴する。ポツダム条約受諾のお言葉のやうに拝された。やうにといふのはラジオ雑音多く、又お言葉が難解であつた。しかし「降伏」であることを知つた瞬間茫然自失、やがて後頭部から胸部にかけてしびれるやうな硬直、そして涙があふれた。近所の人々は充分意味汲取れぬながら、恐ろしい事実を聞いたことを感知して黙つてつき立つてゐた。国民誰もが先日の露国参戦に對する御激励の御言葉をいただくものと信じてゐたのであつた。先日の露国の国境侵入の報知を聞いた時、国民は絶望を、齒くひしばつた心持でふみこらへてゐたのであつた。高岡先生は自暴自棄的な言葉を吐いて口惜しがられる。」

伊東は涙を流した直後は沈静になつたのであらう。

「太陽の光は少しもかはらず、透明に強く田と畑の面と木々とを照し、白い雲は静かに浮び、家々からは炊煙がのほつてゐる。それなのに、戦は敗れたのだ。何の異変も自然におこらないのが信ぜられない。」

第一次応召で中支戦線にあつた日、自然発生的な紀記、現実直情の万葉の境涯を峻拒して

わたしの夢

作男はぶくぶく肥り、山の神は学の無いのが

いい。

人と争はないで日々を暮らし、夜の眠りは平安に。

更に願ふは可愛い子供たちの晴れやかな顔、火の絶えることのない炉端で歌なぞ唄つてくれる。

中年に至つてデヴオンシャーに移つたヘリックは恋の歌に自然を背景とし、草花のたくひをからませたりしたが、時に田園の行事を歌ひ、農民の習俗を歌つた。「五月柱の歌」(六九六)もその柱の周りを田舎の人たちが踊り回る五月祭に因んだものであるが、歌謡風の発想で自分の言ひたいことだけを言つてゐるのは如何にもヘリックらしい。この詩の第二聯で乙女たちのために願つた嫁いだ先の一家の繁榮を、一生独身で過ごしたヘリック自身に対して空想したものが「わたしの夢」(九三九)で、マルテイアリスの二つのエビグラムの詩句を利用した調査的性格の物ではあるが、私はこれも詩人がデヴオン州へ行つてからの筆のすきだと考へる。

と、附記してゐる。

玉音盤のラジオ放送を聞いて「茫然自失、やがて後頭部から胸部にかけてしびれるやうな硬直、そして涙があふれた」伊東の心情は日本人としての、いや、日本浪漫派詩人としての正気である。その正気は、田畑や木々の上を照らす太陽の光の透明な強さや、静かに浮んでゐる白雲、昼餐をととのへる煙を確認して、おや？という反省をしてゐる。おや？といふかつてゐる。「何の異変も自然におこらないのが信ぜられない」からである。もし日本が神国であるならば、その敗亡と共に地軸が砕けるか、白雲は妖雲に変化して嵐を呼ぶか、それとも太陽は色を失ふかしなければならぬ筈だつたのである。しかし相も変わらず太陽は強く照り、白雲は静かに浮び、忙しく炊煙はたちのぼつてゐる。この自然現象はこの瞬間、伊東の胸隅にあつた祭壇を叩き懐してゐるのである。神国などではなかつたのだ。ただの人間が統治し、統治されてゐた国にすぎなかつたのだ……という、人間としての正気に立ち戻る契機となつたのである。明らかにこの瞬間……伊東は完全な人間世界へ脱皮をしてゐるのである。

しかるに伊東の心友蓮田善明氏にはかゝる転機に恵まれなかつたのである。彼は心裡の

自然や現実とは全く別個の「歌の世界」を創造した貫之を激賞したことがあつた。つまり蓮田氏は貫之のこの「歌の世界」を自らの心裡に移し植えて「花の堡」にした。蓮田氏はこの「花の堡」に拠つて死の恐怖を制し洞庭湖畔の戦闘でも豪膽たりえた。(参照「果五四号」蓮田善明とその死)蓮田氏はこの「花の堡」に拠つて、敗戦後も神国を守護し続けようと捨身したのであつた。

萩原朔太郎手記

「浄罪詩篇ノオト」A

竹越三男編

編者まえがき

萩原朔太郎が書きつけたノートはほとんど教えきれないほどあつたと言つてよきさうだが、現在遺つてゐるのは、前橋の生家と市立図書館とにある合計十二冊であらう。そのほかどこかにノートがあるかどうか、今のところ私は具体的に聞いたことがない。この十二冊の中の二冊は、「愛憐詩篇ノオト」として前橋市立図書館監修、世界文庫発行で、昭和三十七年末に複製本が出版され、もう一冊の大正三年の当用日記帳は、私が関係してい

る同人誌「丘」第八号（昭和三十七年）に、「若き日の日記」として初めて公開された。私はこのさらに別に別の二冊のノートを、「浄罪詩篇ノオト」AおよびBとなつて、本誌に連載公表することにした。これは小高根二郎氏のおすすりによるものであるが、この貴重な誌面を割愛されるご好意には感謝の意を表したい。この二冊のノートは、前橋の朔太郎生家に現住される実妹津久井幸子さんの所蔵であるが、著作権者秋原葉子さんが快よく本誌への掲載を承認されたのと同じように、原本所蔵者もこれを快諾されたもので、これらのご好意に対しても深く感謝している。

「浄罪詩篇ノオト」AおよびBは、がら何ら標題を帯びていない別々のノートである。ただ大体同時期に並用されていて、記載内容も、両方に詩・歌論、詩的散文、という共通の種目なので、この二冊は当然合わせ見なければならぬといふぐあいになつてゐる。両方に全くの雑記帳であつて、必ずしも順を追つて記載したわけではなく、かなり手当りしだいの所へ書きつけたというふうにも認められるものである。したがつて同じ時期にAに書くこともあればBに書くこともあつたわけである。書き方も極めて乱雑で、インキで書いた所、鉛筆で書いた所、また例

えば鉛筆で書いた上にインキで推こを加えた所、さらに所々赤鉛筆でしるしをつけるなど、さまざまであつて、推こは入り乱れ、一見判読困難と思われる部分が大半である。しかし私がよく念を入れて読んでみた結果、読み取れない所はまずなくなつた。けれどもこれを原稿紙に写し取るばあひ、写し手によって多少の異同を生じるのもやむをえないような箇所もある。しかし私としては、活字に組むという条件の中で、できるだけ正確を期したつもりである。こうした雑記帳であるから、作品集としていちおう浄書してあつた「愛憐詩篇ノオト」とは違つて、原本のままの複製は一寸考えられないが、研究資料としての価値においては、同じくらい重要なものであると言つていいだらう。

A B二冊を通じての記載時期は、大正三年九月から翌四年三月頃に及んでゐると見てよいが、その中で主要な記載時期は、十二月から二月までの三ヶ月間と言えよう。これを別々に見れば、A冊は大正三年九月から翌年のほぼ一月中まで、B冊は大正四年一、二月中を主としてゐるが若干その前後にも記載されている、と推定することができる。ノートの体裁は、この二冊がまるで違つてゐて、Aは「愛憐詩篇ノオト」に似通つた上質紙のノ

ト、Bはもっと厚手のザラ紙ノートである。私はこんど写し取るときに、ノートの最初の方から、記載されたままの順序で写す方針を採つたが、しかしA B二冊共に、中途からは、反対に末尾の方からの順序に切り替へた。（どこから切り替へたかは、その箇所に註記する。）これはそれぞれのノートでの最後の記載と思はれる作品が、ノートの中途に書きつけてあることなどからである。なおノートには「人魚詩社用紙」と印刷された原稿紙に書いた作品が挿んであるので、これもBの末尾にまとめて付けておくつもりである。

この二冊のノートを書いた時期全体が「人魚詩社」時代の中にはゐる。人魚詩社時代はつまり、「月に吠える」の前期の本質が形成されると共に、その詩作品が産出された時期であるが、その中でも特に重要な時期は大正三年十二月から約三ヶ月間である。と言ふのは、ほぼこの間に「月に吠える」前期の核心とも言うべき「竹とその哀傷」の章に含まれてゐる詩篇が産出されてゐるからである。このノートを書いた主な時期も、ほかならぬこの三ヶ月間である。この時期が詩人朔太郎の生涯の中でも、また彼が近代詩史の上にも果たした役割の上から言つても、いかに重要な時期であつたかは、ここに改めて言わな

けれども、このノートの中で見られる詩「竹」の原形八種を始め、その他の詩の原形、原質や詩論、詩的散文のひとつとつが、この重要な時期の詩人朔太郎をナマの形で見る上の資料として、おそらく最も貴重なものではなからうか。

そういうことから言えば、この二冊のノ

わが存在

浅野 晃

わが存在を形づけてゐるもの

わが視野を輝やかせ

わが時を充たしてくれてゐるもの

昼や夜や

風 海鳴り 銀河――

すべて漠たる不毛の曠野で

わたしを影とゆり動かし

こだまとなつて歌ひも啼りもさせるもの

わたしは牡牛となつてここにうづくまり

自分の眼や耳を開け閉てしながら

自分もその一部であるこのふしぎに虚

しい

現在のなかで

トは「竹とその哀傷」ノオトと呼んでよいかもしれない。「浄罪詩篇ノオト」と呼ぶのは何か偏よつた感じを受ける人もあろうが、じつは私は、朔太郎が「浄罪詩篇」という詩篇名を用いてゐた時期を、「月に吠える」本質形成期の一時期と見て、「浄罪詩篇時代」というものを考へてゐるわけで、前からこ

ときにアトラスのごとくうち呻き
またメムノンのごとく鳴りひびく

終末観

おや、あれは雲雀ぢやないか

雲雀が啼いてゐるんだな

やつと雪がとけはじめたと思つたら

もう啼いてゐるなんて

なんといふ機敏なやつなんだらう

しかし気がいいね

あの声がいい。せはしなくて静かで

快活でおちついてゐる

じつに卒直で嫌味がなくて――

あの連中がああやつていそしんでゐるのに

この世が急にしまひになるなんて

どだい考へられないことだ

のノートを「浄罪詩篇ノオト」と名づけてきた。「浄罪詩篇時代」に朔太郎は多数の詩を書いたばかりでなく、この時期独特の注目すべき詩的散文などもかなり書いたが、後にその詩の中から選んで「月に吠える」に収載されたものには、一括して「竹とその哀傷」という章名が付けられたという、そういう関係である。この時期の詩の多くのものに、ノートや発表誌上では「浄罪詩篇」と付記されていたが、どの詩にこの篇名が付記されていたか、またはいなかったかということは、詩の本質の問題であるよりは、むしろかなり附随的な偶然性の問題であると思う。それは実際にそれらの詩を較べてみればわかることだらう。仮りに全部に「浄罪詩篇」と付記されていたらとしても、そぐわない感じのものではない。この篇名は、この時期の詩のナマナましい制作過程の中で、おのずから詩人の念頭に発して付記されたわけであつて、それから一年半も経つてから詩集を編むときに、その時期の詩を一括して名付けられた「竹とその哀傷」という章名よりも、ずっと実感的ないぶきを持っており、ずっと幅広い範囲に及ぶ意義を持っている。こういういろいろな意味において、私はここでもやはり「浄罪詩篇ノオト」の名を採用することにした。

凡例

○用字は現在の当用漢字に直した所が多い。
原文の誤記または異例な用字はそのままとし、たいいてい「ママ」と傍記した。活字にない誤字は編者が「」の中に入れて直した。編者に疑問な字には「？」を傍記した。○△の中は編者の補註である。*印は編者の註記との参照符号である。

本文

此頃僕の内部で何かえたいのわからぬ奇異な光が受胎して居る、そいつがだんだんあばれ出す、併しまだ外壁が厚いので容易に外部へはみ出して来ない、それが非常に苦しい、実〔際〕所産前の望息の苦悶だ、毎日わけのわからないことを紙片に書いて居る、いよいよセンチメンタルの混漿が近づいて来たやうに思ふ、天地がまぶしくて瞳がくらみそうだ、九月の太陽は密雲に蓋はれて居る、何をみても輪光がみえる、これは歓喜だ、実に針のやうな苦痛だ、絶息だ、たまらない。

ゆうべ久しぶりで、*エレナに逢った、エレナとは彼女が浸水聖号だ、二人で月蝕を見て居た、もう僕と彼女との間には恋はない、併し恋以上の不可思議な愛がある、それは深く考

へるときは戦リツすべきものだ、僕はいそいで別れた、部屋へかへってからまっさをなつてふるへて居た。

*高時のS氏の妻N子のこと。この人とのことは初期朔太郎の作品の方々に關係があり、エレナという名もときどき出てくるし、自叙や屋敷にもさかんに話したらしく、手紙にも書いた。彼女との關係については久保忠夫「朔太郎の恋」(東北学院大学論集40号)に詳しい。私には「浄罪詩篇」時代における朔太郎のいわゆる「懺悔」はこの人とも重要な關係があると考えている。

訳詩といふことは最も完全に行はれたところで第二義の芸術的価値しかもつて居ないものだと思ふ、然も訳詩には最も洗練された技巧と最も热情的の共鳴とがなくてはなるまい、今迄見た多くの例から私は訳詩といふものの芸術的価値(第二義の)を全々疑つて居た。

前号「抹消した部分に「八月号」とある。詩歌に発表された福士幸次郎氏の二篇は僕が訳詩といふものにリズムを感じた最初の作である。

*「詩歌」大正三・八には福士幸次郎の詩二篇が出てゐる(「死の歌」「離れている女に送る」)が、訳詩ではないと思ふ。

*「幼児が神になる」 幼児が幼児として生長するときはいつかきつと神になる、成人は到底神になれない、最も賢しい成人でも尚聖

手は遠くどこへでもものびる、盗まれて怒る人と悦ぶ人とある、どっちでもかまはない、僕自身の肉が増えればそれでいゝのだ、然しいづれ近い中に夫々のしをつけて御返しする時がある。

*本篇冒頭にも「光が受胎して居る」と書いて居るがこの時期の朔太郎には「光」という言葉は独特の意味を持つていて、しきりに出てくる。詩語としても「光る地面に竹が生え」「この光る、寂しき自然のいたみ」その他いくつでも出てくる。

*室生屋敷をさしているものと思はれるが、本篇は消息体のつもりで書き始められたのであろう。大正三年九月と言へば、この頃をほぼ中心とする約一年間は、朔太郎が屋敷や暮島の影響を最も強く受けた時期と言へよう。詩語の上にもそれが現われた。

過去は闇黒だ、昨日は闇黒だ、今日のみが明るい、僕は何度青い鳥つかまへたわからない、恐らく今握つて居るものも、そうかも知れない。だから自分は過去と未来を決して口にしない、現在のみをいふ、そして此の上もなく幸福だと言ふ。おめでたいといふ人たちには勝手に言はしておく。

真実を曲げるよりも鉄の棒をまげる方がやさ

久礼田房子第四歌集

四〇〇頁

蒼林

日本文芸社

人以上になれない、あらゆる天才は幼児が幼児として生長したものだ。心は至純でありたい、「幼児が神になる」天国を見ることの出来るものは幼児より外には居ない。*

*これに類することを書いたものとしては、詩的散文「幼児と基督一人魚詩社宣言其一」(尾山篤二郎編集「異端」創刊号大正三・九)や劇詩「魚一人と幼児一人魚詩社の畏友に捧ぐ」(山村暮島編集「風景大正三・十」)が、同じ時期に発表されている。

*このへん、その他本篇は詩的散文「SENTIMENTA LISM」(詩歌「大正三・十」)と同巧異曲のものである。

今の僕にとつてはあらゆる物象が「光」だ、あらゆる人々が僕の先輩だ、至純の心は芽生のやうに生長してゆく、あらゆる光と人とはぐくまれて、いろいろな色彩と形体とにうつり変りながら、至純な心が成長して行く、空腹なる利己主義者の食欲は真に驚くべきものがある、彼は盗人でさへもある。

手近いところで君の造語さへ時々失敬して居る。

しい、僕にとつては盗みも真実である。

併しみなさんは心配しない方がいゝ、狡猾な盗人はあらゆる財宝を奪ふけれども、魂だけはそつとしておく、惨酷な殺人者でも魂には手がつけられない、盗みは自殺である。

勿論僕は出来るだけ自分で自分の食物をさがして居る、併しそれでも足りないときは他人のものを盗む、実〔際〕盗みは「時」の経済でもあり便利でもある、そして僕は一日も早く成長したい。

併し今の世に僕の盗みたいものがあまりに少ないのを遺憾とする、つくづく考れば貧乏人ばかりの世界である。

即ち僕が盗むのは僕自身のリズムを完全に近く表現するための手段である、盗みのために盗みをするのではない、順つていくら飢えても豆腐のカラなどは食はない。

貸室 XII

萩原葉子

隅の方に白い筒封の手紙が置いてあった。「急に、部屋を明けることにしました。」

若葉の頃

福地邦樹

五月は人恋おしい

一雨ふつたあとなど

若葉に陽の当るのをみていると

愛する思ひのように

やさしい、寛恕の気持が湧いてくる

このころ

高松では夜の植木市がある

今に恋すべき人としてないが

アセチレン燈の下で咲いた

花と緑の記憶は

いつも私を懐郷の思いにさそう

本当はいろいろ相談して頂きたかったのですが、奥さんはもう前のような甘えられる奥さんでは、なくなりましてので……。

追伸 部屋代は日割で計算して同封します。では失礼します。さよなら。

私は小峰少年の書き残した手紙の文面と、五百円札一枚とを握ったまま、立ち尽した。暗闇でぐさつと胸を刺された思いだった。忙しいので小峰に関心を向けなくなつたのは、確かなことでも、こんなに冷めたい態度を取らなくても、良いではないか。

行く先の住所も書いていないのは、これきりでもう終しまいという心算なのだろうか。それほど見放されてしまったのだろうか。沖繩から帰って、そのまま行ってしまつたのは、あんまりだと思つた。それにしてもどこへ行つたのだろうか。勤めが嫌だと言つたので、会社を止めたのだろうか。

止めるなら相談してくれるように、先日も言つたばかりなのに、それもしないのはよほど信用を失つたらしい。小峰に見放されたのだと分ると、私はまったく立つ瀬がなかった。いきなり置いてけぼりを喰つたような虚ろな気持を味つた後、私は次第に怒りに似た不快な思いに苛まれた。たかが息子のような少年ではないか。それ

なのに大人の私は小峰の仕打ちに、右往左往している不甲斐なき。してやられた形である向うがそうなら、こつちだって、もっと冷めたくならうと、思つた。小峰が出ようと出まといと蚊の鳴くほどにも、感じない自分になれば良いのだと思つた。

どんな良い部屋が見つかったのか。知らないが家の貸室より安くて良心的な所なんか、めつたにあるものではないだろう。私にしても、小峰が出た後は、世間並の部屋代で貸せるのだから、好都合だということ、困らないどころか、かえってさっぱりした感じだといふことを、小峰に知らせてやりたい。

しかしそう思う後から、一体どこへ行つてしまつたのだろうか、心配になつて来る。良い勤めと部屋が見つければ、何よりだかと安否が、気遣われて来るし、もっと親切にしてあげれば良かったと悔やまれてくる。

小峰にしてみれば、いろいろ話したり、相談もしたいと思つても、やはり家に来にくかつたのだろう。少年から見れば、私はいつぱしの大人で、しかもおやおやという垣根があつたに違いない。もともと大人気ない私である気楽に、小峰に話しかけるだけの度量がないうえに、逆に会うのが恥ずかしくさえあつたのだ。

それどころか、小峰の強い正義派派のものにはたじたじて、気楽には会えないのである今更大人げない自分だったが、そのために、小人を傷つかせたのだったら、済まないことをしたと思ふ。

私は自分のへんな性格から、少年を傷つかせたことが、取り返しつかないことだつたと、思うようになっていた。 — つづく —

高校生の詩

福地邦樹

近頃の高校生は、実に表現が上手だ、といふのが私の常々の感想である。次あげる三人の生徒の詩はどれも、私が勤務している四年級高校の生徒のであるけれども、去年一年間に、これだけ良い作品を見つけることが出来た。中省三君の「秋」など、どこへ出しても恥ずかしくないような、感覚的な、見事な出来ばえだ。都会的なハイカラな表現をちゃんと身につけている。福田絃子君は、小説なども書く文学少女だが、この作品には、イメージの確かさと、言葉の豊かさがあり、上手

毛虫

堀之内 歴

わたしたち ボクたち

みんな 毛虫

凄いでしょ

立派でしょう

黒毛虫だよ でかいだろう

こひょうもんもどき

しらないね そんなのは

忍者毛虫 いいねそれ

こつち来るなよ 汚ねえや

ナニよ あんたこそ毛虫

止せよ お前たち

人前だ 澄まさなくちゃあ

一九六三・四・二九

な詩だと思ふ。寺野一成君は家庭的にやや恵まれない所がある生徒だが、それが作品にかえてプラスになっている。この作品二つとも、イメージの確かさでは実にすばらしい。「松」の葉の針状になっているのは、苦闘のために身を細らせていたため、という発想はとてもうまい。

秋

三年 中 省 三

辺りが真面目になる

光が 切れ味を増す

秋がこころを遠巻きにした

そして まず

銀杏の木のとっぺんに

秋は 黄色い

見張りを立てた

船

ごつてりした真鍮が光る

厚いペンキの 古い船

ゆっくりやすめる

むしろたへさき

もうやがて

また うろこがへばりつく

大きな サーチライト

予期されること

三年 福田 絃子

汽車の出て行った跡には

ぬれた二本のレールが

白痴のように眠っていた

何の思いもない

何の思いもない

にぶい橙色の光の中で

すべてをたぐり寄せて

もっていつてしまった

—— 汽車が見えなくなつたら

あらん限りの声で

叫んでみよう

あの汽車がつく私の知らない町の

その駅には きつと

赤い花がさいているにちがいない

いじけた 心だけで

想像できるのは そんなこと……

夕日

二年 寺野 一成

西に燃える雲を見ると

齊藤清衛著

隠仙の文学

目次
業平／西行／兼好／絶海／宗祇
芭蕉／良寛／元義／放哉／山頭
火／附録略年表
定価・三三〇円

東京都千代田区神田錦町三ノ一
板橋 東京六七 一四六

武蔵野書院

波に洗われて色のあせた

白い砂浜に

闘い疲れた様に

松はたっていた

そのはだは

強い潮風に

カサカサに荒れ

その足は

倒されまいと

地中深く踏んばり

その手は

長い苦しみにもがいている

松はこの様に闘いを忍んできた

松は非情な風と

非道な人間とに

この様に耐えてきた

それでも松は

風にけずられて

針の様に細い緑の葉を

大切そうに抱いている

松はその葉を見る時

なぐさめられて

今までの闘いを忘れる

編輯後記

四月九日。大丸百貨店にルシアン・グレート展を見る。私の最も好きな画家の一人であるが「花をつけた鳥」は西洋杉のねかたに遊んだ」の前では、去りがたは「いとこの愛着を感じた。折からクート夫妻が来場したが、二人はタプロローのやうに楽しげであった。

岳

四月十一日。函館の北大水産学部を訪れたついでに立待岬の啄木一族墓に参つた。東海の小島の磯の白砂に……の例の歌が刻んである。彼は僕の生れた翌年に死んだのだ。翌々年には鶴子夫人もその後を追つた。死後半世紀にも及んだ盛名は生命よりも長く、芸術家の本望これにすぎものはない道理だが、二日前の樂しげなクート夫妻を思ひ出し、あまりにその懸隔にいさか心が痛んだ。

果樹園 第八十八号 (毎月一回一日発行)
昭和三十八年六月一日発行

池田市野町一六八
編輯兼 小高根二郎
發行所 元市印刷株式会社
池田市野町一六八
果樹園社
定価 三十円 送料 十円

果樹園

第89号

詩人、その生涯と運命 小高根二郎
ヘリック詩抄 森 亮
紋白蝶 堀之内 歴
崖の道に 浅野 晃

貸室 萩原葉子
名前 吉本青司
夜 福地邦樹
浄罪詩篇ノオト 竹越三男編
土 浅田二三男
小 歴 史 小高根二郎
編輯後記

詩人、その生涯と運命

書簡と作品から見た伊東静雄(七十七)

小高根二郎

濠北からジヨホールバルに引揚げてきた蓮田中尉が所属する板垣征四郎大將揮下の第十九軍は、不敗を誇る熊本師団を中心にしたものであっただけに、その抵抗精神も熾烈であった。逸速く終戦の報が伝はるやいなや、もし武装解除が直接聯合軍の手で行はれたり、天皇を戦争責任者に指定するやうなことになる。板垣軍司令官を擁して、最後の兵まで戦はうという動きがあった。神風連か

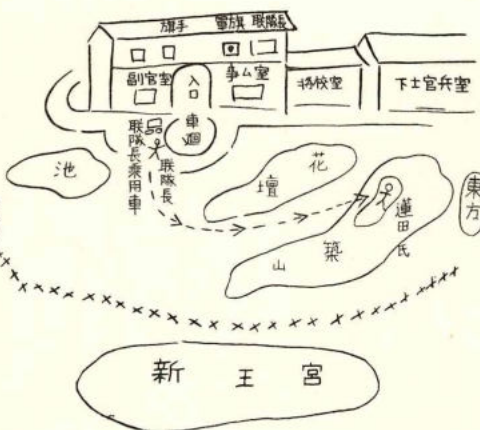
ら伝統する抵抗精神である。蓮田中尉が属する聯隊の副官鳥越春時大尉のもとで極秘裡に抵抗部隊の編成がなされつつあった。

鳥越大尉は蓮田の第一次応召のときからの上官であつて、殊勲甲の勇士であり、戦闘指揮と訓練指導を管掌し、蓮田はもつぱら内務教育を担当する唇齒の關係にあつた名コンビであつた。第二次応召に際しても偶然一緒になり、特に鳥越大尉の工作によつて蓮田は鳥越隊に編入されたやうな因縁と特殊な間柄にあつた。蓮田は鳥越副官の抵抗部隊の編成では大隊長に予定されてゐたのである。

この不穏な動静に対処するつもりだつたのだらうか、聯隊長上条大佐は下士官以上を聯隊本部の奥に当る山上の新王宮(山下奉文大將がジヨホール渡河作戦を指揮した所)に集

め軍旗被別式をして訓示した。その訓示中に青年將校の憤激を買つた言語があつたのである。鳥越副官の思ひ出によると、「敗戦の責任を天皇に帰し、皇軍の前途を諍論し、日本精神の壊滅」を説くところがあつた。国学者蓮田中尉の心中に煮えくりかへるものができたのは当然であらう。

それだけでなく上条大佐の日頃の言動には



蓮田善明中尉の最後

第一三三聯隊本部前広場 鳥越氏筆

不審な点が多かつたのである。大佐が上海から着任した当時「自分宛の郵便物に金某と云ふ名でくるのがあるが、これは少し訳があるのだから諒解してほしい」と鳥越副官の諒解を求めるところがあつた。後になつて考へると上条大佐は対馬の出身であつたから、或は少年時代に朝鮮から渡つてきて上条家の聲養子になつたのであるまいか？ つまり金某こそ真実の姓名であつたのではないかと、後日鳥越氏は推理してゐる。さう言へば、上条大佐は分屯地の軍状を視察に行つても、日本の軍隊は相手にせず、もつぱら現地人の出迎者の応待にいんぎんで、「いまにあいつらの世話になる時がある」と、鳥越副官に洩らしたこともあつたというのである。即ち、スパイ容疑をうける言動が上条大佐の日常にあつたということになる。

二十日の早朝七時半頃、蓮田中尉は背囊、拳銃、眼鏡をつけた完全軍装で副官室に現れた。お早やう……と挨拶してから、鳥越大尉は、おや？ 蓮田は転任でもするのかな、或ひは命令受領の用向きがあつたかな？ といふが、それにしては副官の俺が知らぬはずはない……さう、思ひ直すと、鳥越大尉はなんとということなしに蓮田中尉と話をしてゐた。そこに補給中隊で手榴弾による自決者が

でたという報告がきた。沖繩出身者。しかも二人である。すぐ処理にきてほしいという要請なので、鳥越大尉は立ち上つた。このとき蓮田中尉は、

「隊長殿！（さう呼び習はしてゐた）。もし自動車でゆかれるならお共をさせてください。まだ話があるのでです。」

と言つて立ち上つてきた。が、あひく自動車は出てゐてなく、やむなく鳥越大尉は蓮田中尉を後に残すと単車に跨つて補給中隊に駆けつけた。

鳥越大尉が自決者の後始末をして聯隊本部に帰つてきたのは十一時半を廻つてゐた。蓮田中尉はまだ待つてゐた。昼食時なので鳥越大尉の部屋に、河村大尉、田中大尉、高木大尉と、それに蓮田中尉と旗手の塚本少尉とを加へて六人で会食することになつた。鳥越大尉の自決者の報告から、話はしぜん日本の将来のことになつた。高木大尉は投げやるやうに「日本は戦争に敗けたんだ。敗けたからには、聯隊長が言はれるやうに、もう……天皇も、国民も、ありはしない。これから日本の子供達に、誰が一番偉いんか？ と訊ねたら、おそらく蔣介石とか、ルーズベルトと答へるもつちやらう。天皇……なんぞと答へるものは一人もゐなくなるよネ」

と言つた。蓮田はきつ！ と座を正すと即座に反論した。

「高木大尉！ あんたは士官学校で一体なにを学んできたんですか。そんな莫迦なことは絶対にない。日本が続くかぎり、日本民族が存続するかぎり、天皇が最高であり、誰が教へなくとも、日本の子供であるかぎり天皇至上と讃へる。」

高木大尉はにやり……とすると、

「敗けてから、そんなことを言うても始まりん！ それはあんたの単なる理想ぢや。」と、軽くうけ流した。

「敗けたからこそなほ必要ではないか！ 皇室中心に子供達を導くのは、変らぬ我々の責務だ。」

と、蓮田中尉は無念の唇を噛んだ。

「冗談ぢやねえ。はたして生きて復員でけるか、でけんか判らん我々なんだぜ。聯隊長の話のとほり、くだらん理想論議で暇つぶしをするより、どうしたら生きて帰れるかちゆう手段を真剣に考へる秋ぢやあるまいか？」

と、高木大尉はたたみかけた。

「生きて帰らうと死んで帰らうと、我々は日本精神だけは断じて忘れてはいかん！」と、蓮田中尉は大声を荒らげた。

「その日本精神が物量にころり……と敗れたんぢや。いまさらなんの日本精神ぢや。日本精神の看板ぢやア、もう……飯も喰へんわい！」

ヘリック詩抄 (三七)

森 亮

召使のブルーに

あの夏鳥たちは暖かい時候のあひだはこの家に厄介になつてゐたが、いつしか飛び去つた。
取り残されたあるじの詩人は老い込んだ身にこれから来る冬の寒さをいやと言ふほどひつ被るのだ。

だが親切なブルーデンスよ、夏と言はず、冬と言はず
お前は安んじてわたしの運命と歩調を合はせてきた。
願はくはさういふめぐり合はせを愛しんで、

どの季節も
別け隔てなく一年がちゆうわたしの許で暮らして欲しい。

と、星の敷に物を言はずやうに、高木大尉は左肩を聳やかした。
「まあ、まあ、まあ。飯がまずくなる。論争はそれぐらゐにしてくれ！」

墓碑銘

この小さな壺に収まつて此処に埋まるのは長年うちで働いたブルーデンス・ポールドウイン。

彼女のぱつと明るく燃え尽きたいのちからさあ、咲き出るがよい、草のむらさきの花。

ディーンブライアーの牧師館におけるヘリックの内助者はブルーコートブルーデンス・ポールドウインであつた。彼女は土地の女で、独身の詩人に対して女中ないし家政婦の役柄を忠実に勤めた。先に紹介した「われ富めり」（第八三号参照）でもさうであつたが、この「召使のブルーに」（三八八）を見ても彼女に対するヘリックの信頼の厚かつたことがよく分かる。「墓碑銘」（七八三）はブルーの死後作られた体裁になつてゐるが、実際は彼女はヘリックよりも四年後死んでゐるので、随分先回りして書いたものである！ 真情の籠つた茶目氣を以て。

と、田中大尉から水が入つて、後はいつもの談笑に戻つて、つづがなく会食がすんだ。

鳥越大尉は蓮田がなにか話しかけたさうな様子をしてゐるのを感じた。しかし他の人間があるのを気がねしてゐるやうな気配だつたそれは先ほどの論争の余燼ではなささうであつた。もつと沈静な何か？ さう……蓮田がスマバ島の陣營で歌の発想を得ようとしてゐる時に感じた、あの沈静だがソワソワした摸索……。そんな気配を鳥越大尉は蓮田から感じた。そんな沈静な摸索の後で、きまつて蓮田は歌を示したものだ。▲妹がきるひとへのきぬのかたにせむわが名づけける浜藤の花。▲いとまありてしづけきときはふるさとの子ろが手こほしすべなきまで。鳥越大尉はそんな蓮田の風雅をいつもうらやましく思つた。しかし今日は風雅の焦燥ではない。なにかを俺に訴へたいんだ。極秘裡に俺の手許で進行してゐる抵抗部隊の編成についてかもしれない。鳥越大尉はゆつたり煙草をくゆらしてゐる連中をいまましげに振り返つて、さう……思つた。このとき旗手の塚本少尉が、

「副官殿。軍旗焼却の準備を唯今からやりますから、監督をお願いします。」と言つた。飛行機で飛来した閑院宮春仁王殿下から聯隊長以上に終戦の聖旨の伝達が新王宮であ

つた後で、第十九軍の軍旗を一括して昭南神社で焼却する手筈になつてゐたからである。

「よし承知した。すぐかからう」と塚本旗手に応じ、蓮田に向つては、「あんたは今すこし私の部屋に遊んでいてください。例のことで相談がある。帰りは自動車で私が送りませよ。」と言つた。蓮田は立ち上ると、「聯隊長殿はいつ出発されますか?」と訊ねた。

「もうすぐ乗用車で出発される……」と答へて鳥越大尉は部屋を出ようとすると、「隊長殿!!」

と、姿勢を正した蓮田は声をかけたが、大尉は塚本少尉を追つて二階の聯隊長室の隣の軍旗室に赴いた。

箱に納めた軍旗を奉持した塚本少尉を伴つて上条大佐は二階を下ると玄関に向つた。車廻りの乗用車の扉を聯隊附下士官の黒田稔伍長が開いた。大佐がまさに車のステップに足をかけんとした刹那、伍長の背後——副官室外に潜んでゐた蓮田中尉が躍りてた。

「国賊!!!」

という絶叫で、大佐が顔を廻らさうとするところに蓮田中尉は擬してゐた拳銃を発射した二発の連発だつた。弾は右顎下から左頬に貫通し大佐はどつ!と仰向けに倒れた。とつさ

に黒田伍長は塚本小尉と共に瀕死の大佐を玄関横の部屋に担ぎ込むと、蓮田中尉は小走り

で花壇の向ふに走ると立止り、コマカミに筒先を当てて引鉄を引いた。カチリ!不発だつた。伍長は走り寄りさへすれば自殺から救へると思つた。しかし、上官殺しではしよせん銃殺刑は免れまい。知性の高い先生のことだ信従のケ条まで超越して敢行された所業には、それ相応の原因や理由があるに相違ない。

さう、黒田伍長は反省した。丁度向ひの築山で兵隊が文書の焼却をしてゐた。その連中が跳びだしてきて、もし蓮田中尉の行動に妨碍でもならうなら、阻止を買つてでやらう……という逆心理になつてゐた。

蓮田中尉は拳銃を握つてゐる右手を水車のやうに廻しながら築山に向つて走つた。それは追手を防ぐ動作とも、二重装填を解く所作ともとれた。二階ばかりで再び立ち止ると、再び筒先を右コマカミに当てて引鉄を引いた今度は成巧した。身体がぐるり一旋回すると、ねちねち熱い大地にどう!と崩折れた。けいれんする左手には遺歌であらう一枚の葉書が堅く握りしめられてゐた。

この蓮田中尉の最後は、黒田伍長の他に鳥越副官も目撃した。鳥越大尉は軍旗を送りだしたあと軍旗室の整理をしてゐた。上条聯隊

長は終戦以後は副官でさへ近侍することを忌避してゐたので敢て見送らなかつた。二発の銃声を聞き、その音でどちらの方角か?の判断をして窓辺に走り寄つた。丁度、蓮田が第二の疾走をしてゐるところであつた。最後まで神国を信じて譲らなかつた国学者にふさはしい蓮田善明の最後をみとどける結果となつたのである。

蓮田中尉の遺骸は丁重に手当てをして原隊の梶原隊に移され、戦友達の手で火葬にふされた。遺骨は同郷の島村肇伍長が奉持して帰国する手筈になつてゐた。ところが英軍は遺骨の持ち帰りを厳禁した。やむをえずシンガポールの近くのゴム林の中に戦友の手で埋められる仕儀となつた。又、蓮田が死の掌に堅く握つて離さなかつた葉書には、愛国の三十一文字が書いてあつたさうだが、憲兵隊に没収されて再び返らなかつた。

又、非業の死をとげた上条大佐は英軍が鋭意探索する人物であつたことはやがて判明した。彼はドリットル東京空襲部隊で上海不時着の飛行士に死刑を宣告した軍事裁判の判士長その人であつたからである。蓮田の手にかららずとも、いづれ英軍の手にかかることは、単に時間の問題にすぎなかつた……とは蓮田の竹馬の友・丸山学氏の語るところであ

絞白蝶

堀之内 歴

こゝ毎日 雨ばかり

食事だけでも 摂らなきや

ああ、また矢車草か

二枚団扇? 魔除じゃあない

ピツタリ豊んで 立ててるさ

ぬか雨だ じつとしてりゃあ濡れないや

あ! モン太とシロ子

やってくる 行っちゃまう

なあーんだ隠れ場所し この雨にねえ

一九六三・五・二七

る。

この蓮田の死に關しては丸山氏の「蓮田善明の最後」(昭和三年一月)を基本とし、それに不明な箇所を入吉で木村業を営んでゐる元副官鳥越春時氏の示教(昭和四年九月附)に仰ぎ、さらに大阪在住の元聯隊付下士官黒田稔氏の記憶(昭和四年一月附)で補ひ、相互に矛盾する箇所は筆者が推理修正したものである。元十九軍将士の方々の示教で、後日さらに完璧を期しうれば幸ひである。

丁度、この蓮田が自決した日頃であつたらうか? ある味方……熊本県鹿本郡植木町の留守宅で睡つてゐた敏子夫人は蓮田を迎へたのである。ほつ……と明るんできた蚊帳の外に戸外に完全軍装をした蓮田中尉は佇んでゐた。おかへりなさいまし。と夫人は挨拶したが、蓮田は身じろぎもせず佇んだままであるさ、お入りなさいまし……と、声をかけたがうなづくま、で動かない。どうなさつたのです? ご自分のお内です。遠慮なくお入りなさいまし……と促したところで夢がさめた夫人の脳裏に刻まれてゐる、二重橋の完全軍装をした蓮田中尉の姿が、後象として浮び上つたわけであらう。その完全軍装で蓮田は自決したのである。二重橋では蓮田は敏子夫人に玉砂利を拾はせ、三人の愛子に形見分けを

し、自分では「いただきもちて 行く 三粒四粒」と戦地に携行したのである。そのうち二粒は上条大佐の射殺に費消してゐた。一粒は自決に用つた。三粒であれば丁度だつたし四粒だつたら一粒余つた勘定である。それも二重装填による一粒の捨弾を計算に入れるとちよつきりとなる。まさに運命の数と言はなくてはなるまい。もし靈魂というものがこの地上に存在するものであれば、自が運命を果したへた蓮田は、その由を告げに敏子夫人の夢枕に立つたのだ……と言へるかもしれない

蓮田の悲痛な死も知らぬ伊東は、八月二十七日に内地の沿岸守備隊から復員した庄野潤三氏を迎へた由、日記に記してゐる。

「夕方から庄野君宿直室に来訪。二、三日前除隊になつた由。房総半島で部下約百名を使つて、砲台を建設してゐた由、その苦労と、愉快を物語つて、敗戦のことに及んで声をのむ。まだ横須賀にゐる頃、林、三島他一名と佐藤春夫氏を訪問した時のことを語る。佐藤氏は長野県へ疎開の直前で、家は混雑してゐた中で、ウイスキーをのみながらにぎやかに喋り皆記念に短冊かいて貰つたさうな。林君は「一時帝都を脱出するも文学のことは林富士馬に一任す」とい

ふ意味の言葉。庄野君は「雪・ほたる」がよい作品であるといふことを書いて下さいと註文すると、「雪・ほたるは優秀なる作品なること実証也 佐藤春夫先生」とあつた由。煙草を庄野君がくれて、四、五日ぶりにのんで甘かつた。帰りに門まで送つて行つたら、「中尾先生がゐりなかつたら、もつと話すことがあつたのですが——お嫁さんのことや、いろいろロマンチックなこと」僕曰く「もう四、五度の会談で徐々に承りませう。」

この記述中、疎開直前の佐藤春夫氏を訪れた林富士馬、庄野潤三、三島由紀夫氏等が、アルコールの余力を借りて若さを爆発させ、師もまた短冊に酔筆を運ぶさまが眼に浮ぶ。昨十九年十月七日附田中光子さん宛伊東書簡で、佐藤氏がまだ伊東等の詩に期待する旨を「文芸春秋」に書いてゐたのを伊東は悲しんでゐたが、それは敗戦の兆……歴然たるなかにも超然として志を屈してゐぬ佐藤氏を悲しんだのである。その佐藤氏の超然たる醉態がこの日記によく浮び上つてゐる。林、庄野両氏は酔ひにまぎれて短冊の文句に註文をつけて甘えてゐるが、三島氏に關しては特別な記述がない。三島氏の「私の遍歴時代」(昭和三八年一月一七日東京新聞)によると佐藤氏を訪問したのは一回とあるから、まだ甘ええないのか、林、庄野

氏等とは別種な客観的立場にゐたのであらう。翌二十八日の日記は通勤事情の困難と食生活の困窮の状況を伝へてゐる。

「このころは、電車するぶん混んで、到底朝の出動時間に間に合はぬので、学校に泊ることにしてゐる。一時間一回の発車で、しかもくる車来る車が大満員で、連結のところは勿論、窓にも腰かけ、腰をかける」と

崖の道に

浅野 晃

崖の道に日は傾き
風は樹木と傾く

かして川波は
光と小舟を揺する

疲れた歩みが黄昏を呼ぶ
われらの上に夜が傾く

泣くな父よ

泣くな子よ

若きらが列伍も
号令の声も傾き

平沙に遠くかの黒い山も
この無数の灯火も

更けた銀河も傾き
倚りそふて歩むものも

いよよ傾き傾いて
さやうなら 別れてゆく

泣くな夫よ
泣くな妻よ

(昭和二〇年一月二十九日、大阪府南河内郡平尾村菅生高岡清方より東京都世田谷区大蔵町一九七-一 栗山理一宛封書)

友人達の住所録まで焼失して了つた伊東は学校に残つてゐた「文芸文化」でからも栗山氏の住所を知り、連絡の便りをしたわけである。罹災から四ヶ月半も経過してゐる。随分水い虚脱状態が続いてゐたわけである。伊東は選詩集が出たらそれを記念とし、住み古りた大阪を引払つて長崎か諫早かに帰郷

大阪は猥雑不義住むに堪へない気がし

す。それで諫早か長崎の田舎に移住しようと思ひ、最近弟の結婚によつて近しい姻戚になつた長崎高女の校長に頼つて転任の運動を初めてをります。うまくゆくと思ひます。東京目黒書店からその内に出すことに約束した選詩集を大阪生活十六年の記念にして来春は故郷に帰ることになるのぢやないかと思つてゐます。向ふで生活が思通りにゆくなら、小説を書きたいと希望してゐます。奇妙なことに、近來わたしはやや肥えて(約一貫目)、健康です。心持も静粛、孤独を保ち得てゐます、林君の通信によつて皆さんが佐藤先生と共に軒昂としておいでになることだけは知つてをります。林君らは大阪から「まほろば」をつづけて出すさうで、元氣なその原稿見て喜んでゐます

今日は久しぶりに妻子の家にかへり、小さい部屋で子供らが邪魔して書かせません

十一月二十九日 伊東静雄

栗山さんの宛名を、今日学校に一冊残つてゐた「文芸文化」を見つけ出しそれで確かめることが出来たのです。

ころには皆立ち上つてそれでも身動きも出来ない。屋根の上を上る者さへある。うつかりすると三時間も眠て待たされることがある。さうしてのつて、半死半生の態で目的眠ておろされる時はぐつたりなつてしまつてゐて、一日何も出来さうにない程だ。このころの食事、朝ジャガイモ三個位。ひるは大豆粉のだんご。夜、一合足らずの米にジャガイモ入れたもの。おかずはなすびかばちやなど。」

日記は八月だけで終つてゐる。前述の生きてゐるだけがせる一杯の生活事情と、教へ子達の死が次々と報じられる悲しみしかなかつたからであらう。

伊東は十一月下旬になつて初めて蓮田の盟友——栗山理一、池田勉、清水文雄三氏に次の書簡を送つてゐる。

「栗山さん 池田さん 清水さん
まことに久しぶりでございます。皆様御近況何もかも知りたく存じます。そして切に会つて色々お話したくあります。終戦になつて、先づ第一に、友人達に会ひたいと思ひました。私は七月十日の明方に罹災。家財の大半と書籍の全部を焼失しました。家族は表記の百姓家に、私は学校の宿直室に暮してゐます。」

しようとしてゐる。長崎は八月七日原子爆弾の洗礼を浴びてゐた。それは大阪の猥雑不義どころでない暗澹悲惨な呻吟で満ちてゐた筈であるが、長崎は八思ひ出の中で、それらの日は狭く、いい時と場所とをVえらんでゐるので、それほどの悲惨な廃墟に印象されてゐなかつたのかもしれない。健康・静粛・孤独を保持してゐると自負する伊東は、その故郷でじつくりと小説を書くことを意志してゐる。もし伊東がこの願ひのごとく長崎か諫早に引揚げてゐたら、別居生活が原因とみられる肺疾患も予防でき、一篇たりとも伊東生涯の念願だつた小説を、この世に残しえたかもしれない。

伊東は林富士馬氏の通信で池田・清水・栗山氏等が佐藤春夫先生と共に意気軒昂としてゐる由伝へてゐるが、佐藤先生は事実敗戦によつていささかも動ずるところがなかつたやうである。蓮田善明は第二次応召の際にスラブで佐藤先生にたまたま出会い記念の夜光時計を頂戴した因縁があるが、既述した非業の死を佐藤先生は知るや、次の悼詩を鎌倉文庫から出てゐた「人間」に寄せられた。その詩は校正前まで出てゐたが、発売禁止の厄にあふのを懼れて梓に上せなかつた。それを惜んだ編輯員は校正前を三島由紀夫氏の許に送

り、三島氏はさらに先生の清水文雄氏に送った。将来「佐藤春夫詩集」に加ふべき一篇であらう。

哭蓮田善明

すめぐにの
ふみのはやしに
わけいりて
おくがをきはめ
かぐはしき
心の花も
ひらきしを
おほきみの
まけのまにまに
つるぎはき
すめろぎの
とほのみかどに
さむらひて
たたかひの
かたぬうらみに
はぐちつつか
八月二十日
じよほうるに
己がこめかみ
びすとの
たまにつらぬき

たまきはる
いのちすぎぬる
みたまいま
まみがつかへし
すめぐにの
いづくにかます

反歌

まさきくもあれ
といのりし
ますらをの友は
あらずも
なりにけるかな

註、第二四行目ママのまはきの誤植ならん(小高根)

貸室 XIII

その2 萩原葉子

小峰少年は、どこへ行ってしまったのだろうかという思いは、私の頭から終日去らなかつた。
この間のように、ひよつこり尋ねて来るか、電話ぐらいはかかって来るだろうと、思ってみたりもう永久に行ってしまったのだと考

えてみたりしていた。
空き部屋のこと気がなつてはいたが、幹旋所に頼めば、すぐ塞がってしまうのが、面白くなかつた。小峰のいた部屋だけは、やたらに知らない他人に、入ってもらいたくないもう暫く空けておいて、小峰の様子を待ってしようと、思っているうちかなりの日数が経っていた。
「ごめんくださいまし」
玄関の方で、れいの男の声が出て、出ると色の白い顔にピンクのシャツを着た中谷が立っていた。
「あのう、こんなこと申しては失礼でございますが……お怒りにならないで下さいまし」
しなしなと身体じゆうに媚を作るようにして、中谷均は言った。
「わたくしの隣の部屋のことなんでございますの、そういつちやなんでございますが、ああして空けて放しになっておりますのは、どなたか決まっていますんでございませうか？」
返事に迷った私は、自分でもあまいに何を言ったのか、分らなかつた。
「もし決まっていらないでしたら、早く決めておしまいにならないと、不用心でござい

ます。あらあゝ失礼なこと申し上げてしまいましたわ。ホホホ……」
そこで耳たぶまで真赤に染めて、男は恐縮した。ピンクのYシャツの胸から女のような派手なハンカチを出して、首すじや顔を拭きはじめ、あつげに取られてる私に
「あのう、実はお願いがあつて参ったんですが、聞いて頂けますかしら？」と言った。
中谷均の言うところによると、自分の知人で身元もしっかりしている男が、あの部屋を

借してほしいと言っている。迷惑をかけるようなことは無いから、差しつかえなかつたら是非借してほしいと、言うことなのだ。勤め先を聞くと、SK会社と、SK会社の係長というこどだった。SK会社といえは一流の商事会社で、名前も知られてる。
そんな男があんな部屋など何の必要あつて借りるのだらう。それに中谷と知人だということも、不思議だった。
ともかく考えておきますと、私は言つて男

名前

吉本青司

ふるい小箱がある
八嘉永三年
大工 長者村 常次作
西邑長平所有
と書いてある
ある日 虫ほしをしていると
息子がみつつけて
嘉永とはいつごろかという
江戸だという
しばらくして

嘉永三年は
国定忠次が幕府に殺された年だという
年表をのぞいてみると
八月 和蘭キャピタン レファイブソン
將軍家慶に会う
九月 蘭書の翻訳を禁じ 鉄砲の四季打ちを
將助
十月 高野長英 捕吏に罾まれて自殺
と書いてある
——それにして
長者村 常次
西邑長平とは
どんなひとだったか

に帰ってもらつた。
それから毎日のように「いかか致しましたか？」と言つては、やつて来る。小峰からは何の便りもないし、当てもなく空き部屋にしておくのは、中谷の言うように用心も悪い。そうかといつて、幹旋所に頼んでも、どんな人が来るか気を探まなくては、ならないことを思えば、いっそ中谷の申し出を通した方が、めんどうも少ないだろうと、思った。
借して良いと言つと、中谷の喜びようはなかつた。早速本人を連れて来るから、会つてほしいと言ひ、翌日の夕方連れ立って二人は来た。
客間に通すと中谷は知人という男を「先生」と呼び、中谷のことは「キン」と呼び捨てなのが、ちよつと気になつた。
今度は真赤なYシャツを着ていたが、見馴れた故かそれほどおかしな気はしないし、段々田舎臭い感じも無くなつていた。だが仕事はますます異様である。
「せんせい。ほんとに良かったわ。うれしい」と胸を抱きしめたり、
「おおやさんは理解がありますわ」と、私を拝むまねをしてみせる。
せんせいと呼ばれている男は、どこかで会つたことがあるような顔だと、考えていたが

、ふと始め中谷の部屋を見に来た時、一緒に来た男だと、思い出した。

よほど変った顔でない、覚えの悪い私は忘れてしまふのだったが、あの時の二人連れの片方の男とはうかつにも、気が付かなかつた。

それなら、なんのことはない、もともと幹旋所から案内されて来た男なのに、中谷の紹介という事で安心したり、信用したりしたのが、我ながらばかばかしい思いである。

あの時は二人共、私など無視していたし部屋を気に入らない様子で、すぐ帰つてそのまま放つていたのに、と私は思った。

せんせいと呼ばれている「雨宮純一」という男は、背の高い中年男で、もうとっくに妻子を抱かえている感じである。そしてどこかに暗いものがあった。

私の視線からいつも目を外して、何か別のことを考えているように、空ろだ。いつ引越して来るのか聞くと、

「別に引越しというほどの大げさなことはやりません。身の周囲のものを持って来れば良いのです。」とあいまいなことを言う。

「あんな狭い部屋では……」と私が言うと、キンが後を引き取って「いいえ、とんでもございません。仕事の都合でちっと泊まるだ

夜

福地邦樹

夜は僕らを動物的にする

悲しみや喜びや欲望やらが

理屈ぬきになってしまふ

家族だけが寄りそい

安心して物を食べ

または口争いをし

そして疲れて

肝をかいて眠てしまふ

けでございませうから、」と、身をくねらせてみせる。

なんだか狐に化かされたみたいで、二人が帰つた後もさっぱりしない。たとえおやおやというものは、どんな人が入ろうと部屋を汚さず、きちんと部屋代を払ってくれば良いと思つてみても、やはり割り切れるものではないかつた。

その後貸室のことは、また忘れ放しになるほど、私は自分の毎日の生活で一杯だった。

書くことや息子の高校進学のこと、家事等の仕事は際限なくあり、いつも「精一杯の時間に追われ通してあった。」時間がないと口ぐせに喋っているの、まるで流行作家のようなことを言うと、笑われるほど。

或る日息子の入学の用事で出掛け、小田急の座席に座ってから、はっと気がつく、すぐ隣りに鬼林が座っているのには、おどろいた。辛い鬼林の方は気がつかないのか、まっすぐ前を向いていたが、いつ気が付かれるか分らない。もし電車の中で「おやおやいたのか？」等と言われたらと思うと、生きた心地はなかつた。

せつかく外出して、わずらわしいことは忘れていたのに、おやおやということのために、

が走る。……」

「それにこのごろときたら、隣りの男と夜つびで話し声がして毎晩、気になって寝られねえじゃないかよ」まるで私が中谷であるように怒っている。

隣りの男という、雨宮純一のことだらう「せんせい」という時の様子が、どうもへんだと思つたが二人はちつとおかしいのだろうか。

ともかく鬼林には、注意しておくからと言つて、帰つてもつらた。

萩原朔太郎手記

「浄罪詩篇ノオト」A

竹越三男編

咏嘆以外に短歌なし*

*これは以下の歌論の題目であらう。以下は玉指筆書きであるが、これはインキで大きく、後で書きつけたらしい。

*人間に咏嘆的気分が無くなると歌は滅亡する、人間に感傷が無くなつたとき詩は滅亡する、人間に真実になくなるときあらゆる文芸は死滅する。

*以下のこの歌論は、発表を予想しながら、鉛筆で

こんな思いをしなくてはならないのかと、情けなくもあつた。

次の駅で子供連れの女に、鬼林は立つて席をゆすつている隙に、私はあわてて下車してしまつたが、それからはまた会うのではないかと、心配でおちおちできなかった。

それとも、私があわてて下車したのを知つていたのでないかと思つて、心配になつたりだつた。

数日して鬼林はやつて来た。

「中谷均という男のことで、ちよつと伺いたい。あの男は何の商売の人間かちよつと聞かせてもらいたい」私のことでなくてほつとしたものの、中谷がなんの商売だつて他人のことはおおきににお世話であらう。だがそうは思つても意気地なしの私である。

国家公務員の勤め人だと答えていた。

「ふん。何だか知れないけどよ。まったく得体が知れない人間というもんですよ」

「なぜですか？」私は当らずさわらずいつた。「なぜもこうもない。わしの見たところじや変体というもんですよ。だいたいあの女のような、話し声が気に入らねえんだ」男のくせしてやれ「わたくしいやだわ」とか、やれ「ごめんくださいまし」なんぞと言つて、虫づ

書き流し、さらに後日黒インキで加筆したもの。一部赤鉛筆で補訂した所もあるから、二回手を入れている。

自分は所謂歌人ではないが歌には相当の経験もあり且つその経験には深い自信があるからこの評論を書いたのである、書かずには居られないから書いたのである。

人に咏嘆的気分が消滅したとき彼は既に歌を詠む資格がないのである、当然彼は詩にはいる。

人々に感傷が消滅したとき彼は詩をつくる資格がないのである、当然彼は戯曲或は小説或は他の芸術にはいる、人に真実が消失したとき彼は全々芸術家の資格を失ふ、当然文芸と縁を絶つべきである。

資格がないといふことは既に必要のないといふことである、必要のないのに詩歌を作るといふことは真実がないといふことである、之を別の方面からみれば形式に囚はれて居るといふことである、必然性のない芸術はすべて遊戯である、典形に囚はれて居る芸術は生命を所有しない。

歌は咏嘆を出でず万葉出ない、といふわけのべる。詩(広義の)とは何等の叙述又は何等の理智

の力を借りずして自我のリズムそのものを直接に言葉或は「文字」と書いて抹消、符号に複写したものをいふ、自我にとつて最も深い詩とは最も完全に自我のリズムを發揮したものをいふ、然ればリズムは何物にも束縛されてはいけぬ、調子はリズムを表現するために最上の武器であることはいふまでもない、けれども所詮は手段であり方便である、方便のために肝腎リズムがコー束されてはいけぬ。

この理由で自由詩形（所謂今の詩）が最も進歩した詩であり、調子本位の詩（歌、俳句、新体詩）はそれよりわ低級な詩であることはうたがひを入れない。

人が詠嘆するとき言語は自然一定の調子を生じる、これが七五調であり、詠嘆調であり、短歌である。

古人が始めてあつまはやと詠嘆したときにその言葉は短歌であつた、短歌の形式はうたがひなく詠嘆が生んだものである、元始の歌及び万葉集の歌は悉く至純な詠嘆である、技巧は万葉に至つて洗練の極致に達した。

万葉以後歌は専門的に研究され驚くべき発展を示した、新古今集に至つて歌はその到達する至上の域に迄、（或はそれ以上）に到達した、すなはち万葉の純情一点張をあきたらず

として更に一脈の象徴味を加へ玉のやうな触覚と玻璃のやうな浸輝とを尊重した。

この時代の歌人が感觸の粗荒な万葉の歌を野臬ありとして斥けた心持も余にはよく理解が出来る。

試みに新古今集から左の一首を類例として評価しよう、だれも知っている歌であるから特にこれを選んだ。

×ほと、ぎす鳴くやさつきのあやめぐさ
あやめもわかぬ恋をするかな

少しく注意して見るときこの歌が主観の形式をとつた客観の歌であることに気がつくであろう、勿論この歌にかぎらずすべて新古今時代の名歌と称さるゝものは主観と客観と混和して一種の漂渺たる象徴味を生じたものにかぎられて居る、当時の歌に於ては言葉を言葉として取扱はずに言葉をリズム中の一有声音として使つて居る、したがつて言葉そのものには何等の字義を有して居ない、例へば上例の歌にしてもこれを言葉の字義通りに解釈すれば極めてくだらぬたゞことにすぎない、単に技巧を弄した浅薄な遊ギ歌にすぎない、併しにもかゝらずこの歌をしづかに低吟するとき何びとも初夏晩春の人事風物ややるせない年少の情調が夢のやうに漂渺とたゞよつて居ることを感ずるのは何のためのあろうかのである。

けれども長年月の間に彼等の歌に対する感觸は著るしく洗練されカミノリの刃の如く鋭敏になつて居た、その感觸は専門的に驚くべき発達をとげた結果歌に濁音の入るのを怖るゝ程の神経過敏になつた。

所謂枕詞、かけ言葉なるものは決して後人の考へる如く技巧のための技巧ではなくして言葉と言葉との間に漂渺たる象徴リズムを發現するための方便として彼等が好んで用いたも

土地

浅田 二三男

場所もわろかったが

とにかく

道が消えてなくなつてしまいました

幅一メートルたらずの野道です

飢えた両側の田んぼが

道を囓りはじめ

そうしてついに

むしゃむしゃと

食つてしまつたのです

それでも

そのあいだ
数百年はかかつているかもしれませぬ

帰り途をふさがれ

みんなは

山のとっぺんへ登つて行きました

すこしずつ棚田をこしらえながら

そうして

ええ眺めや

観光地にどうや

というのもあり

余つた米で作つたドロクを

かくれてのむのもおり

お野菜ばかり
つくつて居るのもあります

。言ふまでもなくこれらの歌は至純な詠嘆でなくして立派な象徴歌である、「ほと、ぎす」とか「さつき」とか「あやめ」とか「恋」とかいふ初夏の景物を連鎖する言葉と言葉との間には、それは容易に門外漢にキユすることの出来ない程微妙な密約である、言外微妙の陰約が用ゐられてあるからである。

この場合に「ほと、ぎす」「さつき」等の名刺以外の言葉は悉く言葉でなくしてリズムそのものになつて居る、「あやめもわかぬ恋をするかな」といふことは言葉の語る意味とは重大な關係がなく単に象徴のための適当なりズムを表現した一有声音にすぎない。

歌もこの境致に達すると全々音楽と一致する故に言葉は全くその第一義の定義を失ひ、根底から理解をはなれて感知すべきものへ以上字には抹消を付すゝとなるのである。

世界に歴史あつて以来新古今集程技巧の洗練された詩歌を見たものはない、かやうな至大な芸術はかの短歌をもつて生活及び生命の全部とした当時の貴族が幾代かの長い間の修養と努力とによつて、洗練に洗練しつくされた後の至尊貴重な産物である。

勿論彼等は象徴といふやうな言葉は知らなかつた、又芸術そのものの性質についても深く考へたことはなかつたのである。

全くその生命を失つた、古の歌人にとつては自己の生活即ち自己の歌であつたのが後世の歌人に於ては全くその生活と歌とがかけはなれて居た、然のみならず、彼等後世の成上り歌人には到底古歌の洗練された象徴味を味ふことが出来なかつた、それを味ふには彼等の感覚があまりに理性的であまりに遲鈍であつた、そこで彼等は単に技巧の末技にはかり眼をつけ始めた、古今集が立派な高等遊戯として解されたのはこの当時の喜劇であつた、かうして歌は墮落に墮落を重ね全々形骸ばかりの遊ギ文学とまで成下つたことは説く迄もない、明治以後に至つて万葉集が称導されたときの絶叫は、技巧をすて、内容をとれといふことであつた、新派和歌の絶叫もそうであつた、當時に於ては勿論当然の反動で怪しむにたりないが尚人々が古今集の外骸のみを知つてその真〔髓〕を感知することが出来なかつたのは事実であつた。

最近に至つては歌は二度驚嘆すべき発達をとげた、そして象徴歌の問題も現にやかましく喧嘩され始めた。

かうして万葉、古今等の古歌が漸くにして正当の理解者をうる時代になつたのである。

こゝで余は最も冷静な最も嚴肅な態度をもつて、万葉と古今の優劣を批判しなければなら

ない。

古今が万葉よりいでて万葉より進歩したものであることは上述の如くである。

然り、たしかに絶大の進歩である、けれどもその進歩が果して歌としての正当な行路であつたであらうか、ところが不遜ながらも余自身は古今以後の歌の生命とせる象徴味を最も正確に理解して居ると信ずる一人である、少なくとも自分は古今及び新古今の最も正当な理解者であると固く信ずる、それにもか、はらず、余はそれらの各歌よりも却つて万葉集の卒直な吟嘆により多くの感動を与へられるのである、更にまた万葉集の歌をより優れた芸術と考へるのである。

思ふにその原因は二つある。
第一は真実の厚薄である、万葉歌に於ては悉にしろ叙情にしろ悉く作者の燃えきつた熱情からほとばしつて居る、その純ボク至純な吟嘆には一点の虚偽を認めない、之に反して古今以後の歌には真実以外の遊ギ……少なくとも遊ギと名づけようべき類のものがまちつて居る、たとへばその多くは象徴のための象徴である、元来象徴なるものは主観が燃焼しきつた場合に至上芸術がとるべき必然の形式であつて、かの概念のための象徴、即ち象徴のための象徴に至つては遊ギに近いものである、

かういふことは最も我々に反感を抱かしめる

第二、元来詩の生命がリズムの全躍にあることは上述のごとくである、そして調子なるものはリズムの変流する或は吟嘆或は哀傷或は祈禱或は冥想等それぞれのリズムによつてどうにも変化するのである、然るに「短歌が元来吟嘆の調子を本位とした芸術である以上、この形式に吟嘆以上のものあるものを盛らんとすることは勞多くして効の少ない試みであるといはねばならぬ、一〇この括弧は何かの覚えとして付けたらしい」

古今以後に試みられた象徴味なるものは勿論優雅一点張の極めて般困のせまいものである、ハ、二字不明の象徴といつても矢張吟嘆的気分を主として象徴味を注加したものにすぎないのであるが、それにもか、はらず歌としては失敗に終つたのである、所詮歌に象徴味を注加した試みとしては成功をしたにもか、はらず第一義的には却つて失敗したのである、何故ならば短歌の生命は吟嘆以外に出ないといふことに気がつかなくかつた。
すべて古今以後の歌がどことなく生ぬるく感ぜられるのは主として以上のやうな理由によると思ふ。
芸術はすべてその本義を忘れたときは墮落で

桐の花以上に出てはいけない、然らざるものは悉く歌としての直接さを失ひ感動を失ふことは明らかである。

象徴歌を称へる人々は必ず古今集の失敗を考へなければならぬ、而して新古今集の技巧が洗練の妙致に達したものであつたといふを、考へて見なければならぬ。
(技巧とは表現の手段をいふ)
うたがふものは試みに我々を最も感動さした

古今の歌に就いて見るがい、例へば若山秋水氏の歌集の中で最も感動と直接さをもつて居るものは「水上」と「別離」である、北原白秋氏の「桐の花」である、石川啄木氏の「一握の砂」と「悲しき玩具」である、晶子女史の初期の恋歌である。

そしてそれらの歌が悉く豈漫な吟嘆的気分で充たされたものであることを考へて見なければならぬ。

小歴史

小高根 二郎

出 藍

「尊称」にさえ 嘯みつく次第……

「きみ」「おい」「おまえ」「おかアさん」
四種の呼び名を YOU に贈った。

「きみ」 には「ハイ」
「おい！」 にさえ 「はいッ」
「おまえ」 にも 「はい」
しかるに「おかアさん」の尊称に
しばしば 「……」

黙秘権の発動だけで ことたりず
仔鹿したがえ とくろを巻く YOU

憶良は子等を眼に入れた。
俺は心臓に入れてるんだ……
喰意地のはつた男の子
ビービー ドンドン 腹をくだす。
「この餓鬼めが……」と どやしつけると
当年九才の その小坊主
「このちぢいめ！」とぬかしおった。

天 命

五十にして 脱殻 たるを知る

カツバ・ブックス

Y 1110

受験番号五一一一

塚本康彦著

彼の、ちよつと類のない率直さは、この日記にも、あざやかに躍動している。それは、戦後青年によつて初めて書かれた、清潔爽快なグイ・セクスアリスであり、あるいは、心あたたまるアイウィー・コノツイブ（神曲）でもある。
(橋川文三)

光文社

ある、あの洗練の極に達した新古今の技巧には何人も敬嘆しなければならぬが、新古今の歌そのものを芸術として万葉以上に尊重する必要はない、何故ならばそれらのケンランたる技巧も必竟は邪道のための技巧にすぎなかつたから。

今日我々の生活は古人に比していちじるしく豊富になつて居る、勿論詩材に於ても感覚に於ても彼等の夢想だになしえなかつた新鮮な多くのものを所有して居る、順つて我々の吟嘆と古人の吟嘆ではその深みがタツチに非常に懸隔がなければならぬ筈だ。

併しながら我々はそれらの吟嘆以外には何ものをも短歌にもつてはいけない(少なくとも

*新妻莞氏広田菜氏等の所有する精霊的リズムは私のリズムと共鳴するところが多い、余はこの人々の歌に最も同情をもつものである、けれどもこれらの人々の歌が歌として非常な欠点をもつて居ることは否定することが出来ない事実である、極言すれば本来歌人向でないこれ等の諸君が何故自由詩を作らずして歌をつくるかといふことに余にとつての大きな疑問がある。

*新妻莞は尾山篤二郎編集の「異端」(前出)の同人。

広田菜もこれに準ずる者であつたらし、その創刊号に

「幻の魚群」と題し歌を載せている。(明太郎は本篇を

「異端」に送る草稿のつもりで書いたのかもしれない。) かつて余は三味線を改良して西洋楽曲を演奏する企てを試みた人をきいた、古き皮ぶくろに新しい酒を盛ろうとして小さい壺に多量の水を注ごうとした人を見た、かくの如く余は常識の欠亡からくる多くの笑ふべき試みを見き、して居る。

所謂破調を称へる人はあきらかに歌に囚はれて居るのだ、典形に囚はれることを非難して居ながら実は最も典型に囚はれて居る人々だ、彼は一方にピアノのあることを知つて居ながら、又三味線では自分の感情を充分に表現することが出来ないことをよく知つて居ながら、しかも尚手慣れた三味線を手放すことが

近代文芸複製叢刊

『氷島』詩稿

呻吟で歌いあげられた朔太郎の窮極の詩業「氷島」。収めるところの廿一の詩稿中……現存する十九篇の生原稿を紀伊国屋の原稿用紙もろとも複製。活字前の詩の原形は、訂正・補筆の筆痕も生々しく天才の鏤心彫骨を物語る。まこと「氷島」は朔太郎個人の宿命の呻吟であるばかりでなく、時代のそれであつた事実を知れる絶好の資料。

限定 三五〇部
頒価 一一〇〇円。

21周忌
記念刊行

冬至書房

東京都中野区上高田五ノ一三
振替東京 八七〇四番

出来ない気の毒な人々である、ものぐさで臆病で未練で頑迷な人々である、そして同時に三味線の美音をき、つくしハこの間五字判讀できないVの人々である。

要するに歌は万葉に尽きて居る、何万年のちと雖も歌の境致は万葉を出ないことは明らかである、言ひ代へれば至純な咏嘆以外、短歌の居るべき境致はないのである、断じてないのである。*

*朔太郎は本篇の中で、自分の歌に対する経験と、古典歌に対する鑑賞眼とについて、自信のほどを示しているが、彼は明治三十五年(中学三年生)から「愛憐詩篇」時代の大正二年末までに、「文庫」『明星』『スバル』『木犀』その他に合計二百首以上を発表し、多数の歌をノートに書きつけた。彼の歌の最終段階である大正二年作の百二十四首は、「愛憐詩篇ノオト」で見ることが出来る。

後年(昭和六年)世に出した「戀愛名歌集」は、朔太郎の生涯の名著のひとつに数えらるべきだと思ふが、そこに現れている古典歌に対する彼の批評眼は、既に本篇においてその骨格が出来ていることを示している。

編輯後記

五月七、八日。劇団「雲」の「夏の夜の夢」公演で西下してゐた福出恒存氏と連日お会ひした。談たまたま蓮田善明のことになり、その死は芝居になりましたね……というお話であつた。丁度、本号の拙論で蓮田の死の場面に遭遇したが、これをドラマとして立体化したならば、或ひはもつと別の意味が発見できるかもしれない。

五月十七日。午後〇時四〇分から讀光テレビで萩原葉子さんの父・朔太郎の詩を心にがあつた。一日の前編での朔太郎先生二周忌を中心にしたものであつた。先号から「愛憐詩篇ノオト」を偶然……連載したのであるが、或ひは先生の魂の呼びかけによるのかも知れない。

この日夕刻、美奈を見に上落された清水文雄氏にお会ひした。蓮田の絶作「有心」の板間に關し、氏の根本的な見解をお聞きしておく必要があつたからである。

五月十九日。塚本康彦氏よりカッパ・ブックス「愛憐詩篇ノオト」に於いて送りたい。四年前の「古典と現代」誌上で、氏が初めて正當に蓮田を論してくれたことは忘れがたい。

五月二十九日。冬至書房の中島善彌氏より上掲の「氷島詩稿」をお送りいただいた。私は暮春から応召まで「氷島」と共に過ぎた思ひ出があるので、先生の声咳に接してゐるやうな喜びを感じた。それにしても五月は心裡を訪れる故人で賑はつた。季節外れの長雨のせりであつたのかもしれない。(〇)

果樹園 第八十九号 (毎月一回一日発行)
昭和三十八年七月一日発行

編輯兼 池田市野町一六八
発行所 小高根 二郎
大阪市東住吉区桑津町五の八
印刷所 元市印刷株式会社
池田市野町一六八
發行所 果樹園 社
定価 三十円 送料 十円

果樹園

第90号

詩人、その生涯と運命 小高根 二郎
足摺 岬 詩篇 吉本 青司
薫 風 浅田 二三男

ヘリック 詩抄 森 亮
枕 カバ 福地 邦樹
貸 室 萩原 葉子
フライパン 堀之内 歴
無言の夏 浅野 晃
浄罪詩篇ノオト 竹越 三男 編
編輯 後記

詩人、その生涯と運命

書簡と作品から見た伊東静雄(七十八)

小高根 二郎

昭和二十年十一月末伊東は学校に残つてゐた「文芸文化」によつて栗山理一氏の住所を思ひ出し、書簡をだしたところ、応答があつたので、十二月初旬にさらに次の書簡を送つてゐる。

「御近況わかつて安心しました。近々お目出たの由、御安産を祈ります。どうぞ御大切に。学校焼けたのですか。折角のお骨折が実を結ばず実に残念でしたね。色々物倦いこともあるでせうが、やはり、できるだけお仕事して下さい。私達の選手になつて

又学問や文化の団体をいつも監視しておいで下さい。自分が長崎にひつこむ決心をしたにつけてもそのことを、あなたにお願ひしておきたい気持ちが切であります。わたしは、このごろは一日も早く長崎にゆき、小説を書きたいとそればかり夢みてゐます。時勢のせいに長崎に退くばかりでなく、是非さうしたい文学的な希望も積極的原因になつてゐるのです。それはここでは申しません。林君らの「まほろば」に何かの形式でそれを表してゆく計画をたててをりますこれは私の文学的前途を賭けてゐることなのでしつかりやるつもりであります。池田さんの独居も随分永いものです。一日も早く奥さんが帰京されればいいと思

ひます。池田さんに頑張つて下さるやうお伝へを願ひます。大阪は十六年になりますので未練はいささかもないのですが去らうとすると実にさまざまのことを考へます。そして、それが私の今の生活に大へんい影響を与へるやうであります。時勢を堪へる痛切さと二重になつて、一種異様な沈静な音楽と色彩とを感ずるのであります。それに四十歳といふ心理的生理的変化が伴奏してをります。

今日は一週間ぶりに帰宅し、寒いままに昼から赤ん坊と床には入り、これを書きました。きたない手紙になりました。

十八日 伊東生

栗山理一様
(昭和二〇年二月八日、大阪府平尾村より来)
(京都大蔵町、栗山理一宛封書)

伊東は栗山・池田両氏の近況を知り、その滞京の意志が変つてゐないのに対し、さいはての長崎に引籠る自分の決意をひれきしてゐる。「色々物倦いこともあるでせうが、やはり、できるだけお仕事を下さい。私達の選手になつて又学問や文化の団体をいつも監視しておいて下さい」と言つてゐるのは、「コギト」「文芸文化」共に戦争を賛賞した元兇として排撃されるにいたつた時潮をさしてゐるものと思はれる。その極端に反動に走つて

るの時期に對し、伊東は學問や文化の団体を監視しておいでくれと言つてゐる。八月十五日の玉音放送を聞いた後「何の異変も自然におこらないのが信ぜられない」と伊東は言つてゐた。それは反省の契機だつた。その反省はまだ契機のままの状態に留つてゐるのであらうか？ 或ひは、原爆による未曾有な被害でいまだ呻吟してゐる長崎に、わざわざ引籠つて小説を書きたいと願つてゐる「文学的な希望」の底には、反省を契機としての懺悔でもしようという心づもりなのだらうか？ その作品を林富士馬氏が復刊を意図する同人雑誌「まほろば」に発表するのに、伊東は文学的前途を賭けると言つてゐるところから推すと、日本浪漫派としての闊歴を一応空無にして、振りだしに戻つて再出発をする覚悟であつたのかもしれない。

十六年の青春を蕩尽した大阪と別れるに當つて、その回顧は「時勢を堪へる痛切さと二重になつて、一種異様な沈静な音楽と色彩とを感ずる」と言つてゐる。この沈静な音楽と色彩は、中期の心理的生理的変化に伴奏されて、その後一年九月も伊東の心底でオルゴールのやうに鳴りつづけ、「小さい手帳から」(昭和二年九月)に結実するのである。伊東は落日前にひろがる築地や家の影の中に

、沈静した白や黄の花々をみつけ、音楽のやうな明るい静穩にうたれながら、その情緒はわか肉體をつらぬいて激しく響いた光のこれは終曲か
それともやうやく深まる生の智慧の予感か
めざめと眠りの
どちらに誘ふものかを
誰かをしへてくれることが出来るのなら
う

と歌ふのである。
つまり、これから反省と共に新しい世に目覚めるのか、それとも過去の栄光の思ひ出と共に眠りこむのか？ の、重大な分岐の時点に、伊東は佇んでゐるわけなのである。

明けて昭和二十一年の一月末、帰郷を決意した伊東は、伊東のファンである亀山青年に次の書簡を送つてゐる。

「置手紙拝見し、御厚志ほんとううれしくありがたく存じました。少しこのごろ被害妄想の氣味になつてをりましたので、捨てる神あれば助くる神ありといつたやうな有難さを感じて心持が甚だゆるやかになつた感がありました。御両親様にもこの感謝充分にお伝へ願ひます。さてその御返事です

が、昨日日曜家に帰り家内と相談した結果左の通りに決定しました。即ち、やはり四月の始めまで現在のところに我慢すること理由。(1)家内も責任上、黒山高女に三月末迄は退職出来にくいこと。(2)まき子にまた新しい学校に、それもほんのしばらく転校さすのが可哀さうなこと。(3)そのお家にひつこしてまたやがて二ヶ月後には長崎にかへるその慌ただしさ手数の煩雜に思はれること等であります。果して三月末には長崎に私が転任出来るやうに具体的に決定することも危ぶまれますが、その時はとにかく妻子だけ一先つさきに帰しておかうかと予定してゐます。とにかく我慢出来がたいところを我慢するより外に仕方あるまいといふ甚だ消極的なところにおちついたのであります。

云つて下さつたお家に行けば、あなたも、又あなたの御家族とも、大阪生活最後の二、三ヶ月を充分お親しく暮せるといふ大きな魅力を感じつつ以上の様な決定をいたしましたわけでありませう。

二十八日
伊東静雄

亀山太一様
(昭和二十一年一月二十八日、住吉中学校より大阪)
(昭和二十一年一月二十八日、住吉中学校より大阪)
(昭和二十一年一月二十八日、住吉中学校より大阪)

亀山氏は昨年七月十日の堺の空襲直後、逸速く北三国ヶ丘の焼跡を見舞つてゐた。又、掲載を省略したが、昨年十一月二十三日附伊東書簡に、亀山氏が香里への移住をすすめてゐる事実が示されてあつた。亀山氏は住吉中学を訪れ、その不在中に香里中振への移住を再度すすめる置手紙をしたのである。亀山家は丘の上にある宏壮な邸宅である。その邸内の離れにでも伊東一家を招くつもりだつたのだらう。このせつかくの親切に、伊東は滞在二ヶ月という短時間のために要する事務的心理的煩雜さをいとつて、応じなかつたのである。

二月末、伊東は移転した北余部から教へ子である齊田昭吉氏に次の書簡を送つてゐる。

「病氣のこと、心配かけてすみません。神経衰弱と相俟つてどうも快方に向ふとは云へぬ状態で、いやです。先日も電報いたいたけれど、作品おくる目あてもなく失礼しました。何もかも転機で、ちよつとやそつとでは立直れないのでせうと観念してゐます。せつかくい舞台だから、お祈りをする上げて、額を畳につけて、精神集中して作つてごらん下さい。私も若い意力の強い頃はそれを敢てやり、そして実力を出し切つたといへる作品をつくつたことがあ

りました。それは愉快な思出であります。

(二月二十四日、大阪府南河内郡黒山村北余部)
(より東京部台東区上野公園内美術クラブ)
齊田昭吉宛はがき

伊東は一月末の亀山氏宛書簡では香里への移住を断つてゐたが、それより一と月もたぬまに、平尾村菅生より僅か大阪寄りの黒山村北余部に移住してゐる。長崎転勤のめどが立たなくなつたためか想像される。伊東は神経衰弱になつてゐる由見えてゐるが、長崎に帰る夢、そこで散文に転身する希望が、あへなく潰えたための欲求不満が内攻したからか……と思はれる。

齊田昭吉氏はたしか八雲書林かに務めてゐた。そこからでゐた雑誌に伊東の作品を求めたのだらう。が、「何もかも転機」という理由で、伊東は執筆を断つてゐる。精神的にも肉體的にも敗戦のいたでからまだ立直れてゐないのである。

三月の二十八日中支蘇州から復員してきて一週間ばかり世田ヶ谷四丁目兄太郎の家に休養してゐる私は、誰から私の復員と居所を聞いたのか、若い編輯員である齊田君の訪問をうけ伊東の消息を聞いた記憶がある。

五月下旬、伊東は諫早に帰郷した酒井百合子さんに次の書簡を送つてゐる。
「お葉書ありがたうございました。姉から

皆様諫早にかへつていらつしやることおききました。私は無理にひきとめられて住吉中学に居ます。物価騰起や食糧難の中でどうにか生きつづけてゐます。発疹チブスはずつかり全滅しましたから、どうか大阪に立寄つて下さい。そちらのお話もききたいです。私はこのごろ田舎に一軒家を見つけて移り住み、安楽な氣持で一年ぶりに自由な生活が出来喜んでゐるところです。ほつほつ友人からも帰還して来ます。少しづつ氣持もにぎやかになりつつあります。

大阪は治安もだいぶよくなりました。強盗など殆どないといふことです。物価は相変らず高くなり、食糧も段々ひつぱくして来るやうですが、今の氣持はやはり少しづつおちついて来てゐるのぢやないかと見てをります。御両親様方は久しぶりの諫早住ひでいろいろおなつかしいことや、又反対に幻滅なことやがらありであらうとお察してゐます。では、どうぞよろしく御伝へ下さい。また、一寸前に通知して下されば駅までお迎へに出ます。」

(五月二三日、住吉中学校より長崎諫早)
(市原生町四一六、酒井ゆり子宛はがき)
伊東は自分達一家が帰らなかつた諫早に、酒井一家が帰つてゐる由、実姉の江川ミキさんからのたよりで知つてゐたのである。伊

東も昨二十年十一月上旬、弟寿恵男君の結婚で帰郷し「長崎に久し振りにかへり、改めてその美しい風景、しつとりとした人情、ゆた

足摺岬詩篇

吉本青司

伊佐

朝明の足摺岬が近くになると
ほくの乗った船はすこく揺れた
体の血管が収縮して
手足がしびれるようだった
伊佐の港が近づくと 波もおさまり
やっと甲板に立つことができた
はしけに移って波止場にはいると
ゴツゴツと茶褐色の岩がせまってきた
ベレ帽をかぶった客が
へさいはてだなあ……
といった
小雨のふる朝明のちいさな岩壁に
伊佐のむすめが
子供をおぶつた姉らしいひとを出迎えた
そして いきなりその肩に手をやると
何ごとかはげしく慟哭した

かな物資等を見直して」(昭和二〇年二月三三
日尾山太一氏宛書簡
)のたのである。平尾村から黒山村に移転して
、戸障りもなく畳もなかつたやうな家であつ

この人生の断面をここにたたむと
ほくはひとり足摺岬に向つた

足摺岬

樹海のトンネルを
どこへとも知らず歩いていくと
急に視界が開けて天狗鼻に出る
足摺岬の断崖に
海が白い波がしらをぶつつける
ソソクと降りやまぬ
潮鳴り 木鳴り
太陽の表情によって変る自然の色彩
このデラックスな展望に
沈着な感情を導入する純白の燈台
その人工の立像が
休暇をたのしむひとびとの眼を
無限の視界に解きはなつ
パスの通り曲りくねつた道が
終るところに始まる美しい未知……
やがて ハイゼンとくる驟雨さえ
その白い指先に湧く
雲のオーケストラだ

東門

なんとなく
岩の突っぱなに立ってみたくなる
自殺者の気持ってこんなものか知れない
引きとめるものと
誘うものとの この微妙な均衡
こいつがくずれると
あの突っぱなからの誘いに負けてしまふ
むかしこの足摺山の僧が
普陀落渡海をしたという記録がある
ひとり小さな舟にのつて
無限の海にただよう気持は
最高のスリルだったにちがいない
足摺岬の先端に
一夜建立の鳥居というのがある
いまは倒れたままになっているが
ここはむかしの普陀落東門だ
雨水をたたえた礎石のとなりには
大きな石の顔があつて
ほりの深い眼がぐっと宇宙を睨んでいる

この不動の石のころを

ひとびとは意外に見のがしてしまふ
へ死ぬなんてまっぴら

鳥

足摺岬の鳥は ばかに人なつこい
餌でもほしいと言いたげに
断崖を吹きあげる気流にのつて
トンビが ほくの頭の上を滑空する
そして 羽の青い 胸毛の赤い小鳥が
そこの天狗鼻にきてとまる
たつたいま樹海を浴びてきた鳥だ

燈台

波に磨かれた石が
庭いっぱい敷いてある
どの石も
赤さびて球形だ
そこから 岬の燈台が
まぶしく
高く 見あげられる

事務所で一日の勤めをへたわかい女が
まだ暮れるには間のある街路をあゆむ

青葉した並木や焼跡ののびた雑草の緑に
少しづつ疲れを回復しながら
そしてちとわが家の夜の茶の間を思ひ

たが、とにかく一軒家に移住して「安楽な気
持で一年ぶりに自由な生活」ができる由、書
いてゐるが、いささか羨望の思ひを味つたこ
とであらう。それにしても「今の気持はやは
り少しづつおちついて来てる」とあるので
、二ヶ月前の神経衰弱は諦念によつて治癒し
つつあつたのだらう。酒井小太郎先生と婦美
夫人は久しぶりの諫早住ひ、G・H・Qの通
訳をしてゐた模様の百合子さんは帰京する段
取りになつてゐるのであらうか、伊東は駅頭
への出迎へを申し出てゐるが、酒井家に対す
る伊東の忠実な心情は、戦後といへどもいさ
さかも変つてゐない。

伊東は友人らの復員で「少しづつ気持もに
ぎやかになりつつ」ある由しるしてゐるが、
この五月に富士正晴氏も中支から帰還してき
たのであつた。又、転機をもとめつつも、な
ほ方途をみだしえずに低迷してゐた伊東の
気持をにぎやかにしたのは、林富士馬、庄野
潤三、島尾敏雄氏等の同人雑誌「光耀」が刊
行されたことであらう。伊東はそれに戦後最
初の作品「都会の慰め」を発表したのである

都会の慰め

商人らは映画を見ない 夕方彼らは
たべ物と適量の酒と冷たいものをもとめ

浮へる

そこに帰つてゆく前にゆつくり考へてみ
ねばならぬ事が
あるやうな気がする
それが何なのか自分にもわからぬが
どこかに坐つてよく考へねばならぬ気が
する

大都會でひとは何処でしづかに坐つたら

いゝのか

ひとり考へるための椅子はどこにあるの
か
誰にも邪魔されずに暗い映画館の椅子
じつと画面に見入つてゐる女学生や受験
生たち
お喋りやふざけ合ひから——お互の何と
いふことはない親和力から

やつとめいめいにひとりにされて
いちらしい横顔 後姿

岸の崩れた堀割沿ひの映画館 かれら
はそこで

暮れ切るまでの時を消す
暗いなかでもすぐに仲間をみつめて
何かを分け合つては絶えず口に入れる
かれらは画面にひき入れられない 画
面の方が

友人のやうにかれらの方に近よつて来る
そしてかれらは平気で声をあげてわらふ
事務所づとめのわかい女は
かすかな頭痛といつしよに映画館を出て
来る

もう何も考へることはなくなつてゐる
また別になんにも考へもしなかつたのだ
街には灯がついてゐて
彼女はただほんやりと気だるく満足した
心持で
ジープのつづけさまに走りすぎるのをし
ばらく待つてから
車道を横ぎる

第四詩集「反響」

「春のいそぎ」期の作品に比して非常に散
文的になつてゐることに氣附く。もつとも婦
郷して小説に専念することを夢にした直後の
作品だから、散文的になつてゐるのは当然だ
らう。又、あまりに散文的な世上の風景を即
物主義的な手法で描写してゐるのだから、当
り前の結果であると言へるだらう。読者はこ
ゝで伊東の訳詩に新即物主義の詩人エリツヒ
ケストネルの「事実のロマンス」(Sachliche
Romane)があつたことを思ひ出していただ
かねばならない。伊東は昭和七年の「呂」十
一月号でその訳と解説を「談話のかはりに」

と題して発表してゐたのである。

事実のロマンス

互に知合つて八年
(それだつたらいい仲と言ふものだ)
急に二人の愛情がなくなつてしまつた
世間でステッキや帽子がなくなる様に
二人は悲しかつた わざと快活にした
何でも無い様にキスしてみた
そして見つめ合つてみた がそれから先
がわからなかつた
そこでしまひに女は泣いた 男は傍に立
つてゐた
窓からは舟がいくつもツインク出来た
男は言つた もう四時と十五分だね
時分だ そこらで珈琲飲まうよ
隣室で人はピアノをさらへてゐた

二人は土地で一番小さいカフェに行つた
そしてめいめいの茶碗を掻きまぜるのだ
つた
夕方はずつと其処に坐つてゐた
二人だけだつた そして何も話さなかつ
た
たやすく話はみつからないのであつた

しなければならぬ時勢であり、世潮であつた
その日本を、この「都会の慰め」中の映画館
で皮肉つてゐるともうけとれるが、伊東の鑑
照は事実を照らす「鏡のやうに……」という
ただの率直さにあるのかもしれない。
この「都会の慰め」と同様に「事実のロマ
ンス」の舞台も、言葉すくない沈黙の場面で
あることは面白い。二人は八年の間に話とい
う話をしつくしてしまつたからだ。しつくし
てゐなければ、別れる運命とはならなかつた
かもしれない。その話のみつからぬ二人に聞

えてくるのは、隣室の気随意なピアノであり
避けられぬ外部の雑音なのである。しかも二
人はカフェを出れば、映画館で偶然落ち合つ
た人々が映画がはねればちりちりに別人とな
るやうに、赤の他人として別れてゆかねばな
らぬのである。そして別れる時が同じく夕方
か宵の口であることまでそつくりである。
私は別に「都会の慰め」がケストネルの「
事実のロマンス」からヒントを得たものと
言ふわけではない。ただ「都会の慰め」を作る
ときの心境が、戦前あるいは戦中の昂揚し

薫風

浅田 二三男

一本ずつうえた
苗さんが
しばらく見ないうちに
かわいらしい
ぶんけつをして
等間隔にならんでゐる
溪間をわたる
さわやかな風が

水の上をすべり
苗さんのあいだを
くぐりぬけ
げんごろう
どじょう
めだかなどが
じつにたのしく
あそんでいて
いまはもう
なんにも
考へることが
ない

伊東は新即物主義を「なるべく事物に即し
明澄な鏡での様にこの紛雜した世界に對し、
それを透徹しよう」というもくろみである
と解釈してゐたが、それと似たやうなもくろみ
で、第二次大戦後の紛雜した世相の一角を照
射し透徹しようという意図がうかがへる。
伊東は岸の崩れた堀割沿ひの映画館を、都
会の中の考へる椅子、或ひは時間を消すレイ
ジュアの場所、ないし待合はせの空間として
設定してゐる。この闇を人工した空間に、家
に帰るまでに何かを考へねばならぬやうな氣
になつたビジネス・ガールを入场させてゐる
。彼女はそこで女学生や受験生、それからパ
ンパン・ガールと同席して映画を観る。が、
彼女等のやうに映画の方から同化されぬ孤我
の氣質は、軽い頭痛という違和感と一緒に映
画館をでるのである。

この場所は囁きしか許されぬ沈黙を要請さ
れた暗い空間である。聞くことだけが許容さ
れる一方的な音声の世界である。言はゞ占領
下の日本そのものである。戦時中の大声叱咤
や呼声を忘れたかのやうに、虚脱した日本人
はぶつぶつという囁きか唾のやうな沈黙しか
できなかつた。日本政府も機関も民間組織も
執行力を失つて、なにをするにも「進駐軍の
命に依り……」という、一方的な声を頼りに

きた境涯から脱皮する手段として、事実をし
て、事実の重量をして語らしめ歌はしめると
いう新即物主義の意図を、伊東は思ひ出して
ゐるに相違ないことを、私は言ひたかつた
けである。

丁度その頃の伊東の心境を物語る庄野潤三
氏の好手の文章がある。

「コンドル裏の飲屋で僕らが出会つたのは
丁度そのような時期であつた。

伊東先生は僕の顔を見るなり、いきなり
からむやうなことを云ひ出したけれど、
僕は悪意と云ふものはちつとも感じなかつ
た。これは、僕が先生に会はなかつた二週
間足らずの間に、先生が漸く新しい詩作の
方法が決りかけて来て意気が上つて来て居
られたからであつた。

先生は、一日おきに街に出ることに決め
て、都会の詩を作つてゐる。中略……
詩が二つ出来た。一つは、パンパンガ
ルが都会の虚無の中に生活してゐて、その
中で自ら都会の慰め——それはさゞなみの
やうに起つて来る——を受けてゐる。さう
云ふところを書いたもの。題は「都会の慰
め」こんな詩を二十位かきたい。君もさう
云ふ作品を書かねばいけない。
伊東先生は、それを大変元氣な調子で云

はれた。酔つて居られることは酔つて居られたが、僕はその勢ひにすつかり圧倒されてしまった。同時に、永い間模索して居られた詩作の道がやつと開けて、一つの方法を見つけたのだなと、心に嬉しく思つたのだつた。」(昭和二年「祖国」伊東静雄追悼) 伊東が「君もさう云ふ作品を書かねばいけない」と示唆した意向は即物的な取材をせよということだつたらう。又、庄野氏がいう伊東が永い間の模索によつて開いた一つの方法とは上述した新即物主義の再認識と開眼であつたやうな気がする。

伊東は七月上旬、復員して再び宇治に帰つてきた私に次の書簡をくれてゐる。

「御無事のお帰り何よりです。大概帰つて来て心がぎやかです。然したれにもまだ会つても、文通も、してゐません。中島さんはまだなのではないですか、その留守宅もはつきりしません。あなたのこれからの活躍たのしみです。斎藤君から手紙貰ひました。「コギト」に密接した雑誌のやうですが、どういふ風なものになるのでせうねあなたにも是非一度お会ひしたいです。私はやつとこのごろ立直り、仕事ははじめました。」

(七月五日、大阪府黒山村より京都府宇治町、小高根二郎宛はがき)

所持品を再び袋に包んで退場しろというのだつた。特に検査官殿はスピードがお好きだから、もしのろのろとした者を発見したら極の棒が遠慮なく頭に飛ぶであらうと宣言した。かつて萬歳を唱へてくれたあの紅唇である。

ヘリック詩抄(三二)

森 亮

讃歌

——ミニエズの神々に——

気高いお姿をなんと言つて讃へよう、湧き出る才知の泉のほとりに坐つて思ふさま手に掬ひ、喉を潤すあなたがた。

栄光につつまれてこの礼ひを受けられよ、わたくしをいつも励ましてくださる九人、美しく乙女さびていらっしやる神々よ。

いみじさは魂をも蕩らす歌の調べを堅琴の絃に合はせてわたくしが歌ふすべ歌ふたくみを、お授けください。

昭和十七年十月末に応召渡支以來……丸三年五ヶ月ぶりで私は日本に帰つてきたわけである。その間、学徒動員で特攻隊の訓練を受けてゐる少年と文学的な文通があつた。共に復員したら一緒に文学雑誌を出さうという夢を書いてよこしたりした。文芸春秋新社にゐる榎原雅春氏もその一人だつたが、文中の斎藤吉郎氏もまたその一人であつた。東大法科に復籍した斎藤氏は、どこでどうして私の住所を知つたものかわざわざ西下してくると、約によつて文学雑誌を出さうと提案した。出資者は新炭業で成金の某のことだつた。潰滅した「日本浪漫派」の旗挙げをして、日本文学の源流だけは守護しようという意見が一致した。誌名は「斑鳩」と決つた。諸方に「コギト」「日本浪漫派」「四季」の同人や寄稿者中で消息不明者の照会をだした。私は伊東に執筆方を依頼すると共に中島栄次郎氏の消息を訊ねたのである。伊東は「斑鳩」という誌名から「コギト」に密接した雑誌と推察したやうであるが、作品を寄せるとも寄せぬとも言つてこなかつた。私には伊東の煮えきらぬ態度が不思議であつた。東京の斎藤氏から北佐久に疎開してをられる佐藤春天先生の原稿を入手したという喜びの便りをよこした。それから間なし「日本読書新聞」かの切

その変貌ぶりに私達は愕然とした。展示の用意ができる肩を組んだ検査官と彼女は一巡し、そのリズムに彼女は乗つてゐるのである。時に彼は身をかがめ展示品の中から何か

あなたがたを讀へて歌ひ参らせまますほどに、僧形のわたくしの頭にも冠らせてください月桂樹の緑葉を、わたくしが世を終るまで。

★

自分のこと

世の中からも、己れからも離れてぼつねんと今ここにわたしは大理石の下に置かれて誰にも見られず、聞かれずに、沈黙の底で。

ヘリックは全行押韻した三行詩や、この詩形を積み上げて一篇の詩にしたものを時々作つた。ミニエズの神々への「讃歌」(七七九)もその一つである。讃歌とは言つても甚だ身勝手な物で、神話といふ伝統的空想を利用して、僧職に就いても詩には未練があることを美しく巧みな言葉つかひで(それが彼の詩法のすべてであつたが)述べて、詩人たるの覺悟を新たにしてゐる。「自分のこと」(九五五)も全行押韻の三行詩で、墓の中から歌つたことになつてゐる墓碑銘的作品、詩集中では後期に属する物か。

抜きと出資者の出版忌避の意向を伝える斎藤氏の書簡を買つた。切抜きには軍閥に脈絡のある右派の復活を撲滅せよ! というやうな憎悪の文字に充ち満ちてゐたと記憶する。その文面に出資者の新炭氏は恐れをなしたのである。僕は補充兵あがりの上等兵で愚癡無知の詩人であつて軍閥とも右派とも関係ない。むしろ書くところの優柔体の詩や小説が、戦時中いかかとはばかられたほどの軟派である。斎藤氏にしてからが、いやいや馱りだされた学徒動員の特攻隊の難で、文字に志を燃やすことでもなくも死の恐怖を忘れようとした紅顔の少年であつた。ただ二人ともせめて残つた山河の美を後の世に語り伝えることをその日の生甲斐にしようとしただけだつた。

私は三月二十八日博多に上陸すると、直ちにアメリカ兵の所持品検査をうけた。そのときの屈辱の場面は今に忘れられない。首筋からD・D・Tを体に吹きかけられたポタ餅のやうに不様な恰好をした我々は、広間に押しこめられた。そこにアメリカ兵と肩を組んでアメリカの兵服を着てゐるが明らかに大和撫子が現れた。二十一、二である。彼女は背負袋を解いて、袋であるテントの上に所持品を展示するやうに命じた。そして検査官殿が一巡し「よし!」という声がかかつたら二斉に

を掠めた。ダンサーは私に近附いてきた。私は彼女の変貌ぶりをつぶさに検分してやらうと身構へてゐた。カツプルは私の前でしげらぐ止ると、彼女は毛深い手を伸して所持品の中から鑷切付ナイフを奪つた。凶器に変貌することがあるとでも判定したのであらう。やがて「よし!」という声がかかつた。この屈辱の上に榎棒の痛のおまけでもつけばまさに泣面に輝だから、被検査者は迅速に所持品を袋に包み直した。この作業は中国引揚げのときにも何度か経験すみの熟練者ばかりであつた。が、唯一人例外があつた。日本上陸と同時に当番兵を失つた聯隊長である。下士官上りで中国女の妾を蓄へてゐた下等な将校だつた。自分と当番兵と二人がかりで運んできた慾張つた所持品は、まだ四分の一も整理できないのである。タンズが終つて一服してゐた検査官殿が跳んできた。右手の榎棒が一閃して聯隊長の頭が「カン!」と音高く鳴つた。かつての大和撫子——パンパン・ガールが宣言した通りであつた。

この敗残兵としての屈辱は、廃墟となつた都市を通過することに、拭ひがたい汚染となつて心にしみついた。まだ妻帯してゐなかつた私には、あの変貌した大和撫子から受けたシヨックは大きかつた。真近かで検分した彼

女の浮気な瞳孔には、私達敗残兵なんぞ展示されてゐるみすばらしい官給品以下にしか映つてゐぬやうであつた。私達は石鹼のかけらだ。ちり紙だ。雨にたたかれて酸酵してゐる粉末味噌だ、醬油だ。靴下に詰め込まれた家を探し当てるまでの糞粒だ。雨水が汚染になつてゐる棉製のシャツとズボン下だ。いや、それ以下のなにかだ。さう、母国の女性達にとつては去勢された魔馬相当だ。

このインフェリオリティは富士の秀麗な姿を見た頃から、少しづつ癒えてゆくのを感した。恐らく世田ヶ谷四丁目の家は灰燼に帰してゐるかもしれないが、戦時中に寡婦となつた老母は生きのびてゐて、私を迎へてくれるかもしれないという、かすかな期待からだつたかもしれない。いやいや、それは、恐縮だが拙詩が歌ふところにお聞きねがひたい。

生還

小高根 二郎

五年前、門出をしたあの日を、そのまま

に
富士は夢かのやうに、車窓にまばゆかつた。
小田原……横浜……川崎……と、列車は

疾風となつて過ぎると

汽笛はしきりに吹き鳴らされ

望郷の思ひは、一時に、はり裂けるばか

り
その音につれて、夕日色した、桃トタン
のバラックから
父や、子供や、夫の帰りを、まだ、待つ
希望のある

子供が……老婆が……モンベ姿の女房共
が……、弾け出てきて

無言ではあるが、手を振り、手を振り、
敗残の私達を、出迎へてくれた。

生きて還つた喜びから、つひ、私も手を
振り応へたが

私は発見けた！ 出迎者の群のただ中に
手を打ち振らぬ、ねんね姿のお神さん
を、一人――

列車が過ぎると、その人は両掌で顔を掩
つて、バラックに駆け込み

生還の喜びに甘へてゐた私は、思はず、
声を呑んだ。

つまり、この愚癡無知の子供が、老婆が、
モンベ姿の女房達の愛らぬ善意、逆立ちして
ゐぬ正気が、流産した「斑鳩」刊行の基盤と
私は愚かにも夢想したのであつた。

枕カバー

福地 邦樹

ねむられぬ夜があるのは
良くないからと言つて

おまえが作ってくれた真白な枕カバー

空色の糸で縁の縫取りがしてあつて

新しい木綿の匂いがかすかにする

この枕に頭をしずめると

遠くにいるおまえが身近かに感じられる

心なしか前よりよく眠れるようだ

埒もない夢に乱されやすい私の夜を

おまえのやさしさが守ってくれるようだ

に上らなくなつた。彼は何か彼の過去に背
を向け、解放感をたのしんでゐるやうに見
えた。彼は大へんおだやかになつてゐるや
うだつた。〔昭和二十八年「祖国」富士正晴〕
この文章に天皇の終戦放送を聞いた以後の
伊東の変化がよく現れてゐる。あの日、「何
の異変も自然におこらないのが信じられな
かつた」が、今は信じられすぎるほど信じられ
るのである。それと共に今までの価値の倒錯
や歪みが自然の位置や均衡に戻り、猛然たる
自己嫌悪を伴つて戦争に關する一切を嫌悪し
憎悪する状態になつてゐるのである。富士氏
の感情は多分に反動的にすぎることが、「世の中が
左翼化すれば左翼化し右翼化すれば右翼化す
るのが当然」とする傾向は、もともと伊東に
はあつたのである。それは便宜主義といつた
思想的なものというより多分に生理的な傾向
だつたやうである。朝礼後の体操に涙ぐむあ
の感動性の陥穴である。「呂」時代の「事物
の本」にへ従順な決心が真に欲ばしいとあ
り、へ陽の躍く中をゆき、まもるべき自分
はないのを発見する。私の手にふれたがる道
花らに触れながら、私は林を進むとあつた
。この従順な決心はもともと伊東が彼自らに
要請した美の資質であつたのである。しかし

富士正晴氏が復員したのは私より一ヶ月遅
れて昭和二十一年五月だつた。彼も私と同じ
く中支派遣軍に属してはゐたが、清郷地区の
警備に當つてゐた私の矛部隊と違つて、彼の
属する鯨部隊は中支・南支に転戦したので
復員が若干遅れたわけである。

富士氏は復員するとすぐ住吉中学校に伊東
を訪れた。

「戦争がすんで復員したわたしは戦闘帽と
軍服のまま住吉中学校まで出かけて伊東静
雄にあつた。彼は戦闘帽や軍服をはなはだ
不愉快があつた。彼は大東亜戦争をものすご
く憎んでゐて、戦争がすんでほつとしたと
言つた。わたしは「春のいそぎ」のころの
伊東静雄を思つてゐたので、一寸あつけに
とられた。

わたしは戦争中ウルトラ右翼だつた連中
が忽ち左翼化してゐることを少し非難した
が、伊東静雄は、人民としてそれが当然だ
といつた。世の中が左翼化すれば左翼化し
右翼化すれば右翼化するのが当然ですよ、
それが良いのですよと言つた。……中略……

終戦といふものは、伊東静雄の上にも大
きく影響してゐた。「春のいそぎ」のころ
しきりに彼の口には、彼を内らから鼓
舞してゐた保田与重郎のことも余り口の端

、このへ手にふれたがる道の花らに触れゝる
従順さは受動的である。へ守るべき自分はな
い」という受け身からやつと免れてゐるとい
どの従順さである。それが「夏花」末期にな
ると、従順さに能動性が加はり、随順という
意志の姿勢が感じられる。へ手にふるる野花
はそれを摘み、花とみづからをささへつつ歩
みを運べゝとなるのである。触れたがる花に
受動的に触れるのでなく、自然な均衡の姿勢
で触れる花に触れ、触れるだけでなくそれを
摘み、そのうへに携行するのである。従順と
いう受動的な決心は随順という能動的な決心
に昇華し成長してゐたのである。

貸室

XXIII

その二

萩原 葉子

中谷均という、女のような男と、雨宮とい
う男はやつぱり何か、あるのだろうか。雨宮
の勤め先の会社は名も知れてゐる所で、しか
も係長だというのに、そんなことはあり得な
いように思う。

その上妻子もいるらしく思われるのは、疲
れた顔やもの憂い動作でも、察しられそん

人間があやしいとは、考えられない。何か誤があるのだろうかと思つた。

中谷のへんな、言葉とピンクや赤のワイシャツはちよつと変っているが、それも大して珍しいものではない。

近頃の若者は皆派手なシャツを着ているし、男のような乱雑な言葉を使っている女性もいる。街などで後から見ても「男だろうか？女だろうか？」と、考え込んで分らないほど、今日では男女の見分けがつきにくくなっている時代である。

それよりも気になるのは、鬼林自身のことである。酒乱の傾向は別としても、この中谷の忠告に來た頃からずつと家にいて、出勤している様子がないのである。

窓は早朝から夜遅くまで開いていて、相変わらず娘にどなり立てている。いっそうの不機嫌で娘にぶつけているようだ。

娘はそのたびに「父ちゃん、もう止めないんならあたし帰っちゃうよ」と泣き声を挙げている。

ここへ來た時はまだ膝の出たスカートをつけ、ほんの少女だったのに最近はずつかり娘らしく成長して、しかも美人である。

鬼林とはまるで違った顔つきで、親子には見えないほど顔立が良い。道で会ってもちや

言うだけで、来てくれるとは言ってくれない。

。追いつくことができる位なら、何も電話などかけないのに、と私は腹立たしく男の顔を思い浮べた。

部屋を頼む時や客を連れて來る時の、あのわざとらしいほどのお世辞は、一体どこへ行つてしまったのだろうか。鬼林を連れて來た時も、良い客だと言つてすすめたのに。

それでも受話器を握つたまま、一所懸命になつて頼み、にえきらない幹旋所の男の応答に疲れていた。「困りましたね、あのトラックの運転手の男ですか？酒乱ですか？ホウノそいつはいけません……。そんなことをするなら一度ここへ寄越して下さいよ。」

そんなことの繰り返しを聞きながら、鬼林が家の中にあはれ込んで來ないかと、両方に氣を使っていたが、支関が開く音がして、帰つたと分つた時は、ほっと生き返つた思いだった。

私が電話をかけている間、鬼林は大いびきをかき始め、寝たふりをしているのだと思つた妹と息子は、そつと警戒していると、垂らした首をタタキ石につくほど前にのめつて、ぐつたりしてしまつた。と言うのである。

その様子が氣の毒になるほど、今日の鬼林は疲れ果てているらしいのだ。あの年まで家

んとおじぎをするので、うっかりしている時など、こちらがまごつくほどだ。時々支那服など着ている時は、挨拶されても分らないほど美しいのである。鬼林の娘と知らなかったら、どこのお嬢さまかと注意を惹くだろう。鬼林は半月も部屋代を遅く持つて來ると、支関に出た私の息子に、大声を挙げた。「遅くなって心配しただろう！」

無言の夏

浅野 晃

無言の夏の炎熱が語るのに
しばし耳をかたむけよう
これこそ地上での至福の時だ
われらの長からぬ旅路で
すでに何十遍とめぐりあつたこの季節
夏——
無言の夏の炎熱の
なんと身に泌みて語るることか

無言の夏はわたしに語る
汝よくこの日まで生きたと
汝よくこの処まで歩みつづけたと
風が木の葉をゆるがして過ぎ
満山をこめて蟬が鳴きいそぐとき
夏は語る 無言の炎熱もて
汝なほ生くる日のかぎり
勇氣と信を失ふなと
わたしの影を濃く地に歩ませて
わたしの夏は語る
無言の夏の炎熱は語る
ああこの地上での至福の時

もなく借間暮しをしているようでは、やっぱり不能力者だろうが、それも酒が災いしているのは、怖ろしいことだと思つた。

その後二ヶ月経つても、やはり鬼林は勤めるふうもなく毎日家にいて、部屋代は遅れるばかりだった。いっそ払わなければ契約を解除できても、持つて來るのでその度にがっかりする。娘は最近すつと來ないらしく、声も姿も見えないのは、とうとう父親に愛想を失つてしまつたのだろうか。
或る朝ラジオで〇〇ちゃん誘拐犯人の声が

「今年いっぱい契約が切れるわう。ことに、おやおやに意向を聞きたいと思う。おやおやに会わせてくれ！」

息子は内辨慶で、こんな時何も言えないのは、私と同じである。妹を代りに出すと「あなたは誰だ？」と、一層不機嫌の声をし

「わしはあなたに用はないんだ。契約したのはおおやなんだから、おおやが帰つて來るまでここで待たせてもらおう。」

そういつて支関にどつかと座り込むと、腕組みをして頭をがっくり垂れた。酒臭い息は奥まで臭ってくる。思いつて私が出て行って交渉する勇氣がでたとしても、今日の鬼林はとても荒んでいるので怖い。

こんな時女世帯の不自由さを感じ、男が出て一喝すれば案外の弱さできつと、おとなしくなるに違いない、のだと思つた。がいま更の主人に來てもらう訳にも行かず、考えた末この男を世話した幹旋所の男に來てもらおうと、考えた。

電話をかけて、済まないがと頼むと、顔馴染になつてゐる小さい男は「困りましたね」「追いついてしまいなさい」と、事もなく

流れて、何気なく聞いている内、どこかで聞いたような声だと思ひ、注意して聞いていると、鬼林の声に似ていると思つた。

〇〇ちゃんを誘拐した犯人は、悪質で金銭を取つた上に子供を殺してしまつたのである。警察は犯人の捜査に躍起になつてゐた。

もしや？と不吉の思ひに囚われ出すと、私は落ち着かなかつた。鬼林の失業やあの態度、それに娘の姿も見えないことも、一致する。もし鬼林が〇〇ちゃん誘拐殺しの犯人だったら、私はどうなるのだろうかと思つた。証人として引つ張り出されたらうに、新聞にまで書かれることは、間違いない。

そうなつたらどうしようと、心配になり出すと、何も手につかなかつた。鬼林ならばやりかねないという気がしたが、まさかそれほどの悪い男ではないと、落着いてみたりするのだった。ふと、今度はどこかで妙な声がしているの、何だろうと思つと前に小峰のいた部屋に入った中谷均の声だった。少しノイローゼにかかっているのだと耳を疑つたが、「あたしくし、お待ちしていたんですの、それなのにあんまりよ、ホホホ……」
たしかに中谷のあの声であつた。この部屋はどんな小さい音も手に取るように聞こえるほどに、母家と接近しているが、今日迄ついで

この部屋にいた小峰の声など、聞こえたこと
もなかった。中谷の声も始めてだった。

「あたくし一人では心細いのよ。だってお
二階の鬼林さんは怖いし、ほんとに寂しいわ
」

相手の雨宮の声はしないが、中谷の甘い声
はまるで恋人に囁やく女のようなのである。

二人はどんな具合に座って、こんな会話を
交わしているのだろうか？向き合っているの
か、それとも中谷が雨宮の胸にすがるように
、身を寄せているのだろうか？つまらないこ
とが気になり始めると、鬼林の心配と重なり
ていよいよ気になって来るのだった。 つづく

萩原朔太郎手記

「浄罪詩篇ノオト」A

竹越三男編

月夜の晩に八抹消「闇夜の晩」

犬が
柳の木をめぐって居る

この犬は何物かを感じして居る

犬の心霊はあきららかに光って居る 八抹消「あき
らかに光る核心がある」

八一行判読できない
八抹消「この地球の自転は遠心力に」

「牽きつけられて居る、地球は」

「然れども犬の感能せる物」

亀について*

* 題目だけを書きつけたのであろう。

犬*

月夜の晩に
犬が柳の木を 八抹消「墓場の墓標を」めぐって
居る

この遠い地球の核心に向って吠えるところの
犬だ

八抹消「犬の心霊はあきららかに光るかやいて居る、犬の
心霊は清く、犬の迷走神経はあるしかなる」

彼は透徹すべからざる地下に於て深く〇がれ
たるところの主人の八抹消「金銀貴金属」金庫を
感知することにより

而て金庫は斐翠及び夜光石を以てみたまされて
ゐる

吠えるところの犬はその心霊に於てあきらか
に白熱され

その心臓に於て螢光線の放射の如きものを肉
身に透影する、

フライパン

堀之内 歴

ボクらは正午の炎天を 公園に来ていた

プラタナス樹は 白く瘠せてあった

彼は軽装になり 眩しげに言うのだった
へ脱ぎなさいよ まるでフライパンだ

私は殊更に陰のない砂地を歩んだ

厚苦しい着衣に 無用な威儀を作って

熱気が恰かも我が生涯に いま莊嚴さを
：と ふと おかしさが湧くのであった

友は去り 残されて私はなお立っていた
惑る魅惑に酔い痴れて まなこ据わり：

彼なた 古鏝瓦館の高い屋根は緑色

ボートもない川の水面に重い皺

このとき フライパンから声

へカサくになれ 土になれ

一九六三・六・三〇

この青白き犬は前足を於て固き地を掘らんと
して焦点する、

遠い遠い地下の世界に於て微動するところの
ものを明確に感知したところの犬である、

犬は感傷し、犬は疾患し而してその直視する
ところのものを掘らんとして、月夜の晩に焦
心する、

* 本篇は「詩歌」(大四・二)に発表した「密房秘記の
一部吠える犬」(後に詩集「蝶を夢む」の散文詩の部に
収載)の原形であり、このすぐ前に出ているのが、ここ
にいたる過渡形である。

柳*

夜に於て光る柳の葉は薄き金属の碎片である
、光る柳の木は靈性を有するところの感電白
金体である、およそあらゆる樹木のうち動物
電気知感に於て鋭感すること霜かれ月の柳
の如きものはない。

手に兇器を所持して、人畜の内臓を電裂せん
とするところの兇賊がある、彼の八抹消手は

その愛人の額に光る鉦石を射撃せんとして震
リツし、かつ発光するところの手を所有する

、また兇器はその生あた、かき心臓の上にお
かれ、生ぐさき夜の靈智の呼吸に於て点火発

いかんぞ天地草木山岳金鉦の類と交感知足す
ることあらんや、

凡そ凡俗の輩の見るところかくの如し、

花鳥樹木はその形骸を写真するときに於て聊
かも悶心なし威容を損滅せず、

但しその心霊を描かれたるときに於て万象は
惘焦震悸す。

八抹消「いふところの詩人とは何ぞ」

動物心理学者

植物心理学者

動物心理学者

いふところの芸術家とは正しく斯の如きをか
ねたり、詩人の天爵何ぞ片々たる物理学者、
哲学者の低位にあらんや、凡そ人類至高の玉
冠の戴くもの正に我徒の外にあることなし。

愛より生る、ものは魚、魚より生る、ものは
詩人、詩人より生る、ものは愛、而して詩人
より生れざるもの、愛は真誠の愛にあらず、

凡そ真に愛を感知するものはその最初の刹那
に於て悶絶す、

愛より生る、魚を称して我は恋魚と呼べり、

その恋魚は靈肉の間に浮遊して我の死脈を制
す、そのまれに泳ぐときもつとも青明光輝体

萩原朔太郎

三好達治著

朔太郎との最初の邂逅から四〇年、「地上に存在した無二の詩人」として、今なお愛らぬ敬愛を捧げる著者が、二十余年にわたって発表した論文、随筆から自選、始めて一巻として世に問うもの。この優れた二人の詩人の出会いによって生まれた本書こそ後世ながくその存在を主張するだろう。

¥ 三五〇

筑摩書房

東京都千代田区神田小川町
振替東京四一二三番

なり。

魚が愛より生る、ことを最初に知覚したるもの世界に於て室生犀星を一人とす、
賤民室生照道は巷路に彷徨する一酒徒にすぎざるも詩人室生犀星は人類史上に於ける未曾有の大科学者にして同時に尊権無比なる帝王なり。

若し日本人にして世界人類の上位に高座するものあればその第一位を所有するもの当然室生犀星以外にあることなし、何となれば現代に於ける政治家、学者、実業家、宗教家、芸術家及びあらゆる事業並に創作に於て彼の詩扁の如く光明体なるもの一も見ることなれば也。

*「前年来朔太郎が心酔した犀星の詩によく魚が出てくるのは知られた通りで、彼ら「人魚詩社」の詩人には、魚は独特の意味をおびたイメージであった。

〔第八号追補〕

「書簡と作品から見た伊東静雄」中、六頁上段で作者不明と論じた詩は、伊藤信吉氏の御教示により、国木田五歩次の「沖の小島」であった事実が判明した。

沖の小島に雲雀があがる
雲雀すむなら畑がある
畑があるなら人がすむ
人がすむなら恋がある

果樹園

第91号

詩人、その生涯と運命 小高根 二郎
おとことおとこと 浅田 二三男
お堀 端 浅野 晃

魚 鱸 吉本 青司
貸 室 萩原 葉子
ヘリツク 詩抄 森 亮
あ こ う 堀之内 歴
浄罪詩篇ノオト 竹越三男編
編輯 後記

詩人、その生涯と運命

書簡と作品から見た伊東静雄 (七十九)

小高根 二郎

この伊東の生理的な傾向で時潮に随順したのだと見るべきだらう。その変向ぶりで富士氏を吃驚させた伊東は、夏の或る日、次のやうな書簡を送つてゐる。

「午前」ではつまらぬ計画をしたものですね、よせばいいのに。あなたまで面倒かけて。又お暇には学校まででも遊びにおいで下さい。このころは正午迄。

蓮田善明君、昨年八月、南方の某小島でビストル自決をやられた由。

私はあれからたつた一篇出来たきり、一寸やすみの態也。」

(昭和二年夏、大阪府黒山村より大阪府三島郡阿武ノ村日赤公舎、富士正晴宛はがき)

「午前」というのは福岡から戦後逸速くでた文学雑誌で、その第二巻第二号で伊東静雄特輯を企画した。「つまらぬ計画」とは、そのことをさすのである。同号に富士氏はエッセイ「伊東静雄」を依頼され、庄野潤三氏は伊東に関する随想「淀の河辺」を執筆し、伊東自ら「雲雀」を発表してゐる。その企画に對し伊東は「よせばいいのに」と卑下をしてゐるが、意識的に自らの過去に背を向けようとしてゐるためかもしれない。

蓮田の死に関して伊東は或るていど情報を得てゐるやうであるが、まだ正確ではない。

編輯後記

六月二日。京都岡崎公園の国立近代美術館でペルナル・ビュツフェ展を見た。「シチ島」一坐つてゐる女(「パル」)「アナベルの像」なぞ心に喰ひ入つた。十年前に見たルオー展よりも、今日性において遙かに私の心を衝いた。それと共に、ビュツフェの技法は特別ま新しいものでなく、むしろ日本の墨絵の技法そのままであるのに驚ろいた。つまり、油絵で描いた墨絵なのだ。日本画家ならば誰でも思ひつかねばならなかつた従来の技法ではないか……という声が、会場を一巡してゐる間中、私の心の中に絶えず起つた。

六月二日。所用で上京したが、人を訪ねるには短かすぎる時間を利用して、京橋の近代美術館を訪れた。日本の民芸展が開かれてゐた。火山列島が宿命してきた暮しの知恵や工夫はいかにか……と、いまさらながらに感じた。木喰上人の羅漢像がづらりとならんでゐたが、一体一体はなるほど念入りで面白いが、群像として眺めたときの不安と離さはまた格別であつた。こゝにもなにか火山列島の陥穴があるという気がした。

六月二日。大朝の詩雑誌評で「わずか十六ページの小冊ながら、読みごたえのあるものがまつてゐる」という褒め言葉の言葉をいただいた。「さ」氏である。いつか書いたことがあるつもりである、時間的に五十年を、一単位にしてゐるつもりである、時間的には五十年を、一とこととする。そのつもりで求永くおつきあひねがひたい(〇)

果樹園 第九十号 (毎月一回日発行)

昭和三十八年八月一日発行
池田市野町一六八
編輯 兼 小高根 二郎
大坂市東住吉区桑津町五の八
印刷所 元市印刷株式会社
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円 送料 十円

自決の場所を某小島としてゐるが、それは蓮田がシンガポールに引揚げるまで進駐してゐたスンバ島が誤伝されたものである。

末尾に詩が一篇できた由を伝へてゐる。「あれから……」というのは五月に発表した「都会の慰め」以来ということだらうか? 「座右室」七月号に発表した「野の夜」或ひは「夕映」、それとも「光耀」第三号の「詩作



北余部の家と辻の地蔵
—伊東夏樹君撮影

の後」のうちのどれかであつたらう。

野の夜

五月の闇のくらしい野を

わが歩みは

迷ふこともなくしづかに辿る

踏みなれた野の径を

小さい石橋の下で

横ぎつてざわく小川

なかばは草におほはれて

——その茂みもいまはただの闇だが

水は仄かにひかり

真直ぐに夜のなかを流れる

歩みをとめて石を投げる

いつもするわが挨拶

だが今夜はためらふ

ながれの底に幾つもの星の数

なにを考へてあるいてゐたのか

野の空の星をわが目は見えてゐなかつた

あ、今夜水の面はにぎやかだ

螢までがもう幼くあそんでゐて

星の影にまじつて

揺れる光も

うごく星のやう

こんな景色を見入る自分を

どう解いてい、かもわからずに

しばらくそこに

五月の夜のくらしい水べに踞んでゐた

しやが

この詩が取材された小川は、伊東が住んで

ゐる北余部のすぐ東方を流れてゐる西除川だ

らう。狭山池を源とする野中の小川である。

数年前まき子さん、夏荷君とに北余部の旧居

を案内してもらつたさい、あちこち詩材とな

つた場所や事物も見て廻つた。「野の煙」の

煙の樹も見にいつたが、二人の記憶の場所、

西除川近くの路傍にすでに木影はなかつた。

伐られてゐたのである。そのときはからずも

、伊東がしやがみこんで水面に映つてゐる屋

肩と螢に見呆けたこの石橋の上に佇んだので

あつた。土提に架つてゐる橋から遙か下に水

面があり、螢と星との交歓を眺めるのに恰好

な高度であつた。その高度が形成する地形の

落差は、また詩に歌つてゐるさほめきを湧き

立たせてゐた。そのさほめきが落ちつくところ

ろ、螢の絶好な棲家である葦の茂みは川の面

を半ば以上も蔽つて、流れの方位を隠してゐ

た。「野の夜」が取材された場所はここだ！

とすぐさま気がついた。

この「野の夜」に对照される作品は「夏花

」期の「夜の葦」である。取材した場所は戦

後

あそこに行はれる日のかはいい祝祭

そしてわたしもまた

夕毎にやつと活計からのがれて

この窓べに文字をつづる

ねがはくはこのわが行ひも

あ、せめてはあのやうな小さい祝祭であ

れよ

飯合それが痛みからのものであつても

また悔いと笑りのない憧れからの

たつたひとりのものであつたにしても

この詩に歌はれてゐる地藏さんは、狭山町

から大阪へ走る街道と、その街道脇にある伊

東の家の前を通る道路とが交叉する地点に佇

んでゐる。△わが窓に

とどく夕映は 村の十

字路とそのほとりの

小さい石の祠の上に：

▽と冒頭にあるとほり

、塀がなかつた当時の

伊東の家からは、つい

眼と鼻の先に眺められ

たのである。伊東の家

からは数間西、西面し

てゐる石の祠は、暑い

ほど西陽をいつばいに

災にあつた北三国ヶ丘の家の直ぐ近くの反正

天皇陵の濠であつた。その濠辺の葦のそよぎ

で、伊東は初めて太白星を発見した劫初の人

の驚ろきに想ひを走せ、併せて揺れ定まつた

六連星に眼を輝やかしてゐる伊東自身を歌つ

てゐた。それは比喩である私は解説した。

日本現代詩史における六連星の一つに、伊東

自らを擬した、自負である私は解説した。

もともと宵の明星は少年の日から希望と自

負の象徴であつた。△宵を浅み建礼門の上に

出し明星はまだ光放たず△の詠がすでに大

時代にあつたことを思ひ出す。それから先の

「夜の葦」における六連星に寄せる自負であ

る。この思ひは戦後になつても変つてゐるわ

けではなかつた。道頓堀の松竹座近くのコン

ドルで伊東は庄野潤三、島尾敏雄氏等とどぶ

ろくを呑むと酔つばらつて、マダムに向つて

「君、僕は日本の金星だ。夕方、一番最初

に現れて、美しく、明るく光つてゐる金星

だ。こゝにゐる若い友人たちもみんな金星

だ。マダム、この人たちを大切に下さ

い」(昭和二年「祖国」伊東静雄)

(追悼号、庄野潤三「反響」のころ)

と、気焔をあげてゐた。

酔えば地がでるこの浪漫派の気焔も、覚め

れば慎ましい内省的な正気に戻つたわけであ

らう。伊東が△野の空の星をわが目はみてる

浴びて輝やいたのだ。△首のとれたあの石像

△とあるが、事實は頭と顔の浮彫りの盛り上

りはあるが、眼や鼻や口の道具が刻んでない

ところから、首のとれた……と表現したので

ある。△形ばかりに刻まれたその肩や手」と

あるが、むしろ形ばかりに刻まれたその頭や

顔……と表現すべきところを、いかにも疎外

された村外れの地藏さんらしい詩的效果を現

はすためデフォルムしたのであらう。地藏さ

んの遊び相手は同じ背丈の村童たちである。

野花をそのまゝ、供花とするのだ。その村童た

ちの無心な祭、目的のない遊びと同じやうに

伊東は自が詩作行為も小やかな祝祭であるこ

夕映

わが窓にとどく夕映は

村の十字路とそのほとりの

小さい石の祠の上に 一際かがやく

そしてこのひとときを其処にむれる

幼い者らと

白いどくだみの花が

明るいひかりの中にある

首のとれたあの石像と殆ど同じ背丈の子

らの群

けふもかれらの或る者は

地藏の足許に野の花をならべ

或る者は形ばかりに刻まれたその肩や手

を

つついたり擦つたりして遊んでゐるのだ

めいめいの家族の目から放たれて

第四詩集 「反響」



花と地藏地缺顔
—伊東夏樹君撮影

とを願つてゐる。もしそれが小やかな祝祭たりうるのであれば、へ痛みが原因のものであらうと、或ひは単なるへ憧れからのたつた一人の祝祭であつてもいいと謙虚に折つてゐるのである。先の「野の夜」における天から降りて幼い螢と遊ぶ星屑の心境とまさしく同じである。

詩作の後

最後の筆を投げ出すと
そのまゝ、書きものの上に
体をふせる

動悸が山を下つて平地に踏み入る人の
足どりのやうに

平調を取り戻さうとして

却つて不安にうちつづける

窓を開け放つた明るい室内に

いつの間にか電燈が来てゐる

目はまだ何もかも

見究めようとする強さの名残にかがやき

ながら

意味もなくそれを見てゐるうちに

瞳の内なる調和に促されて

いつか虚ろになつて
頭脳を孤獨な陶酔が襲つてくる
庭一杯に茂り合つた

いろいろな植物の黒ずんだ葉の重りや
花の色彩が

緻密画のやうに鮮やかに
小さく遠のいてうつる

やがて夜の昆虫のむれが

この窓をめぐり

にぎやかに飛び込んで来るだらう

險がしづかに垂れる

向うの灌漑池では

あのすこやかに枯れきつたいつもの

老農夫が

今日も水浴をしてゐる頃だらうか

濃いい樹影が水に浸るやうに

睡りにふかく沈んでゆく

第四詩集 「反響」

前二作「野の夜」「夕映」と同じやうに、
Schlichに、あるがままの事実を取材し、そ
れに透徹して真実に近附かうとする謙虚な努
力が見られる作品である。「野の夜」「夕映」
に比して一番素朴であるところから、転回
第一番目の作品ではないかと想像される。
それにしても筆を擱くと、そのまま原稿の
上に上体を伏せ、動悸が下山するときのやう

私もそれにつれて、詩出来るやうになり、
方々にのせます。(「座右室」「文化展望」
「女性展望」等五、六)。このごろ又一
寸停滞してゐますが、勉強したいと考へて
ゐます。いろいろ沢山雑誌が出て、にぎや
かでもあり、又書かねばならぬ義理が、う
るさくもあります。三島といふのは、僕が
云つてゐたその人です。このごろ小説方々
に書いてゐます。私の友人蓮田善明君が、
南方の島で、昨年八月終戦直後ピストル自

殺をした由、最近報知をうけました。立派
な人格の人でありました。自殺と云へば八
月の中頃家内の女学校の女の若い先生が二
人で一緒に葉で自殺しました。私も親し
く、品位あり、いい趣味の、才能ある人達
でしたので、こたへました。いい家庭の生
れでした。原因は、大へん仲がよかつたこ
とより外にないらしいのです。この三人の
死を殆ど同じころ知り深い衝撃をうけまし
た。弟は今小浜の農園にかへつてゐます。

おとことおとこと

浅田 二三男

—京のくりかえしことば

あおいあおい

かおをして

たのむたのむ

いうさかい

きつときつと

だいじようぶか

ぜったいぜったい

めいわくかけん

きつうきつう

だめおしして

かとおかとお

やくそくしたのに

もうちよつともうちよつと

いうばかりで

だらだらだらだら

いつまでのばす

はつきりはつきり

きげんをきつた

おとことおとこと

やくそくやのに

ほんまにほんまに

なめとおる

に高鳴るといふのは異常である。それは詩的
表現を越えて、心臓脚気でも思つてゐるかの
やうな肉体的異常さを感じさせる。伊東は肺
を病んで学校を休みみだすのは三年後の昭和二
十四年六月からであるが、すでにその前兆は
こゝに見えてゐるのかもしれない。

詩の末尾に現れる灌漑池は、伊東の家から
南海鉄道高野線の萩原天神駅に至る一軒強の
通動路わきに三つある。その南端にあり、最
大の一つは、周囲に桜を植ゑた堤をめぐらし
てゐる。伊東が歌つてゐるのはそれである。
伊東はその池畔を險の裏に思ひ浮べてゐるが
、それは睡気のせむばかりではなく、道路よ
り入り込んだ伊東の家からは死角に当つて見
えないからであらう。一日の勤勞を終へて池
水に身をそそぐ老いた農夫。いつも見る彼の
枯れた健やかさを特に伊東が思ひ浮べてゐる
のは、枯れるのも待たず細りゆく自分が生命力
を伊東は凝視めだしてゐるからかもしれない
。

伊東は九月中旬次の書簡を酒井百合子さん
に送つてゐる。
「お手紙ありがたう。おつとめが決つて、
まづ、よかつたですね、私共も、無事に、
あまりひもじくなく暮してをります。大阪
はだいぶん人の気分もおちついたやうです

嫁さんが長男を生んだのです。それが面白
いことに、夏樹と同月同日に生れたのです
「夏ちゃんと同じ男が、同じ日に生れたつ
てよ」と云ふと、意味も知らんくせに、な
ぜか急に笑ひ出してころげまはるのです。
それが面白くて、同じことを何度も云つて
夏樹を笑ひこけさせて、はやしたてるのが
しばらくのあそびになつた程です。生れた
子には、私が道夫とつけてやりました。電
燈もない、人里離れた森林中の一軒家で赤
ん坊の世話をしてゐる弟を考へると面白い
です。

お父様は、ほんとお気の毒ですね、こ
んな時勢に晩年をおすごしになるのは、先
生でなくともいやになることと存じます。
私などもまだ老人ではないといふ自励の氣
持だけで、元氣を出してゐるやうなもので
す。

私の今ある家は、——新しく一軒家を見
つけ出したことは書きましたから——広
々した田圃の中で、雲が美しく、毎夕方、
下駄をやつとはきなれた夏樹をつれて、散
歩に出ます。「野の夜」「夕映」「雲雀」
「訪問者」「詩作の後」「夏の終」などと
いふのが、そんな時に出来た詩の題です。
「世界文学」といふ雑誌の七月号に山本沖

子といふ無名の一少女の詩が三篇のつてありますが、それよんで戦後始めて、詩らしい詩だと刺戟をうけました。病弱な日常の生活を素直に、しかし端正な才能ある筆で書いてあつて、いいなあとくりかへしてよんでをります。

さあ、これでもう書くことがなくなりました。又次に書きます。

九月十六日

伊東静雄

ゆり子様

(九月十六日、住吉中学校より東京都世田谷区上馬二ノ八四ノ四開方、酒井ゆり子宛封書)

伊東は冒頭ゆり子さんの就職がきまつたことを祝福してゐる。進駐軍の通訳になつたのである。

例によつて文学に関して伊東はよくおしゃべりをしてゐる。おしゃべりというのは、文脈を立てた文章というよりも、思ひつくま、をアトラダムに話しかけるやうな調子で書きとばしてゐるからである。

三島由紀夫氏のことゆり子さんから話題として出てゐるが、昭和十九年六月末に伊東が上京してゆり子さんに出会つた際、東京で出会つた若い文学の友の一人として話をしたことがあつたからであらう。

又、蓮田善明の死を伝へてゐる。併せて花子夫人の同僚である若い女教員の同性愛心中

雲雀

二三日美しい晴天がつづいた
ひとしきり笑ひ声やさざめきが
表畑の方からつたはつた

誇らしい収穫の時ははつた
いま耕地はすつかり空しくなつて
ただ切株の列にかがんで
いかにも飢えた体つきの少年が一人
落ち穂を拾つてうごいてゐる
と急に鋭く鳴きしまつて

あわただしい一つの鳥影が
切株と少年を掠める 二度 三度
あつ雲雀——少年はしばらく
その行方を見つめると

首にかけた袋をそつとあけて
中をのぞいてゐる
私も近づいていつて
袋の底にきつと僅かな麦とともにある
雲雀の卵を——あ、あの天上の鳥が
あはれにも最も地上の危険に近く
巢に守つてゐたものを
手のひらにのせてみたいと思ふ
そして夏から後その鳥は
どこにゐるのだらうねと

少年と一緒にいろいろ雲雀のことば
話してみたく思ふ

お堀端

浅野 晃

お堀端を歩いてゐる——私
残された一つきりの美しいこの道を
歩いてゐるのは私だけだ
みんなすばやい車の中か
四角い大きな箱の中にある
私だけが歩いてゐて
お堀の水を見たり
芝の緑や松の枝ぶりを見ながら
どうやら私は最後の歩行者らしい

車の中や箱の中では
写したり数へたり弁じたり笑つたり
飲んだり食つたり踊つたり抱きしめたり
人間のゐない人間のつき合ひを
飽きもせず
人間のゐなくなつた人間の
ああしたいとなみは淋しいだらう

も伝へてゐる。一は国運に殉じ、一は同性の愛に殉じたこの二つの異種な死も、伊東にはもはや死は一つとしてしか映つてないやうである。「この三人の死を殆ど同じところ知り深い衝撃をうけました」とあるが、その衝撃は人格や、才能や、趣味に寄せた同じ哀惜の思ひにすぎなくなつてゐるからである。
夕方になると、伊東はようやく下駄をはきなれた夏樹君をつれて、雲の美しい田園を散歩する由をしるしてゐる。その散歩の途上に詩材を得、あるひは発想を得たと述べてゐる先に解説をした「野の夜」「夕映」「詩作の後」の他に「雲雀」「訪問者」「夏の終」もこの頃、同じ環境下でできたといつてゐる。書簡の冒頭にしているやうに、世情のおちつきとともに伊東に詩情が復活したからであるが、さらに具体的には、長崎へ帰住する迷ひも去り、従つて散文へ転身するきつかけを失つて詩に観念した結果だと言へるかと思ふ。

書簡の末尾で「世界文学」七月号所載の山本沖子さんの詩に感銘した由をしるしてゐる私は遺憾ながらまだその作品を見てゐないがもしご存知の方があれば御教示をねがひたいものである。

第四詩集 「反響」

富士正晴、庄野潤三両氏が伊東論を書いた

けれど淋しいとは感じていないのか
さう感ずる人間は不在なのだから

歩いてゐるおかげで私には
足もとにまだ大地がある
頭の上に空がある

宿なしのやうなこの私を
かなしい太陽は一心に照らしてゐる
こんどこそ君は本当に隠れるのか
そして本当の夜が来るのか

いままでの夜は偽りの夜で
朝も本物の朝ではなかつたのか
みるみる日が傾いてゆき

私の影が瘦大みたいのびてゆく
こんどこそ底知れぬ真の闇が
五彩のネオンと彼等と私を呑み込む
そしてまつしぐらに疾走するだらう
海山のあひだを——ああ

その中で私といふ宿なし犬は
のつそりとお堀端を歩いてゐる
暮れてゆく松を見ながら歩いてゐる

「午前」(昭和三年二)に発表した作品である。

小鳥と子供ないし少年を素材にしてゐる点で「夏花」期の「自然に、充分自然に」に対応する作品である。加害者は子供であり被害者は小鳥である点も同じである。前作では被害者である瀕死の小鳥は、看護しようとする子供の善意を誤解して、子供の指に噛みついて最後の抵抗を示すと、余力尽き果てて死んでゆくのである。後作で被害者の小鳥は、隠蔽物であつた麦が刈りとられて露呈された巢から、生きる希望であり夢であつた卵を奪はれたのをしると、非難と哀訴の絶望的な泣き声をあげて、むなしく天に帰つてゆくのである。

又、前作の加害者である子供は、指を噛みつかれることによつて、加害者となる以前にすでに被害者であつたのである。後作の加害者である少年も、加害者となる以前に、落ち穂を拾つて歩かねばならぬほどの飢多という被害——戦争の被害者であつたのである。

伊東はこの加害者と被害者の中間にあつていづれにも加担してゐない。仲裁も調停もしてゐない。その代り、加害者は同時に被害者でもあるという負目の均衡によつて、詩にしてゐるのである。

昭和二十一年の八月に「女性展望」に発表

した作品に、次の「訪問者」がある。

訪問者

トマトを盛った盆のかけに
忘れられてゐる扇

その少女は十九だと答へたつけ
はじめてひとに見せるのだといふ作詩を
差出すとき

さつきからの緊張にすつかりうけ応へは
うはの空だつた
もつと私が若かつたら
きつとそれを少女の気随な不機嫌ととつ
たらう

或はもすこし年をとつてゐたなら
かの女の目のなかで懼れと好奇心が争つ
て

強ひて冷淡に微笑しようと骨折るのを
審録した老詩人にむける憐れみの目色と
邪推したらう

いま私は畳にうづくまり
客がおいていつたノート・ブックをあけ
る

鉛筆書きの沢山の詩

本を読む事、結婚しても詩を書いてゆく気
持があるのか？ 等と言われた事だけは、
今も忘れずに覚えております。

あの時の先生は一体おいくつ位だった
のでしょうか？ 私の年齢をきかれ、大変若
く見えると言われました。この言葉で心の

魚籃

吉本青司

松山から車で帰る途中

足摺で買った人形を

相乗りの客が持って行ってしまつた

くやくして仕方がない

停留所近くのお医者さんだと聞いていたので

田舎の診療所へ手紙を書いた

返事は来なかつた

日がたつにつれて

人形のごとは忘れてしまった

一月ばかりして

見知らぬ女性が訪ねてきた

へ葉問屋のものです

田舎の診療所長さんから頼まれてまして

それだけ聞けば

愛の空想の詩をそこによむ

やつと目覚めたばかりの愛が

まだ眩くらとした目あてを見つける以前に

はやげしい喪失の身悶えから神を呼ん

でゐる

そして自分で課した絶望で懸命に拒絶し

防禦してゐる

出されたまゝ、触れられなかつたお茶に
もう小さい蛾が浮んでゐる

生涯を詩に捧げたいと

少女は言つたつけ

この世での仕事の意味もまだ知らずに

第四詩集 「反省」

この「訪問者」のモデルは、伊東の教へ子

である白築勇氏の姉・幸子さんだと周囲から

想像されてゐた。父親がないこの姉弟のため

に、伊東は後見役のやうな立場でよく面倒を

みた。一つはこの姉弟の母親はコンファタブ

ルな性格の人であつたらしく、伊東は茶吞み

話のよい相手にもしてゐたやうである。この

白築家と桑原武夫氏の親戚である津田家は、

伊東にとつては一種のサロンであつたとはい

つか既述した。伊東は学校帰りに立ち寄つて

、ときに教師稼業の詰屈した心境の洗濯をし

たのである。また美少女であつた幸子さんを

未熟さを指摘されたように思い急に赤くな
つたのを思い出します。

筋もついてなかつたズボン、運動靴をス

リツパのようにベタンコにしてはいておら

れたあまり背も高くなかつた青白い顔の疲

れたやうな先生の姿が、今も目をつむりま

もう 人形だとわかつた

ほくはうれしかつた

ほくはそそくさと包をひろげた

大きい貝殻に腰かけた

飛白模様の海の少女があらわれた

夏ミカン色の帽子の下の

目が遠くを見つめている

へちよつとさびしそうな目……

右手に釣ざお

左手に魚籃

へこのビクがほくの氣にいつたのだ

わずか三センチぐらいの竹かごだが

ほんものとするこしも変らない

小さな薄いへぎ竹のていねいな細工だ

それから

少女の腰かけた貝殻は

足摺のサザエだろうか

真珠色の口が空を向いている

伊東はよく散歩につれだしたらしく、白築家
の門から

「サ・チ・コ・サン……サ・チ・コ・サン

……。」

と、まるでマ、ゴト遊びを誘ふ童子のやうな

尻上りの口調で、呼び出しをかけたものだけ

うである。

この身近かな幸子さんを「訪問者」の女主
人公に見立てるとすると、詩中の表現はいさ

さか他人行儀にすぎない……と感じてゐた。

第七八号所載の若山登美子さんの「伊東先生

の思い出」で判明したが、女主人公は平田登

美子さんであつたのである。その文章による

と、「コギト詩集」の愛読者であつた彼女は

学校に伊東を訪れたのである。

「一枚の紹介状すら持たず（勿論ハガキで

日時を問い、それに対して放課後来るよう

にとお返事を戴きましたが）物資の無い時

だつたせいか、何故そんな物を持つていつ

たのか、当時の気持は解らないのですが、

大きな紙袋にトマトを一杯につめこみ、片

手に失恋の詩を持ち、やたらにフリルのつ

いた服を着た娘に、疲れた感じの先生は、

どんなお話しをして下さつたのか、今は何

も覚えてはいないのですが、中原中也の詩

集を読む事、言葉が少いからもつと沢山の

すと、臉に残つております。

始めいきごんで伺いましたのに、次第に

落ちつかなくなつた私は、赤い縁のりの扇

子を応接室の机の上に置き忘れ、家に帰つ

てから気付いた事でした。」

この登美子さんの文章の中で、伊東が彼女

の年齢を聞いて大変若く見えると言ひ、彼女

はまた背が低く蒼白い疲労感のある伊東をい

くつぐらるだらうとさぐつてゐた。この相互

の微妙な洞察的感応を第二聯はまことに正確

に伝へてゐる。もし伊東がもし若かつたら

緊張のため応答が上の空の彼女をへ少女の気

隋な不機嫌のためであると誤断したらうとい

ひ、伊東がもし少し年輩であつたとしたら、

へ懼れと好奇心が争つて強ひて冷淡に微笑し

ようと骨折るへ彼女の目の色を、もうろくし

た自分への憐れみとつたらうと分析してゐ

る。

この若すぎも老惚れてもゐる Sachlich な

中年性が、「恋という字に憧れ恋をしてゐた」

十九の少女の純潔な何か——へ眩とした目あ

てを見つける以前にはやげしい喪失の身悶

えから神を呼んでゐるへネンネさを看破して

ゐるのである。

ちなみに白築幸子さんは医家大東勝之助氏

に嫁し、平田登美子さんは若山牧水の二男富

士人君と結ばれることとなるのである。

貸室 XXV

萩原葉子

気になるといふより、私は少しノイローゼにかかっているようだ、自分で思った。

まるで誘拐犯人と国籍不明の男達に部屋を借しているような気がして来ると、おやおやとして共犯者であるかの思いになるのだった。

そう思い始めると、自信はいつそう無くなつて、もともと自分に合わない商売をしようとする無理が、たつて来たのだと思つてみるのである。

もし鬼林が××ちゃん誘拐犯人だとしたら# 世田谷区二丁目三番地、萩原莊、責任者という所に、私の名前が出て警察に呼び出されるだろう。

私はもう明日にでも、そんな暗い運命が待っているような、不安な状態が続いていた。

一方中谷均と雨宮純一の二人の様子は、相変わらずおかしかった。夜になるとへんな話し声は相変わらず聞こえ、昼間も出たり入ったりして勤めている様子は見えない。一体何者なのだろうと、思うようになっていた。

考えてみると、あの小峰少年がいなくなつてから、貸室にはろくなことはない。小峰は

だと思つた私は、くやしいが黙つて雨宮の

正義派の少年だから、自然に皆に感化力を与えていたのかも知れない。それにつけても、どこへ行つてしまつたのだろうか。

いくら私が直接に目をかけなくても、子供ではないのだから、黙つて出てしまふほど欲求不満だったのでもあるまい。私にしても一度「お母さんと思う」等と言われた以上、何かの時にはできる限り力を借そうと思つたのに、ほんとと出て行つたまま手紙も寄越さないのは、やつぱりたなこのひがみ根性というものだろうか。

おおやなんていうものは、どうしてこうも面白くないのだろうか。他人は皆、黙つても部屋代が入つて来るから、こんな良い収入方法は無いと羨やましがすが、それどころでなかった。火事のことや何か起つたこと迄心配になり出すと、いつそ、敵意をこらしてしまつた。持てるものの悩みと言われるだろうが、めんどりなものも持たなくても、生活してゆける人は、他人の苦勞が分らないのである。

私は一人でそんなことをぶつぶつ腹立たしく思っている日が続いていた。家でも外でも不満を聞いてくれる人がいないので、尚更気が晴れなかった。

「ごめんなさい。ごめんなさいまし」聞きなれない、あわてた女の声が出て

部屋を教えて、合鍵を渡した。

へリックク詩抄 (三十二)

森 亮

妖精女王マブへの乞食の願言

願はくば尊いあなた様のおん着への中から貧しい私めに施しをして下さいませ、山程あるあなた様の持ち物が一層殖えますほどに。

食ふに事欠く私、顔の色とてございません。お恵み下されば蟻も喜んでいただきます。

塩漬の汁に酸っぱくなるまで漬け込んだ二十日鼠のちぎれた耳でも宜しうございませうなにとぞ優しいあなた様のお思召しを以て蜜蜂のふくらんだ腹をお授けください。

それが叶はぬ願ひなら、こほろぎの尻か、その太股でも私の頭陀袋に投げ込みください日毎欠かされぬ麵包の代りになりますれば細々と芽の萌え出た豌豆をちよっぴり、それが頂けますれば有難き身に余ります。

挨拶の笠の袋にぎっしり詰まつた粉は

見ると、三十前後の奥さんふうの人が立つていた。

女の後は小さい男の子が、こわこわ私の顔を覗いている。見ず知らずの人達であった「あのう、こちらじやないんですか？ウチの人が隠れているのは？」

呼吸も荒らぐ何かに憑かれていくように、前後の脈絡もない。だが突差にこの女は雨宮純一の奥さんだと思つた。勘である。

私はできるだけ落ち着いて、雨宮の奥さんの言うことを聞いた話は——夫は正直一本の人間である。だが最近何故か家に帰らない日が多くなつた。あの正直な人に限つて女が出来るといふことではないし、会社でもそんな噂はないという。ここに部屋を借りていることを会社で知らせてもらい驚ろいてしまつた。ウチの人とお宅とはどういふ関係なのか？

あの人はどこに居るのか早く出して下さい——というのであつた。

始めから、私が雨宮という男を悪の道に誘つた犯人であるかのように思ひ込んでいたのである。後ろに隠れている子供までが私を見てイーと唇をつき出している。

開らき直つてこっちの立ち場を、逆に怒つてみたところで、こようゆ無智の女にはかなわないどころかかえつて事態を悪くするだけだ。

女は鍵をひたたくような勢いで受け取る

と、子供の手を引っぱつて、貸室の方へ行つた。

暫くすると、台所でザアザア水の音をさせていたが、ふと見ると干物竿に一杯の洗濯物が風にひるがえつて、さつきの女が勢い良く働らいているのだった。シートばかり三枚も干してあり、下着に混つてピンクのYシャツも干してある。

それが終ると、今度はバタバタはたきを掛ける音が出て、掃除をしているらしい。随分汚れつ放しにしているのだろうと思つと、小峰少年があんなに清潔にしていたのに、申し分けなような気になるのだった。

「ちよっと伺います」女は今度は少し落ちついて、私を呼んだ。だが声は冷めた。「あの、こんなこと何うのはなんです？近頃は女でも男物のYシャツを着るようですが、そんな女はこちらじや御存じありませんか？」

私はまたも、疑いをかけられている不快さ

に、答える必要はないと思つた。女はちよつとあわてて

「いえ、別にお宅がどうつて言っているんじゃないんです。ウチの人の部屋に色物のYシャツが掛かっていたので、もし女でも来て

いるのじやないかと思つたんです」

私は中谷均のYシャツだということが、や
つと分つた。そしてそのことを言った。する
と、女は見る見る顔を綻ろばせ、明るい表情
になつていった。子供までにっこり笑つた。
そして、今迄の態度とはがらりと變つて、

「こちらに御厄介になつて居るのでしたら
私は安心して夜も寝めます。やっぱりウチ
の人は大丈夫でした」と、頭を下げる。

大丈夫どころか、良い折だから奥さんに連
れて行つてもらひ、部屋を出てもらひたいと
思つた。あのような得体の知れない男では、
閉口なのである。

だが夫を信頼しきつて居る女の顔を見ると
、そうは出来ない。仕方なく住所を聞いて帰
つてもらつた。

夕方今度は中谷均が来た。

「あの、せんせいのところにとなたか参つ
たんじやございませんか？」

せんせいとは兩宮のことであるが、中谷も
さっきの奥さんのように、かなりあわててい
る。見て居る私もつられて落ち着かない。

「あたくしのYシャツ、誰が洗濯したのか
しら？こんなところに干してあるなんて、嫌
でございませすわ」

「……」

「あたくし、やっぱり虫が知らせたんです
のよ。分つていますわ、あの洗濯はせんせい
の奥さんに決まっています」

「……」

「奥さんが来たんですわ、あたくし分つて
いるんです」

ひどく興奮して、一人で勝手にしやべ
つて居る様子は、ちよつと普通ではない。

返事の余地のないのはかえつて、好都合だ
つたが、気味が悪い思ひであつた。

「奥さんって、どういう方でございました
か？教えてくださいませ」

今度は私に助けを求めるふうには、折り入
つて尋ねる。仕方なく普通の女の人で、子供も
一緒に来たことを言うしかなかつた。

言つて居るうち、他人の家の悲喜劇に、一
役買つて居るばかりか、自分に気がつくこと
、嫌で、たまらなかつた。

ちようちん持ちという言葉があるが、おお
やというものは、そんな下劣なことまでしな
くてはならないのか。

それもアランドロンのような美男ならば、
嫉妬や情事も無理もないというのだが、あ
んな男は三文の価値もないではないか。一体
あの男のどこが良くて、あんなに嫉妬などす
るのだろう。おまけに私迄嫌疑が掛かつて来

私は卒倒せんとする。***

*左とか右とかいうことについて、例えば大三・11「地
上巡礼」発表の詩「雲雀料理」には、「いとしがりが君がひ
だりにすすみなむ」、室生犀星の同じ頃の詩「右」には
「盗めよ／＼右の手をもて盗めよ／＼君にのみ盗むことの
ゆるさる」とある。

**このあたりは、大四・1「詩歌」発表の詩「すえたる
菊」などを想起させる——「その菊は醋え／＼その菊はい
たみしたる／＼あはれあれ霜つきはじめ／わがぶらちな
の手はしな／＼するどく指をとがらして……」。

***以上、この部分は大四・2「詩歌」発表の「手の幻
影」の原形である。それをさらに改作したものが小学館版
「全集」別冊、遺稿(上)の「樂を夢む」拾遺の部に出ている。

私は観念をはなれる、乃至観念をはなれんと
する、日ぐれに及び私の健康の全く害なはる
、ことを憂心するものである。

草木及び魚介の類と会話することに於て人間
の白血球はその多量を消耗される。

並びに草木心理に於て樹木花弁の最も恐怖す
るところはその「灼」かれ砕かれ乃至倒伐さ
るゝことにあらずして人心心靈の触手を以て
タッチさるゝ場合である。

かくの如き世界に於て人は草木を支配し交歓
し会話し甚だしきは姦淫することさへ出来る

*(草木姦淫の罪業は人間至上の悪徳である、
何となれば神威を犯すこと之れより甚だしき

るのでは、たまつたものではない。いくらお
おやだからといって、あんな男を問題にする
ほど、落ちぶれてはいないんだと、心の中で
タンカを切つてみても、始まらなかつた。

萩原朔太郎手記

「浄罪詩篇ノオト」A

竹越三男編

⑦

△以下、各篇ごとに番号をつけることにする。▽

白昼或は深夜に於て幻影するところの手は決
ず一個である、左手である、而てそれは何人
にも語ることを禁ぜられたところのあるもの
の手である。

手は歴々として発光する。

手はしんしんとして疾患する。

手は酸蝕されたる石英の如くにして傷み最も
はげしくなる。

手は白き金属のごときものを以て製造され時
に透明性を生ぶ、かれの手より来るよりとこ
ろの恐怖はしばしばその手の背後に於て幽霊
をさへ感知する。

微笑したところの幻影であり、沈黙せる先
祖の顔面であることを明らかに感知するとき

はない)

*大五・7「感情」誌に犀星の「抒情小曲集」のために朔
太郎が書いた「詩集のはじめ」には、「樹木にすがり
つくやうな烈しい性欲のなやみと、恋を恋する少年の日
のやるせない情欲とが、私に詩をつくるすべを教へた」
などとなり、詩「恋を恋する人」には、「まつしほの高い
樹木にすがりついた」の行がある。

極めて珍れに極めて少数の人によりて此の恐
怖すべき遊戯は行はれる、行はれつゝある、
もつとも秘密に於て、結果に於て草木が憔悴
〔枯〕様なることは言ふまでもない。

阿片、ケシ、及び酒精ハッシュ等の人身健康
に及ぼす害悪を説く学者は多い、しかも草木
姦淫の害悪を論難するものをきかない、この
せりりつすべき悪徳の及ぼすところの害悪は
肉体をしてしんれつピランせしめその血統を
汚しその靈魂をして永世地獄の最下級にまで
へ一字不明、墮せしむる種類のものである、
何となれば神威を穢汚することこれより甚だ
しきはない。*

*この時期の朔太郎の「懺悔」とか「浄罪」とかという想
念は、むしろ性欲、恋愛、それから飲酒、放蕩などに関
係が深い。

あころ

堀之内 歴

播州赤穂の 赤土山で

海をみている 七月のうみ

岬の尖に ヨットが回る

一つ もり一つ

海の真上で 太陽が停まっちゃまつてる

播州赤穂の 赤土山で

日なが一んち蟻をみている 腰高の蟻

松の根っ子に 行くやつ来るやつ

働らきすぎて 身軽になつた

古びたヨロイを 着ているけれど

松林の中に 白い病院

覗いてみたら どの室の窓も

人っ気がない 死んじまつたか

或るへ絶滅が ふと思われた

播州赤穂の……

一九六三・七・二三

青き鬼に就て

酒精及びハッシュの夢遊境以外かつて人間に
かくされたところの多くの快樂がある。

前人未発の魔宮殿がある。

妖魔のBALがある。

心靈意識のため絶息する手淫がある。

眩惑する妖姫がある。

「抹消し「舌をピランせしむる絶」」

芳香無比のLIQURがある。

而してこの種の風月賀宴に於ては空想が排斥
され実感が歓迎されるための金門がある。*門
に於てそのかんぬきをあつかうところの羅平
はつねに青き琉璃の衣装をきたる「抹消し」その
名をSENTIMENTALと呼ぶところの「妖鬼」である。

*「若き日の欲情」書簡32(大三・12・14)では、「小
生の作は最初実感より出で一時空想に入り最近に至つて
二度実感に立戻る傾向有之候(共……)」と言っているが
JIS「実感」は彼が「わゆる」SENTIMENTALISM
「であつて、必ずしも日常的次元の實感とは言えないか
もしれないが、「淨罪詩篇」時代の詩について、彼自身
が実感を強調していることは重要であらう。

以上多くの奇怪なる演説に就て諸君は我を偽
へん者となし却つて嘲笑し投石する由所を知
る。

然れども我は既に今日その感傷門に及べると
ころの第一人である。

である。

それを立体的に節奏したものは光である。

光の最も純一なものは音楽である、(特に器
楽ハニ、三字不明は少しの説明も許されない)

つゞいて詩である、つゞいて彫刻である、つ
ゞいて絵画である、つゞいて劇である、最後

に散文である、絶対に光のないものは言ふま
でもなく科学及び哲学書、近代に至つてあら
ゆる芸術が音楽に接近しつゝある、その最も

成効したるものは言ふまでもなく文学である
、画界の新運である。

レニエの「上」ハニ字不明

石川啄木の歌

オイケン

白秋

芭蕉、人麿及び我々の詩はすべて完全なる立
体である、之に反して西洋人の詩は半立体で
ある、西洋人の詩が未成品なる由所はこゝに
ある、彼等の弱点がこゝにある。

大部分の歌人は新古今集を単に言葉の遊びだ
としか考へて居ない。

万葉の真実に共鳴する人はあつても新古今集
の象徴がハニ字不明の程レファインされた感
覚をもつて居るものは極めて少ない。

凡そわが実に見たるところ実には聴きたるとこ
ろに於て寸豪の誤謬あることなきを契ふ。

かくの如き演説及び報告に於てわれはわれの
言辭のあまりに貧しくして光彩なきに絶望す
るものである、併し「抹消し」言葉に於てリズムに

於て「新らしき奇蹟の体得に於て、奇異なる
所現の体得に就て、(顔に就て)

最近に体得せるところの奇蹟、既に草木姦淫
の事実において我は儼然

更に「滑」稽なるは西洋の詩の邦訳せる場合
に止むをえずして慣用する一種の概念叙述眼
を巧みに習得して詩作する人がある。
先づ汝自ら光榮ある日本の詩人なることを知
れ。
彼等が歌麿や国貞から学びえた「一の真理」
がなんであるかを考へるものは当然彼等の前
にゴーマン不遜であれ、日本の詩人として、
先覚者として、最初に詩人として我々は世界
無比の先覚者の地位にあることを自覚せよ、



詩歌 4

異端 3

地上巡礼 3

△右は当時彼が主として寄稿していた三誌について単
に何かのメモとしてここに書きつけたのであらう。▽

⑧ 好んで西洋の詩の短所を模倣して得意なる詩
人がある。

⑨ 生活

あつまやに朝のへ約五字不明」とたのみ
せんするに舟を浮べ
林に鴨をうち
いと高きところに夜光の盃をあぐ
音楽のテマを超えて

⑩ 疾患せる動物の肉身よりして放射せるところ
の螢光が如何に人間の健康に有害なるかを思
へ、かくの如き光線は*

*大田・2「詩歌」発表「危険なる新光線」の前半部の
原形。
懺悔するもの、輪画は最も鮮明である。
まっくろの冬に於ても彼のみはあきらかに光
つて見える。
みよ、合掌せる懺悔者の背後には妖光青色の
虹の如き極光がある。
地平をこえて永遠の闇黒が眠つてみえる。
そこには流失する水山がある。*

*大田・2「詩歌」発表「懺悔者の姿」原形、その一部
は「極光」と題して詩集『蝶を夢む』に収載。

⑪

*日本古典の象徴主義が世界無比のものであるという思
想を、朔太郎は詩人としての出発の当初から深く抱いて
いた。それはこのノートの前の部分にも見られた。
後年大田・11「日本詩人」に「日本詩歌の象徴主義」
を書いたときにも、「実に和歌や俳句の如きは、世界
における象徴文字の極端であり」「今や吾人は、盲目的
なる西洋心酔の夢からさめて、民族的に日本主義の精神
を自覚しなければならぬ」と言っている。彼は
さらにその後年、「日本への回帰」を行なつたようにも
言われるが、これは必ずしも外部情勢への妥協ではなく
あだかも「郷土景詩」が彼の出发点「愛憎詩篇」への
復歸を意図したと同じように、それは彼自身への内面的
な回歸でもあつた。

光体と光とを区別する。
詩と概念とを区別する。
ある種の觀念を平面的に陳述したものは概念

思つ切つてとびおりろ、下はナタネの花ざか
りだ。

空気の中を泳ぐひと、
空気は液体空気である。

手を合せておがむ、

おがみ申すから見せてくれ、

あなたの大事のかくしどころを。

これを神に向つてさ、げる新人の祈禱である

酔いどれにはネンセウする意志がある。

けれども手段がない。

詩人とは人生の酔いどれだ。

他人の所有するもの悉く盗め。

盗人をして全く肥えしめるために他人はあ
る天才とは生れざる前よりの大盗である。

△以下の四行は抹消してある▽

広く巧者に盗むものは発見せられず、
狭くまづしく盗むものは捕縛される。

大盗は芸術であり、
小盗は悪行である。

突つ込んで行くまへに用意がある。

自然の仮面の前に汝のリズムは結晶する。

突つこんで行く前に恐怖がある。

仮面に対する臆病がある。

用意とは勇氣を養ふとこだ。
臆病者にとつて自然は永久に未知の鬼である

詩人にとつて最大の悪業は始めに「考へる」といふことだ、所詮考案は空想である、空想は詩に於ける空間である、八抹消「空間力をもたない」V裝飾である。

味にスペースをあたへよといふことは真実の核に空想を咲かせろといふことだ。
壁に窓をくりぬけといふことだ。
窓に壁を打ちぬけといふのではない。

それ自身に於てリズムを所有せるところの特殊の空想がある。

生きて居る空想がある。
考へざる空想がある。

それを実感と区別することは困難である。

「考へる」「考へざる」最も危険なる境界線はこゝの一歩にある。

巧者は細心にもっとも貴重なるものを生死の境に発見する。

進みすぎていけず、退きすぎていけず、

さて立止まれれば沈降する。

八抹消「詩を作る人は霜解けの路をあゆむ如し」V

芸術家とは人生の料理人である。

料理人とは「如何にしてパンを獲得すべきや」といふ問題の答案者でない。料理人とは「如何にしてパンよりギョー多の慈養分と美味とを撰取すべきや」といふ質問の解答者である。

賤民は賤民、貴族は貴族

空腹なものにとつては料理人よりも生のパンの方が必要である。

* 賤民に芸術なき由所。

* 朔太郎は彼のいはゆる「趣味性」においてエリート意識を持つていた。また例えば「賤民室生照道」と彼が言つたようなばあい、彼は自己の出身についても上流意識を若干持つていたと思う。これはおそらく彼が地方小都市に住んでいたせいであつて、彼の元来の出身は典型的なプチ・ブルジョアであつた。

真理は考へるものではない
感得するものだ

真理を人に伝へるものは智的に演説された哲学でなくして無智によつて叫ばれたる単純な響である。
無智と勇氣(盲目的の)と感情は詩人を生む。
智識と臆病と理性とは哲人を生む。

果樹園

第92号

詩人、その生涯と運命 小高根 二郎
花 火 杉山 平一
ハンカチ 福地 邦樹
蟹 堀之内 歴

貸	室	萩原	葉子	
後	日	吉本	青司	
手	術	後	美堂	正義
浄罪詩篇ノオト		竹越	三男	編
八月十五日		浅野		晃
朝		森		鮎子
ヘリックク詩抄		森		亮
草		と		
		浅田		二三男

詩人、その生涯と運命

書簡と作品から見た伊東静雄(八十)

小高根 二郎

伊東はまた次の作品も完成、昭和二十一年「文化展望」八月号に発表した。

夏の終り

夜来の颱風にひとりはぐれた白い雲が
気のとほくなるほど澄みに澄んだ
かぐはしい大気の空をながれてゆく
太陽の燃えかがやく野の景観に
それがおほきく落す静かな響は
……さよなら……さやうなら……
……さよなら……さやうなら……

編輯後記

七月一日。阪大の小島吉雄博士から第八九号拙文で蓮田善明の死を知り肅然としたものを感じた由たよりをいただいた。杉山平一氏からは蓮田が宮城前で拾った玉砂利の数の運命に詩を感じたと感想を寄せられた。

七月八日。伊藤信吉氏から前号で紹介した伊東の愛読詩で作者不明のものは国木田独步の「沖の小島」の変形である由教示をいただいた。絶えざる指導誘掖の眼をそよいでくださつてゐる事実を感謝する。粟山理一氏からは、蓮田の死に際し、後に残つた清水文雄・粟山理一・池田勉三氏に佐藤春夫先生から送られた激励の詩を書き送つてくださった。

七月二〇日。早大の川副国基教授から数年前渡欧の途次に遊んだジョホールバルの新王宮が蓮田最後の地であつた事実を知り、感銘を新たに回想したとたよりをいただいた。七月二三日。熊本南大の丸山孝氏より蓮田の命日に歸郷墓参をされる由たよりをいただいた。

果樹園 第九十一号 (毎月一回日発行)

昭和三十八年九月一日発行

池田市野町一六八

編輯者 小高根 二郎

大坂市東住吉区桑津町五の八

印刷所 元市印刷株式会社

池田市野町一六八

発行所 果樹園社

定価 三十円 送料 十円

いちいちさう領く眼差のやうに

一筋ひかる街道をよこぎり

あざやかな暗緑の水田の面を移り

ちひさく動く行人をおひ越して

しづかにしづかに村落の屋根屋根や

樹上にかげり

……さよなら……さやうなら……

……さよなら……さやうなら……

……さよなら……さやうなら……

……さよなら……さやうなら……

……さよなら……さやうなら……

……さよなら……さやうなら……

……さよなら……さやうなら……

……さよなら……さやうなら……

……さよなら……さやうなら……

……さよなら……さやうなら……

……さよなら……さやうなら……

……さよなら……さやうなら……

……さよなら……さやうなら……

……さよなら……さやうなら……

……さよなら……さやうなら……

……さよなら……さやうなら……

早春

春の風が
……さよなら……さやうなら……

古代の雲も愛でし
君はその身に古代
を現じて雲隠れ玉
ひしに われ近代
に遺されて空しく
穀穂の雲も慕ひ
その身は漠々たる
塵土に埋れんとす
三島由紀夫

うつろな並木道をとほる
くしきこともを
そのいぶきにひめて

風は泣き声に
身をゆすり
乱れ髪に
まつはつた

風はアカシヤの花を
ゆりこぼし
いきつかひ熱した
からだをひやした

笑ふ唇に
風はふれ
やはらかに萌える
野づらをなでた

風はすすりないで
笛をすりぬけ
朝やけのそらを
かけりすぎた

風はもだして
ささやきの部屋をかけ

身をかがめて
懸燈のあかりをけした

春の風が
うつろな並木道をとほる
くしきこともを
そのいぶきにひめて

たんたんたる
うつろな並木道
風のいぶきは吹きおくる
淡い影と

昨夜からの
みちすがら
もたらしてきた
ものの匂ひと

(昭和十三年「カスタニ」
「エン」二月号)

「カスタニエン」所載のこの訳詩の朗読を私は伊東から聞いたことを今に覚えてゐる。板倉頼音氏は同号、この「早春」(Vorfrühling)の他に、「旅の歌」(Reiselied)、「お前のかほ……」(Dein Antlitz)「休験」(Erliebnis)を載せてゐる。伊東は全篇を朗読し終ると、私にどれが一番好きかと訊ねた。私は

草 上 記

三好達治 著

懐しい詩友の詩のころを偲び、現代の詩歌や俳句への疑問から、国語問題への関心まで、直截に語つた近作集。特に伊東静雄に關する随想は「草上記」四、「をちこち人」三に収められてゐる。
¥四八〇

〔目次〕

半瓢器 某日
愚見 をちこち人
昔ばなし 湯ヶ島
高村さんと岩手の国 土澄みうるほひ
草上記 足音
現代詩について
春風
不定見
雑感

陽春某日
短歌と私
ひとりごと

東京都新宿区矢来町七一

新潮社

振替 東京八〇八番

「早春」を挙げると、彼は「旅の歌」を推した。……にもかかはらず口調のいい「早春」を再び朗読してくれたやうに記憶してゐる。

この「早春」のへ春の風にはホーフマンスタイル独特の陶醉がある。もし伊東が「夏花」期に「夏の終り」のへ白い雲を歌つたとしたなら、或ひはこのホーフマンスタイルの陶醉の微熱を帯びてゐたかもしれない。

しかし伊東は今や目覚めてゐるのである。ザッハリッヒにあるがままを見、沈静した事物を取り、微熱に浮かれた仮象を捨て去る悟性

に目覚めてゐるのである。伊東は「早春」の中の仮象——くしきこと／＼乱れ髪／＼アカシヤの花／＼いきつかひ熱したからだ／＼笑ふ唇／＼ささやきの部屋／＼淡い影／＼捨て去り、そこに残る事物——／＼やはらかに萌える野づら／＼うつろな並木道／＼朝やけの

そら／＼を取りだして、それをへ太陽の燃えかがやく野／＼一筋ひかる街道／＼気のとほくなるほど澄みに澄んだ かぐはしい大気の空／＼置き換え、ホーフマンスタイルの主役であるへ春の風(Frühlingwind)の代りにへ

颯風にひとりはぐれた白い雲を登場させたのだと言へないであらうか？ それは意識的ではないかもしれないが、ホーフマンスタイルの「早春」は韻律として意識下に作用した

とするのは、私の思ひ出が勝ちすぎてゐるせゐかもしれない。

伊東は百合子さん宛に文学通信をしてから一ヶ月した日に、女弟子である田中光子さんに戦後初めて次の書簡を送つてゐる。

「原稿とどいたのが十月十三日、それでこんなにおそくなりました。字句とところどころ不穩当に思へるところ発見しましたが、なほしてゐたら限りなく、又所詮はあなたの息吹みたいなものゆゑ、直しやうもない気もし、常識にそむいてゐるところもうちすてておきました。

跋はやはり詩にしました。(これは明日中にでも速達してお手許にお届けします)これはあなたの詩集を機縁にして出来たものですから強ち、跋として不適當でもないと思つてゐます。

「四季」正月号に出す予定、これも予めお許しねがつておきます。一流の詩人になたがなるためにはひとり合点めくあの文章、是非一度は直すやうにしたいものです。大へん惜しいですね。もつと近ければ一つ一つとひたひたし筆を入れて貰ふのですが。文章を少し直して詩の値うちが変るといふことはないのですから。むしろ直すところに詩作の意味があるのですから。

田中光子様

伊東生

十月十八日

(昭和二年一月一八日、封筒紛失のため発信地不明)

田中さんは昭和十九年六月二十二日東京において伊東に添削をうけた詩集以後の作品をまとめて、伊東の批評を仰いだものと想像される。「ひとり合点めく文章」という評は今度も交つてゐない。その固辭を「所詮はあなたの息吹みたいなもの」、つまり個人的な生理だとして半ばあきらめてゐながら、まだ仄かな期待は残してゐるやうである。

伊東は跋文の代りに詩を書いてゐる。その詩は「あなたの詩集を機縁にして出来たもの」と言つてゐるが、その作品を「四季」に送る予定にしている。それは「中心に燃える」であるが、伊東の教へ子である齊田昭吉氏が発行した冊子「舞踏」十一月号に発表、次で翌二十二年四月発行・神西清編輯の「四季」第四号にも発表、さらに長江道太郎氏の「詩人」第六号に再々録をしてゐる。

中心に燃える

中心に燃える一本の蠟燭の火照に
めぐりつつける廻燈籠
蒼い光とはのあかい影とのみだれが

眺め入る眸こゝろ衣ころも くらい緑に
ちらばる回帰の輪を描く

そして自ら燃えることのほかには不思議
な無関心さで
闇とひとの夢幻をはなれて

蠟燭はひとり燃える

第四詩集「反響」

まことに見たままである。いや、見るもの
見られるものの境涯から、具象的な仮象を一
切抽象して、そこに精神である真諦だけをと
りだしてゐる。焰だけをとりだしてゐる。

廻燈籠に工作されてゐる図柄は単にへ蒼い
光とほのあかい影に抽象されてゐる。その
走る光を鑑賞する家族はへ眸へ衣」とい
う二名詞に還元され抽象され、燈籠を吊す軒先
の庭はへ緑の一字に単純化されてゐる。こ
の抽象した還元によつてへ自ら燃えることの
ほかには不思議な無関心さ本性をとする蠟
燭を造型してみせてゐる。この見事な抽象化
は Sachlichkeit を比喩にまで高め昇華するこ
とに成功してゐる。ゲーテの「西東詩集」に
傾倒してをられる大山定一氏が、この「中心
に燃える」を伊東作品中で第一等の作である
と推されるのも当然である。

伊東は先の田中さん宛書簡で、この作品は
「あなたの詩集を機縁にして出来た」と告白

る。

この弔辞というより、生存者への鞭撻の辞
ともいへべき奇妙な弔辞を書いた伊東は、蓮
田善明の追悼会の招きに対して、次のやうな
返事をしたためてゐる。

「おなつかしうございます。御無事でよう
ございました。蓮田さんのこと、『光耀』
の原稿で初めて知りました。丁度一年目の
八月二十日ごろでありました。その日は颯
風の余波が、河内平野を過ぎようとして、
しきりに雷鳴のある日でありました。それ
から二三日目に未知の青年（三高の学生）
が来訪し、その人が話のついでに、蓮田さ
んに対する敬愛の衷情を述べましたので、
その最後のことををしへましたら、急にそ
の青年は、顔面蒼白になり、貧血をおこし
た模様で、失礼しますと云つて、私の前に
仰向けにねころびました。私は驚くと同時
に、この青年の肉体にまでしみこんでゐた
蓮田さんの影響を思ひ、痛切の情にうたれ
ました。私は「ひとりの友を失つて、他の
多くの友をも遠ざかつてゐたい気持」とそ
のころの心境をノートに書きとめておきま
した。ほんたうに壮年時代が過ぎたといふ
感がいたします。「余生」といふことも考
へます。私はただこれからは「観る」生活

してゐた。伊東は、濃密・哀婉、しかもへひ
とり合点めく彼女の詩句に、師匠の伊東と
は全く無縁に、つまりへ自ら燃えることのほ
かには不思議な無関心さで彼女自ら憑かれ
たやうに燃えてゐる情熱の焰にヒントを得た
のである。彼女はひとり自らのためだけに燃
える焰だつたのだ。燃えつきる運命もしらぬ
げに燃える蠟燭の焰なのだ。その焰が結果す
る熱で、風車を仕掛けた燈籠が廻り、燈籠に
細工された絵型が、どんな絵模様や明彩を四
囲に投げかけつゝ廻らうと、それはつひに蠟
燭の燃える本性とは無縁の行だ。

花火

杉山平一

オスカー ワイルドは書いていた
高く、高く、空高くあがつて
赤 青 黄色に爆発する花火が
泥濘に沈められているのを
自分のことが書かれているのだと思つて
それを読んで僕は泣いた。

あいびき

木の下園や
鉄橋の下
塀のかけに
男と女は立っている
夜よりももっと暗く
もっと深いところ

をつづけようと思ひます。そして詩は譬喩
だと思ふやうになりました。そちらの記念
の会に出られないことは残念です。どうか
皆様によろしく申上げて下さい。お元気を
祈ります。私共は、私共で出来る仕事を自
分だけのためにやつてゆかうではありませ
んか。私は売文といふ形式だけで、自分の
書いたものを世に出さうと考へてをります
。自分のことばかり書きました。お憐み下
さい。

十四日
清水文雄様
伊東静雄

伊東は和製ノイエウ夫人を小説のモデルに
しなかつたが、詩の「機縁」——ヒントには
したのである。しかし詩の核心はあくまで伊
東自身なのだ。彼はへ自ら燃えることのほか
には不思議な無関心さで燃えるか細い詩の
蠟燭に自らを擬してゐるのである。かつての
日本浪漫派詩人として、四囲の敵視のなかに
もとほしつづけるか細い蠟燭になつてゐるの
である。その結果として、燈籠に仕掛けられ
約束された六連星の絵型から、次々と闇に投
影される井上靖、三島由紀夫、庄野潤三、島
尾敏雄氏等の新星の予感を、伊東はこつそり
と歌つてゐるのであるまいか？

伊東は田中さん宛に書簡を送つた十月に、
若死した生徒終新也君のために美しい弔辞を
書いてゐる。その文章は「夏花」期の「若死
」解説の折に詳述してゐるので再録を省略す
るが、伊東の眼は死んだ美少年の秀才新也君
にはなく、生き残つてゐる凡容凡才の弟和
典君に向いてゐた。それは死んだ新也君は他
の先生の担任、生きてゐる和典君は自分の担
任であるという相違からきてゐるのでなく、
三兄を早く失つて悲痛な家運を担はねばなら
なかつた伊東の若死忌避の思ひが強く作用し
てゐるからだ……と、私は解説したはずであ

(二月一日、大阪府黒山村より東京都淀橋
区下落合三丁目学習院附和寮、清水文雄宛封書)
この書簡によると伊東が蓮田善明の死を知
つたのは三ヶ月前の八月二十日頃、『光耀』
の原稿からだという。その「光耀」は林富士
馬氏の手で山形県の鶴岡で出された第二号で
ある。同号の刊行は十月だから、林氏は一応
集つた原稿——佐藤春夫書簡、橋本攻、林富
士馬、庄野潤三、島尾敏雄氏等の作品を上梓前
に伊東の閲覧に供したものと想像される。
蓮田の死はその佐藤春夫氏の書簡の中に記述
されてゐるのである。

その日は颯風の余波が河内平野を過ぎよう
として雷鳴のしきりにする日であつたとい
う伊東はその雷鳴を自決時の蓮田の精神の轟き
と聞いたであらう。その雷鳴もやがて遠去り
へ気のとほくなるほど澄みに澄んだ翌日、
伊東はへかぐはしい大気の空をながれてゆく
へひとりはぐれた白い雲を発見して、そ
れを別れを告げにきた蓮田の魂と見たかもし
れない。

……さよなら……さやうなら……
……さよなら……さやうなら……
「夏の終り」の別れの言葉は、とりもなほさ
ず蓮田が伊東に告げ、伊東が蓮田に告げた袂
別の辞であつたかもしれない。
この瞬間……伊東の眼は生に向いたのであ

る。死んだ兄新也にはなく生存してゐる弟和典に場所柄もかまはず向いてゐるあの実存の眼である。その二三日後訪れてきた三高の学生が、尊敬した蓮田の死の真相を知つて、脳貧血を起して伊東の眼前に仰臥したとき、実に冷静にこの青年の驚愕を覗いてゐる眼である。もはや二度と陶酔することのない覚醒した眼である。その眼は冷酷なほど割り切つて、もはや死の側には振り向かない意向である。「ひとりの友を失つて、他の多くの友をも遠ざかつてゐたい気持」と、ぶしつけなほど明瞭に、蓮田の異常な死を介し、まだ生の領域にゐる友達からも遠ざかつてゐたいという疎外の心境を述べてゐる。その心境を文学の側から述べると、もはや集団を組んだ文学運動はご免だといふのである。自己のための売文という個人的な商売の場だけで、文学にながつてゆかうという身を狭めた心境を述べてゐる。

かく生の側のみに転心した伊東は蓮田の追悼会には出席しなかつた。

蓮田善明を偲ぶ会は十一月十七日午後二時成城学園の素心寮に於て催された。出席者は桜井忠温、中河与一、清水文雄、阿部六郎、今田哲夫、三島由紀夫、栗山理一、池田勉の

諸氏であつた。

「床上に飾りし君がうつしゑはわれらが思ひ出の地紀州高野山なる遍照光院の後庭にて栗山理一手づから撮りし」の、供へし花は君が出立つ日の車窓に伊東静雄氏より贈られしとふかの黄菊、集ひし人は君を知ること深く君を思ふことまたあつき先輩友人。折から朝来の時雨漸く上り、薄雲を通してさせる光、前庭にちりしく落葉にほのかに映えて、君を偲ぶ心切なる日なりき。

「蓮田善明追悼録」(おもかげ) 清水文雄序

と、当日の場景を清水文雄氏は記述してゐる清水氏等によつて供へられた黄菊は、はからずも缺席した伊東の身代りとなつて蓮田の靈にかしづいてゐるわけである。それにしても刎頸の交といつてい、ほど親密であつた交情が、敗戦を契機として天と地に別れたことはいかにも悲しい。伊東が真に蓮田の死を哀悼して慟哭するのは彼が瀕死の床に伏してからだつたのである。

尚、蓮田に将来を囑望された三島由紀夫氏は墨痕あざやかに次の詞を追悼録「おもかげ」に残してゐる。

古代の雲を愛でし君はその身に古代

川蟹

堀之内 歴

何処に棲むのも同じこと
海辺の小川に棲んでゐる
へまあ 何て重々しい威厳と
目玉も天に向けてある
違うだら 川風がいつも言うんだ

世の中の退屈な有様が
居乍らに見て見徹した
俺の沈黙の固い次第

こんな世に 前向きで歩く奴らは……
み給え 音無しの俺の蟹行を
蟹だけは まだ神の子なんだぞ

一九六三・八・二五

貸室 XXV

萩原葉子

心配した××ちゃん誘拐事件は、その後新聞で犯人があつたことを知り、鬼林でなくてよかつたこと、愁眉の開ける思いであつた。犯人があがる数ヶ月間は、おちおちしてゐられないほど、万一という心配が去らなかつた。

もっとも、その間には私の家にも母が来るという変化があつたり、私が家の近くに勉強部屋を借りて、母に家を手伝ってもらふようになったという問題もあり、鬼林のこともすつかり忘れてゐることもあつたのだが。

ハンカチ

福地邦樹

旅行へ出かけると言うと
おまえは早速
麻のハンカチに
得意の刺繍で
私のイニシャルを縫つて
ちり紙まで添えてくれた
汗をふくとき ほんのり
香水がつけてあるのがわかつた
これはおまえの匂いだ
なるほど
旅先でも自分を恋しくさせようとの
おまえの企みなのか
私はまんまと それに
ひっかかつてしまった

家にいる時間の多い母に、一応鬼林の性格や中谷均と雨宮純一のこと話しておくこと、母はそんな人は珍しくないと言ひ、変つてゐる方がかえつておもしろくてよい等と、笑つてゐるのである。

それならよいが、またなにか問題があつた時、うまく応待できずあんな人に貸したのが悪いと叱られそう、それが心配だつた。鬼林のことを話す時にも、自然にあまりひどいことは抜かして、なるべくあっさりと言つただけなので、本当の鬼林を見たらきつと母も驚ろくだらうと、思うのだった。

母の性格は、私と反対で絶対に人に負けたり、気弱く我慢することはなく、むしろ積極的にこっぴどく、やりこめなくては気の済まないたちなので、どんなことになるかが心配であつた。

或る日私の借りてゐる部屋に、母がひどく意気込んで来た。案の定、鬼林とけんかして来たのだった。「あたし、泥棒扱いにされたこと、生れて初めてだわ！鬼林のやつたら!!」と、吊り上げた目で私を睨んでいる。こうなることを、怖れていたもので、遂に来るべきものが来たという感じであつた。どんなことが起つたにせよ、その責任はすべて私

にかかってくるのだ。しかし母に詫びて後始末は私がすれば、何とかなるだろうと突差に考えた。母は私の風邪が感染しないようにと掛けたマスクで、顔半分かくしているの、怒り皺がいつそう目立つ。その皺のかずだけ問題が後ろにかくれているのだ。

「ごめん」鬼林が改まった声で戸を敲いた相変らず赤い顔で、玄関に仁王立とになって肩をいからせている。

「こんなところや、おちおち住んでもいられねえ、おおやと今日は談判しに来た。おおやに会わせろ！」と、すごんでいる。母が用件は私が代りに聞きますと答えると、

「わしは、アンタに用はない。アンタと契約した覚えはないんだ」と言う。酒ぐせの悪いことを私から聞いていた母は、何とかうまく帰らせようとしているうち、

「アンタが来てから、ひんぱんにものが無くなるんだ。第一その太った身体で、ぐでんぐでんと歩いてよお。婆さんのくせにへんな色気があって、ほんわか、ほんわかしていらあ。それじゃあ、泥棒が入ったって分るめえ」

そこで母は持ち前の勝ち気を發揮させ、開らき直った。声も大きく響く。

「なんでですって！婆さんだろうが若かろう

後日

吉本青司

村に伝わる田植を所望したら
へともだちはうづぎウノハナ

咲いてのちはちりちり
と歌ってくれた

——咲いてのちはちりちり

高原の夜の部屋に
思いがけなく

五月の白い花の感傷がしのびいった

この日 再会した教えごたちは

みな壮年の男女であった
その多くが村に生き

いくらかは都会に在って
片脚をなくしたものの

夫をうしなつたもの

妻の瀕死のけがのため にわかに

来られなくなったもの

病死したものがひとり

戦死したものに

それらのみんなが

ひっそりに再現しようと試みる

少年の日の

あまりにも美しくまぶしいことを

その歌はおしえてくれた

が、おおきにお世話です！。それと泥棒とはどうゆう関係なんですか？」

いつものように、何を言っても反応を示さず、少さくなっている私とは大部勝手が違つて、一瞬ぎくつとしたが、次には、いよいよ肩をそびやかして

「郵便物やスリッパが無くなったのを、どうしてくれるのだ！」と、出た。

夕飯に家に帰ると、早速さっきのことが話題に上っていた。息子が母の負けていない強さに、すっかり感心している。

「ほく、おばあちゃんを見直したよ」

「もう安心だ。お母ちゃんじや心細くって嫌だからなあ」

ほめられて母はもうすっかり不機嫌が直っている。そして鬼林のことは今後自分が引き

手術后

美堂正義

深夜

海底のやうな静けさ

どこかで水を割る鋭い音に
ふと浅い仮睡から目覚める
酸素吸入の呼吸がせいぜいと
狭い室のうちにこもる

握つてゐる妻の手は

雪のやうに冷く

私の掌のなかで融けないかと

不安がつきまとふ

麻酔から覚めない血の気のない顔

顔の上を振り払ふしぐさ

なにを追はふとしてゐるか、

窓をキラリと過ぎるサーチライトの

夜更けを廻るのはなにかのためであらうか

この命が失はれることがあつたら

それでも無関係に一夜巡り

星は高い処で輝いてゐるだらう

手術后の

生と死の境

妻の名を低く呼び

顔を横に直してやれば

目を閉ぢたまま

素直に云ふがまゝになつてゐる

受けたから、負かしておいてくれと、言うのには願つてもないことであつた。

萩原朔太郎手記

「浄罪詩篇ノオト」A

竹越三男編

⑫米

光を確実に感知しきるまでしんほうして掌中にあつたため。

光が出たら一気に生め、この一気に生むといふことが肝心だ。

除々に推稿しつゝ、組立てた詩は出来上つたときに既に完成されて居るけれども死んで居る、リズムが逸走するからだ、かようなものは人を敬服させることはあつても感動させることはない、直接の感電がないものは詩ではない、たとへば非常に巧みにコンデンスせられた散文の一種である。

推稿は大磨きでやれ、接近しすぎてはいけな、部分部分に目をつけてはいけな、調子に引きずられてはいけな、出来上つてから三日目にまた推稿しろ、より遠くのところ

立つて。

その外形（格調取材等についていふ）が異隔すればするほど、詩と音楽とは本質上絶体（マ）に同一不二のものでなければならぬ。

*伊藤信吉編「年譜」によれば、朔太郎は大三・12「詩歌」に「感傷詩論」を、大四・1「異端」に詩的散文「光の説」を書いている。私はまだこれらを見ていないが、おそらくこのノオトのこの篇や、前出の⑨⑩⑪などの諸篇と同じような内容のものであろう。なおこの篇は彼自身の作詩法の内実に関れたものとして多くの人の興味をひくだろう。自分に言いきかせている気味もある。

愛と恐怖とは一である
恩寵と刑罰とは一である

考へることは罪悪だけれども考へずには居られないことがある。

修養が足りないからだ。

詩人はたゞ信仰すればいい。

⑬

西洋人を先輩だと思ふな、どんな場合にも彼等は先輩ではない。

一夕会談論辯すればたちまち自分の前にキ押して師事するだけの理解と謙讓と勇氣とをも

つて居る未見の友人である、同時に我々の頭を踏みにじつて一躍向上するところの恐るべき敵手である、西洋人を怖れるな。

西洋人が我々よりも偉いところは我々よりも遙かに多くの言葉を所有して居るといふ事である、人間の所有する心の言葉のA一字不明Vはその人間の生活と正比例をする。

詩と音楽とは本来の性質上絶対に同一不二のものでなければならぬ、その外形（格調、取題等についていふ）が相互隔離すればするほど詩と音楽とは接近する。

音楽的といふことはいふまでもなく直接さをもてる立体的といふことである、「優雅な情想」又は「舌さばりのよき調子」といふことではない。

⑭

犯罪はそれ自身に於て権威と靈性を有し居る、兇行が秘密に行はるれば行はる、程靈性を生じてくる、何故ならば兇行を果せるものはその利那に於て世界第一の個人主義者となるからだ、直接真理に面接することができたらだ、人類の虚飾と仮面をひっぱがすことが出来るからだ。

スリといふ奴はいつしか靈性を生じて居る、痛快な紳士犬だ、けれどもそれを追つかける探偵といふものは一層貴族的の人種だ、彼等の職業は明らかに至上芸術の般固（マ）に属する、併しそれは外国のことだ、日本の探偵は自個の職業の眞価を自覚しない、彼等は貴族の業務をする賤民だ。*

*大三・8作の詩「殺人事件」には白秋のいわゆる「素敵に氣の利いた探偵」が出てくる。犀星「抒情小曲集」所載の詩「兇賊TIGERS氏」や「石」などは、その時期の

八月十五日

浅野 晃

なにも知らない合歓の花
思ひ出してる夾竹桃
やや狂ほしい百日紅

夏の祖国の歌ひ手たちは
ここを先途と鳴きしきり
大いなる昼のすぎゆく静けさ

あら草の列を写して

水は逝き 河骨のかけ
翅を折つた鷺はひそむ

沙漠に 海に 密林に
天の青 夢とひろがり
時はすぎ 花のくれなる
父よ 子よ 兄よ 夫よ
落日の丘をよち岩をよち
母よ 子よ 妻よ 妹よ

新秋の燈火 思ひ切り
思ひ切り独りの夜を更かす
いまだ幼ない虫の歌。

果樹園叢書

詩集 寒色

浅野 晃 著

著者が終戦後の五年間北海道の勇払に流寓した当時の作より三十三篇をすぐった詞華集。「寒色」と銘打つごとく寒冷そのものの風物の中に守り続けられた著者の诗情は暖炉のやうにはほのと燃えてゐる。無技巧の技巧の極致をこゝに見る。
¥三五〇

【目次】

石炭	行進	鳩の脚
たきぎの時	植物	わたつみ
岩と波	青い自然	ひととせ
海	天上の牛	橘ととせ
冬	馬	ジャガタラ文
粉雪のふる日	歌と影	哀歌
雪空に立つ雲	あなたの庭	火ともし頃
わか戦士	夏のはじめ	風と雷
誘惑	夏のはじめ	快活な魂に
生物	夏のはじめ	脚早な雲
	夏のはじめ	石と草
	夏のはじめ	戸に停つて
	夏のはじめ	先師

果樹園社

、孔子の言ったことは真理だ、パンを与へられないでも芸術を所有する人がある、それがほんとの貴族だ、パンを獲るために奮闘する人間は大てい下劣だ、そういう人々の芸術は悪臭を生じて、おまけにひからびきつてる、銅製だ。

パンを獲るために乞食をする人間は貴族だ、その人々の手は光る、銀製だ。

室生の乞食は坂の上に立つて居る。*

みる貴族は働くことはしない。
労働は賤民の本業だ*
乞食に敬礼しろ。

*このあたりは犀星の詩「銀製の乞食」大三・9「地上派札」をふまえたもの。「若き日の欲情」所載大三・9・4の手紙には「室生君の「銀製の乞食」がいちばん佳いと思ひます。私の言はうと思ふことを、いつもあの人が一先足に言つてしまふので口惜しくてたまらない。」と書いている。

*こういう思想が人間朔太郎の生活意識そのものであつたと見るのは早計である。これは本篇後出部分の「一體生活の目的とは何だ」というような言葉と、表裏同根の関係にある。こういう高貴な言葉の底には無職業者としての社会的コムプレックスがあつたと見えよう。

キリストが地上に再降される場合にまっさきに反対するのはカトリックの坊主だといヴンが言ふ。

自然が光る本体を啓示した場合に一番先きに反「抗」するものは自然主義者ではないか。

*「カラマーゾフの兄弟」のイワンであると思われる。しかしこの時期までに朔太郎が「カラマーゾフの兄弟」を読んだと言えるかどうか、疑問がある。久保忠夫「朔太郎とドストエフスキイ」(「比較文学」1・一九五八)は、朔太郎がそれを読んだ時期を大正五年四月と推定しているが、この推定はほぼ正しいと思う。なお彼が読んだ三浦閲造の訳本は現に遺品として保存されているが、その発行は大正三年十月(金尾文淵堂)であるけれども、朔太郎はこれを古本屋で買ったらしい。そういう符号が本に付いている。

我々の感傷主義は自然主義の正反対だ、けれどもより本来の自然に接近して居る。

「寸陰を吝め」といふ人がある、どうしたら寸陰が吝めるか、それから先に教へねば駄目だ、貴重な目的のない人には吝むべき時間もない。

一体生活の目的とは何だ。だからこれに答へろ。

以下は、これまでとは逆に、ノートの末尾

朝

森 鮎子

外界と私の内との
数知れない受け応え、
音や像、
その中から
私の養いになってくれるものを沈ませて、
闇は薄らいだ。
白い坂道を人影が登っていく、
崖の上に犬が立つ、
水平線の涯には船の姿が端正に浮び、
私は明るい時間の始りに

ほのかな期待を抱いて、
白桃の皮をむく。

遊園地の片隅で

茶色の馬が閑かに草を食べている。
そのそばで
女の人が鎌を研ぐ、
冠った手拭いの端から、
時々空を見上げて
小さく、低く、うづくまって鎌を研ぐ。
豆汽車から子供等の歓声がはじけ
馬は思い出したように尻尾を振る。
むくむくと立上った女の手に
鎌が光り、
仕事への真摯な足音をしのばせて
その女は繁みの中へ消えていった。

からの順次によつて書き写したものである

15 罪びと*

いと高き木すえにありて
ちいさなる卵ら光り

あほげば小鳥の巢は光り
いまはやつみびとのいのるときなる

十二、二十七*

*本篇は大四・一「地上道札」に発表され、そのときには「浄罪詩篇」と付記されていた。後に「月に吠える」に収められたとき、「卵」と改題された。

**この日付は、このノートに書いた日付である。「若き日の欲情」書簡31(大正三年十一月二十〇日付)にこの詩が書きつけてある。

天上縊死米△この上部に抹消し「屍体」V
遠夜に光る松の葉に

懺悔の涙した、りて

△追記V
天上の光れる松を恋ふるより
いのれるさまにつるされぬ

天上の松にくびをつり△抹消し「かけ」V
十二、二十七

を整理したのが前出の追記 であると見られる。V
*詩「天上縊死」の発表と収載の関係は「罪びと」と同じ。
△抹消し「いのりはかみのくちびるに」V
くちびるやぶれ血はながれ

ヘリック詩抄 (三三)

森 亮

自分の詩集に

本のかたちを取るまではお前が偶にちらと覗かせる
その面影さへ誰がさうやすやすと窺へただらう。
お前が印刷されたからには、お前は声あげておのれのあらはな姿を万人に見せようと努める。
恥ぢらひを捨ててしまったお前であれば
私も虫でもつかないかと気を配らなくてよく
なつた。
不出来な所はあつても開けるも開けぬもお前の運、

でも、お目見えに赴くまへに餞別のひと言を
聞いてお呉れ、
——人目を引くやうな女はじつとはしてをれないもの、
おのれの性のまにまに道ならぬ恋の数々を遂げるさうな。

洋音楽及びトーン・ポエムなる
ものの具体的説明*

- 1ドビッシェ
- 1ストラウス以外に於ける最近の人気作家
- 1印象派の代表的作家。
- 1未来派の代表的作家。
- 1バイオリン二重奏の場合に2ndは全々1stに附従しつゝ、その下底を流すべきや或は1stの上を行く心待にて奏すべきや、或は並行すべきや。
- 1相違 シンホニー・オーケストラとオーケストラ
- 1コンサート・オーケストラとオーケストラ

*これは音楽の話をするための覚え書かもしれない。全体が横書であるが、便宜上縦書にして写した。

自然が光る本体を啓示した場合に一番先きに反「抗」するものは自然主義者ではないか。

*「カラマーゾフの兄弟」のイワンであると見られる。しかしこの時期までに朔太郎が「カラマーゾフの兄弟」を読んだと言えるかどうか、疑問がある。久保忠夫「朔太郎とドストエフスキイ」(『比較文学』1・一九五八)は、朔太郎がそれを読んだ時期を大正五年四月と推定しているが、この推定はほぼ正しいと思う。なお彼が読んだ三浦閲造の訳本は現に遺品として保存されているが、その発行は大正三年十月(金尾文淵堂)であるけれども、朔太郎はこれを古本屋で買ったらしい。そういう符号が本に付いている。

我々の感傷主義は自然主義の正反對だ、けれどもより本来の自然に接近して居る。

「寸陰を吝め」といふ人がある、どうしたら寸陰が吝めるか、それから先に教へねば駄目だ、貴重なる目的のない人には吝むべき時間もない。

一体生活の目的とは何だ。だからこれに答へろ。

以下は、これまでとは逆に、ノートの末尾

朝

森 鮎子

外界と私の内との
数知れない受け応え、
音や像、
その中から
私の養いになってくれるものを沈ませて、
闇は薄らいだ。
白い坂道を人影が登っていく、
崖の上に犬が立つ、
水平線の涯には船の姿が端正に浮び、
私は明るい時間の始りに

ほのかな期待を抱いて、
白桃の皮をむく。

遊園地の片隅で

茶色の馬が閑かに草を食べている。
そのそばで
女の人が鎌を研ぐ、
冠った手拭いの端から、
時々空を見上げて
小さく、低く、うづくまって鎌を研ぐ。
豆汽車から子供等の歓声がはじけ
馬は思い出したように尻尾を振る。
むくむくと立上った女の手に
鎌が光り、
仕事への真摯な足音をしのばせて
その女は繁みの中へ消えていった。

あほげば小鳥の巢は光り
いまはやつみびとのいのるときなる
十二、二十七*

*本篇は大四・一「地上流礼」に発表され、そのときには「淨罪詩篇」と付記されていた。後に「月に吠える」に収載されたとき、「朝」と改題された。

**この日付は、このノートに書いた日付である。「若き日の歌情」書簡31(大正三年十一月二十〇日付)にこの詩が書きつけてある。

天上縊死*△この上部に抹消し「屍体」V
遠夜に光る松の葉に

ヘリック詩抄 (三三)

森 亮

自分の詩集に

本のかたちを取るまではお前が偶にちらと覗かせる
その面影さへ誰がさうやすやすと窺へただらう。
お前が印刷されたからには、お前は声あげておのれのあらはな姿を万人に見せようと努める。

恥ぢらひを捨ててしまったお前であれば
私も虫でもつかないかと気を配らなくてよく
なった。

不出来な所はあっても開けるも開けぬもお前の運、

懺悔の涙した、りて

△追記▽
天上の光れる松を恋ふるより
いのれるさまにつるされぬ

天上の松にくびをつり△抹消し「かけ」V
十二、二十七

△この次に製作過程を示す抹消された数行があり、これも

でも、お目見えに赴くまへに餞別のひと言を
聞いてお呉れ、
——人目を引くやうな女はじつとはしてを
れないもの、

おのれの性のまにまに道ならぬ恋の数々を遂
げるさうな。

ヘリックには「自分の詩集に」といふ題の詩が十篇ほどある。「お前は枯死することを知らぬ木として生まれた。/月桂樹のやうにとこしへに緑葉(みどりば)をほびこらせる」といふ景気のいい二行詩などもまじってあるが、ここに紹介する「ヘスベリデイズ」九〇〇番が面白い。自分の詩作品の総称としての「本」であるが、それがいよいよよ本になって世に出るのは娘を嫁にやるやうに気のもめるものであらう。しかしこの父親は一言居士で、自分の本のもつ毒(大した毒でもないが)が寧ろ世を毒することとを願ふやうな口振りの別辞を吐く。

を整理したのが前出の追記 であると見られる。V

*詩「天上縊死」の発表と収載の関係は「罪びと」と同じ。

△抹消し「いのりはかみのくちびるに」V
くちびるやぶれ血はながれ

16

洋音楽及びトーン・ポエムなる
ものの具体的説明*

- 1ドビッシェ
- 1ストラウス以外に於ける最近の人気作家
- 1印象派の代表的作家。
- 1未來派の代表的作家。
- 1バイオリン二重奏の場合に2ndは全々1stに附従しつ、その下底を流すべきや或は1stの上を行く心待にて奏すべきや、或は並行すべきや。
- 1相違 シンホニー・オーケストラとオーケストラ
- 1コンサート・オーケストラとオーケストラ

*これは音楽の話をするための覚え書かもしれない。全体が横書であるが、便宜上縦書にして写した。

草とり

浅田 二三男

腰をのばしていっぶくすると
チーチーぜみが山でなく

たった二反の山田でも
ヒエやコナギや牛の毛や
十本の指は
草とり

ああ
すくなすぎる
小ぢやすぎる
もうよっぽどきたかと
ふりむけば
まだ五、六歩しかとってない

植えたからにはつくらにやならぬ
つくるからには
世間なみ
そんな見栄と二人つれ
腰がうづく草とりを

米つくりのつらさを
きいてくれる
誰もいない
しずかな山の中の段々田
せみがなく

かがし
じつところは
一本足で
つっ立って
いるのや
あらしまへん
そうどす

となりの貧乏
お向いの病氣
差別の脚たつ
お百姓の
おの字
つまりどすな
出るに知られぬ
米つくりのぬるま湯

有害なる動物*

孝子実伝*

* 大四・一「水ガメ」に発表した詩の題。
* * 同月「詩歌」に発表した詩の題。

懺悔のなみだいぢぢるく
遠夜の空にうっされぬ。

⑩*

—プロテヤ氏近況—

豚うら草履に膠をふみつけた、先生たるもの
が、

なまけもので、
やくざぜで

でかたんなる、

おまけにかはをふみつけた

詩人たるところの

のんだくれの足どりだ、

ベツタリコ

ヒツタリコ

どうです諸君

ヘツタリコ

グツタリコ

いやはや諸君

あれがおしねり

数えあげたら
きりがない

そんな
たんとなつつかい棒で
立ってますねやけど
グラグラどすわ

それが
わかりまへんねや
なんせ
目で見
耳で聞き
手でつかまぬと
納得でけん
性分どすさかいな

いのしし

稲が穂首をたらずじぶんになると
あいつがやってくる
雨がふるまっくろけの晩
ダニだらけの総身を
耳と鼻にして
そろりそろりと
田アのねきまで来て

大丈夫やなと思うと

やにわに稲を踏みたおし

甘い汁のである

出来たての米を食いやがる

なになに

そうはさせんぞと

ボロ切れや古ゴム靴や古地下足袋やらを
くすべたり

くさいにおいをさせる

田小屋に寝泊りし

よなかじゅう

大声でどなりちらす

カンテラとほしたり

ガス鉄砲ならしたり

田アのまわりに抗うちこんで

金アミ張ったり

エレキ通したり

そないしても

あいつはやってくる

そらアあいつも

食うもんがなかったらかなんやろが

せっかくみのった

稲を荒らされる

こっちゃんの身にもなってくれ

市の一方から夕やけの路をこざるところを

榎町のバアからこざるところまで

ヒツクリコ

ガツクリコ

みんな出て見ろやくざが膠をふみつけたい

ゾロゾロ

どうですみなさん

おまけに○をふみつけ

やれやれ

惟悴せるひとのあるく路*

夕やけの路(前橋市民に捧ぐる詩)

*この詩は判読困難な書き方をしている。

* * 以下の二行は、ともにこの詩の題名を避けているも
のと思われる。

○編註補遺 89号に掲載し歌論中「若山牧水氏の歌
集の中で最も感動と直接さをもつて居るものは「水上」と

「別荘」である」という箇所「水上」をさしているの
「みなかみ」をさしているのか、「路上」をさしているの

か、にわかに判定しがたいが、むしろ「路上」の誤記で
はあるまいか。なお三好達治「をちこち人」10「新潮」

昭三六・11は、牧水歌と朔太郎詩との関係論じて、
朔太郎が「路上」を愛説したに違いないことを推測してい

るが、この見方は正当であつて、すくなくも「路上」を
読まなかつたとは一寸考えられない。

人間最後の言葉

クロード・アヴリーヌ
河盛好蔵 訳

ほかの場合(死以外の時)には、いつも仮面がありがちである。けれども、われらが死とあい対するこの最後の役割においては、もはや胡麻化しがきかない。……壺底に存する真正正銘の物を示さねばならぬ。

コノ時初メテ真摯ノ言我等が肺腑ヲ出ズ 仮面ハオチテ真相アラワル。
(ルクテイウス 157/53)

¥ 四二〇

〔目次〕

生きてゐる者と死
百五十の最後の言葉
アナトール・フランス／ラブレ／ベート
ウエン／リルケ／ネロ／聖フランシスコ
エルネスト・ルナン／ブレンキン／オスカ
ワイルド／ネイ元師／ゴッホ／ソクラテス
／ユーゴー／トーマス・モーア／ピュコ
ス／ジツド／ハイネ／孔子其他
死にゆく者と生
六百の最後の言葉

筑摩書房

振替 東京四一二五番

八月一日から五日まで、富士五湖から菅平まで旅をした
いつものあたたかい業務上の出張旅行と違って、遊び
の旅であつたから、同じ風物でも、味ふやうに鑑賞できた
毎朝のやうに郭公の声を聞きえたのもまさに三十年ぶり
であつた。箱庭的な関西の風物にいき、か馴染みすぎてゐ
る私には、雄大な上信高原の風物は印象的であつた。菅平
から須坂に降る途中にあるひなびた仙仁温泉もなつかしか
つた。温泉の中が二つに分れ、各三段の浴槽になつてゐる
のも面白かつたが、浴後に呑んだビールのみさだにでた
ワラビの風味はまことに忘れがたいものがあつた。
八月四日。月余の歐米の旅から無事帰朝された中河与
一氏から、蓮田善明の死を伝える八九号の記録は感銘ふか
かつた旨の便りをいただいた。欧州の風物や文化の感銘を
言はれず、非常な時が失つた一国学者の死に感銘してぐ
ださつたことが添かつた。この日、寿岳文章氏からも添い
便りをいただいた。敗戦を契機として志を同じくした友等
が分岐してゆく過程が明確にわかつて興味ふかつた由で
あつた。八九・九〇両号の総合的な感想と拝見した。
八月二七日。蓮田敏子未亡人から八九号の拙論でまだこ
存知なかつた事実で判明したものがあつたと感謝の便りを
いただいた。八九号を、却下された遺族年金の交付再申請
の資料として厚生大臣にまで提出されることである。
蓮田は自殺のゆゑであらうか敏子未亡人には一円の遺族年

編輯後記

金も下附されなかつた。彼女は女短大の世話係となつて三
子息の養育に献身して今日に至つたのである。長男品一君
は学位をとり九大第二外科の助手、次男太二君は熊大医学
部研究室に勤務、三男新夫君は北大土木科の四回生、明春
大阪府庁に勤める由。こゝまで献身して時に病むこともあ
る敏子未亡人のために、形式的な法文解釋でなく、死に至
つた蓮田の苦衷を諒として遺族年金の下附を願ひたいもの
である。生存者になくもがなの彼獣のくはだてを聞く。死
せる者に礼せずして何の彼獣であらう。

菅平から歸つてきて間なしに、東京のS社から拙論の上
梓方おすすめをうけた。今まであちこちから一本にまとめ
てほしいとの要望をうけてゐたが、明年六月で一応百号を
迎へることになるので、その少し前あたり以上に梓すること
もあながち無駄ではあるまい。いづれ詳細お伝へする機が
あると思う。

(〇)

果樹園 第九十二号 (毎月一回一日発行)
昭和三十八年十月一日発行

池田市野町一六八
編輯兼 小高根 二郎
發行所 元市印刷株式会社
池田市東住吉区桑津町五の八
印刷所 元市印刷株式会社
池田市野町一六八
發行所 果樹園 社
定価 三十円 送料 十円

蓮田は自殺のゆゑであらうか敏子未亡人には一円の遺族年

果樹園 九十二号 昭和三十八年十月一日発行 (毎月一回一日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社

果樹園

第93号

詩人、その生涯と運命 小高根 二郎

見合 結婚 福地 邦樹

野 火 織田 喜久子

発 掘 美堂 正義
階 段 吉本 青司
ヘリック 詩抄 森 亮
浄罪 詩篇ノオト 竹越 三男編
夜 夜 浅野 晃
夜 さ む 堀之内 歴
編 輯 後 記

詩人、その生涯と運命

書簡と作品から見た伊東静雄(八十二)

小高根 二郎

明けて昭和二十二年一月、伊東は仙台なる
桑原武夫氏に、次の書簡をしたためてゐる。

「ほんたうに永い間御無沙汰してしまつて
お手紙先にいただくことになり、まことに
恐縮しました。しかし大へんうれしくござ
いました。戦後はなまけ者が一層おつくう
がり屋になつて、学校からかへつては寝て
ばかり暮してゐる為態であります。御無沙
汰はしてゐましたが、御文章はしばしば

々で拝見しまして、なつかしく存してゐま
した。先年直接承つてゐた論旨や、話術や
、冗談までが、はつきり思ひ浮べられ、ひ
とり微笑しながら、なつかしがること
多くございました。俳句論は知人らの間に
大へんで、あれに対する反駁文を蒐集して
みようぢやないかと話合つてゐます。これ
は出来るだけ実行するつもりです。萬葉集
が戦時中ほどの人気を失つた上に、俳句ま
でやられては、国文学は一寸困るので職業
上の保身からもずるぶん反駁が出るのでせう
し、この蒐集はきつと考現学的にも見もの
であらうと思ひます。私や又現下の詩人と
称する者の大部分の作も亦、殆ど和歌や俳
句の引のばしにすぎぬものですから、これ

は一寸人事でもありませんから三省しよ
うと考へてゐます。「世界」何度も拝見して
、お尋ねすべきことはお尋ねしておかうと
志してゐます。(私の禁止派は、自分の「
詩」をも含めた自嘲的禁止派であります)
又お嬢様お生れの由、つい笑つてしまひ
ました。いかにもゆつたりした福々しい感
じがあつて、このお知らせには、にぎやか
ない気持ちがありました。どうぞ美しい
お嬢様方になられるやうお祈りします。奥
様にもお目出度うをお伝へ下さい。
私は貧乏の上に、すつかり焼けて一層貧
乏になり、本も全部なくなつて、一寸ねこ
ろんで読む物にも事缺くことがありをかし
い程であります。それで暇な時は抒情詩で
も書くより仕方ないのでありますが、この
ごろ自分の抒情詩のごまかしといふものが
段々目についていやになるので困ります。
かうなると、無学なので、どうにもならぬ
無手勝流の悲哀を覚えないでもありません
保田、田中両君も近くに來られたらしい
ですがまだ文通も面会も打絶えてをります
中島君もまだ比島から帰らないやうであり
ます。果して生きてゐますことやら。
「お茶」の話の時よく承りました御母上
様最近おなくなりなさいましたとのこと、

38.12.29

深くお悔み申上げます。

二十二年正月十日

伊東静雄

桑原武夫様

適当な紙なく、こんなもので、しかも不揃い。どうぞお許し下さい。」

(昭和二年一月一〇日、大阪府黒山村より仙台市北五番丁、桑原武夫宛封書)

この伊東書簡は、桑原武夫氏が「第二芸術——現代俳句について——」(昭和二年二月号)を發表してから、昨二十一年の出来事として五女陽子さんの誕生や、母しんさんの死を知らせてきたことに対する返事である。

桑原氏は昨年の「人間」二月号、「新潮」九月号で、明治以来のわが国の小説のつまらなさは思想的社会的に無自覚な俳諧を基盤にしてゐるからだと論じてゐた。そこに「世界」十一月号で結論づけるやうに俳句第二芸術論を放つたのである。当時、このエッセイは俳歌人や国文学者のみならず一般社会人にも喧々轟々の物議を醸したものであつた。

桑原氏は専門家の十句と普通人の五句、計十五句を、作者名抜きで掲載すると、それが誰の作品であるか判定できるかと提言してゐる。それを氏は同僚や学生に実験してみた結果、「現代俳句はまづ署名を見て、それから作品を鑑賞するより他はない」倒錯的な衰状

を論じ、「他に職業を有する病人が余技として消閑の具とするにふさはしい」玩具だと断じて、「しいて芸術の名を要求するならば、現代俳句を『第二芸術』と呼んで、他と区別するがよい」ときめつけたのであつた。

伊東はこの第二芸術論に対し「知人らの間は大へんで」という反響を伝へてゐるが、事実、頼原退蔵先生を初め栗山理一、杉浦正一郎氏等の俳文学者を伊東は身近かにもつてゐるからである。しかし、伊東自身も俳句に對し、いささか懷疑的であつたことを思ひ出す。昭和十九年の春、大山定一氏から頼原先生の芭蕉講話を聞きに出てこないとこの勸誘に對し、「芭蕉について——というより俳句といふものがよくわからぬ」(昭和十九年四月二日伊東日記)と述懐してゐた。そのくせ桑原氏の痛棒に對して、私や又「現下の詩人と称する者の大部分の作も亦、殆ど和歌や俳句の引のばしにすぎぬものだから、これは一寸人事でもありません……」と三省してゐる。いささか矛盾してゐるやうであるが、伊東の詩は和歌の引のばし、つまり短歌の系列に属する現代詩であるからである。

書簡の末尾で伊東は保田与重郎、田中克己氏等に文通も面会もしてゐない事情を伝へてゐる。昨年十一月月中旬の清水文雄氏宛書簡で

しづかに少しづつ書き出しました、終戦後八つ書き、それぞれに満足した気持を持つてゐます。しづかりやります。実生活はしかしやはりひどいものです、殊に家が、屋根と柱だけで、満足に戸障子のない廃屋なので、この冬はこたへました、正月一日から約四十日も悪性の風邪で苦しみました。家のものもつぎつぎにねましたが、二、三

見合結婚

福地邦樹

おまえと付合うようになって

半年たった頃

おまえがはじめて私にねだつたのが

琴の爪だった

これだけは ほかの人に

買ってもらいたくなかつたからと言つた

私はおまえの

そんな古風な所が気に入つて

その後おまえが初めて私の家に泊つた朝

私が仏壇で手を合わせるのを

そちらこそ古風だと笑いながらも

日前からやつと元気をとりもどしました。夏樹が一番達者で、毎日、漫画カルタといふのを、自分でよんで(絵を見て文句を暗誦し)、自分でとつて遊んでゐます。例へば「拾つたガマ口からつぽだよ」とか「ルールを忘れたアンパイヤー」といふ様な類のものをわけわからずおぼえて、とるのであります。そして、特に機嫌のいい時は豊年踊とい

おまえは私にならつて手を合わせた

私達は二人とも晩婚どうしだから

そういう取り合わせに

なつてしまつたのか

おまえと話している

胸のとどろきというよりはむしろ

もう四五年も夫婦でいたやうな

静かな安らぎを覚える

私の両親がおまえに何もかも打ち明け

私よりも大事にしているのが

それを裏がきする

どうやら私達は

恋愛結婚など出来ぬ物ぐさ同志の

似合いの夫婦になるらしい

蓮田の死を介し、「ひとりの友を失つて、他の多くの友をも遠ざかつてゐたい気持」としてゐるのだが、年が改まつてもその気持は變つてゐないのである。伊東は比島戦線にあつた哲学者・中島栄次郎の安否をきづかつてゐるが、昨年五月ルソン島ですでに戦没してゐるが、公報がまだ入つてゐないからである。

二月中旬伊東は次の書簡を百合子さんに送つてゐる。

「お手紙久しぶりでありがたうございました。女一人で、この大悪気流の世間の中に生きてをられることを考へると、ほんたうにいたはしい気がします、私にはとにかくまだ家庭があり、文学があり、それが避難所にも元氣の源泉にもなるのです。お近づければ、いくらでもこんな時お力になれるのにと残念です。丁度私が京都にゐましたころ、お宅が私にとつて唯一のオアシスであつたことをいつも思ひ、それに引きかへ、先生にも、あなたにも全く自分が無力であるのを恥入ります、元氣を出して闘つてゆかれることを祈らずにはをられません。弟の案内もお産にかへつたまままだ雲仙の山中にゐます、弟も東京の生活がいやになつてゐるやうです。私はしかしまだ大阪生活にはへこたれず元氣にやつてゐます。詩も

ふのをやります。夏近所の百姓がやつたのをまねるので、歌をうたつて、左と右の足を交互に前に出し、手を上下にふるのです。それに、三輪車、——これはまき子のもので、疎開しておいたやつ。も一つ、電車と機関車の玩具をしきりに何百べんとなく往復さす遊び。

この四つものを、じゅん番に、ほとんどすこしの暇もないほど交互にやつてひとりで遊びます。又、食事の用意、——茶碗をおぜんにならべること、又その後かたづけ——茶碗や空のおひつを台所にかへし、机を——これは食卓のかはりにまき子の机を用ひるから——ふきます。へんな子供です。すべての玩具はちやんと自分でしまふ場所をきめて、きちんと後かたづけをします。きつちり屋です。そして夜半に目ざめて

「お父ちゃん、牛にはつべたなめられた」とカルタの文句を突然云つてみせて笑ひます。さうすると、私も

「夏ちゃん、猫の頭にカンブクロ」と応答してやるとキヤッキヤッ笑つて、またねます。朝は私と一緒に六時には起きて、一緒に食事をします。

学校は、学制がかはり米年から高等学校になるので、何だか浮足立つてそはそはしてゐます。時勢がわるいので、生徒が見る不良化します。私は年輩や何かで、段々忙しくいろんなことをやらされて重要視され、弱ります。私はい詩さへ書ければいいのですから。いろんなことがあり、人の心の変化を見てゐると、時勢がよくわかつて面白いです。

六時半にはもう家を出ます。夜のしらじら明けです。西に向いて十二、三町、このごろは風がはげしいのでつらいです。雲雀は春のものとはかり思つてゐたら、もう夜明けの空でないでゐます。昼間は一寸ばかり伸びた麦の間を十羽二十羽と跳びまはつてゐます。そんな平野です。大きな池が、三つあります。周囲に竝樹があつてきれいです。そのあたりの夏の風物詩書いたら桑原武夫にほめた手紙貰ひました。ほらルノアルといふ絵書きがゐるでせう、自分の詩にあんな色彩がほしいものだとこのごろ考へてゐます。このごろは夜の家路を懐中電燈をつけてゆく小さい黄色い光の輪のことを書きました、養徳社から出る「随想」といふのに（三月号）にのせます。夏の雲雀

の卵のことを書いたのは「午前」といふのの二月号に、又、廻燈籠の夢幻を書いたのが、近い号の「四季」にのる筈です、ついでがあればごらん下さい。

御元氣を切に祈ります。

今日は久しぶりに宿直で、ここは進駐軍の住居が近くにある関係で停電がないのでゆつくりこんな手紙書けました。三十分おきの停電は東京もありますか、あれには弱りますね、本も何もよめません。

シャルドンスといふフランスの作家の面白い面白いですよ、私は「ロマネスク」といふのをうらやましくよみました。

十七日

しづを

ゆり子様

（二月十七日、住吉中学校より東京都上馬、酒井百合子宛封書）

百合子さんを慰め激励するこのたよりは、例により詳細を極めてゐる。姫路五軒邸、京都今熊野の酒井家……。それが大学生時代の伊東にとつての唯一のオアシスであつた回想と感謝から起筆し、酒井家の力となれぬ微力を詫びてゐる。

その代償というわけではあるまいが、弟・寿恵男君一家の消息、愛息・夏樹君の動静の報告は詳細である。まだ結婚しようとならない百合子さんのために、「避難所」ともなり、

「元氣の源泉」ともなりうる家庭の楽しさを教へる心つもりなのかもしれない。

それにしても後半の義務づけられてゐるやうな文学的報告は重要である。真冬の夜明け空に鳴いてゐる雲雀。竝樹を植えた三つの灌漑池。それらの風物詩を伊東はルノアルの明るい朱で彩りたかつたのである。屋根と柱だけの風通しのよすぎる廢屋で、代用食が主食である生活をしなければならなかつた伊東にとつて、せめて詩の世界だけなりと暖く色付け、豊饒に彩りたかつたからである。三十分おきの停電が強ひられる火の気もない夜に、伊東が拾ひ読んだジャック・シャルドンスの「ロマネスク」（神西清訳、昭和二年一月）に興がりうらやんでゐるのは、「私は一人の女が一人の男に与へうる幸福、この世でたつた一つの幸福を書いてみたい」と願ふシャルドンスの、少年バツプを愛するやうになつた妻アルモンドと夫オクターヴの間の嫉妬と愛情との交情のコンニヤツクのやうな筆致のことに、肉体が暖まる思ひがしたからかもしれない。

「ロマネスク」の訳者の神西清氏は、伊東が「中心に燃える」を寄せた「四季」第四号の編輯者であつたので、同著を伊東に寄贈したものと想はれる。

伊東は懐中電燈の小さな光の輪を歌つた「帰路」の新作ができたことも百合子さんに報告してゐる。

帰路

わが歩みにつれてゆれながら
懐中電燈の黄色いちひさな光の輪が
荒れた街道の石ころのうへをにぶくてら

す

よるの家路のしんみりした伴侶よと私は
思ふ
夜ちゆう風が目覚めて動いてゐる野を

野火

織田喜久子

「キリンソウ」
またの名を「トラノオ」という。
敗戦の山野に、黄色い尾をふりたてて現
われた虎族の野草だ。
戦前派の「ヒメムカシヨモギ」や「アレ
チノギク」を抑えて
日本のジャングルを我がものとした彼ら。
秋がようやく深まるころ
茎の天辺から真黄の花を噴きあげたとみ

かうしてお前にみちびかれるとき

いつかあはれなわが視力は
やさしくお前の輪の内に囚はれて

もどかしい周囲の間につぶやくのだ

——この手の中のものしびは

あ、僕らの「詩」にそつくりだ

自問にたいして自答して……それつ

きりの……

光の輪のなかにうかがふ轍は

昼まより一層かけ深きさままれてあり

妖精めくあざやかな緑いろして

草むらの色はわが通行をささやきあつた

ると

たちまち烈しい炎の渦巻となって野を席

巻する。

ギラ／＼と紺青の天に映える

野火！

工場が建ち団地ができて

彼らの領分はだいが減つたが——

今年もまた「虎の尾」の季節がきた。

嵐にもまれて十分に根を張つた彼らの群

落は

秋空へもり上がるように

ぐん／＼伸びる。

第四詩集「反響」

かつてこの作品はフォード・ソローの「光と影」が影響してできた作品として昭和十四年十月五日附富士正晴氏宛伊東書簡の解説のをりに触れたことがあつた。つまり、主人公のフローチャが影絵を愛好したやうに、伊東はへ光の輪のなかにうかがふ轍は、昼まより一層かけ深きさままれてありと、光よりむしろ影に印象づけられたと説いたのであつた。読んでから七年余の年月が経つた日に、その小説の主人公の好奇に影響されるものかどうか？ いさ、かこちつけがましいところがないかと反省されなくもないが、伊東は読後「自分も切に小説書きたくなつたです」と書いてゐるほど感銘をうけてゐるから、作時に影響したといつても暴論ではなささうである。

それに当時は電力不足で占領軍以外の燈火は三十分おきの停電を強ひられた。したがつて石油ランプや蠟燭が停電間に使はれた。日常の起居に影絵は馴染みであつたのである。……というわけで、伊東はフローチャの影絵遊びを夏樹君に教へたこともあつたらう。さうした事情からも「光と影」が影響したとしても自然であつたと思量される。いや、これらの口説をまつまでもない。「

「帰路」は Saché そのものだったのではないだろうか？日脚の速い真冬のこと。伊東は放課後、萩原天神で下車すると、北余部までの空つ風の寒い十二三町の野中の闊路、懐中電燈に助力を乞はねばならなかつたらう。風邪が四十日間も治癒しないという、すでに胸部が尋常でない徴候が予見される伊東は、空腹と生活の疲れてことさら足が重かつたらう。石ころと凸凹……。小さな光の輪に囚はれた伊東は、心の支へとしての詩すら、桑原氏に「私や又現下の詩人と称する者の大部分の作も亦、殆ど和歌や俳句の引のばしにすぎぬ」と書き送つた自嘲される心境である。

伊東は歩む度に小刻みに揺れる小さな光の輪を凝視めながら、ふん！ この手の中のものしびは、へあ、僕らの「詩」にそつくりだ自問にたいして自答して……それつくりの影響の……と感じたのだらう。「光と影」の影響による影のくまどりの濃淡はともあれ、生活それ自身、人生の「帰路」それ自身の感傷だったのであらう。

伊東は四月下旬未亡人山川京子さんに次の書簡を送つてゐる。

「山川京子様

拝啓 先日は御鄭重なお手紙と御遺書「やまかは」御恵与いただきまことに、あり

き忘れようと努めてゐた悲愴に胸をふさがれたことだらう。

山川未亡人に弔問の書簡を出した一週間後山川の友であつた林富士馬氏に次の便りをし

てゐる。「ほんとにあなたは、このごろ次々と大へんでしたね、へこたれずに元気でゐて下さい。大へん会ひたいです。私は大元氣、色々考へ、計画し（詩作のこと）、又読書し

発掘

美堂正義

二万年位まえの地図では瀬戸内海は陥没してゐないで本州と九州四国とも地続きで北転して老岐対馬から朝鮮半島へと連つて幅も現在よりも広いこの地図に向つて来しまなかつた当時よりも山は隆起し激しく傾斜して平野は狭く、青い海の所に浸蝕されてゐる縄文青銅時代の土器や鋳粗末な数少ない出土品も製作当時の姿を保ち得ないで破片や腐蝕された品が淡い電燈の光に怪しく浮き彫りされて、乏しい古代人の生活の姿をぞかのせる地殻の変動が起りそれら古代人は激動のうちに埋没し山中深い土地に忘れられて

がたう存しました。この上なき記念品として水く大切にしておきたいと存じます。先年一度林富士馬君の家の二階で二、三時間お話ししたことをはつきりおぼえてをりませ。又御出征直前のころのお作かと存じますが故郷の風物をお歌ひになつた一聯の和歌を雑誌にて拝見し感動したことも忘れ難くございます。この戦争に蓮田善明君、中高栄次郎君などまことに得難い友を私もうしなひましたが、山川様も亦大切な友人とひとひそかに存じてをりました。ただ私が関西にゐましてお会ひする機会の少かつたのを残念に存じます。御遺著により御夫君とあなた様とのあやしいほどの御運命を知りまして、何と申し上げていいかなかなか言葉も見つかりませす、筆もすすまぬままにお礼今日まで延引いたしてしまひました。どうぞお許し下さい。心からお大事にお暮し下さいと申し上げます。

四月二十九日

伊東静雄

（四月二十九日、大阪府黒山村より東京郵形並）
（区西田町一の七〇七、山川京子宛封書）

これは「まほろば」同人であつた山川弘至の遺著「やまかは」（昭和二年三月）を未亡人京子さんから贈られたときの札状である。

山川は岐阜の出身、国学院大学国文科から研究科に進んだ前途有望な詩人・国学者であ

つた。林富士馬氏等と共に「まほろば」を興し、保田与重郎の影響顕著な評論と詩・短歌を精力的に発表した。京子さんと結婚四日にして応召、台北第八飛行師団司令部に暗号将校として勤務、昭和二十年には空襲激化した南部屏東飛行場本部附暗号班長となつた。終戦四日前の午前十一時、をりから耐爆壕内で十数名の部下と情報整理中であつたが、米襲したB24の二五〇軒弾の直撃をうけて戦死した。享年満二十八であつた。

つまり彼は結婚四日にして応召、終戦四日前に死んだのである。真にむなし一生であつたと言はねばならない。「御夫君とあなた様とのあやしいほどの御運命」とは、そのむなしいちぎり、そのちぎりのむなしさを介してのされた京子さんの相問歌が、「やまかは」の合せ鏡「新月」という歌集に編まれて一緒に送られてきた宿命をさしてゐるのである。へ見らるるとかへりみすれば黒髪風のゆれつふるる御手なし」

死後も京子さんの変らぬ相問歌を贈られる山川弘至は至福の人と言はねばなるまい。それにひきかへ、昨秋追悼会が催されたとはいへ、今なほジョホールのゴム林に眠つてゐる蓮田。比島のいつれの山野に遺骨をさらしてゐるのかわからない中島。伊東の胸はひと

てゐます。そして楽しい、色彩ある気持でゐます。いろんなことが面白くて仕方ありません。大へんいい傾向にあるやうです。独立した、展開のある仕事してみたいです。「ずるさ」といふことは自分の日常生活にいつでも辯疏を用意してゐる抜目なきのことです。私は段々自分の具体的な日常や生活や、会話や、風采に一向興味も関心もなくなりつつあります。つきはなし

幾十世紀の後人は思ひ出したやうに発掘し白日の下に曝してしまふ掘り出した品物をどうしようとするのかわれわれに暗示するものは深い霧に包まれたこれら一連のものから何が理解され、何を理解しようとするのかそれを知ってどうしようとするのか私は知らない

まだこの国土は細くなるだらう火山列島はいつかは消滅するかも知れない西細亜大陸から離れて太平洋の真ん中へと移動するそれは幾千万年後かも知れない既に人類は滅びて宅宙を始め地球まで失はれてゐるかも知れない未来を予知することは出来ないがその時は私は死んで近い子孫のときかも知れない若しも残つてゐる人がゐたらそのとき私たちの遺品が残されてそれを発掘するだらうか

て平気でありませす。只自分の詩法だけが興味です。（何だか舌たらずでうまく云へませぬ。）グロリアが又出版を開始します。私はあなたのもを是非出したいです。そこから小冊子も出る筈。」

（五月六日、大阪府黒山村より東京郵形並川河島）
（四月三十一日、小峰正義方、林富士馬宛はがき）

伊東は林氏に次々に大変だつた……と慰めの言葉を書いてゐる。それは一年前に父上の芳三さんが疎開先で亡くなつたことや、その後における日本医大を卒業するための上京と生活のための苦闘やらをさしてゐるのである。私はたびたび伊東から耳にしたことだが林家は非常な家作持ちだつた。それが戦災にやられたのであるから大変な打撃をうけたわけである。林氏の語るところによると、池袋のマーケットに古本店を出したり、太鼓焼を売つたりまでの苦勞をしたのである。

それにひきかへ、伊東は読書をし、詩作の計画をめぐらし、ルノアール風の暖い色彩のある心境で日々をすこしてゐる幸福を伝えてゐる。「大元氣」と言ひ、「いろんなことが面白く」て仕方がないと言つて、独立した展開のある仕事をしたという意欲に燃えてゐる。この裕達な境涯は、日常生活から言ひわけを捨て去つて、あるがま、に平然と在ることから生れる……ということわりを啓示して

るのである。できるだけ生活し、必要からの会話をし、あるものを平然と着流してゐる日常——Saehlicheit。つまり、日常の関心の一切を詩法にだけ懸けよ。他は一切かへりみるな……と言つてゐるのである。身はたとへ埃にまみれた古本屋、炭火にはつた太鼓焼屋であらうと詩は生れると伊東は林氏を鞭撻してゐるのである。末尾にぐろりあ・そさえての復活を希望の灯のやうに提げてみせてゐる。

五月下旬、伊東は天理図書館に勤めるやうになつた田中克己氏に次の書簡を送つてゐる。「先日はお手紙ありがとうございました。おすめの『炉』への投稿、期日までに是非実行したいと存じます。又大毎でお会ひした日は、ゆつくりお話出来ず、大へん心残りでした。又機会があつて、アペノ辺にお出向の折は学校に一寸立寄つてみて下さいませんか。私も日々疲れて中々そちらに出向く折もありません、このごろは又少しづつ詩作の心持うごき、ひとり町をあるくことが多くなりました。切に御自愛と御詩作を祈ります。」

(五月二十七日、大阪府黒山村より奈良県丹波市天理図書館、田中克己宛はがき)

この書簡によると伊東は田中克己氏と大毎

で出会つてゐる。恐らく偶然であつたのだから。伊東は学芸部次長の井上靖氏に中島栄次郎の情報を確かめに行つたものと想はれる。田中氏も同じ調へて出向いたのであつたのかもしれない。

その後田中氏は奈良の田舎から出てゐる詩雑誌の『炉』に作品を寄せるやう要請したのであらう。

その日より一ヶ月後、伊東は次の書簡を富士正晴氏に送つてゐる。

「いま、長尾良君米校。いよいよあなたに正式に出版事務のこと専掌して貰へないだらうかとの申出がありました。月給は二千五百円。是非ひきうけて、私と一緒に仕事して下さい。第一の出版は、小生の選集「誰が胸に熟れむ」(或は「反響」)。ついで、三十一日午前九時、住吉中学校で長尾氏と会見していただきたいのです。御足労恐れ入りますが、おいで下さいませまいか。」

二十八日 住中にて 伊東生
富士様

(六月二十八日、住吉中学校より大阪府阿武ノ村、富士正晴宛封書)

長尾氏は檀一雄氏の義弟で元「コギト」同人だつた。彼がぐろりあ・そさえての再建を

劃は四・五月頃から始まつてゐた模様だから、伊東はすでに「反響」の原稿——既刊三詩集からの抜萃と戦後作品——を用意してをり、ぐろりあ急な挫折で不用になつた原稿を、抜萃作品の当否その他の意見を求めるために、富士氏に送つたものであるとも想像される。

昭和二十二年の七月下旬、伊東は酒井ゆり子さんに次の書簡を送つてゐる。

「このごろどうしてをられるかと案じてゐる。」

階段

吉本青司

檜の木のみどりにおどろき
木ささげの下をくぐって
寺田寅彦邸址にあそぶ
石の灯籠はたおれ
秋草がしげって
芭蕉が波をうっている
記念館とは名ばかりで
内燃機関の模型が
床の間に飾つてあるだけ
——それだけ

意図したのである。編輯主任として富士氏を幹旋してくれるやう伊東に頼んだのだらう。というのも、復刊ぐろりあ叢書の第一冊は伊東の第四詩集を予定してゐるのであるから、第三詩集「春のいそぎ」上梓に力を借りた富士氏に再び助力を得たかつたのであらう。しかし富士氏は伊東の要請には応じなかつたやうである。

「お葉書ありがたう。私の方ではまた、毎日心待ちして、二時ごろまで学校に残つてゐました。十三、四、七、八をのぞいて、月末迄、毎日、二時頃までゐます。遊びにおいで下さい。その節、あの原稿持参して下さいませんか、一応私があつかつておくといふことにした方が、自分の心持が清潔に保たれるやうで、工合いいですから。これは是非おねがひします。」

林君とはほんとに会ひたいですね、とにかく、一度、あなたとお会ひしたいです。
十一日 伊東

富士様

(七月二日、住吉中学校より大阪府阿武ノ村、富士正晴宛封書)

この書簡で富士氏に持参を要求してゐる原稿とはなにのことか判らない。現在富士氏の記憶にもないとのことである。ぐろりあ企

ました。どんなにか身心疲労なさることだせう、どうぞ大切にしてこの悪時勢をうまく生抜いて下さい、何のお力にもなれないことすまなく存じます、私はどうやら生きてゐます、困り切るといふところまでは行つてゐません。

四月頃から佐高への転任交渉をうけてゐますが、矢張りあんな田舎まで行く気にならず今迄のところ断つて来てゐます。佐高はやがて大学になるについて特色ある人を

この部屋を訪ねるものは
ただその意味を知るだけでよいのだ
伸びるにまかせた木々は
しずかな林間をつくり

ナツメがたくさんの実をつけている
その指頭ほどの
木の実の階段をつたう
秋のひかりや
トンボのはねに息する風が
充溢した

宇宙物理学者の記念碑だ
忘れられたころ来るものは
天災ばかりではない

夕月したら「反響」という題で出版されると思ひます。(九月頃発売される「週間朝日」の二十五周年記念号に詩三つほどのせましたからおついでの折のぞいて下さい)

大阪は驚くべき高物価です、東京よりずるぶん高いといふことです。しかし何にも外に買はない素朴な私の生活ではお金に困るといふ程でもありません、それにいろんな人々の手厚いひごもあり感謝してゐます。来ていただいたてもじやがいも以外には何もありませんが、気がむいたら出かけて下さい。しかし、一寸やそつとは出来かねるこのごろの汽車旅行のやうですから、おすすめする気にはなれません。

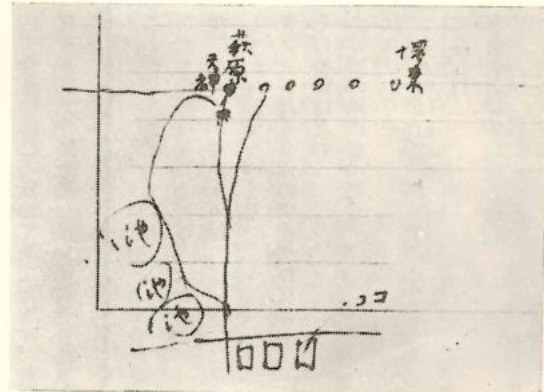
私は今月三十日まで受験講習でおひるまで毎日出てゐます。そして毎日のやうにおひるから街の風俗を見てあるいたり、映画をみたりして帰ります。そして夕方田舎道を家にかへりながら詩をつくる。さういつた生活です。

ではお大事に。これからは時々お手紙書きたいと考へます。

二十三日
ゆり子様

伊東静雄
ナンバ発高野線普通
列車約一時間で萩原

天神。下車、東へ約十五分、黒山村北余部。



(七月三日、大阪府黒山村より東京都上野、酒井ゆり子宛封書)

この書簡は、生きがたい日々、老父母を女手一つで養つてゆかなくてはならぬゆり子さんの、悲痛な訴へに対する鞭撻の辞をなしてゐる。

伊東は母校佐賀高校から招かれてゐる由を

めに没にしたのであらう。同号に頼原退蔵先生の「西編のエロテイシズム」が掲載されてゐるから、おそらく先生の推輓によつて詩を寄せたのであらう。

ヘリック詩抄 (三十四)

森 亮

靈感無沙汰して

詩を書かうたつて手の下しやうがない、
靈感の訪れが間遠になつた今日この頃は、
でも、ひとり静かに部屋にゐて
旧稿を読み返すのも詩人のわざか。

★
死後の願ひ

もしもわたしが詩を本にしないで
死んでしまふやうなことがあつたら、
ヂュリアよ、わたしの切ない願ひゆゑ
詩稿に火をかけて焼き払ひなさい。
中途半端な姿を人目にさらしたのでは
わたしの詩、未来永劫に浮かばれない。

伊東は書簡の末尾に案内書をつけてゐるが積極的に勧める気はないが、自主的に来訪されるなら敢て拒まないという消極的な招き一変らぬ好意を示すためかと想像される。

★
もうわたしは

もうわたしは恋の歌は書くまい。
恋に夢中になつたときどきのが悔まれて
ならぬ。
もうわたしは浮世の歌は書くまい。
生を閉ちて塵の身を大地にお返ししたい。

ヘリックには自分の詩のことや詩人としての自分を歌つた詩が幾つもある。「靈感無沙汰して」(三三五)は詩が書けないことを書いた詩で、言はず無から有をひねり出したもの。「死後の願ひ」(五九九)は自分の作品を愛惜する余り、自分が編集し、校正しない遺稿詩集を出して欲しくないといふやうなことを歌つたもの。「もうわたしは」(一一二五)は詩集に入つてゐる作品では最晩年のものらしいけれど、その頃ヘリックは五十七、八才で、本当はこの詩に歌はれてゐるほど気力が衰へてゐたとは思はれない、彼は八十四才の秋まで生きてゐた。

しるしてゐるが、四年前にもその話があつたことがある。夏樹君の生れた頃である。即ち、昭和十八年九月二十七日の日記に、「佐賀の口の成就することを祈る」とあり、十月一日の項に、「朝刊に高校校長の異動発表。待つてゐたものゆゑいそいで見たが、小田先生の名なし、失望。日野月先生新潟である。これも失望。新潟では躊躇する。寒いところだらうから。赤ん坊もゐるから」とあつた。日野月・小田両先生のひきで母校に錦を飾る段取りであつたやうである。それは広い庭のある田舎屋を住居として、そこで文学に専念をする夢からであつた。が、今は戸障子でさへ満足でない陋屋に住みながら、通勤の往來にたどる萩原天神から北余部に至る田野を庭として、生きがたい大阪に住み果てる覚悟をかためたやうである。

伊東は家族の消息とともに、義務となつてゐる文学の報告を例のやうにしてゐる。ぐろりあ叢書の第一冊たるべかりし詩集は題を「反響」と決定して創元社に手渡した由をしるしてゐる。又、「週間朝日」二十五周年記念「愛と美」特輯号(昭和二年)に詩三篇を寄せてゐる事実もしるしてゐる。伊東は、せたと確定的に書いてゐるが事實は掲載されてゐない。編輯者が伊東に関して無知であつた

八月に入つて、伊東は次の書簡を田中克己氏に送つてゐる。

「前略 お褒りありませんか、盛夏がやつて来て、生きかへつたやうな快適を覚えてゐます。六月から七月初めにはずるぶん身体わるくしてくるしんでゐました。それに夏休みでのびのびしてゐます。

中島さんの留守宅わかりましたので、只今早速、矢代書店の長江道太郎君宛、「詩人」一部と稿料とを催促してやりました。あんまり遅れるやうでしたら又私までお知らせ下さい、催促しますから。先日(大毎でお会ひした日)長江君から交渉うけた際は稿料のことは、はつきりとりきめはしませんでしたが、当然それは支払はるべきものと思ひます。

「炬」の年刊詩集の原稿はすでに(七月末)直接、「炬」編輯部に三篇送つておきました。お心づかひさせてすみません、御好意感謝いたします。

こんど、大阪の創元社から、古い詩の大部分と、終戦後の新しい十篇を加へて「反響」と題して出版することになりさうです。大して気乗りはしないままに、お金もほしいし、出すことになりさうです。

このごろは又少しづつドイツ語の復習を

してゐます。

御家庭の平安を祈ります、米食ひたいです。

八月二日

田中克己様

伊東静雄

(八月二日、大阪府黒山村より奈良県櫻井町様)

(井大教会内、田中克己宛封書)

冒頭、伊東は盛夏の精気によつて元気を盛り返してゐる模様を伝へてゐる。「詩人」に關聯して稿料云々の話が出てゐるが、過日大毎の井上靖氏のところでは伊東は田中、長江氏等に会い、その際「詩人」の編輯者長江氏から中島栄次郎の詩論を再録する交渉でもうけたのだらう。その原稿料を天理の極楽寺で生死不明の夫の消息を待つてゐる明子夫人に送つてやらうということのやうである。

萩原朔太郎手記

「浄罪詩篇ノオト」A

竹越三男編

先日は侏儒をわざ／＼ありがたう

△以下この部分全体に×じるしをつけ抹消の意を示してある。▽

今度の(十二月号)侏儒を見るに及んで侏儒

も初めて完成されたといふやうな気がしてうれしかつた、併しそれは表装の話だ、内容は空前のだけ気味で御話になりません、見るべきものは内山、金井、橘三君の光つた詩篇だけ、歌の方は一人も真面目なものはない。

*大正三年八月、朔太郎の指導下に前橋で創刊された詩歌集、これについては拙稿「若き朔太郎と前橋」(『無限』12、昭三七・12)を参照されたい。
*内山夢路、金井津根吉、橘文夫(奈良半太也)の三人は「侏儒」の同人。橘文夫は「草上噴水」(9)にも詩を寄せている。

何しろかゝる疾患状態にはつくづく愛素がつきました、こいつがつづけば天上殛死の懺悔体も氷凍してしまふほどの酷痛です、いろいろ考へると情なくなる、何でもいゝから病氣なんか治つてしまへ、早く治つてしまへ。*

*この部分はその前の部分と共に、次の梅沢君の下の下書である。

梅沢君

病氣が治らないので困つて居ます、毎日発熱がつづく、頭の心がいたい、苦しい、つくづく考ふるに今度のハルシネーションの最大原因は高崎菊のバアの آپサントにユウ困をきざし前橋バアのボンボゴダンスに遠因を發して居る、(近因は先夜御話した事実)
何しろかゝる疾患状態にはつくづく愛素がつきました、△以下の部分は抹消してある▽第一小生

にとつていちはん肝心な勇気がまるでソッとする、その上幻惑の米襲は殊に激しくなる、いやはや惨酷なものです。

*「侏儒」の編集を担当していた梅沢英之助。
*これはどの事実をさしているのか確認はできないが、おそらく「若き日の激情」書簡32に書いてある病名に關係のあることであらう。なお同書簡23に書いてある高崎のエレナの家を襲がせた事件に關係したこともかもしれない。

侏儒一月号の詩篇同封しておきました。流石、のんだくれの探偵詩人プロチャ氏、肉身ランエの疾患ニカワをふみつけたので、靈肉共に憔悴困惑の極に達して居るところを侏儒の諸君と前橋の市民がエノキ町の一角で指さし嘲笑して居る光景です、題を「夕やけの路」としました、悲惨なる頽廢デカタン行路の象徴です。

*この詩(夕やけの路)は「侏儒」には出なかつた。
同誌一月号は発行されず二月号に朔太郎は詩「雨の海へ行きます」を寄せ、その号⑥で同誌は終刊した。

つくづく考ふるに僕はいつでも一人ぼつ「ち」だ、さむしいんだ、笑ふ奴らは勝手に笑へ、僕が泣きたいときはいつも一人で泣いてるんだ、僕の涙を見た奴が、この町に一人でも居るか、やい。

健康第一

△大きく書いて、マルで囲んである▽

夜

浅野 晃

真夏の夜のふかい夜ふけに
川岸の柳につながれてゐる小舟

私はくらしい川波の音をきく
草叢のかげにいくつかの灯火を見る

田園は眠つてゐる
うらやましいまでによく

新妻も若い母も赤ん坊も娘たちも
うらやましいまでによく

既に馬がことりと音をさせる
けれどすぐそれは止みもとの静けさに帰る

すこやかな夜はふけ
ふかい忘我の眠り

草の葉に花に露は降り

健康第一、

眠つてまだ醒めない花

しげみの中で小鳥眠り
墓地で死者眠る

寝息がすやすやときこえ
忠実な灯火はまたたく

ここには呪はれた不眠はない
ここにはまだ夜がある

私は夜を愛する
夜の美しいことはどうだ

夜は天のものだ
黒い山も黒い梢も

川波がうたつてゆく
夜があり夜がある——と

残された田園に忘れられた夜がある
われひとの愛する夜が

春のきたらんとするまへ、
われらの盃をあてん、

少女

忘却(忘れもの)

⑩ 時世おくれの詩人たち米

遠い大昔の話である。

その頃の若い詩人は(詩人は五十才になつても青年と呼ぶ習慣である)いつも美しいプロンドの髪の毛を長く肩までたらし居た(髪の毛に櫛を入れないのは詩人の風俗であるから)。

彼はいつも幾人もの恋人をもつて居た。

実「際」少しばかり眼付が気に入つたとか小鼻の形が理想に近かつたりした少女に逢ふごとに彼は恭しく前につきまぎさいて花束をさげた、そしてかういつた。

「おお、おんみ、白百合の花にもまさる美しいの恋人よ、おんみが清き御姿はさながら夢の園生に提琴の調かななる天使のそれにも似たる哉、ああ、希くばせて我をしておん身が奥しき僕の一人とも許させ給ひてよ。

かうあんなばいでは彼は恋人の多くを所有して居た、(もつとも女の方では此の美しい言葉の意味をせめて半分も理解しては居たか疑問で

ある)

彼はまた美しい月夜の晩に甘い哀愁に浸りながら限りもなく耽美的なロマンスを画いた。「楽しい恋のおもひでよ、月は昔に変はれぬど、破れし胸を如何にせん」失恋のなやみは気の毒な詩人をいつも執念ぶかく意地めっていた、実際その当時に於て最も人気のある詩人は奇体(キタイ)に皆失恋の人であった。

詩人と思想家(シイカ)は別外(ベツガイ)に書いてある。もつとも一寸一言口をきいただけの少女が「恋焦がる、何子の君」となる割合だから失恋の度数が多くなるのも無理はない計算である。

併し既に既に此等の詩人の楽しい初恋時代はすぎ去つた。

今時うかうか「神聖の恋」とか「楽しい家庭」とか「天使の夢」だとか「破られし胸のいたみ」とか、口に出して言はうものならたまま「時勢おくれ」なる洪笑(コウセウ)と賤辱(せんじやく)の下に葬られてしまふ。

今時髪(カミ)の毛を肩まで長くして居るものがあれば、(たとへそれが美しいブロードにしろ)たちまち低級(テイキウ)な寄亭(ヨシテイ)芸人(ゲイジン)の類(ルイ)から然らずんば乞食(ケイシキ)と誤解(ゴケイ)される。

バイロンやシルレルやハイネの作つたそれら

のロマンチックの幻影(カクシ)は趾方(シカタ)もなく消えてしまつた。

世の中は一日(イチニチ)とせちがらくなつてくる、夢(ユメ)にも「美しい世界」は見られなくなつた。

昔(ムカシ)から詩人(シイジン)というものは口を開けば女のこゝとを讚美(サンペイ)するにきまつたものであるが、その癖(クセ)實際(ジツチ)は女(メ)にもてないこと甚(シ)だしい。

それもその筈(ハジメ)である、女(メ)の方(カタ)から見れば、詩人(シイジン)といふ人種(ヒトシユ)ほどいけすかないものはない、どれをみてもいやに神経質(シキウシツ)の貧相(ヒンサウ)な顔をして一文(イチモン)なしのくせにいけづうづうしく助平(タツヘイ)で、働(ワタ)きもないくせに気位(キイ)ばかり高く、それで居て自(ミ)「慥(シカク)の強いことは人一倍だ。

殊(トモ)にその貴婦人(キフジン)を気味悪(キミワク)がせる第一(ダイイチ)の原因(ゲンイン)は服装(フウソウ)のじめじめして薄(ウソ)きたないことだ。

△抹消(モクシヨウ)し「掃(ハキ)も入れない長い髪(カミ)の毛(モ)は洗濯(ソウダク)をおこたるので」V

恐(オソ)らく一ヶ月(イツケツ)も洗濯(ソウダク)を怠(タカ)る。

*本篇(ヘン)はどういうつもりで書いたのかわからないが、おそらく室生(ムロウ)屋(ヤ)への皮肉(ヒニク)であろう。「髪(カミ)の毛(モ)を肩(カ)まで長くして」、「一文(イチモン)なしのくせにいけづうづうしく」、「服装(フウソウ)のじめじめして薄(ウソ)きたない」、「長い髪(カミ)の毛(モ)は洗濯(ソウダク)をおこたる」など、まさに当時の屋(ヤ)のイメ(イ)ージ(ジ)だと言(コト)えよう。

㊦

まがきをすかし
木ぬれをすかし

築山(キキヤマ)あたりもみちをそめ

霜(しも)やけさせる小路(こうじ)をふみ
松(まつ)の葉(は)に魚(うい)ちらちらと
植込(うゑこ)にたつづめるひと

庭

まがきをすかし
木ぬれをすかし

築山(キキヤマ)あたり紅葉(もみぢ)をもとめ
さ、の葉(は)にしもやけさせる

植込(うゑこ)の遠見(とんけん)をすきて
うすらひの池辺(いけべ)にきたり
さびしらに魚(うい)をみるひと
あづまやすぎて植込(うゑこ)のしげみ*

*この行(ぎょう)は未定(みてい)らしい書き方(かきかた)。

㊦*

竹

△追記(ツイキ)△凍(こ)れる冬(ふゆ)を

蒼天(そうてん)磨(こ)きをかけ

すぐなるもの地に立ち

すぐなるもの地に立ち

そのみどりは青(あお)き今日(けふ)の空(そら)ちに

なんだたれ

なんだたれ

いのりあげ

いのりあげ

懺悔(ざんげ)ををりて一念(一念)の

いのれる人の肩(かた)のうへより

△追記(ツイキ)△きたる幹(み)は

みよ青竹(あおたけ)の校(ま)は生(な)え

青竹(あおたけ)の幹(み)光(あ)る

すぐなる長(なが)きもの地面(ぢめん)に生(な)ひ立ち

すぐなる長(なが)きもの地面(ぢめん)に生(な)ひ立ち

ま白(しろ)き冬(ふゆ)をつらぬきて

そのみどりは光(あ)る朝(あ)の空(そら)ちに

なんだたれ

なんだたれ

いのれる人のむきむきに

懺悔(ざんげ)を終(お)る肩(かた)の上(う)より

青竹(あおたけ)の根(ね)は生(な)えひろこり

するとき青(あお)きもの地面(ぢめん)に立ち。

竹

睨(にら)み利(り)かす大目玉(おほめだま)の蓋(かぶ)が

カチカチ賑(にぎ)やかに鳴(な)り

汁(じゆ)がこぼれて、火(か)の上(う)で喚(わ)く

なんと威勢(いせい)のいい二十人(にじゅうにん)囃(ば)し

實際(じつじ)は、出来(でき)上(あ)がり急(いそ)がしている

彼女(かのじよ)はしかし、憑(よ)かれて

虚ろ(うつろ)な瞳(ひとみ)を、

炉(いろ)の上(う)にのせているだけ

そとはすぐ夜空(よぞら)

無人(むにん)の屋台(やたい)の上(う)で

二十コ(にじゅうこ)の敷(し)は空(そら)しくはないか

私は呼(よ)びかけてみたくなる

彼女(かのじよ)をへ我(わ)れに返(かへ)えゝらせる?

だが、夜風(よかぜ)で心(こゝろ)は石(いし)になり

ものを言うことが出来(でき)なんだ

夜さむの 夜みせて

一九六三・九・二七

ますますなるもの地面(ぢめん)に生(な)ひ立ち

するときもの地面(ぢめん)に生(な)ひ立ち

凍(こ)れる冬(ふゆ)をつらぬきて

そのみどりは光(あ)る朝(あ)の空(そら)路(ぢ)に

なんだたれ

なんだたれ

いのれるひとのなんだたれ

いまは懺悔(ざんげ)終(お)る肩(かた)のうへよりも

青竹(あおたけ)の根(ね)はひろこり

するとき青(あお)きもの(かたきもの)地面(ぢめん)に立ち

×けぶれる竹(たけ)の根(ね)はひろこり

するとき青(あお)きもの地面(ぢめん)に立ち

竹

ますますなるもの地面(ぢめん)に生(な)えへ抹消(モクシヨウ)「立ち」

するとき青(あお)きもの地面(ぢめん)に生(な)えへ抹消(モクシヨウ)「生(な)い

立ち」V

凍(こ)れる冬(ふゆ)をつらぬきて

そのみどりは光(あ)る朝(あ)の空(そら)路(ぢ)に

なんだたれ

なんだたれ

いまは懺悔(ざんげ)終(お)る肩(かた)のうへより

けぶれる竹(たけ)の根(ね)はひろこり

するとき青(あお)きもの地面(ぢめん)に生(な)えへ抹消(モクシヨウ)「立ち」

△以上、「月に吠(わ)える取(と)散(さん)の詩(うた)「竹」(第二)の原形(げんぎやう)四(よ)種(しゆ)は、順次(じゆんじ)に改作(かいさく)の跡(あと)を示(し)すものであるが、さらに最終(さいしゆ)は、

戦後文学の流れ

三枝康高著

戦後体験の一つの要約
戦争はなにを与えたか
原爆反対と平和の歌へ
太平洋戦争のとりえかた
民族の立場と安保闘争
アジア共産圏の諸民族
学生運動の榮光と悲愴
現代文学の新しい視点
「近代文学」派と平野謙
純文学はどう変質したか
文学史における戦争
二つの国民文学論
浅野晃と「妻と兵隊」
「真空地帯」と抵抗の精神
詩における人間疎外
疎外状況とその克服

「平和とパンとバラ」
戦後における詩の発展

ナシヨナリズムと「貴族の階段」

昭和維新と「貴族の階段」
二・二六事件をめぐるって
近衛の遺書と武田泰淳
宗教における意識の変革
青木敬應の「筒」の生涯
絶対他者の声をきく
指導と信徒の世界へ
軍事占領下の作家たち
戦中戦後の尾崎士郎
片沢光治良と「黒目の天使」
中助助の服織の生活
マス・コミのなかの文学
大宰治の死とその前後
「火の鳥」における演技
三島由紀夫と「金閣寺」
東京都文京区森川町七〇

有信堂

編輯後記

九月三日。元箱根の別荘に清養の中河与一氏から九〇号拙論の愚生の復員記事が美録として興味があつたとたよりをいただいた。自分のメモとしてだけでなく、後世のひとならばかの参考になればと思つて書いたのであるが、ワキがあまりにのさばりすぎてシテの伊東は苦笑をしたに相違ない。
九月六日。「大阪手帖」の内田克己氏の案内で千両会という会に初めて出席した。千円で呑めるといふところが設立主旨の気楽な会ださうで、會員は辯論士、新聞記者、役人、會社員、医師、プロデューサーその他種々な人種で構成され、浅野晃氏の友人である正岡忠三郎、青山虎之助氏にもお目にかゝれた。
九月一日。午後「新潮社」に片岡久氏をお訪ねした。伊東が死後十年を越えてその名と作品が残つたについては、幾多の方々の深い理解とかけがいのない支援が必要であつた事実を話し合つた。片岡氏は島尾敏雄、江藤淳、河盛好藏、庄野潤三その他の諸家との交渉の中に、必ず名がでる伊東の価値に着目されたことであらう。入社して最初の仕事が新潮文庫「伊東静雄詩集」であつたさうで、もともと伊東にとつて有縁の士だつたのである。
九月二七日。山陰旅行の途次大山に秋を探つた。鶯がわずかに色づいてゐるだけでさほどの感銘はなかつたが、大山寺橋の近くの蓮淨院に志賀直哉氏が「暗夜行路」結末の構想をねつた部屋を訪ねた。珍らしく晴れた日でも頂上がくまなく見渡され、よく注視すれば尾根をゆくカビのやうな人影も識別できた。

果樹園 第九十三号 (毎月一回一日発行)

昭和三十八年十一月一日発行

編輯兼 小高根 二郎
發行所 池田市野町一六八
大阪市東住吉区桑津町五の八
印刷所 元市印刷株式会社
發行所 果樹園社
池田市野町一六八
定価 三十円 送料 十円

38.12.29

の原形が「ノオト」Bに書きつけてある。「竹」(第一)は(第二)その他と共に大四・二「詩歌」に発表された。(この詩の改作でいちばん苦勞しているのは「立ち」という言葉であらう。竹は「地に生え」というのは自然である。しかし彼は「立ち」と言いたいのである。しかし「地」に立ち「地面に立ち」ではないかとも耳ざわりである。そこで「生立ち」ともしてみたが、結局「生え」に落ちついた。この詩の「生え」は、必ずしも発見ではなく、むしろ落着である。そして彼が「立ち」と言いたかつたことは、この詩にとつて重要である。

うららかに俣俣と行きかへる
けふしも年の初会なるらむ。*
*この歌は「若き日の欲情書簡33」に、大正四年年始状として、「新正」と頭書して、大体同じ形で出ている。
X
日もうら、かにはれわたる
遠見の空にれうれうと
松のみどりば冴えわたる
寿方万歳の年はじめ。
△「ノオト」A、了り▽

果樹園 九十三号 昭和三十八年十一月一日発行 (毎月一回一日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社

定価三十円 送料十円

果樹園

第94号

詩人、その生涯と運命 小高根 二郎
ヘリック詩抄 森 亮
柿の村 浅野 晃
旅の空 堀之内 晃
貨室 萩原葉子 歴

妻 よ美堂正義
墓 い石吉田全一
白の季節 福地邦樹
父の骨 田中克己
浄罪詩篇ノオト 竹越三男編
彼岸花 森 鮎子
大編輯 山吉本青司

詩人、その生涯と運命

書簡と作品から見た伊東静雄(八十二)

小高根 二郎

路上

牧者を失つた家畜の大群のやう
無数の頭を振り無数のもつれる足して
路上にあふれる人の流れは
うづまき乱れ散り
ありとある乗りものにとりついて
いまわが家へいそぐ
わが家へ?

いな! いな! うつろな夜の昏睡へ
ただ陽の最後の目送が
彼らの肩にすべり

気附かれずバラックの壁板や
瓦礫のかどに照る
そして向うに大川と堂島川がゆつたりと
流れる

私もゆつくり歩いて行かうと思ふ
そして何ものかに祈らずにはをられない
—— われに不眠の夜をあらしめよ
—— 光る蘭の陶酔を恵めよ

第四詩集「反響」

先のゆり子さん宛書簡に「今月三十日まで
受験講習でおひるまで毎日出てゐます。そし
て毎日のやうにおひるから街の風俗を見てあ
るいたり、映画をみたりして帰ります。そし
て夕方田舎道を家にかへりながら詩をつくる
」とあつた。この記述のままの環境から「路
上」はできたわけである。ゆつたりと流れる
大川と堂島川が展望できる地点といへば、天
満橋から天神橋にかけての界限か、それとも
大川が堂島川と土佐堀川に分岐する中之島の
東端あたりになる。いづれにせよ、バラック
が表通りに建ちならび、裏は瓦礫と同居して
ゐた、戦災から治療途上の道を、勤め帰りの
勤労者の家畜のやうな群がゆくの、休暇を
もつ第三者の冷利な眼で伊東は凝視してゐる
のである。彼等は「わが家」—— スウィート
・ホームに帰るのではない。へうつろな夜の
昏睡をやるネグラに戻るのだ。占領軍の処
分食糧で飼育され、間歇的な配電しか与へら
れなかつた栄養失調の当時の市民は、事実、
人間よりむしろ家畜に近い存在だつた。日中

榎原から出てゐた「爐」の年刊詩集(昭和二

刊)に詩を三篇送つてゐるが、それは「夏の

の終り」「路上の祈り」「廻燈籠」である。

「夏の終り」は昨年八月、「廻燈籠」は「中
心に燃える」と題して同じく十一月に発表し
た作品である。「路上の祈り」は「路上」と
題しこの年の「改造」十月号に発表されてゐ
るから、この頃でできた作品ということになる

の飢ゑと疲労。それを忘れるために夜は自ら昏睡に陥るよりがなかつたのだ。

彼等の脊に憐れみの一瞥を投げた夕陽は、眼をそらすやうにバラツクの壁板や瓦礫の角に照る。その向うの川だけが戦災の傷痕もしらぬげにゆるゆると流れてゐる。伊東はその流れと一緒にゆつくり歩いてゆくことを願つてゐる。それはゆつくり歩を運びつゝ折るためだ。折るといつてもはや神などに折るのではない。イズムに賭ける祈りでもない。ざりとして、民族の良心に祈るわけでもあるまい。名も形もしかとはしないへ何もかにも伊東はへ祈らずにはをられない制御しえない衝動に身をゆすぶられて、流れに沿つて歩を運ぶというのである。

へわれに不眠の夜をあらしめよ。へ光る蘭の陶酔を恵め。祈りとはつひに言葉であつた。言葉以外の何ものであるわけがない人みなが陥る昏睡のうつろな夜ではなく、伊東は不眠の充溢した夜を希求してゐるのである。その不眠の状態とは、覚醒した能動のそれではなく、陶酔という……言葉すら発することがものうい不動の態勢をさしてゐる。へ光る夢の陶酔。蘭で擁護された温暖で薄明な空間に、飛翔の光る夢で陶酔しつつある蛹の待期……。それが伊東の路上の祈りであつたのである。

たのである。

つまり、伊東の願ひとは、庇護された雌伏の状態にほかならぬやうである。庄野潤三氏の次の言葉は、この詩に關聯して味ふと面白い。

「醒めてゐると云ふこと、「われに陶酔を与へよ」と云ふこと、これはまるで正反對のことでありながら伊東先生の場合にはそれが別々のことにはならなかつた。先生は、つねにひとり目ざめてゐる人間の不幸と云ふものをそれまでいやと云ふほど味つて来られた方であつたと思ふ。その先生が「陶酔」と云ふことを云ひ出されたのは僕の知る限りではこの年の夏が始めてだつた。」(昭和二年「祖国」七月号)

伊東はどう発心をしたものか、八月に入ると一日から日記をつけた三十日で終つてゐる。昭和二十二年の日記はこの一ヶ月しかつけてゐない。通読するとその発心は、リルケの復習といふ決心に発してゐるやうである。

一日 前略：夜はリルケで独逸語の練習。夕方、米を陰乾し、虫退治。盛夏、日光キラメク。

三日 前略：夕方となりのラジオが、ハレルヤコーラスをやつてゐる。自分もあんな

に「響き合ふ」詩書きたいと思ふ。…中略…

はだかで背表の間に腰かけ、一緒に一番星を見る。家庭の幸福を感ずる。子供ら早くねる。十一時半まで、リルケの勉強。

四日 前略：南アマベで舞踊の稽古の太鼓きこゆ。子等二人大喜びで出かけてゆく。夜十時半までリルケの勉強。…中略…月大きくまるい。池の辺まで散歩。「ヘンリ・ライク」ロフトの私記」中の句この夕方からしきりに思ひ出され、非常によくわかつた。詩といふものの意味がはつきりしたやうに思はれてうれしかつた。そして静かな充実した力を感じた感謝する。

五日 前略：リルケは夜、「ヘルダーリン頌」を一篇よんだだけ。

六日 前略：午前中リルケの勉強。虫退治。七日 前略：夜疲れて、リルケ一篇。午後二時頃庄野君来訪、五時頃帰る。駅まで送る「光耀」三号持参。

九日 前略：午前中少しリルケの勉強。「至上律」から詩の註文。参考のために書いておくと「詩人」は一篇四百円。「至上律」は二百円である。このごろは三、五篇とまとまつた註文である。

十日 前略：夜、リルケの勉強。

十一日 前略：夜ねてから詩書き出し、

速達、どうやら出版実現するらしい。

二十三日 暑い。花子日直。リルケやるが気のりせず、自分の詩を推敲。どうやら出来上つた。夜清書。今夜も停電。…後略…

二十五日 暑い。八時頃から夏樹と一緒に大阪に出かける。夏樹を電車にのせるため。学校に行きそれから地下鉄でナンバ。エビス橋際の食堂の二階で、創元社の西野君に会いよいよ決定した詩集「反響」について色々合はせる。…後略…

四日の項に「ヘンリ・ライクロフトの私記」(ギッシュク)に感銘した由しるされてゐるが、それは次のやうな文章で、伊東は日記の冒頭にそれを書きつけた。

「何故なら人間が聰明になるのは、確かに意識的な思索の努力によるのではないからだ。人生の真理は、我々の力によつて発見されるのではない。思ひかけない時に、天来の靈感が魂を訪れて、そこに或る情緒を発動させる、そして、その情緒がどうしてかは知らないが、心の中で思想にかへられるのだ。そのことは五官が皆平静な状態にあり、全自我をあげて冷静な瞑想に委ねられる時のみ、起り得ることだ。自分は今にして三昧境に浸る人の知的な気分を理解することが出来るのだ」

ヘリック詩抄 (三十五)

森 亮

霧に濡れたチュリアの髪

霧がチュリアの髪に纏はつて
どれもさらさら光つてゐた、

ふるへる露をいくつものせた

木の葉といった格好で。

あるいは又、ふり灑ぐ日差しが

小川の流れに踊らされて

★

伸びやかで甘く、銀の音色をもつたあなたの

夜半に及ぶ。夜明けの二時か三時頃まで(？)
十三日 前略：夜皆に諫早のお盆の習はし精霊送りのことなど話してきかせる。…中略…リルケの勉強。

レ。リルケ。
十五日 前略：リルケの勉強。…後略…
十九日 爽涼。一日中うたたねばかり、さめてはリルケ。
二十日 前略：創元社から逢ひたいとの

声、亡者でさへ耳が聞えたらがやがやは止して聞き耳を立てるだらう(部屋のどこかで)、琥珀の笛に合はせて響き麗しい言葉をあなたの美声が歌にまで解かしてゆくのを。

前回は心細い心境を歌つたものばかり紹介したが、もう一度ヘリックの得意とする言葉の彫金術の方へ戻ろう。歌はれた内容は他愛もないことどもであるが、いづれもヘリックが目尻を下げて語るチュリアの時、「霧に濡れたチュリアの髪」が七番・正篇の四八五番、次の「チュリアの声」は六七番の作品である。序に言ふが、近刊のニューヨーク大学版「ヘリック全詩集」(パトリック教授編)の作品番号は二四番以下が私が拙つてゐるエグリマン叢書本の番号よりも一番つづり上げられてゐる。実はその方が正しい数へ方であるが、今改めると混乱を来たすから私はこれまで通りに番号を付けてゆく。

「ヘンリ・ライクロフトの私記」中の「秋」の章、五節中の文章である。

伊東はこの文章によつて「詩といふものの意味がはつきりしたやうに思はれてうれしかった」と日記に書いてゐるが、G・ギッシンの「人生の真理」という言葉に「人生の詩」という言葉さへ置き換へれば、そのまま伊東が観念で構成してゐた詩の原理になりさうである。

二十三日の日記には詩ができたことを伝へてゐるが、翌月の「舞踏」六月に発表された「小さい手帳から」であらう。その作はギッシンの天来の靈感が情緒を発動させ、それが思想に置き換へられる——伊東流には詩に置き換へられる過程を、そのまま示すやうな作品である。

小さい手帳から

一日中燃えさかつた真夏の陽の余燼は
まだかがやく赤さで

高く野の梢にひらめいてゐる

けれど築地と家のかけはいつかひろがり

沈静した空気の中に白や黄の花々が

次第にめいめいの姿をたしかなものにし

ながら

地を飾る

こんなとき野を眺めるひとは
音楽のやうに明らかな

静穏の美感に眼底をひたされつつ

この情緒はなになのかと自身に問ふ

わが肉体をつらぬいて激しく鳴響いた

光のこれは終曲か

それともやうやく深まる生の智慧の予感

か

めざめと眠りの

どちらに誘ふものかを

誰かをしへてくれることが出来るのなら

う

——そしてこの情緒が

智的なひびきをなして

あ、わが生涯のうたにつねに伴へばいい

【反響】以後

この詩で、夕の景観を眺め入つてゐる人に

思ひがけず訪れたへ音楽のやうに明らかな

静穏の美観がいはゆる「天来の靈感」に当

るだらう。この靈感で、激しい光が去つたか

らこそ各自の色や形を自立させた花々が発

動させる「情緒」の意味を問ふのである。青

春時代の肉体をつらぬいて鳴り響いたへ光の

終曲なのか、それともやうやく深まつてき

た中年のへ智慧の序曲なのか？ つまり、

これから眠りの世界に戻るのだらうか、目覚

めの世界に入るのであらうか？ という問い

となつて「瞑想」されるのである。その結果

へ智的なひびきがへ生涯のうたに伴奏さ

れることを「人生の真理」「詩の真理」とし

て伊東は希求してゐるわけである。

三日の日記に「はだかだ皆表の間に腰かけ

一緒に一番星を見る。家庭の幸福を感ずる」

とあつた。野の末の高い梢の上に陽の余燼が

冷めるや間なし輝きやきたす明星……。例のこ

とながら、伊東は明星にかけて、一家の幸福

がいつまでもつづくことを祈つてゐるのであ

る。若い日の雷に似た野望から解放されて、

知的で静穏な残生涯に恵まれることを伊東自

らのためにも祈つてゐるのである。先の「路

上」につづく第二の禱歌をなしてゐるのであ

る。

伊東は夏休が終つて次の書簡を富士氏に送

つてゐる。

「永く御無沙汰しました、学校宛の竹内さ

んの御本たしかに拝受しました、あなたの

忍耐つよい御努力に敬意を表さずにはをら

れません。厚く御礼を申し上げます。私は特に

暑い水い夏休に満足して暮しました。収獲

は作詩一篇。リルケ約六十篇を独逸語でよ

んだこと。その二つです。学校今日から、大

へん弱つてゐます。一度学校に遊びにおい
て下さい。」

(九月一日、大阪府黒山村より大阪府阿武野
村、富士正晴宛はがき)

富士氏が学校宛に伊東に送つた本とは竹内
勝太郎評論集「丘の上の対話（芸術創作の意
義を求め）」（昭和三年八月）である。伊東は
富士氏の水い間の努力に敬意を表すと共に水

かつた自分の夏休の満足した充実さを報じて
ゐる。夏休明けに拜命した大多忙の役目とい
うのは、十一月一日の二十五周年記念に際し
ての文芸部長としての企劃であつたと想像さ
れる。後述するが、伊東は文芸部の催しの一
つとして仕中の階段教室で小野十三郎氏と詩
に関する対談をしてゐるからである。

十月初旬、伊東は次の書簡を私にくれてゐ
る。

「本日は御高著ありがたう、随分おくれて
出たのですね、拝見するのたのしみにして
ゐます。岡崎は、どんなお仕事ですか、お
忙しいですか、宇治にたうとう出かけるこ
と出来ませんでした、新御家庭も見たかつ

柿の村

浅野 晃

路傍のどこにも柿は実つてゐた

青空のなかで柿は赤い 太陽も赤く柿も赤い

茶店で私は柿をたべ その幽玄な甘味で身心

を潤した

午後のは山に傾き

柿の村は遠ざかる

けれど路上の日の色は柿の赤だ

夜の宿で柿を取出し

灯火のもとに置いてみる

わが生の途上で いくたび
秋のなかを行つたらう その思ひ出を柿は飾
る

子供心にもすでに柿はふしぎな安心を与へた

柿を手にするには歓喜だつた

柿とともに友がある 師が母が父がある

わが生に添へてくれた暖かい手が 慈愛のま

なぎしがある

悲しみや苦しみの底でも柿は

いつも明るかつた

柿の村は明るく静かだつた

われらの祖先は柿の村から来た

山村で漁村で秋空に柿は赤い

苗にして秀でざるものがある 秀でて実らざ
るものがある

君らはつひによく実つた

私も刻々に熟してゐる ただ

君らの如く無心でないから未熟である

生をとげた満足のようなこびの色の赤

美しい じつに美しい

私は君の色と形をここに置いてみる

そして自分の知らない成熟のようこびを知る

いまごろあの村は

くまない月光のなかにある

夜のなかでどの柿も

赤い

たのに。私はこのごろ元気で、しかし学校が忙しくて困ります、いろんな責任をおはされる年輩になつたのです。十一月中に、「反響」と題する詩集を創元社から出します。旧作と戦後の作と合はせた全集のやうなものです。今日はお礼のみ。

十月五日（一ヶ月も投函忘れてゐました失礼の極みです。）

（十月五日、大阪府山田村より岡崎市日名町）
（十一月〇〇、小高根二郎宛はがき）
この書簡は愚著「郷愁に愛と夢とを」（昭和三年一月）を贈つたことに対する礼状である。同著は戦前に書いた作品を編んだものだったが、進駐軍の検閲にひつかつて、その訂正のため、新聞広告より一年も遅れて刊行されたのであつた。

私が宇治から岡崎に移住したのは転勤だつた。前任者はラバウル帰りの海軍大尉のMだつたが、丁度デング熱がでた直後に労働攻勢にあひ、なにかも面倒くさくなつたのか、あつてなく首を吊つて死んでしまつた。その後任に、結婚したばかりで一番身軽な私が、當てられたわけだつた。

岡崎と目と鼻の豊橋には、E・ケストナーの訳者で馴染みの愛大の板倉頼音氏がをられた。そこに疎開先の山形から丸山薫氏が引揚

げてこられた。十年ぶりに邂逅したわけである。碧南には俳句評論をやつてゐた岩田潔がゐた。岡崎には蕪村研究の清水孝之氏がゐた。「コギト」同人だつた言語学者服部正己氏も愛大にやつてきた。「コギト」「四季」の馴染が集つて芸術的な気運が三河に漂つた。

十月下旬であらうか、伊東は女弟子の田中光子さんに次の書簡を送つてゐる。
「速達拝見しました。こちらで勉強したいと仰有る御希望、私も同感出来ませぬ。私はいい先生ではありませんが目下のところあなたの周囲では私よりほかにその役目を果すものはあるまいと信じてゐます。出来るだけ、室をさがします。就いては「晩春」の出版暫く見合はせて、訂正してからにしてはどうです。わたしは特にこのごろ語格の正しき、用語の素直さ、を重んずる気持が強いので、あなたのお作も大へん不具に見え、それが惜しくならぬのです。

あなたの資質に就いては、今のところ私が一番の同情者であるので、その上で不具と率直に申すのです。」

（十一月以前一推定大阪府黒山山村より横須賀）
（賀澤子、田中光子宛はがき）
ずるぶん手厳しい書簡である。師匠としての自認がこの厳しさを生んでゐるのである。田中さんの資質の一番の同情者であるという

らんでせうが。尤も時々だつたら一緒に御飯位炊いて上げてよいさうです。

これらの具体的な計画大至急御返事下さい。これは「晩春」を訂正する御仕事として私は賛成なのでその前に「晩春」を出版してしまはれるのでしたら、私の興味は半減することつけ加へておきます。

十一月十一日
（十一月一日住吉中学校より横須賀宛）
（十一月十一日、田中光子宛はがき）

部屋さがしをしてくれた友人とは誰であらう。庄野潤三氏か、「無踏」というガリ版誌

旅の空

堀之内 歴

備州鴨方長川寺

私はみた

一ばん遠い島宇宙から

億万年の昔旅立つた最初の光が

まひるの空にいま届いた

なにか貴く かすかなものに
それらが地上に撒かれるのを

自信で、不具という診断を敢てくだしてゐるのである。伊東は要請によつて部屋さがしをすることまで約束してゐるが、整形の治療のために病室を用意するのは医師の務めだからであらう。

一年前の田中さん宛書簡（昭和二年一月）では、「むしろ直すところに詩作の意味があるのです」という遠慮があり、「字句とところどころ不穏当に思へるところ発見しましたが、なほしてゐたら限りなく、又所詮はあなたの息吹みたいなものゆゑ、直しやうもない」という諦念にちかい甘へを伊東自らにゆるし、跋の代りに詩まで送つてゐた。その詩稿がこゝでいう「晩春」なのであらう。

伊東は十一月中旬、部屋がみつかつた由、次のやうに田中さんにしらせてゐる。

「わたしの友人（詩の方の私のお弟子みたいな人）が、恰好な部屋を中学校の近所にみつけてゐます。
ブルジョアの大きな家の由。友人の親類。その友人らもあなたのおいでを喜んで期待してゐるやうです。ついでには夜具や食事はどうなさるおつもりですか。その点をその友人は知りましたがてゐます。小麦粉を持つておいでになつて、パンにやかせ、くわん語をおかずにすれば、別に炊事道具も入

二十五周年祝歌

あたらしく世の 立ち出づるとき
すぎてきし 二十五年を
かへりみる 想ひはふかし
ああ わが住吉中学校
残されしその 玉はひろひて
わかびとの のぞみかがやき
新しき 世の星たらん
ああ わが住吉中学校

この日伊東は小野十三郎氏と住中の階段教室で文芸愛好の上級生徒のために現代詩の対談をしたのである。伊東の企劃した最大の行事だつたわけであらう。

「……前略……日ごろいたつて無口な伊東君も、教壇に立つと、弁舌滔々、生徒への応答もよろしくさすがだと思つたが、あ、いう奇妙な角度から数十人の視線を一身に浴びた経験は私ははじめてなので、一寸解剖台に乗せられてゐるやうな気がしないでもなかつた。

伊東君は私を紹介すると、つゞいてこういう意味のことをいつた。みんな詩といえ、西条八十や島崎藤村の書く詩のようなものばかりだと思つてゐるが、小野さんの

その3

私は夕方になると、勉強部屋から家に帰る生活になっていた。昼間家に起った出事ことは何も知らないでいられても、夕飯の時に母の口からくわしく聞かされるのが、気重であつた。

たいい鬼林のことであるが、その度に私が叱られているような気持ちになるのだった。

鬼林が文句を言つて、ど鳴り込んでくることを聞かされる日は、食事もまずいし落ち着かなかつた。

一日じゆう貸室の傍にいて、重くするしい気持でいることから解放されたのは、何よりありがたいことであつたが、それだけに悪い事件は私の責任としてふりかぶさつて来るのが、つらかつた。

だが、母は気が強くて絶対の負けず嫌いなたちであるし、何か言われる度に私のように引込んではいないので、鬼林にかなり言われてもたいして応えてはいないので、あり

れない。

きた頃、満員の会場にまだ入場してきた者があつた。二人だつた。彼等は会場の片隅に佇み、悠然と会場を見廻してゐた。短軀で着流しが小野十三郎、洋服が田木繁……さう、顔の広がつた山村が説明してくれた。この反応は佇んでゐる二人にも現れた。彼等はその頃とみに詩壇の注目を集めた伊東がゐることにいつて嘩き交してゐるやうであつた。すくなくともさううけとれる挙措と視線を、伊東・田中とならんでゐる私は感じた。

もともと伊東は身近な詩人の解説役をひきうけるほど謙虚な男ではなかつた。先輩の朔太郎・春夫は別だが、中也とて例外に属してゐた。心底では自分以外は誰も認めてゐなかつたのが事実だらう。特に俳精神を詩心に置き換へてゐる現代詩には同情しなかつた。いくども既述したが、彼は作詩の過程において朗読という短歌的手法を起用したから当然といへるだらう。ところで小野氏の作品の根底はあるのはその俳精神である。伊東がもつとも無理解を示した俳句的な図柄なのである。その小野氏の詩の解説を、多数の教へ子たちの前で敢行したのだから、伊東自身の変化は大変なものであるといはなくてはなるまい。それとも伊東自らを、改めて太平洋の側から眺め直さうと、懸命に努めてゐるのかも

はまるきり違つてゐる。小野さんは大阪をどう見ておられるか、それを説明しよう」と黒板に大阪の地図を書いて、小野さんは海の方から、つまり太平洋の方から大阪を見られたので、そこには筆が広く一面に生いしげつてゐる。そしてそこには近代的な大工場が建ち、いろ／＼な変化が絶えず起つてゐる。人間もそれによつて変る。それを小野さんは視てゐる。工業地帯、そのしろの農業地帯もどん／＼變つてゆく、このような自然の風景と人間の変化、これを太平洋上から見て詩情を感じる、そんな詩だとはくは思ふんですがどうでしょう、さういつて、伊東君は私の顔を見て笑つた。

……後略……」(昭和三年「新大阪新聞」) (たぐ随筆「小野十三郎の地図」)

「短歌―天皇頌律論」等をつつて当時評判をとつた小野十三郎氏との対談を企劃し、それを現実によつてのけたとは、伊東もずるぶん變つたものである。敗戦前であれば、敵とまでゆかずとも、対抗の意識はあつた。事実、昭和十年にB・Kの催して東京から有名な詩人群が来阪したとき、心斎橋の明治製菓の二階で関西詩人会の歓迎会があつた。大変な盛況で三百人ほど集つた。「コギト」関係として田中克己氏と伊東が出席した。「椎の木」として山村西之助と私も出た。会が半ばす

がたかつた。それどころか時にはかえつて、私の息子に強いと賞められたと、自慢にしてさへゐる。

或日、私が家に帰るなり母は待ちかまえていて「部屋代が安い」ということで、私を非難した。そして来月から早速値上げすべきだと主張したのである。相手の弁解も何も耳に入れず一旦自分の思つたことを押し通そうとするのが母の性格である。

私は腹が立つた。貸室は私が苦心の末建築したものなのに、後から来た母に実権を握ら

妻よ

美堂正義

病妻は
烟がどうなつてゐるんぢあらうかと
一度眼で確かめたいらしい
山の上の烟までは行けないから
ヘリコプターに乗つたらと笑ひながら云ふ
仕度しながら
娘に脊負つてもらつて来いと
できないのを承知で答へる

病氣になつて半年
長男の再発
料理嫌ひな二女もいつしか主婦の役
食へるかと恐る／＼一口食べて安心したのは
最初頃のこと
出たとこ勝負はだんだん上手となつて

れることはないと思つた。

今日までやつて来た私の立ち場もあるのだし、今のところ値上げなど、とうてい出来るものではない。しかし何と説明しても鬼林の部屋は絶対に安くて話にならないから交渉して来るとうゆずらなかつた。

「まるで、鬼おおやじやありませんか」と言つた。

「鬼おおやで結好よ。鬼でも蛇でももらうものはもらわなくてはいられないのが、あつたの性格ですもの」と主張する。

怪しげな副食物も姿を消した
末っ子の男は前垂掛けて
右のものを左に動かさなかつたものが
いまは手つきも鮮やかに野菜を刻み
鯨のテキヤカツはお手のもの
娘の帰りの遅いときは
自らが仕舞つたり、米を炊いだり

みんな広島まで通勤と通学
暮れから帰つてきて晩飯の仕度をする始末
スリーブに胡椒を入れて忘れたり
卵焼きに塩を入れ忘れたり
八宝菜に似た珍奇な副食
手早くしなければ八時になつても食事はでき
ない
御飯のホチはお酒をチヨビリ入れて炊き返し
それでも誰れもが不平を云はず
顔をしかめながら食つたのも始め頃のこと

勝手にするが良いと、私は母の主張に無言で抵抗を示して数日は過ぎた。

「くやしいつたらないわ、鬼林の奴」と母はいらいらして、私に言つた。家に帰つて来れば近頃は鬼林のことに決まつてゐるのが、わずらわしい。

母は早速来月からの値上げを交渉しに行き、話はすぐさまとまったのだが、夕方赤い顔で飲んで来る

「アンタのような變つた人間はワシは始めてだ！ワシはアンタと契約したんぢやないぞ

今日は晴れた空が澄みきつて
少女の瞳に似た奥深さ

山柿の実の紅が目に痛い位必
烟の隈に咲く色冴えたタリアが風によそぐ
苦しい生活のなかにも
こんな静かなひとときもあるんだと
気付きながらわづかに心がなぐさまる
妻よ

山の上からは海の色が青く美しい
小さな波がキラキラ日に輝いて
その向ふに島がくつきりと浮んでゐる
生きてゐたら 元氣になれたら
二人でどこに登つて
林に鳴きかほす小鳥らの声をき、ながら
楽しく語り合ふではないか
いつの日かに
それは近い日に

「と、すごんて来た。」

「ばああの言うことなんか信用出来るもんか！」母はかっとなって、

「じや、伺いますが誰ならば信用できるんですか？」

「ワシの信用できるのは、若い方のおおやだよ。あのおおやしか信用できるはいねえ」

「……………」

「鬼ばばめ奴！勝手なことを抜かしやがって。世の中はアンタの考えているようにや、ゆかないってことを覚えておくといい！」と、一喝して帰って行ったというのだ。

母は自分より私を見ている鬼林が、今日ばかりは許せないと腹立てているが、私は気を良くしていた。鬼林もなかなか痛快なことを言うと思った。私を信用しているというのも意外なことだったが、母のやり方を非難した挙句「鬼ばばあ」と言ったというには可笑しさが、先に込み上げて来た。

案外うがったことを言うではないかと、感心もしたりした。

その夜、鬼林の部屋の窓から、私の家に向けて瓶のようなガラスが投げられる音「鬼ばあ！」と、母をのしつっている声が深夜迄続き、さすがの母も怖くなり、一〇番へ電話しようかと言いつつ出すほどだった。

賃上げが出来ないのなら、部屋を明け渡し

てもらおうと今度は鬼林の処置を、ゆるせないと言張するように言った。

鬼林がいるかぎりは、こんな嫌な毎日が続くのかと思うと、途方に暮れるのだった。

しかも部屋を出てもらおうことは、絶対と言っても良いほど不可能である。場合によっては、鬼林に一家皆殺しにされかねない。母は次第に「あんな男をどうして入れたのか」と私に、愚痴をこぼすようになった。娘はこの頃時々姿が見えるが、母に会っても挨拶どころか、むっとして横を向いてしまうという。生意気な娘だと一層母はくやしがり、茶の間の話題は毎日のように面白くなかった。

鬼林のこの騒ぎのなかで日を暮しているようなばかばかしい毎日にふと思いがけない電話があった。小峰少年からであった。突然置き手紙をしたまま行先不明だった小峰だが、何ヶ月ぶりであらうか。ナマリの重たい声もいまは懐しかった。

「すみませんでした」と、しきりに詫びている。そんなことよりも、現在どうしているのかと聞くと、どうやら元気にやっている。と答え「あのう……」と言ったまま、口ごもっている。私が何度促してもはっきり言わずにいる。もじもじしているところは、前と少

墓石

吉田全一

秋の空が広い。

稲の青い穂波が、西の山東の山まで続く。山はかすんでいる。

田んぼの中の墓地。

石工が墓石を刻んでいる。

煙草をふかしながら、カチンカチン刻んでいる。

——時を刻んでいるような。

古墳

古代の貴族たちの住家。

おれの腹のような恰好をした稜線に

草がぼうぼう茂っていて、

その向うに夏の空が青い。

もう直き、このおれの腹にも

ペンペン草が生えてくるにちがいない。

白い季節

福地邦樹

中国人が

秋を白い季節としたのは

まことに賢明なことであった

白い陽が照り

白い風が吹き

白い霧が流れ

秋はさらさらと

僕らの心に

白く透明な花を吹きおくる

しも変っていない。何か言いたいことがあるのだからか。私はあれこれと思いつくことを頭の中で搜してみても、見当がつかなかった。

一度近いうちに来ませんか！」と言った。「だめです。忙しくて。じや……」と、電話はぶつ切り切れた。

小峰と話していると叱られているような気になるか、そうでなければ自分が小峰をいじめているような気になるかであった。どんな所で何の仕事についているのか、分らなかつたのは気がかりである。だが、ともかく元気でいることが分つたのは、良かったと思つた。小峰が抜いてくれた庭の草は、いまは貸室の庭一杯に生えてしまっている。どんなに生えても他の人は草一本抜いてはくれないのだと思うと、あの時もつとやさしく小峰の世話をみてあげておけば良かったという後悔が押し寄せて来た。

庭の小蔭にそつと佇んで草取りをしていた小峰が思い出された。

庭を見ると草取りをどうしてもしなくてはならないと思つた。このまま生え放題にしておけば、植木まで枯れてしまうほどのびている。夕食後思いきって、ネッカチーフをかぶり、甲斐甲斐しく庭に出て、支関の草を抜

いと、勢い良く窓が開いて鬼林が顔を出した。私は思わず後ずさりするほどに驚ろいた。

「御苦労さまですなあ。」声も顔も以外にやさしく酒気は入っていないらしい。ほつとした拍子にやたらとおじぎとも何ともつかない恰好で頭を下げたり、お世辞笑いをしている私だが、自分でも何をしているのか分っていない。

「そこはワシがやりますよ。いえ、どうせ暇はあるんですから。お宅の庭もついでにずっとやってあげますよ。」

あまり調子が良いので、あたふたとしていた。「この間娘が買って来た週刊誌に、アンタの写真が出てびっくりしたところですよ。いろいろ勝手なこと言って済まんと思つている」鬼林は最敬礼以上の、ばか丁寧なおじぎをしてみせた。

原因はこれだったのかと、思うとおかしくならなかった。週刊誌に出ると、世間の人の信用はいっぺんにつくのである。

私はお世辞笑いを仕方なく続けているよりなかつた。中腰になつたまま、時々立ち上つてみたり、草を抜いてみたり自分でもなにをしているのか、分らなかつた。

いま上機嫌でいても、急にもし母のことから怒り出したら怖いし、そうかといって、こちらからあやまるのもへんである。

それにしてもこの間牛乳ビンを投げてまで母に怒ったことをなげ黙っているのだからか。すっかり忘れていたのだらうか。

酒乱というものは、普段の時の自分と別人になってしまわうらしいと、聞いていたがいつも酒気を帯びている時しか知らないのだから、かえって気味悪い。

数日後家に帰ると、母は上機嫌で鬼の首でも取ったように、はりきっていた。食卓には家中好物の赤飯が炊いてあり、様子がいつもと違っている。息子もここにこしている。

「良いことがあったのよ！なんだか当てなさいよ」

まるでクイズのように、母は言う。私は直感で鬼林が引越してゆくことになったのだと、思った。勘はやっぱり当たった。三日後に急に九州へ行くことに決まったらと、今朝言いに来たと言うのであった。

父の骨

田中克巳

小高根さんから果樹園の名誉同人にして上

げるとのお便りをいただいた。大変ありがたく思ふ。ところが名誉同人はすでに一回あつて骨がそれである。そこでここにのせてもらった原稿が私の不注意でノンブルを間違へ、意味が通らなくなつたのを、訂正してのせていただく。今度はまちがはないつもりである。ついでに時日がたつたので内容もちよつとだけ訂正した。

一昨年の夏、純粹の大阪人である父が七十才でなくなつた。遺言はわたしが開いたのは短歌二万首を残すから何とかしてくれ、といふのだつたが、そのほかに、骨を賀茂川に流してくれ、といふのがあつて困つた。これは伊勢にゐる弟の嫁が「お父さん無茶なことを」といつて叱り「さうか」といつて遺言状から消したとかで、なるほど遺言状には書いてなかつた。

歌のことはともかく、骨の問題では無事に解決した。といふのはわたしの母は家をわたしに継がしたことにして(淡路南淡町)、父の家に入り、まもなく死んで父の家の先祖代々の墓に入つてから四十何年、そのよこへ新しく墓が出来た(大阪の寺町で、蕉門の十哲のひとり野披の墓のある寺)。

坂

よりもさらに大切な魂の問題に気がついた。父は臨終前まで「地獄の方が面白いがな」といつてゐたが、これは逆説の好きな父の言で実はもつと行きたいところがあつたのだと思ふ。

来年は母の追悼会で、わたしをこの五十年そだててくれた母が、この間、その費用をもつて来てくれた。ありがたく泣きたくなつた。淡路の母の妹も来てくれるさうである。

萩原朔太郎手記

「浄罪詩篇ノオト」B

竹越三男編

この号からノートBにうつるので、再び編者の凡例を掲げておく。

○用字は現在の当用漢字になおした所が多い。原文の誤記または異例な用字はそのままとし、原則として「ママ」と傍記。活字のない誤字は編者が□の中に入れてなおした。編者に疑問な字には「？」を傍記。

○への中は編者の補註。＊印は編者の註解との参照符号。

本文

①

てよい、

*このあたりに書きつけたことは朔太郎の説書メモと思われる。明治38年、上田敏武「海潮音」の出た前後から、フランスのサムボリスムなどの紹介がかなり行なわれている。ここに書きつけたのと殆んど同じことが、厨川白村「近代文学十講」(明治45年刊。この本は朔太郎遺蔵書の中に含まれている。)に出ていし、片山孤村の論文「帝國文学」(明治38)にも出ている。こうしたサムボリスムの紹介を彼が読んだことは、むしろ当然である。

②

自分は時間の殆んど大部分を馬鹿のやうにぼかん^{ママ}。自分は椅子に腰かけて居る。自分の居間は洋室(名称だけの)であるから。毎日自由を許された時間の多量を所持して居る自分は祈禱して居る。自分は毎日ぼかんとして居る、時間の大部分を何もしないでくらしして居る、読書もしない、勉強もしない、遊戯もしない、人と会話もしない、考索もしない、空想もしない、一定の業務もしない、そのくせ退屈もしない、自分は一体何物だ、自分は詩をつくる、詩をつくるといふよりも詩を速記するのだ、電光のやうに刹那をすぎる影がある、その来るときは鋭敏に予感される、

鳴、 雪わり草、

先祖、

踊 (雪をめぐらす少女に)

へ右は単に語彙をメモしたもの。しかし重要な語彙、

黒は風琴、白は立琴、青はオロン、赤は喇叭、緑は横笛米

彼岸花

森 鮎子

その年は早くから雪が降り始め野も山も見境もなく埋めつくした或る日 降り続いた雪がはたと止んで際限なく広がった純白の雪原に数限りなく彼岸花が咲き乱れた目をみはる人々の驚きと不吉な予感を裏付けるようにその夜 今までももまして烈しい吹雪が押し寄せそれが通り過ぎるまで物悲しい音色の耳鳴りを聞かねばならなかつた

果して翌朝不義の子を孕んだ一人の娘が狂人になつていた

彼岸花の炎は

夏の名残りをかき集めて燃すための時ならぬ焚き火のように見えるがこんなことがあつてから雪が降る前ぶれに

弱いものがするように

群がってのろしをあげているのだ

彼岸花は

その身を守つてくれる葉に先がけて

咲かねばならぬ不運を知り

嘆きのあまり

花びらの中に鬼子を

宿してしまつたのではないだらうか

来たぞと思ふ切利にだらけきつた自分の心靈は針のやうに針く集中され凝縮される、

そこに「湧躍」と「歎喜」と「焦心」がある、影が矢のやうに頭上をすぎる一瞬間に空間と時間がセツケイされる、

影はたちまちにして消失する、

私は鉛筆をとる

遠心力の中心、重力の中心とをあまりなくむすびつけるために最初の一線が注意深くひかれる、

この一線に私の全身の重量が傾注される、

ついで第二第三第四の点がひかれる、

それは出来るだけの全速力で走る、

走る鉛筆は紙面の文字を書く代りに暗号を落してゆく、これは一種の速記だ、

何人も私の第一の草稿をよんだものはない、だから私はいつも影の後姿しか書いて居ない、真理の尻尾しか握つて居ない、でも光る、尻尾だからとて光るものは光る、

*大正三年一月から彼が使つていた書斎である。これは元は味噌倉だつたと言われるが、前年から約三カ月もかかつて洋風に改装工作をしたもの。土地の者には「音楽室」としても記憶され、現在前橋市が管理して、公共的に保存を図つている。この当時彼はこの書斎を「ゴンドラ倶楽部」と言つていたこともあるという。

でも光らない、それは私が不注意（が足りない）からだ、私はときとき空想する、狡猾にも自分の不注意から見落したところの片影を創造する、不完全な影を完全に見せようとしたらむ、それは立派に成効する、けれども光らない、形がある、生命がない、

形は人に見せることが出来る、説明することが出来る、生命は見せることが出来ない、選ばれたる人にのみ感知させることが出来る、形に敬嘆する人は多い、生命に感動する人は少ない、

私は詩をつくる、下女に追い立てられて、座敷をとりあるきながらも詩をつくる、但し詩をつくることは私の道楽だ、何故ならば私は詩をつくる義務がない、何人に対しても、真理に対しても、

詩は私にとつてインプレーションの備忘録にすぎない、しかも責任のない備忘録である

わつと泣きたいと思ふ、それをこらへる、その瞬間にも影がやつてくる、（以前の影はみんなこれであつた）

影とは雲のやうなものだ、これにのつて遊ぶ

私は詩をつくる、けれども私は詩をつくることが馬鹿らしい、何故ならば詩をつくるといふことは二重生活をするといふことだ、自分の影を霊界にあつて本体は偶像になりすまして居るといふことだ、詩作は絶対服従だ、

詩人は奴レイだ、お話するものはつかしい

大山

吉本青司

サクサクと

淡青の砂礫をふんで

大山礫をゆく――

うつくしい装の誰かに

待たれているような

ブナの黄葉林

スケッチをはじめ

風や石や木の葉たちの

さわやかな対話のひととき

カラスが

かれた声でうたう

対岸の山小屋から

秋の少女があらわれ

詩人は直理の切り売り屋だ、しかも出前人足だ、詩人は銀行の前に立つて預金の帳面

渓谷のそばにあゆむ
そこにわたろうとして

流砂の遠きは
僕を思いとまらせる

枯溪谷のおちていく方に
展望はひらけ

中の海を抱く田園に
太陽が

金のひかりを投げている
その円光のなかに

無路するのは何であろう
やがて雨がふってくる

駈けて大樹のしたに立つと
雨はすこしもこぼれず

ふとい幹からしたたる
メノウ色の樹脂が

泪のように光っている

ことも出来る、文字にうつすことも出来る、どつちにしても一切利だ、

少しも自分はほんとの影を描いて居ない、いつも表面の輪画ばかりを描いてしまふ、これではいけない、影の核心にレンズを向けて速写しなければいけない、そこには貴重なものがある、しかしそれは今の自分には出来ない、心靈が鈍角なのと技巧が洗練されていないからだ、

詩をつくらふと思ふと詩の出来た例はない、觀念について考へたこともない、自分の詩は全く偶然だ、他力本願だ、しかし一度ねらつたものはいつか吃度影になつてくる、しかも思ひがけないときにやつてくる、祈禱とはそれをまつて居る間の時間だ、影が来なくては私には手も足も出せない、全々考へることを知らないからだ、

勉めて自分を鏡角に保持して居ながら勉めて自分を馬鹿にして居る（退屈しないで自分を馬鹿にして居るといふことは一つの困難なる修養だ）馬鹿になりきつたとき私は急に立派な詩人になれる、身返から後光がさす、いつもそうである

をくり返して居る貧乏人だ、真理の手形の被支那人だ、日給のもらへない霊界の書記だ、不安きはまる眼玉の奴ら、

私は詩をつくる、けれども詩をつくるのが私の生活の全部ぢやない、私には私自身の大きな仕事がある、真理そのものの体得だ、私自身の権威の獲得だ、詩をつくるのはほんの御道楽だ、私はそう思ふ、けれどもそれは結局無益な考案であることを知る、何となれば私の体得した真理は直接に私自分の手にははいらぬ、一たん聖霊のタンクをバスしなければ光が出ない、光がなければ土くれ同様だ、私は泣きたくなる

私は詩をつくる、けれども詩をつくるのが私の本分ぢやない、詩をつくるのはほんの御茶受けた、私には私の貴重な天職がある、日給の取れない書記生以上にもつともつと重大なる仕事がある、生命がある、生涯がある、その未知数を教へてくれ、だれでもいい、から数へてくれ、私自分では盲目だ、いくら手さぐりをしてみても何も触覚がない、いくら腕をくんでも分らぬ、分らぬものは永久にわからぬ、

けれども実体はたしかに存在する、人が未だ

戦後文学の流れ

三枝 康 高 著

戦後体験の一つの要約

民衆の立場と安保闘争

現代文学の新しい視点

二つの国民文学論

詩における人間疎外

I

ナシヨナリズムと「貴族の階段」

宗教における意識の変革

軍事占領下の作家たち

マス・コミのなかの文学

東京都文京区森川町七〇

有 信 堂

嘗て見さきしない遠方にある、何人も経験したことがない驚くべきしかも最も重大なる人牛問題がかくされてある、それを人々が失つた、永遠の「忘却」である、遠心引力の失綜

果樹園 九十四号 昭和三十八年十二月一日発行

(毎月一回一日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所

元市印刷株式会社

定価三十円 送料十円

である

怖るべき健忘だ、人生は社会は、彼等は生命にかけても私一人のために此の神秘をあばかねばならぬ、未来に於て紛失した謎を現在に於て解かねばならぬ、彼等自身を幸福にするために、私自身を尊大にさせるために、さがせ、さがせ、瀧大ども、

その未知数を教へてくれ、たつた一つのヒントを与へてくれ、乞食でもよい、私は蜘蛛のやうにへたばつて乞食の足に接吻する、乞食先生よ、爾はキリストである、爾こそ生命である、

そして私は地球と天上に向つて唾を吐く、「私一人の、たつた一つの靈魂を救へない神が何になるか、私一人の、たつた一つの生命を満足させることの出来ない人生が何になるか、全世界よほろびろ歴史よくつがへれ たつた一つの真理がこゝにある」

編 輯 後 記

十月三日。北海道に飛び小樽を訪れた。公園は例のごとく啄木歌碑があつたが、碑文の方は傷けられてゐた。僅かに十二年前の建立だが、広島の原民喜碑の胸板がわられたのもその頃だつたか? と思ひ出した。

十月八日。上野国立西洋美術館でシャガール展を見た。

少年時代に色刷りで憧憬したタブローをうつつて見て、もはやその頃の感度は薄れたが、時流に超然とした恩かしいほどしつこい精進には教へられた。

十月十四日。「俳諧史」の受賞で西下した栗山理一氏が池田の親戚に立ちよられたので十年ぶりでお目にかゝつた。氏の髪は白く、僕の髪にも霜が目立つた筈である。しかし五月山の體朝風のなかでの会話は互ひに張りがあつた。

十月十六日。京大人文科学研究所に桑原武夫氏をお尋ねした。伊東宛桑原書簡の起用の許可をいたゞくためである。その快諾をいたゞくと共に三好達治氏からの好意ある託言を拝聴した。上京のをり聞かれたことだつた。さういへば先号の後記で忘れてゐたが、九月二十日に三好氏から詩集「花の木の椅子」の探索方についてごまごまとした啓示をいたゞいてゐた。光榮の至りである。歸りに文学部に野間光辰教授をお尋ねして百号記念の原稿をお願ひ申しあげた。

十月二十五日。週刊新潮の掲示板で探索を願つてゐた山本沖子詩集「花の木の椅子」がその広告を見た由で大東幸子さんから届けられた。

果樹園 第九十四号 (毎月一回一日発行)

昭和三十八年十二月一日発行

池田市野町一六八

編輯兼 小高根 二郎

大坂市東住吉区桑津町五の八

印刷所 元市印刷株式会社

池田市野町一六八

発行所 果樹園社

定価三十円 送料十円